# だれかが綴ったエリュシオン

ei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だれかが綴ったエリュシオン

【Ｎコード】
Ｎ４５７１Ｖ

【作者名】
ｅｉ

【あらすじ】
ネットゲーム世界『エリュシオン』に入り込んでしまった男が、てくてく歩き回って現実世界に帰る方法を探す話。てくてく歩き回るお話がメインです。

※　主人公のチート設定や、１５歳以下には不適切と思われる描写を含みます。そういうのがいやな方は、お読みにならないほうがいいかも知れません。

※二章開始。
「異世界てくてく記」→「だれかが綴ったエリュシオン」にタイトル変更です。

# 0　プロローグ

出来ごころだったんだ。真剣に考えもしなかった。それが、こんなことになるなんて。

あの時の自分に、忠告してやりたい。

――そんな適当に決めるな、と。

いや、あの時はあの時で真剣だった。６時間も考えに考え、試行錯誤を繰り返し、納得のいくまで試してから決めたことだった。

――ちげえだろ。お前、真剣になるとこ間違えてるから。

もしこの未来がわかっていたら、俺はこんなことをしなかっただろう。いや、そもそも始めようともしなかったに違いない。

稼働５年目にして、今なお世界最高のグラフィックと讃えられる、国産ＭＭＯＲＰＧ『エリュシオン』。

その世界で、俺はその最初の最初、初めから間違った選択をしてしまった。

「なんで……なんで女キャラにしてしまったんだー！」

誰もいない荒野で、俺は叫んだ。

「世界最高峰のグラフィック」というのが売り込みのオンラインゲーム『エリュシオン』
中世をモチーフにした剣と魔法の世界『エリュシオン』はプレーヤーを選ぶゲームだ。
要求する動作環境がすこぶるハイスペックな『エリュシオン』はネットゲーム初心者を寄せ付けない。

とある事情で大学を中退し、バイトでためた小金と暇を持て余したのが、『エリュシオン』を始めた理由。

壮麗なグラフィックと、ニッチ仕様のシステム・設定に魅せられ、どっぷりとハマること1年。
就職し、土日に『エリュシオン』を駆けまわって2年。

リアルで仕事が忙しくなってきたため、俺―若月ヒカルは『エリュシオン』引退しようとしていた。

その矢先だ。

ゲームの世界に入り込んでしまったのは。

# 0　プロローグ（後書き）

お楽しみいただけたら幸いです。

# 1　ヒカル

照りつける太陽の下。日を遮るものが何もない荒野を、俺は歩いていた。

「お腹減ったな……」

お腹を押さえ、歩きながら呟く。

あるけどもあるけども荒野。見渡すかぎりなにもない。

「はあ……」

一つため息。

自分の軽率さを後悔する。

「遭難したときは、その場を決して動かないのが鉄則だとか言うけど……」

いきなり荒野で目を覚まして以来、俺はやみくもに歩き続けていた。

「……」

無言で、ごしごしと顔を拭う。

黙っていると、不機嫌な顔のまま固まってしまいそうだったからだ。

「いやいや。それは救助が来る場合のときだし」

映画なんかでよく無人島とかに漂流する話があるが、ああいう状況下でサバイバルをしないヤツはいない。
ワイルドにサバイバル生活を満喫し、時には一緒に漂流したヒロインとイイコトをしたりしながら無事に生還するのだ。
それがセオリーなのだ！
俺も生き残って見せる！
と、強引に気持ちを切り替える。
――ぐう
その途端、お腹が鳴った。
はあ……
「ゲームの世界だろ。なんで変なとこでリアルなんだよ」
くぅくぅと鳴るお腹を押さえ、俺はため息をついた。

国産オンラインゲーム『エリュシオン』
壮麗なグラフィックと重厚なストーリーで多くのプレーヤーを魅了するオンラインゲームだ。
いや、ゲームだったと言うべきか。
世界最高のグラフィックと謳っていても、所詮はゲームである。

美しい景色も、画面越しのモノだった。

それが今、文字通り目の前にある。

頬で風を感じることもできるし、乾いた土のにおいも嗅ぐことだってできる。

顔を上げれば、ひたすら青い空に浮かぶ太陽のまぶしさに目がくらむ。

俺にとっては不幸なことに、空腹だって感じることができた。

▼

「はん？」

気がつくと、荒野の真ん中に立っていた。

……なんだ？

きょろきょろとあたりを見渡す。

地平線まで見える荒野。あちこちに背の低い木が立っている以外にはなにもない、見事なまでの荒野である。

「？、？」

ちょっと驚いた。

「えーと。えー……えぇ！？」

改めて驚く。

「え、どういうこと！？」

もう一度、今度は慌てて周囲を見渡した。

地平線まで見える、見渡す限りの荒野。

「はぁ！？　なにこれ！？」

ぐしゃぐしゃと頭をかきむしった。

え……どういうことだ？　俺はさっきまで、ＰＣの前に座ってゲームをしていたはずなのに。目が疲れたから、眉間をもんで、目を開けたら荒野って。なにが起こった！？

とりあえず、目を閉じてみた。

それから目を開けてみるが、なにも変わらない。

もう一度、目を閉じる。

今度は手で眉間を揉む。先ほどＰＣの前でやった動作の繰り返しだ。

「って、痛ってぇ！　めちゃくちゃ痛い！？」

突然額に走った激痛に、驚いて目を開く。

「……なにこれ？」

顔の前にかざした手には、不格好な手甲がはめられていた。

えぇー？　ホント、どういうこと？？

俺は自分の体を見下ろす。

深い緑色のブレザーに、チェックのスカート。スカートからは真っ白で細い足が伸びていて、思わず目がくらんだ。

「……スカートぉ！？」

俺はスカートなんて穿いたことはない。男だもん。

「スカートに―手には、手甲？？」

手甲のはめられた手で、スカートの裾を掴んでヒラヒラと振ってみた。

あ、これ。

ちらちら太ももが見えて、なんか――いいな。

風と戯れるようにスカートを揺らして遊ぶ。

なんか落ち着いてきた……。

「って、これ『エリュシオン』の装備のスカートか？　手甲とか……そう、だよな」

俺はブレザーやスカートのデザインが『エリュシオン』中の装備

品に酷似していることに気がついた。もちろん、手を包んでいる手甲もだ。

「え、どういうこと？」

なんで『エリュシオン』？

「ＶＲ？　噂のヴァーチャル・リアリティなのか？？」

俺の知らないところで『エリュシオン』ってここまで進歩してたのか？　確かに、最近はログインしていなかったから、最新の事情を知っているわけじゃない。

でも、ＶＲ？

あれって、まだ実現してなかったんじゃなかったっけ。それに、実現できても専用の機器が必要になるとかどうとか。

そんなの買ってないよな。

「拡張パックが出たとか」

いや、だとしても答えになってないし。どんなバージョンアップしたらこんなことになる。

「バグ？」

逆にスゴイ。

「うー……ん」

あれこれと考えるが、よくわからない。

「あー――。もう――いいや。わけわかんないし、ログアウトしよっと」

ってあれ？

キーボードないからメニュー開けないんですけど。画面で選択しようにも、モニタもマウスもねぇ。

「えええええ？？」

あー、やばい。混乱してきた。

というか、イライラしてきた。

パニックになりそう。

「落ち着け、俺」

こういうときは……。

太ももでも見るか。

再び、俺はスカートをひらひらと揺すった。

ヒラヒラ……。

ヒラヒラ……。

ヒラヒラ……。

――ちらっ。

「うわ」

控えめな装飾の施された、薄いグリーンでした。

「おっけー。落ち着いてきた」

雄大な風景を堪能し、俺の心は静まってきた。

「――落ち着いてきて気がついたけど、自分のパンツ見て、なにときめいてるんだか……」

――？

ってお い。

自分のぱんつー！？

▼

まるで小説の主人公の如くネットゲームに入り込んだのか、それとも単にＶＲが実装された（とはいえ途方もない一大事なのだが）のかはわからないけれど、いずれにしてもここは『エリュシオン』っぽい。

なぜ、俺がこんなところにいるか？

理由も原因もさっぱり分からない。

が、そんなもん、どうってことない。
ついでに、メニューが開けないためにログアウト出来ないと言うのも、瑣末な問題だ。
屁みたいなもんだ。全然気にならないわけでもないが、いちいち気にしてられない。

「いきなり女になるのに比べたらね」

へへ……。
どうってことない。

とはいえ、実際問題としてログアウトできないと言うのは大問題である。
まあ。俺も一応、社会人だ。このままログアウト出来ないとなると、職場とか友人とか、考えなければいけないことはいくらでもあるし、責任めいたものだってある。
ログアウト出来ないのならば、その原因を探るなりなんなりの行動を起こさねばならないのだが――。

突然の望まぬ性転換。

ログアウト出来ないという意味不明な状況下での、あまりにも劇的な変化。状況も手伝って、ショックが大きすぎた。
しょせんゲーム、と気楽に考えられればいいのだが、あいにくそこまで考えが回らない。どんな考え方をしようとネガティブな考えになってしまう。

こんな可憐な姿になっちゃってさ……どうすんの、これ。

今、俺はおそらく『エリュシオン』中のキャラクターの姿をして

いるのだろう。
キャラメイクで丹精込めて作成し、俺の分身としてエリュシオンを走り回っていた少女。
それが現在の俺の姿のようだ。
ゲームでの設定でいえば、俺のキャラクターはハイエルフの少女だ。
見た目は人間と変わらないが、髪の中には三角の尖った耳が隠れていて、さらには長命種と呼ばれる種族の一種。
ゲーム開始時のキャラメイクでこだわりにこだわった容姿なので、基本美男美女だらけのキャラクターの間でも、さらにかわいい部類だ。
そんなキャラクターを操ってニヤニヤしながら休日を過ごすのが趣味だったのだが、こととここに至って、なんて馬鹿なことをしてしまったのだと激しく後悔中。
ないもん付けるわけにもいかんし……。
「はあー。まあ、しょうがない。しょうがなくないけど、しょうがない」
いつまでも落ち込んではいられない。
無理やり気持ちを立て直す。
自分の容姿に関しては、無視するしかないだろう。
無視して、なにをするか。
当面は――そうだな。
『なぜログアウト出来ないのか』

やはり、これの解明なり解決なりを目標としなければならないだろう。
風景やら自分の状況やらから推察するに、ここは『エリュシオン』の世界のようだ。ようはゲームだ。ゲームならログアウト出来きて当然である。
しかし、それが出来なくなっている。
直接の原因は、メニューが開けないことか。

……。

「悩んでいてもしょうがない。わからんもんはわからんし」

一つ頷いて、俺は荒野に向かって歩き始めた。

「とにもかくにも、今は行動あるのみ！　うおー！」

気合いを入れる意味で叫んでみる。

あれ、なんかちょっと元気になったぞ？

そう言えば、叫ぶなんて久しぶりだ。大声を出すと、こう、体の中の鬱々としたものが消えていくような感じがする。

「歌うか！？」

いいかもしれない。
えーっと、なにを歌うか。

「んーんー……。迷子の迷子の子猫ちゃん～あなたのお家はどこで

すか～♪」

この後すぐ、空腹で文句を垂れ続けることになった。

# 1　ヒカル（後書き）

誤字脱字、変換ミスがあったら、その都度改訂していきます。

8／26　ダッシュ記号訂正

# 2　キース

「こんなのゲームじゃないよ……」

空腹を抱え、何回目かのセリフを呟く。

メニューが開けないというのは予想以上に不便だった。

最大のものはログアウト出来ないことだが、こまごまとしたものも幾つもある。

いま切迫しているのはアイテム欄が開けないこと。

引退間際ということで、俺は大量のレアアイテムを所持して遊んでいた。どうせやめるのだから、とギルド内の新人プレーヤーにばら撒くつもりだったからだ。

その種類は多岐に渡る。

上位クエストの成功報酬アイテム、クエストのボスキャラのレアドロップ、高位素材を使った高級装備、すでに入手不可能な配布アイテム。

しかしアイテム欄が開けないので使えない。

まあ、それらはまだいい。もともと手放すつもりだったし。

が、食料アイテムも使用できないのには困った。

食料アイテムは回復アイテムと違い、戦闘時のパラメータ上昇効果を持っている。一部の食料アイテムはプレーヤーにとって定番というか必須になっていたので当然俺も所持していた。

しかしメニューを開けないため、アイテム欄も開けず、つまり食料アイテムも使えない。

アイテム欄さえ開ければ、食べ物はあるのに……。

「こんなの、ゲームじゃないよ……」

リアルだが、ゲーム的なリアルさではない。

現実っぽい。

「既存プレーヤー泣かせすぎる。バージョンアップか何か知らんけど、システム変わり過ぎだろ。回復魔法とか、バンソーコーと包帯が出てくるだけ、とかじゃないだろうな」

それはそれで中途半端なリアルさが心をくすぐるが、今はうれしくない。

というか、魔法ってどうなっているんだ？　メニューが開けないんじゃスキルも使えないじゃん。現にアイテムは使えなくて、所持しているはずの食料アイテムを食べられないし。

ありえなくない？

――ぐー……

あー。そんなことより、肉食いたい。肉なら何でもいい。がっつり食べたいから、安いチキンカツをお腹いっぱい食べたい。

「って、現実逃避してる場合じゃないな」

ボンヤリと顔を動かす。視線を上げることなく、太陽を見ることができた。

日が沈んできたのだ。

地平線へ沈む太陽とオレンジに照らされた荒野と言うのはなかなか綺麗だろうが、呑気に風景を眺めている余裕はなさそうだ。

このままでは野宿だ。ロクな準備もないままで。

今は気温は高いが、なにもない荒野では夜間にグッと冷え込むだろう。毛布もなければ火種もないとなると寒さをしのぐ手段がない。それでは休むなんてことは出来ないだろう。最悪、夜を徹して歩き、人の住む集落なり何なりを見つけなければならない。

徹夜で歩くといっても、周りは荒野。いかにもサバンナってカンジで、野生の動物がごろごろいそうだ。野犬どころか、ハイエナやライオンがいそうな景色である。

てか、普通にモンスターがごろごろいる世界だった。

「ステータスとか、どうなんだろうな。外見見る限り、引き継いでそうだけど」

ゲーム上、俺のレベルは上限の１００レベル。

上限いっぱいの俺が、フィールドモンスターごときに遅れをとることはないだろう。フィールド上じゃ、高くても敵のレベルは４０くらいだ。これだけレベル差があると、攻撃をくらってもダメージは１である。お話にならない。

とはいえ、ステータスを引き継いでいたら、だ。

メニューが開けないなんていうバグとしか思えない欠陥がある以上、気楽に考えるわけにもいかないんだろう。

確認も出来ないため、最悪、外見だけ引き継いで１レベルの可能性だってありうるのだ。

その場合どんな低レベルの敵とエンカウントしても苦戦は必死だ。今の状況でＨＰがゼロになるとどうなるかわからないから、出来るだけ安全に行きたい。

「徹夜で歩くのは避けたいよな―」

身の安全のためとはいえ、ちょっと残念。

こんな事態になってかなり不本意だが、実際のところ、ちょっぴりわくわくしている部分もある。
『エリュシオン』は剣と魔法の世界が舞台のオンラインＲＰＧゲームだ。いろいろ楽しみ方はあるだろうが、闘ってなんぼだろう。
そんな世界にいるからには、実際に闘ってみたい。
こんなことになって、割を食うだけと言うのも気に入らないし。
「……」
いや、ほんと。
冗談じゃないぞ。
ログアウト出来るようになっても、ただでログアウトしてやるものか。
遊んで遊んで遊びつくしやる。
なんなら、唯のゲーム時代には規制されていた違法行為だって辞さない。
ていうか、ウチのギルドは元々、違法行為ギリギリのことをして遊んでいたのだ。そのギルドの一員であるところの俺をこんな状態にしておいて、おとなしくしていると思うなよ。
全年齢対象なんてぶち壊しにしてやんよ。
来いよ運営。
なんてことを考えていると、不意に遠くからかすかな物音が聞こえた。

▼

物音の正体は人の声だと直感した。
辺りを見渡すが、地平線の向こうに沈んでいく太陽の光でよくわからない。
音の発生元を探って耳を澄ました。
すると、辺りがしんと静まった。先ほどまでわずかに吹いていた風の音も止まった。
そのまま耳を澄ますと、今度は怒号が聞こえた。

「あっちか！」

顔を上げると風が頬をなで、音が戻ってきた。

人と会えるかもしれない。

そんな期待をもって走り始めたが、あっという間に忘れてしまった。
悲鳴の方向へ走っていると、やっぱりゲームなんだなと実感できたからだ。
先ほどいたところから、体感で３００メートルほどを走っただろうか。全力で走っているにも関わらず、息が上がらない。さらに華奢な少女の体なのに、その速度は尋常なものではなかった。
この驚異的な体力と速度はおそらくレベルに起因するのだろう。

つまり俺は、外見だけでなくレベルも引き継いでいたのだ。
引き継いだならば、俺は上限の１００レベルだ。さらに接近戦闘職でもあるので、ＨＰは１００００を上回り、筋力や俊敏性も高い。

「あははっ、なんか急におもしろくなってきた！　あはははは！」

先ほどまでの不安は消えてしまった。

肌を切るように感じる風。
足を伝わって感じる、地面を力強く蹴る手応え。
自分の意思以上に動く体。

――楽しい！

興奮し、思わず笑みがこぼれる。

「みッけ！」

笑いながら走っていると、馬車をつれた一団を発見した。
どうやらモンスターに襲われているようだ。
馬は嘶きながら暴れ、荷車は横倒しになっている。そして幾人かは剣を抜いてモンスターに立ち向かっていた。

モンスターは『ヘルバウンド』と呼ばれるものだろう。黒い巨体の犬のようなモンスターだ。レベルは２０から２５で低め。ただし夜間は集団で襲ってくるため、同レベルのソロプレイだと結構苦戦する。俺も相当苦労した。

抵抗している側は人数がいるが、レベル不足なのか、みるみる数を減らしていく。

「あははは！　俺の敵じゃないけどね！　助太刀するぜー！」

叫びながら、全力疾走で集団に突っ込んだ。

「――なんだッ！？」

集団の中の一人。銀色の剣を持った男が、俺の乱入に叫ぶ。

俺は気にせず、ヘルバウンドの群れに突進。

そして勢いそのままに、一匹のヘルバウンドを蹴りとばした。

ヘルバウンドは俺の攻撃を受け、まるでボールのように飛んで――

――

いかなかった。

蹴った瞬間ヘルバウンドの体が爆発し、頭と後ろ足だけがポトン、と地面に転がった。

「オーバーキル！？」

あまりにもあまりな結果に、俺は叫んだ。

不意な戦闘は、これまた唐突に終了した。

俺が参加したことによってヘルバウンドが逃げて行ったのだ。

多分、俺が低レベルモンスターとエンカウントしにくくなるパッ

シブスキルを装備してたのが原因だと思われる。というよりも、それくらいしか原因がわからない。

あっけなく戦闘が終わって拍子抜けしたが、思い返すとこれはありがたいことだった。

よく思い出してみると、ヘルバンドを攻撃したとき、俺はなにも考えずに蹴り飛ばしている。

これはゲーム的におかしい。通常ならば戦闘用のコマンドが出るはずだ。これで「攻撃」「スキル」「防御」「アイテム使用」「逃亡」などを選択することができる。

モンスターとエンカウントすると、プレーヤーはそのコマンドを選択して闘うことになる。リアルタイムで進行するので、時間短縮のためにスキルをショートカットキー選択して闘うこともあるが、基本はコマンド選択だ。

それが出現しなかった。

メニューが開けないことと同様、重大なバグである。

この変化の影響はデカい。

まず、これでは戦闘用のスキルを使用することが出来ない。つまり、戦闘の難易度が上がったことを意味する。

そして何より、戦闘がゲーム的なものではなく、きわめてリアルなものになってしまっている。

実際に体を動かし、敵に攻撃を当て、敵の攻撃は避けなければならない。

それはもはや実戦だ。

先ほどはともかく、実際に行うのは難しいだろう。なぜなら、俺

を含めて一般人であるプレーヤーに戦闘経験などあると思えないからだ。初見殺しにも程がある。

とはいえ慣れていくしかない。

『エリュシオン』がゲームである以上、戦闘は避けて通れないものだ。所持金や装備を増やすには、モンスターを狩って素材を得なければならないので、むしろ戦闘をしなければ何もできない。

「ま、そこら辺はおいおいでいっか」

腰に手を当て、ヘルバウンドの去って行った方向を見て呟いた。適当にフィールドモンスターと闘って、場数を踏むしかないだろう。戦闘がきわめてリアルと言っても、現実そのものではない。その証拠に、戦闘初心者の俺が、１００レベルというゲーム的要素のために勝つことが出来た。

慣れることができれば、そのゲーム的要素はより際立ったものになるはずだ。１００レベルが大きなアドバンテージとなる。

そんな風に物思いにふけっていると、後ろから声がかかった。

「おい、君」

声に振り向くと、そこには大柄な男が立っていた。俺が見上げるほどに大きい。

まあ、今の俺が小さすぎるものあるんですけどね。

男からちょっと視線を逸らして、その後方を見る。無事だった他の人々は、遠巻きに俺のことを眺めているようだった。

俺と目が合うと頭を下げたので、俺もペコリと軽く頭を下げた。

「なんだ？」

目の前の男がいぶかしそうな声を発したので、慌てて頭を上げる。

「とと、失礼」

「さっきは助かった。礼を言う」

と男は深く頭を下げた。

俺は慌てた。仕事上、俺が頭を下げることはあっても、人から頭を下げられたことはない。せいぜいコンビニくらいだ。

「いや、いいですって。困った時は～って言いますし」

「しかし、礼くらいしか言えん。こちらは危うく死人が出るところだったしな」

「んな、大げさな」

思わず呟く。

今の状況でもそうとは限らないのだが、『エリュシオン』ではHPが0になっても、多少のペナルティで生き返ることが出来る。まだ状況をつかみ切れていない俺にとって、死なんて言葉と現象にはそれだけの意味合いしかなかった。

「大げさなものか。……君も旅人なのだろう？　ならば、ヘルバウンドの脅威は君も知っているだろ」

えぇー……知らないよ。プレイし始めの頃はともかく、レベル差がありすぎて最近は見たことすらなかった。たまたまエンカウントしたとしても、範囲攻撃で倒せる雑魚である。ロクな素材も落とさないので、それすらも面倒くさいが。

「いや、先ほどの身のこなしを見る限り……」

男は顎に手を当て、じろじろと俺を見る。

あまりにぶしつけな視線だったので、「なによっ」と乙女チックに身をよじってみた。

ちなみに俺の装備は、高位素材をふんだんに使ったブレザーとプリーツスカートの制服装備だ。上下のセット装備で、名前は『黒羽学園制服・女』。「魅了反射」と多少の防御能力しかない、見た目重視の女性専用装備品。いわゆるネタ装備である。

モニター越しでは気にならなかったが、この装備は――ないな。スカートなんて、穿くものじゃない。眺めるものだ。

「君はもしかして冒険者、なのか？」

自信なさそうに男は聞いてきた。

冒険者？　と首をかしげつつ、俺は答える。

「えー、まあ。そう言えなくもないような。正確に言うなら迷子、ですかね」

気持ちとしては遭難、という感じだけれど。

「……迷子？」

「ええ」

「そいつは……」

大変だったろう、と男は言った。

「俺はキースっていう。今、馬車の護衛に雇われてる。――これか

ら近くの町まで行くんだが、君も来るか？」

近くの町！？

助かった！

「いいんですか。助かります！」

一も二もなく俺はその申し出を受けた。

▼

馬車に乗っていた人たちと挨拶を交わし、自己紹介をしあった。俺からは特に言うことはなかったのだが、俺がモンスターを追い払ったと思い込んでいる人々は、俺を囲んで興奮気味に会話をしている。

「なんだか居づらい」

先ほどまで隣にいたキースは、そう言って隅の方へ移動した。数人の仲間とともに一歩引いた場所から俺の様子を見ているようだ。

キースが隣にいるとき、俺はあることに気がついて、それとなくキースに尋ねてみた。

それはキースが『何者か』と言うことだ。つまり、プレーヤーかどうかということである。

結果として、どうやらキースはプレーヤーではないようだ。であるならノンプレーヤーキャラのはずなんだけれど、そこら辺がしっ

くりこない。
俺がどんな質問をしてもキチンとした答えが返ってくる。身振り手振りや、冗談を交えてだ。通り一辺倒のやり取りしか出来なかったノンプレーヤーキャラの反応ではない。
俺の知らないところでＡＩの性能まで向上したのだろうか。
まるで普通に生きているみたいだ。
これでは、プレーヤーかどうかなんて簡単に区別できない。

「あ、見えたよ！」

乗客達を苦笑いで対応していると、俺を囲んでいたおばちゃんの一人が叫んだ。
馬車の外へと視線を向ける。
太陽が沈んで真っ暗な中、ポツンと赤い明かりが見えた。

馬車が止まったのは、小さな町の広場の片隅だ。乗客を迎えに来たのだろう、結構な人数がそこには集まっていた。

「なんとか着いたな」

乗客たちがそれぞれに去った後、キースたちが馬車から下りてきた。

「本当は、暗くなる前に着きたかったんだがな……」
「そしたらヘルバウンドの集団に襲われずに済んだのにな」
「まったくだ。いらん怪我をした」

はあ、とため息をついて、それから俺を見た。

「ま、困っている君を拾うことも出来なかっただろうが」

「うーん」

なんとも返答しづらい。

普段ならすぐに切り返せそうなものだが、キースが皮肉でもなんでもなく、本心で『良かった』と思っているのがわかったため、上手い言葉が出てこない。

「まー。そういう意味では、感謝してマス」

「ははは」

笑って、キースは俺の頭を撫でた。

撫でんなや！！

と、よっぽど言いたかったが、グッと堪えた。

感謝してるっていったばっかだ。

とは言えかなり不快だったので、やんわりとその手から逃れた。

「じゃ、そーいうことで。お世話さまでしたー」

どうにもキースは俺のことを外見相応の少女としか見ていない（それ以外の見方もないが）ようなので、調子が狂う。

さっさと別れた方がよさそうだ。

「待った」

なんすか。

「君、今夜の宿はどうするんだ？」

あ！

宿という言葉を聞いて、俺は慌てた。

すっかり失念していた。

漠然と街に行けばどうにかなると思っていたが、そうだ。夜なのだから、どこか宿に寝床を定めなければならない。

そして宿と言えば、宿泊料だ。

俺は慌ててブレザーをまさぐった。

なんだ、ブレザーのポケットがやたら膨らんでる……これか？違う、なにこれ？　袋――エコバックか？　……ないな。スカートか？　ってか、スカートのポッケってどうなってんの？　おぉ！？こんな所に隠れてんのかよ！　ありえねぇよ。ミニスカートのどこにポケットを隠せる面積があったんだよ。

「あった」

チェックのスカートのポケットから小さな袋見つけ、手を入れて中身を取り出す。

出て来たのは金貨だ。

「それは、魔法がかかっているのか？　すごい金持ちなんだな……」

巾着サイズの財布からざらざらと金貨が出てきたことに、キースは目を丸くして驚いた。

そうなの？

持ち歩いているのは基本的に小額だ。それは死亡時のペナルティ

で所持金が失われる危険があるため、使わない分は銀行施設に預けるのが常識だからだ。そっちには結構な額が貯金されている。

「しかし、この町に宿屋はないぞ」
「えぇ！？」
「小さな町だし」
「一つも！？」
「ああ」

ゲーム的じゃねぇ！

――こともないのか。プレーヤーが拠点とする都市以外、宿とか大きな施設がない町なんてざらにあったしな。
そもそも始まりからして荒野のド真ん中だ。
近くに町があっただけで御の字かもしれなかった。少なくとも、モンスターに襲われる心配だけはしなくてもいいのだろう。

「俺はこの町にいる知り合いの家に泊まるんだが、どこか紹介してくれるよう頼もうか」

俺の様子を見ていたキースがそう言った。
俺を拾ったことと言い、ずいぶん世話好きの性格の様だ。

「でも迷惑なんじゃ？」
「気にするな。放っておくのも後味悪いしな」

こっちだ、と言ってキースは歩き出した。
やたらと歩くペースの速いキースに、俺は小走りでついて行った。

▼

紹介されたのは町の代表を務める男性の家だ。平たく言えば町長の家。それを聞いて恐縮してしまったが、町長の家に旅人が止まることはままあるらしい。客人を止めるための部屋は幾つもあると言うので、一晩世話になることにした。

夕食の席で、俺はさらにいろいろな話を聞いた。気候、風土のこと、世間話や下世話な話。そんな話を聞いてみてわかったのは、どうやらこの近くにゲーム『エリュシオン』に関連する施設はないと言うことだった。

例えば、金品を預かったり、ギルド立ち上げの手続きを行う『開拓ギルド』、初心者が戦闘のイロハを学ぶ『訓練所』、プレーヤー間でアイテム売買を行うことのできる『プレーヤーマーケット』、死んだときに復活する『神殿』などだ。

まあ、こういう施設はプレーヤータウンと呼ばれる大きな都市にしかないから仕方ないかもしれない。

俺は早々に夕食を引き上げ、多少の絶望感と共にあてがわれた寝室へと戻ってきていた。

「さて」

木製の桶で持ってきてもらったお湯で体を拭き、俺は唯一の持ち物である制服の上下と向き合った。

ちなみに今の俺は下着姿である。
『エリュシオン』では下着の装備こそなかったが、そういう細部まで作りこまれた丁寧なゲームとして知られていた。そのおかげか、装備品の制服を脱いでもしっかりと下着を身につけていたのだった。

――まあ、そのせいでウチのギルドみたいな変態お祭り集団ができたりすんですけどね。詳細は今は割愛。

下着姿のまま、姿見の前に立つ。
この部屋にきて、俺はやっと自分の姿をしっかりと確認することができた。鏡なんて持っていなかったし、ステータス画面を見ることが出来なかったため、ようやくだ。

鏡に映ったのは、華奢なハイエルフの１４・５歳の少女だった。
ふわふわの金髪に、きめ細かい真っ白い肌。緑色の大きな瞳は、よく見ると光彩が金色や銀色に輝き、神秘的な色合いを見せている。

俺がキャラメイクで作ったままの、掛け値なしの美少女。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

盛大なため息。

「もおぉぉぉぉ……。ちょっとぉぉぉぉぉぉ」

いくら美少女でも、それは俺なのだった。
まあ、目も当てられないようなキャラじゃなかっただけ、マシとしよう。
などと、消極的に受け入れるしかない。

改めて認識すると、やはりショックだ。
たとえば、この美少女が他人として俺の隣にいると仮定する。それはいい。全然問題にならない。むしろ望むところだろう。
ただ、俺＝美少女なのが納得いかない。
俺は、あくまで美少女を愛でる側なのだ。

……。

ごめん。誤解を招きそうだ。
つまり、いままで男として生きてきたから、いきなり女になったことが納得いかねえってことだ。

「まあ。まあいいや。良くないけど、まあいいや」

頭をふって思考を切り替える。

ふむ。

よし。このブレザーだ。
俺の唯一の持ち物と言っていいこの制服を、これから調べる。
なにか手がかりやら、役立つものがあるかも知れない。

「どれどれ」

ごそごそとポケットをまさぐった。

む。これは、さっきの袋か。なんなんだろうな、なにも入ってないし。綺麗な刺繍がついてるから、一応貴重品なのかな？　っと、胸ポケットになにか発見！　これは……学生証！？　いったいどこの……。あ、内ポケットにもなにかあるな。お、時計か？　あ、『

朽ちゆく機工神の心臓』か。へー、アクセサリってこういう風に装備されんのな。ふーん。

しばらくポケットを漁っていたが、特にめぼしいものは見つからなかった。

制服を畳んでベッドの端に置き、俺はベッド倒れこんだ。

「財布があっただけ、良かったと思わないといけないのかなー」

呟いて、瞳を閉じた。

キースはお金持ちだって言っていたけど、あの手持ちでどれだけ生活出来るだろう。ゲーム時代――普通のゲームだった『エリュシオン』――の水準じゃ、そんなに多くない額だから心配だな。はあー。ゲームでまで仕事しなきゃいけないのかねぇ。

ログアウトする方法も探さなきゃならんのに。

「せちがれぇー」

まどろみの中で呟き、俺は深い眠りへと落ちて行った。

## 2　キース（後書き）

誤字脱字、変換ミスがあったら、その都度改訂していきます。

８／１２　誤字訂正中に変な上書きをしてしまいました。本文が一度消えてしまい、改めて投稿しています。バックアップを取っていなかったため完成稿以前のものです。そのため細部が違うところがあります。気づいた方、指摘いただけると助かります。

## 3　ラルファス

「おい！　エルフのねぇちゃん！」

朝市で賑わう広場の片隅で、俺は突然声をかけられた。「姉ちゃん」なんて呼ばれ方をしたためにしばらく気がつかなかったが、「エルフの」と言われて、俺のことか？　といぶかしみつつ振りかえる。

現在、貨幣経済の相場を調査中だ。

今のところ、よくわからん。流通しているのが銅貨や銀貨が主なため、俺の持っている金貨がどれだけの価値があるのかさっぱりだ。ただ、結構高額であるのはわかってきた。

実際に使ってみるのが手っ取り早いとようやく気付き、何かないかとあちこち探して回っている最中だった。

「？」

振り返ると、そこには少年が立っていた。

俺（の外見）よりも少し背が低いだろうか。身長でいうなら「男の子」というニュアンスが合いそうだけれど、意志の強そうな瞳が、「少年」の雰囲気をまとわせている。

そんな、男の子のような少年。

「今呼んだの、お前か？」

「うっ……！」

なぜか少年はたじろいだ。

「なになに。なんか用なの？」

俺が首をかしげると、再び少年は叫んだ。

「ねえちゃん！　冒険者なんだろ！？」

「ねえちゃ……」

なんだろう。すげえ違和感だ。

「冒険者なんだろ！？」

「あ、まあ。そうかな？」

冒険者と言えなくもない、か？

プレーヤーは素材集めやクエスト達成のためあちこちに出かけて行ったから、それを冒険と言えなくもない。

「おれ。ラルファスっていうんだ」

ラルファス。かっけー。

「俺なんてヒカルだぜ」

と自己紹介。

ラルファスは、「ヒカル、ヒカル……」と口をもごもごさせて呟いた。

「言い難いな」

「言い難くないし。ヒカルだし」

おいおい、なんて礼儀の知らない子供だ。初対面でなんてこと言うんだ。

「でも、いい名前だな」

マジかよ。良い子じゃんか。

「で、なんか用なの？　ラルハス」

「ラルファスだって」

「言い難いな」

「そんなこと言われたの初めてだ」

ラルファスは傷ついたような顔をした。

あれ、俺大人げなかったか？

「ゴメンて。なんか俺に用事か？　ラルファス」

「あ、うん」

頷いて、ラルファスは俺から視線をそらした。

何だろう？

「あのさ、ヒカル姉ちゃんが冒険者だって、キース兄ちゃんに聞いたんだ」

「へえ」

キースが？　そう言えば、あいつ今何してんのかな。

「キースって、いまなにしてんの？」

「寝てる。この街に来た次の日は、いつも昼まで寝てるんだ。で、

そのまた次の日には帰っちゃう」
「ふうん」
「で、こないだ来た時、今度森に狩りに連れて行ってやるって言ったんだ」
「森？　ここって荒野じゃないの？」

ラルファスの単語に引っかかって、尋ねてみた。
とはいえ、この町に到着したのは夜だったので、付近の様子などわからなかった。どこか近くにあるもかもしれない。

「ちょっと行ったところにある。山みたいに大きいやつ。でも、危ないから、大人でも近寄らない。入っていいのは一人前の冒険者だけだって」
「はあん」

そこまで聞いて、なんとなく察した。
その『一人前の冒険者』というのに、子供っぽく憧れているんだろうな。

「でも今日になったら、昨日は大変だったから寝かせてくれってさ」
「ああ、なるほど」

着いたの夜だったし。なにより戦闘があったから、疲れているんだろう。

「まあ、キース兄ちゃんは、あんなんだけど。ヒカル姉ちゃんは森に行くんだろ？　冒険者だから」
「……」

連れて行けってか。

いや、しかし、俺も戦闘慣れしているわけじゃないしな。一人ならどうとでもなるだろうけど、子供連れは拙いか。

「いかない」

連れて行ってやりたい気もあるが、俺はハッキリと言った。怪我でもしたら、どう責任をとればいいのやら。

「なんで!?」

驚いたようにラルファスは叫んだ。

「うっさい。――いいか、キースはいつも昼まで寝てるんだろ?」
「うん」
「俺はいつも、昼まで買い物をすると決めているんだ」
「はぁ?」

意味わからん、というような声。

素直だ。

「つまり、俺もキースも、午後からは暇ってこと」
「午後からならいいのか」
「おう。午後になったら、キースを起こしに行こう」
「やったっ!」

ラルファスはぴょん、と飛び上がって喜ぶ。

「午前中はどうする? 俺の買い物に付き合う?」
「いいぜ! いいもん教えてやる!」

ぐるぐると俺の周り走り出したラルファス。かなり邪魔くさかったので、襟首を掴んでつまみ上げる。

そのまま市場を案内させた。

まあ、あの世話好きのキースのことだ。いくら疲れていると言っても、ラルファスを邪険にはしないだろう。

「ほんっとうに、疲れているんだがな……」

ブチブチと小言を言いながらもキースは俺たちを森に案内した。やはり世話好き。そして子供好きなのかもしれない。

……もしかして、ロリコンの気もあるか？

俺の外見を考えると、ギリギリありえそうだ。

「？　どうした」

「いや、なんでも……」

不毛な想像は止めよう。

「うおお！」

突然、キースの隣を歩くラルファスが声を上げた。

「ラルハス、うっさい」
「ラルファスだって！」

ぶんぶんと手を振り回した。
その手には、鞘に包まれた小さな剣が握られている。午前中、俺が市場案内のお礼に買い与えたモノだ。
ラルファスのお蔭で、少しはこの世界の相場がわかってきた。
まずわかったのが、貨幣では十進法が用いられていないこと。
銅製の小さな補助通貨１２枚で、銅貨一枚。銅貨５０枚で銀貨１枚。銀貨６枚で金貨１枚。つまり金貨は銅貨３００枚。ただ、金貨や銀貨といっても様々種類があるようで、俺が理解できたのは自身の持つ金貨と、幾つかの銀貨とのレートのみだ。
俺は金貨で１５００枚は持っている。
『エリュシオン』のノンプレーヤーの、平均的な1日の労働賃金が銀貨1枚に満たないというから、これは途方もない大金ということになる。

いや、物価の安いところで助かった。

ゲーム時代の金貨１５００枚は、高価な回復薬で二つか三つ、装備品なら下位武器一つというところか。物価の差は歴然だ。というか、ゲーム時代の最小貨幣が金貨だったし。銀行には金貨で１０万枚ほどあるのだが、これの出番はないかもしれぬ。

さておき、ラルファスの剣だ。
これは市場に来ていた武器商人から買い取ったものだ。炎の精霊の加護を受けているとか何とか。昼ごはんの後にチャンバラをして遊んでみると、どうやら魔法付加がかかっているらしいのがわかった。たぶん火属性の追加ダメージでも発生するのだろう。

金貨2枚ナリ。
安っ。

うれしそうに剣を振り回すラルファスを見て、キースは苦り切った顔で言った。

「子供にあんな剣を与えてしまって……」
「いやあ。喜んでるじゃん」

キースは半眼で俺をにらむ。

「君は、子供に剣を買い与えたという自覚はあるのか？」
「？　いいじゃんか。モンスターを倒すのに剣は必要だろ。大人だろうがなんだろうが、武器なしでどうやって身を守るんだよ」

俺の言葉に、キースはため息をついた。

「それで、君は彼に対して責任を持てるのか？　ただでさえ彼は冒険者にあこがれている」
「……」

俺は黙ってキースの言うこと聞いていた。

「そのうえであんなものを手にしたら、どうなるかわかるだろう？　彼は子供なんだぞ」
「そうだな」

ラルファスを見ながら、俺はうなずいた。
確かに、「常識」と言うものを考えるなら、俺はちょっとやり過

ぎたかもしれない。

けれど、俺は間違ったことはしていないと思っている。

なぜなら、ラルファスは装備して見せたからだ。

あの魔法付加の小剣を。

「君な……」

黙り込んだ俺に、ハッキリと怒気を見せたキース。

さえぎるように俺は言った。

「心配ないって」

「なに？」

俺の言葉に、キースは不審げな表情を作った。

「あいつはもう、冒険者だ」

魔法付加武器。

ゲーム『エリュシオン』では、それはどの職業でも２０レベルからしか装備できない。

つまり、ラルファスのレベルは２０以上ということになる。

ゲーム時代の常識で考えれば、これは異常な事態だ。

ゲーム時代の一般ノンプレーヤーキャラのレベルは3前後。通常の兵士で１０前後。騎士ですら２０はなかった。例外的なノンプレーヤーキャラを除いて、魔法付加武器は、世界を冒険して回ったプレーヤーにしか装備出来ないモノだった。

「このままいけば、きっとすごい冒険者になる」

新鮮な物事と出会った時の感動と、この世界に来てから抱き続けている違和感を感じながら、俺は言った。

## 3　ラルファス（後書き）

ア・ボーイ・ミーツ・ア・ガール？

# 4　ラルファスとキース

「ふう。こんなもんでいいか」

額の汗をぬぐう動作をしながら、俺は言った。

もっとも、汗なんてかいていない。軽い運動後のように、体がぽかぽかと温かくなってきただけだ。

「はぁ、はぁ。――君、どういう鍛え方をしているんだ……」

「ぜーっ……ぜーっ……」

しゃべれもしないのがラルファスだ。

まだ日の高い昼過ぎに、俺たちは森に入って適当な獲物を探して歩き回った。

歩いていたのは、森の外周付近。ラルファスがいるためにキースが深入りすることを避けたからだ。

その結果、獲物はモンスターではなく、普通に野生の動物達だった。

戦闘練習のつもりで来た俺や、モンスター相手の狩りを期待していたラルファスにとって、ずいぶんな肩すかしだったと言わざるを得ない。

「だから、狩りだと言っただろう」

なんてキースは言っていたが、そんな言い訳が通用するのはラルファスだけだ。

俺は別に、キースと狩りの約束をしていたわけではない。

ということで、しばらく動物相手の狩りに付き合った後、俺は別行動を提案した。

外見少女の一人歩きにキースは強く反対したが、

「心配すんな！」

と言い残して一人森の奥へ。

二人を撒くつもりで走ったのだが、面白がったラルファスがキースを置いて俺を追いかけてきて合流。仕方なくキースもラルファスを追いかけてきて合流。

3人仲良く合流したところでモンスターとエンカウントという次第に相成った。

エンカウントしたのはダイアホースという真っ黒い馬のモンスター。ハッキリ言って馬と外見が大して変わらないが、立派なモンスターだ。レベルは忘れたが、さほど強くなかったと思う。

俺とキースでけしかけてあっという間に倒した。

しかし、この戦闘が良くなかったのだろう。

騒音や血のにおいに、ぞろぞろとモンスターたちが寄ってきた。

「ゴブリン」「シュペット」「フニ」「ヘルバウンド（単体）」。

数こそ多かったが、どれも低レベルだったので、ラルファスも参加して戦闘を再開。

俺は装備している手甲『朽ちゆく機工神の腕』で殴る通常物理攻撃しか出来なかったが、キースとラルファスは『剣士（ソードマン）』のスキルを使用しながら戦った。

あれって、スゴイ不思議だ。技名を叫べば、自動でできるんだろうか。今度一人のときにやってみよう。

２０分ほど戦闘し、俺たちはモンスターを全滅させることに成功した。

「よう、ラルハス。怪我してないか」

「はぁ、はぁ。ラル……ファスだって」

息も絶え絶えに返答してくる。

うん。どうやら大丈夫のようだ。

「ところで、こいつらをどうする」

さすがに持ち直したキースが俺に訊いてきた。

こいつらとはモンスターたちのことだろう。辺りは血の海。見るも無残な光景である。

というか、『エリュシオン』は全年齢対象のゲームだったため流血表現などなかったはずだ。倒したモンスターは素材を回収するか、一定時間たつかすると光の粒子になって消えていくという仕様だっ

た。

この扱いもなにやらゲーム的ではない。

俺がするまでもなく、『エリュシオン』はR18指定になってしまったのだろうか。

それって、どうなのだろう。

エロ要素を期待してもいいのだろうか。

「どうするって……放っておく以外になにができるの？」

鼻をつまみながら俺は訊いた。血のにおいはあまり感じない。それでもきつく鼻をつまんでいた。

「貴重な素材を入手することができる。例えば、ダイアホースの尻尾は防具に利用できるし、ゴブリンの肝は薬になったはずだ」

そのほかにも、とキースは続けた。俺は大して興味ないので聞き流した。

「はぁ、たくましいねー」

入手ってどうやるんだろうか。ゲーム時代と違って、近づいても素材選択のウインドウは出てこない。となれば、想像はできるけれど。

「俺はいいや。キースは何か気になるのはある？」

「あ、ああ」

「じゃ、そいつだけ解体して、後は放っておこうぜ。ちなみに、俺は手伝えない。手伝いたくない、断固」
「わかった」

キースは頷いて、のしのしと血の海を渡って行った。歩きながら、腰から小刀を抜く。あれでばらすつもりだろう。

「ラルファスは？」
「き……キモチ悪い」

地面に仰向けに寝転がり、青い顔で唸った。

調子は悪そうだが、目立った怪我はしていない。

その様子に、やっぱりな、と俺は思った。

ラルファスには、どうやら戦闘経験があるようだ。先ほどの戦闘を見ていれば、ただの田舎の少年でないことは明白だ。

レベルを上げるには戦闘で経験値を獲得するしかないのが『エリュシオン』だ。２０レベルとなれば、それなりの場数を踏んでいることになる。

子供のくせに。

「じゃ、一緒にあっちに行ってよう」

よいしょ、とラルファスを持ちあげて俺は移動する。途中「ねーちゃん、おろして……」と弱々しくラルファスが呟いたが、思いっ

きり揺すって黙らせてやった。

「ヒカルねーちゃん。これ、ありがとうな」

大きな木の幹に背中を預けて座り込みながら、ラルファスは言った。

「うん？」

「この剣」

「ああ」

ラルファスは、大事そうに俺が贈った小剣を抱く。

「俺は装備できないから。気にすんな」

剣系統の武器は『剣士（ソードマン）』から派生した職業（クラス）しか装備することが出来ない。『格闘家（ファイター）』からの派生職業である『制圧者（タイラント）』の俺にとっては無用のものだ。

ちなみに、『エリュシオン』では『剣士（ソードマン）』『格闘家（ファイター）』『弓士（アーチャー）』『魔術師（メイジ）』の基本４職と、それから派生する２次職８職。そして最上級の３次職である１２職の計２４職業のいずれかに就くことになる。キースとラルファスは『剣士（ソードマン）』。俺は『格闘家（ファイター）』の最上級職の一つである『制圧者（タイラント）』だ。

「でもお前、これから大きくなるんだから、いつまでもそれ使ってんなよ」

おそらく、ラルファスの剣は装備レベル２０の下位武器だろう。ラルファスのレベルが上がっていけば、上位武器を装備することだってできる。

ゲーム時代は対象に近づけばある程度のステータスを見ることができたが、今はできない。そのため、キースやラルファスのステータスを見ることもできないのだが、一般のノンプレーヤーキャラよりははるかにレベルが高いのはわかる。

キースはヘルバウンドの集団戦でも互角だったから、２０レベル後半から３０レベル前半。ラルファスは魔法付加の剣を装備出来たが、先ほどの戦闘では真っ先にへばったから、２０レベル前半。

レベルだけ見ると、クエストの途中で登場する、イベントキャラクターみたいだ。

まあ。救助クエストの対象とか、そんな軽いクエストにだってそういうキャラは出てきたんだし、騒ぐほどのことでもないだろうけど。

ただ、一般のノンプレーヤーキャラじゃないことは確かだ。

とそこまで考えて、それとも、と俺は思った。

それとも、俺は。

何かの長編クエストに巻き込まれてしまったのだろうか。

『エリュシオン』の世界に入り込んでしまうような、文字通り世界

規模で展開する英雄的な物語に。

そんなことをつらつらと考えていると、ガサガサと草をかき分けてキースがやってきた。

「おお。お帰り」

「あ！？　あぁ、ただいま……」

俺の言葉に、キースは大げさに驚く。

「？」

ラルファスと二人、首をかしげた。

「死体でも担いでくるかと思ったけど」

俺の想像に反して、キースは手に麻袋をぶら下げているだけだ。

「なにを回収してきたんだ？」

「ふふふ」

キースはニヤニヤと笑った。

「キース兄ちゃん、気味がわるいぜ」

上機嫌に笑ったキースにラルファスが突っ込んだ。

まぁ、見ろ。そういってキースは麻袋を広げた。

「げ。――腕、か？」

「そう。アッシュグリードの腕だ。君が倒したものだが」

アッシュグリード。死霊系のモンスターだったか。物理攻撃の効かない霊魂のモンスターではなく、動く鎧（フィアナイト）と同様、実体の部分を攻撃すれば倒すことができる。

「君は興味なさそうだったので、俺が回収しておいた。それとも、やはり問題あるだろうか」

「いや。いいよいいよ」

アッシュグリードか。なにを回収できたっけ？

「なんでそんなの拾ってきたんだ？　にーちゃん」

俺が思い出そうとしていると、横からラルファスが訊いた。

「アッシュグリードからは『翠輝石』が回収できると聞いたことがある。おそらく腕輪やら指輪についている石のことだろう」

へえ、腕輪や指輪ね。

たしかに腕にくっついてる。素材回収って、そんな細かい設定になっていたのか。

俺は感心しながら頷いた。

「ん？　でも『翠輝石』ってなんの素材だっけ？　それとも、売却用？」

「いや、素材用だ。――武器に、魔法効果を付加することができる」

魔法効果、と俺は呟く。

「ああ。剣の素材にしようと思ってな」

そう言って、キースはラルファスと向き合った。

「俺だって、お前とは付き合いが長い。俺からも剣を贈らせてくれ」

「え……え？」

ラルファスはキョトン、とキースを見返した。

「その、なんだ。――子供扱いして悪かったと思っている。お前には剣の才能がある。いずれ、冒険者としてか、剣士としてかはわからないが、大成するだろう。さっき一緒に戦って、そう思った」

「え、うん……」

「お前の才能を伸ばすために、俺が贈る剣も使ってほしい――と、ふと考えた。どうだろう？」

「え？」

首をかしげて、ラルファスはキースを見上げた。

俺はそんなラルファスの背中をたたく。

「良かったじゃん。先輩が、剣くれるってさ」

「えぇ！？」

「がんばれ。新米冒険者」

俺の言葉に一層困惑するラルファス。
その様子に、キースは笑みを浮かべる。

「ぷっ」

なんか、いいハナシだな？

深い森の中で、俺のカラカラとした笑い声が響いた。

「ねーちゃん、行っちゃうのか？」

朝霧が立ち込める、辺境の町の小さな広場で、俺は短い時間を一緒に過ごした小さな友人と別れを惜しんでいた。

森に狩りに行った次の日。キースが帰りの馬車の護衛をすることになっていたので、俺も同行させてもらうことにしたのだ。

わずか3日の滞在期間だったが、かなり濃い時間を一緒に過ごしただけにラルファスとの別れはなんとなく寂しい。
もしかしたら、弟のように感じていたせいで一層そう感じるのかもしれない。

「おう。まあ、また来ることもあるかもな。わからないけど」

一応目的を持った旅路なだけに、安易に再会を約束することはできなかった。

「俺は、来月も来るぞ」

荷物をまとめた背負い袋の位置を直しながら、キースが言った。

「うん……」

キースの言葉にもラルファスの表情は晴れない。

「おいおい。んな顔するなって」

俺はラルファスの顔を両手で押さえた。

「い、痛いって。ねーちゃん」

変な顔。ぶっさー。

「俺は結構たのしかったぜ」

「お、俺も……」

「ならなんで悲しそうなんだよ。楽しいなら、笑えばいいじゃん」

なんて、およそ理論的ではない言葉で励ます。

「楽しいけどさ……」

俺の両手のなかで、ラルファスは顔を歪めた。

「あー。もう、泣くなよ。―お前さ、冒険者になるんだろう？　俺のことが忘れられないなら、会いに来ればいいだろ」

「あ」

「まあ、そんなに簡単じゃないだろうけど。――でも、冒険って多分、そういうモンだぜ」

俺の言葉にラルファスは目を見開いた。

「そうだな、ラルファス。お前が冒険者なら、その足で会いに行けばいい」

頷きながらキースもそう言った。

「難関に挑むのが冒険者なんだ。二人が冒険者なら、ここで分かれても、きっとどこかでばったり再会できるさ」

「――うん」

キースの言葉に、ラスファスは神妙に頷いた。

「おし。――じゃーな」

軽く手を振って、キースと並んで歩きだす。

多分、あいつ。すぐにでも会いに来るだろうな。

よくわからないけど。

## 4　ラルファスとキース（後書き）

職業とするかクラスとするか迷いました。結局、職業にルビ振ってます。

あと、ここで小説の方向性がヒカルによって暴露されてます。

## 5　シャロンとカミラ

１０日ほどの行程で、大きな街に着いた。

夜は集落に泊まって野営などは一切しない旅だったので、俺の予想したサバイバルよりずっと快適だった。

途中で小さな町に寄り、そこでも三日過ごしたから、ラルファスの居る町とは馬車で一週間程の距離となる。

結構遠い。

キースとは、途中で立ち寄った町で別れた。

そこを活動拠点としているらしい。たまには会いに来るとのこと。

着いた街は王国第二の都市『港湾都市・ポートアーク』というらしい。

王国やらポートアークやら、ゲーム時代には聞かなかった名前だ。

ゲームは都市国家が無数に存在している世界であり、王国なんていう巨大な国はなかった。どういうことかと不審に思い、俺は道中キースにいろいろ質問してみた。

驚くことに、俺がプレイしていた『エリュシオン』の年代から、結構経っているらしい。ゲーム『エリュシオン』は、昔話や物語でのみ語られる「繁栄の時代」あるいは「理想郷（エリュシオン）」として今に伝わっていた。

いま人が住んでいるのは、ゲーム時代は未開の土地としてマップ

が用意されていなかった地域のようだ。かつてプレーヤータウンが存在していた地域は、モンスターが無数に跋扈（ばっこ）する危険地域となっているとか。

さらに、知能の高いモンスターが危険地域内でそれぞれの勢力を形成していて、それらを総称して魔族と呼んでいる。

という、とんでもないことになっていた。

「所属都市国家の開拓」という『エリュシオン』の基本的な設定すら消えている。

これは、プレーヤーが共同して魔族と戦う展開だろうか。

熱い展開だが、どうなのだろう。ユーザーを置き去りにしている感が否めない。少なくとも、俺は『エリュシオン』にそういう展開は求めていなかった。そんなのはコンシューマー版でやってほしい。

自分で目的を設定して遊べるのが魅力の一つだったのに。

魔族を倒したら、めでたしめでたしで終了しそうだ。

さておき、『港湾都市・ポートアーク』である。

例によってキースに宿を紹介された俺は、簡単な地図を抱えて街なかを歩いている。

「うーん。こうして見ると、やっぱゲームだなあ」

しみじみと、俺はつぶやいた。

歩きながら視線をあちこちに向けると、さまざまなゲーム時代によく見かけた亜人種がいることが分かる。

巨大なトカゲのような竜人族（ドラゴイド）。どこか優雅な雰囲気を持つ猫人族（キャイア）。尻尾をパタパタ振っているのは犬人族（ビーグル）だ。

それぞれが賑々しく通りを歩いているのは、なんだか懐かしい気持ちにさせた。

こんな事態に陥って以来、ゲームとは乖離した出来事に直面し困惑し続けた俺にとって、ゲームの風景そのままの光景は、安らぎを感じるに十分なものなのだろう。

ちなみに。

それぞれの亜人族は、「獣の特徴を持った人間」といものではなく、「人間ぽいシルエットをもつ二足歩行の獣」である。種族ごとのパラメータ変動のない『エリュシオン』では見た目が重視される傾向にあり、これらの亜人族は人気の種族というわけではなかった。

スタンダードに人間（ニンゲン）か、見た目がきれいな妖精（エルフ）、シンプルな大素精（ノーム）がメジャーなところか。

「っと。ついた」

大通りから一本入り、なかなか立地条件のよさそうなところに、キースから紹介された宿があった。

「でっけー」

見上げるほどの大きさがある。道中の田舎町では、これほど大きな建物は見かけなかった。さすが王国第二の都市だ。

知らんけれども。

感心しながら俺は宿屋に入った。

どうやら、一階は酒場らしい。
それほど広くないフロアの一角にカウンターがあり、他のスペースには幾つもテーブルが並べられている。数人の客がテーブルに着き、黒っぽい色の飲み物を飲みながら談笑しているのが見えた。

「キース。ちょい雰囲気悪くないかな……」

まんま、ゲームの「酒場」の景色だ。薄暗くて、雑然としていて、酔客がテーブルに突っ伏している。
現実でこんな居酒屋があったら、絶対入らないだろうと思うような雰囲気だ。

「……」

カウンターにいる男が、ちらちらと視線を向けてきた。
男の視線に気付き、俺はカウンターによる。

「キースの紹介なんですけど。部屋を一つ貸してもらえませんか」

俺がそう言うと、カウンターの男は軽く目を見開いた。

▼

「キースの紹介？」
「ええ」
「なら、全然構わないけど。けどウチ、冒険者の泊まり客が多いよ。お嬢さん、それでもいいのかい？」

お嬢さん、ね。

「大丈夫です。一応、俺も冒険者なんで」
「あ、ああ。うん。なら、いいんだ」

何泊する？　と聞いてきたので、とりあえず一週間と答え、前払いで料金を渡した。

「ところで、キースは来てないのかい？」
「ええ」
「そっかそっか」

頷きながら、何やら台帳を引き出してきた。

「お嬢さん。名前は？」
「ヒカルです」
「ふーん」

男は相槌を打ちながら、なにやら台帳に書き込む。
なんだろう、と思った俺は男の手元を覗いてみた。

『２０２　ひかる　７／２２～７／２９』

さすが国産ゲーム。なんか雰囲気台無しだ。

「ちょっと待ってて」

台帳を書き終えた男はそう言い残し、身軽に階段を登って行った。

なんか、宿屋の主というには軽すぎる印象だ。見るからにオヤジ、

というのを想像していただけに拍子抜けした。

「逆にリアル、なのか？」

ぶらぶらと店内をうろついていると、男が戻って来た。恰幅の良い女性と一緒だ。

「キースの紹介なんだって？　この宿の主人で、シャロンだ。よろしくね」

おお。

こっちが本当の宿屋の主。想像していた宿の女主人の雰囲気そのままだ。

「ヒカルです」

「へえ、ヒカルね。キースと一緒に来たのかい？」

「途中まで。ここに来る前に立ち寄った町で別れました」

「ああ、なんだ。そうなんだ。顔見せればいいのに」

ははは、とカラカラ笑ってシャロンさんは言う。

「さ、こっちだ。案内するよ」

「さて、どうしよう？」

案内された部屋の寝台に横たわり、天井に向かって俺は言った。

もちろんだが、返事は返ってこない。
でもちょっと寂しい。あの木目、実家の天井で見た気がするのにな。

ついでに俺はというと、やはりというかなんというか、下着姿だ。
基本、家では裸族だったので本当はブラも取っ払ってしまいたいが、何とか自制する。なんせ今は美少女なのだ。それに、この体で普段通りに過ごして女性の体であることに慣れてしまいたくなかった。どこかで自分を律していないと、男であるということを忘れてしまいそうだ。まあ、それがブラというのもおかしな話だが。

「まずはー」

俺は思案を巡らす。

「危険地域は、行かないといけないよな」

そこにはかつてのプレーヤー都市群があるはずだった。おそらく、何らかとしか形容のしようのない何らかの手がかりがあるはずだ。ないと困る。

「あとは……」

自分以外のプレーヤーを探す、かな。

俺がこの世界に来た時、現実では22時頃だった。ログインしているプレーヤーの数は多かったはず。ならば、俺以外にもこういう状況に陥っているプレーヤーは相当数いるはずだ。

俺だけが異常な状況に陥っているのでないかぎりは。

ただ、なにをするにせよ。しばらくは拠点が必要だろう。

危険地域に行くにしても、大体の方角くらいしかわからない。歩けばいずれは着くだろうが、そんな無計画では遭難してしまう。さまざまな準備は必須だ。装備とか回復アイテムとかはもちろん、長旅をするためのノウハウ等も仕入れなければならない。できれば、危険地域のことも事前に情報収集しておきたいな。

プレーヤー探しをするにしても、人のいない荒野より大きな町の方が可能性は高いだろう。そこに拠点を置けば、より効率的だ。

「しばらくは、この宿に泊まるかな……」

呟きながら、うとうととしていると、階下から階段を登る音が聞こえた。

踏みつけるように登っているのか、かなりうるさい。

ちょっとー。迷惑な客もいるんだな。

目をつむったまま、そんなことを考える。

すると――

バアン！

部屋のドアが勢いよく開いた。

「な、何事!?」

唐突な物音に驚いて、俺はベッドから起き上がった。

「ちょっと!　あんたキースとどういう関k―って、なんて格好してるのよ!?」

続いて聞こえた叫び声に、俺は寝台に腰掛けたまま視線をドアに向けた

入ってきたのは金髪碧眼でエプロンドレスを身に付けた少女だった。

少女は俺を見て叫ぶと、いきなり飛びついてきた。

「な、なんだ!?」

「ちょっと貴方!　はしたないわよ!」

少女はベットの上のシーツを掴み、俺に巻きつけようとする。

「ちょ、なにをする」

ヒラリ、と俺は少女をかわす。

二人の位置が入れ替わって、俺がドア側、少女がベッド側になった。

「はしたない!!　隠しなさいよ!」

「な、なんだとぅ」

はしたないぃ?

うろたえながら自分の格好を確かめる。

薄いピンクの下着の上下。

うん。いつも通りじゃん。むしろブラまで付けてるんだから、鉄壁のガードと言ってもいい。

それに、制服はともかく、下着はちゃんと毎日取り替えている。特に今穿いているのはおろしたてで、よそ行きにしたっていいくらいだ。部屋着としては、別にはしたなくはないと思うんだけど。

というか、そんなこと言われたの初めてだ。

いま俺、一応女の子なんだけど。はしたないとか、ひどくない？

「隠すものなど何もない。目に焼き付けるといい」

失礼なヤツめ。

「な、なぁッ――。そうやって、キースを誑かしたのね！？」

ブン、と少女は俺にシーツを投げつけた。

目の前でバサッとシーツが広がる。避けれない。

「わっ」

ふわり、とシーツが俺を包んだ。

「ん？　たぶらかす？」

今こいつ、なんていった？　たぶらかす？

誰が？　誰を？

首をかしげていると、少女はみるみる瞳に涙をため、わっと崩れ落ちた。

顔を覆う手の隙間から、低い嗚咽が漏れだしている。

突然のことに驚きつつも、俺は少女に近寄った。

「なにいってんの？　おまえ」

「なによぅ……」

しくしくと泣きながら、弱々しい返事。

えー、どうしよ。これ？　泣いた女性の扱いなんて、見当もつかないんだけど。あいにく俺は、現実ではそこまでレベルが高くなかった。泣かせたこともないし、泣かれたこともない。いたってほのぼのとしたお付き合いしか経験したことがないのだ。

「泣くなよ」

「う……うるっさい！」

俺がとりあえず言うと、少女は俺を罵倒しながら泣き出した。

えー？　どうしよう？？

ギャーギャーうるさい少女を前に途方にくれる。

「……なにやってんだい？」

と、不意に後ろからシャロンさんに声を掛けられた。

助かった！　と後ろを振り返ると、廊下をふさぐようにして立つシャロンさんと、多数の見物客。
シャロンさんは呆れ顔だが、見物客のほうは顔を赤く染めて俺を凝視していた。
むっと視線を向けると、彼らは顔をひっこめた。
よわ。

「シャロンさん、ちょうどいいところに。彼女、何とかしてください」

そう言って、俺に組み付いている少女を指差した。
少女見てシャロンさんは顔を顰める。

「カミラ……」

うん？
なにやらシャロンさんはこの少女のことを知っている風だ。
顔見知りなのだろうか。

シャロンさんは大股で部屋に入ってきて、少女を抱える。

「カミラ！　お客さんに迷惑掛けるんじゃないよ」
「うぅーっ！　だって……だって、きーすがぁ」

顔をぐしゃぐしゃにして少女―カミラと言うらしい―が言った。

あれ？

キースという単語とカミラの様子、さらには自分の性別（仮）を思い出して、俺は遅まきながら事態に気がついた。

「あっ！　あーっ！　あぁ！」

とりあえず叫ぶ。それからフォロー。

「っえと。あー、貴方がカミラ！？」

「えぅ……」

肯定なのかなんなのか、よくわからない返事が返ってた。構わず、続ける。

「あーっと。キースから話は聞いてる。うん。くれぐれもよろしく言っておいてくれって、伝言頼まれていたんだった」

「え……」

俺の言葉にカミラが顔を上げた。頬が赤く染まっている。

カミラを抱くシャロンさんは、なにやら驚いた表情を作ったが、俺はかまわず続けた。

「えっと……あのー、あれだ。ほかにも、『何かあったらカミラを頼れ。彼女ならきっと助けてくれるはずだ』って言ってた。うん、そういえば」

この言い方なら、いかにもキースがカミラを頼りにしているかのように聞こえるはずだ。

実際はそんな伝言も何も聞いちゃいないのだが、知るもんか。

ていうか、こういうことなら先に言っておけよキース。

なに、テレてんの？

それとも俺の美少女っぷりが、まさかお前を惑わせたなんてこと

はないだろうな。

「……本当に？」

上目づかいに確かめてくるカミラ。
俺は勢いよく首を縦に振った。
そんな俺をじっとみていたカミラは

「んもぅーっ」

と叫んだ。
身をよじってシャロンさんから逃れる。

「しょうがないなー」

顔全体に喜色を浮かべ、俺に向かって手を差し出した。

「うん。私はカミラ。しょうがないから、困った時は相談してね。手伝えることなら手伝ってあげる」

笑顔を浮かべて言った彼女に、俺はほっと息をついた。
差し出された手を握り、俺も答える。

「俺はヒカル。まあ、困った時は相談するから、よろしく」

「ふふ」

カミラは嬉しそうに握った手をぶんぶんと振った。

「で――」

ギュッと、俺の手を握る力が強くなった。

「キースとは、どういう関係なの？」

▼

迷子になっているときに拾われたことや、ラルファスと過ごした日々をカミラに聞かせてやった。

まるで英雄譚でも聞くかの様に顔を輝かせていたカミラだったが、唯一、ラルファスのいる村から二人で馬車の旅をした下りで眉を吊りあげた。

そこは何もなかった。と必死に言いつくろっておいた。

なんかあってたまるか。

一通り話し終えた後、カミラは満足そうにお礼を言って、俺の部屋から出て行った。

「ね。ヒカルさ」

カミラが出て行ったあと、一緒に話を聞いていたシャロンさんが声をかけてきた。

「はい？」

「キースのヤツ。ホントにあんたに伝言なんて頼んだかい？」

「え、ええ。それは、もちろん……」

シャロンさんは俺の顔をじっと見つめる。逸らすこともできず、俺は作り笑いを顔に張り付けて耐える。

しばらくそうしていたが、シャロンさんはやがてニヤッと笑った。

「ふうん。そうか」
「そうなんすよ」

ははは、と俺は乾いた笑い声を上げた。

「よかったよ。これで、あの子の片想いも、実を結びそうだね」
「……え？」
「ヒカルには感謝しなくちゃねぇ。二人の間を取り持ってくれたようなものだし？」
「え……っと。はは。そう？　なるんですか、ねぇ？」

俺は冷や汗を垂らしながら頷く。
片想いぃ！？

「いやいや、間違いないよ。うん、二人がくっつくのはヒカルのおかげだね！」

ばしばしと俺の方を叩きながら、シャロンさんは言った。

「は、あはは……」

いや、この人絶対わかっててやってるだろ……。

えー、つまり。
俺が、何とかしなきゃいけないの？？

## 5　シャロンとカミラ（後書き）

ここから、カミラとのからみが多くなります。

# 6　ギルド

「ただいまー」

言いながら、俺は酒場のドアを開けた。

今は夕方だ。一日の活動を終えて、俺は拠点としている宿屋に戻ってきたのだった。

夜の営業に向けて仕込みをしていたマスター（この間俺が話しかけた男だ。酒場の切り盛りをしている）が、俺を確認するなり、笑顔を浮かべた。

「ああ、ヒカル。おかえりー」

「なんか飲み物頂戴」

カウンターに付くなり、俺は言った。

「はいはい」

マスターは一旦氷室に入り、片手で抱えるくらいの小さな樽を持って出てくる。ちなみに、食料品などの貯蔵としてこの宿屋には氷室があった。この都市でも珍しいこの設備のために、冷たい飲み物という貴重かつ贅沢品が酒場のメニューに並ぶ。

グラスを用意しながら、マスターが話しかけてきた。

「今日はどうだった？　収穫あったかい？」

「いやー。駄目さー」

ぐったりとカウンターに突っ伏す。

俺はこの宿を拠点に定めて以来、毎日外出している。目的は危険地域の情報収集と、戦闘訓練のためだ。

しかし、今日は珍しく行き先が違った。

酒場で食事をとっている最中に耳にはさんだ、冒険者ギルドへ行ってきたのだ。

ゲーム時代はプレーヤータウンなどの大規模都市にしかなかったこの施設（ゲーム時代は開拓ギルドだったけれど）だが、この街にも支部があるらしいということを聞いて、早速向かった。

開拓ギルドでは基本的にギルドに関連した諸手続きを行う場所だけれど、そのほかにも個人プレーヤー向けの銀行サービスと、２００種類のアイテムを保管できる倉庫の貸し出しも行っていた。

お金はともかく、アイテム倉庫が使えるならば是が非でも利用したい。

新人プレーヤーにばら撒くために目ぼしいものは所持していたとはいえ、倉庫にはまだまだレアアイテムを保管してあったからだ。メニューが開けないせいで手持ちアイテムを使えない今、ギルドの倉庫を調べないわけにはいかなかった。

しかし結果は不調に終わった。

一部のシステムや機能を除き、今の冒険者ギルドはゲーム時代の開拓ギルドとは全く勝手が違った。

話を聞くと、名称が変わったのではなく新設されたもののようだ。

そのため、俺が預けていたアイテムの引き出しは出来ず、預金も口座ごと消失してしまっていた。

「まー。良いこともあったけど」

新冒険者ギルドは、開拓ギルド時代に無数にあったプレーヤーのギルドの情報は引き継いでいたようで、俺もかつて在籍してたギルドを確認することが出来た。

『ギルド：ノーブル・パンツァー・ソサエティ』

カウンターに頬を付けたまま、再発行してもらったギルド証の文字を眺める。

「はあ。なんか、なつかしいな」

大して時間も経っていないはずなのに。

「うん？」

俺の呟きにマスターは首をかしげた。

「これ」

俺はマスターにギルド証を示した。

「俺が昔いたギルド」

「『ノーブル・パンツァー・ソサエティ』？　高貴なる……装甲士会、でいいのかい？」

「いや、直訳すぎてわけわかんないだろ」

「じゃ、なんていう意味なんだい？」

「高貴なるパンツ同好者の会」
「……は？」
「そういう馬鹿なギルドがあったんだ。昔は」
マスターからギルド証を受け取り、ブレザーの内ポケットにしまう。
「なんだか、変わったギルドなんだね」
マスターは俺の前にグラスを置いた。
俺はそれを一口飲む。冷たくて、うまい。
「変わり者の集団だったからねー」
というか変態の集団だったのか。
『エリュシオン』が装備品でもないパンツまでも忠実に再現したゲームであったことはすでに述べたが、そのパンツに群がった馬鹿どもの集団が、このギルドだった。
主な活動内容は、自分のキャラクターのパンチラをスクショすることだ。
まあ、ほとんどのメンバーはそれだけに満足せず、未知なる光景を求めて日々邁進していた。
露出度の高い装備に身を包み、戦闘に挑んでパンチラを狙う者（オーソドックス）。
処理の関係で数フレームだけ出現（通称、全裸処理）する、キャラクターの全裸チラを狙う者（ただし肌色一色。細部はわからない）。

日がな一日ノンプレーヤーキャラをストーキングし、マップ高低差や全裸処理でパンチラと全裸チラを狙う者（猛者。うまくいけばパンツ一つで階段を上り下りするキャラクターという、かけがえのない姿を見られる）。

中にはプレーヤーをストーキングして（あくまでキャラ目的と主張）、アカウント停止を喰らう者もいたりして。

そういう馬鹿で愉快な変態の紳士どもが、公然と所属していた名物ギルドであった。

「楽しかったな―。馬鹿ばっかりで」
「いやいや。ヒカルも所属していたんでしょ」

冷や汗をぬぐいながらマスターは言う。

「まねー。結構メンバーもいたし、割と活動が盛んでね」

そういうヤツらの集まりだったが、その活動は華々しいものだ。まだ見ぬコスチュームのため、新クエスト先陣競争ではいつも、他の大規模戦闘ギルドと共に最前線にいた。

なにせ基本がフレーム単位でゲームを楽しんでいる連中だ。本気で戦闘すれば恐ろしいまでの能力を持っている。

「でも、自然消滅」
「なくなっちゃったの？」
「らしい。ずいぶん前に」

そう言って、俺はぐいーとグラスを傾けた。

「ごちそうさま」

「いえいえ。―夕食はどうする？　部屋に持っていけばいいかい？」

「うーん……いや、降りて食べるよ」

それまでは部屋にいる、と言って俺は階段を登った。

▼

宿屋の一室。

例によって俺は下着姿だ。

ベッドの横に仁王立ちし、そこに広げた制服装備、つまりブレザーとスカートを眺めていた。

「やばいな」

広げられた装備を見て呟く。

スカートはところどころほつれ、ブレザーは深緑だった色が日焼けして茶色っぽくなり始めていた。

この世界に来てからこっち、洗濯しながらずっと着てきたが、そろそろ限界のようだ。

「劣化とか」

ゲーム的じゃない、と今まで何回も言ってきた言葉を呟いた。

基本、装備は一度入手してしまえば捨てない限りずっと使い続けることができる。耐久度とかも設定されていないし、経年劣化はあり得ないものなのだ。

とはいえ、ブチブチ文句を言ってもしょうがない。実際に制服はボロボロになっているのだ。こういう仕様と思って、諦めるしかなかった。

「買い替え時かなぁ……」

とはいうものの、今の世界で俺を満足させられるものがあるかどうか？

見た目や機能を選ばないなら、衣服はそこらじゅうにある。

しかし、俺はコスチュームには特別なこだわりを持った『ノーブル・パンツァー・ソサエティ』のメンバーなのだ。可愛くない物は着たくない。というか、可愛くない物はキャラに着せたくない。

などと、今日の一件以来、妙なこだわりを思い出してしまっていた。

ようは自己満足と見栄である。

それらを満足させてくるものしか着たくないのだ！

「お金はあるんだし、オーダーメイドで何か作るか」

例えば、この制服を持って行ってもう一着作るというのは可能だろうか。

同じものを作るのは無理だろう。ネタ装備の例に倣って、この制服装備も大量の高位素材を必要とする、一応はレア装備である。

ただ、せめて外見を似せることができれば……

いやいや、そんな妥協でどうする。俺はレア装備であるところの制服装備だからこそ、好んで装備していたのだ。外見だけを似せた制服など、大量生産の可能な、いわばコスプレ衣装である。そんなチープなものなど着たくない。というか、着せたくない。

「うーん。じゃ、どうすっかなー？」

うろうろと部屋を歩き回っていると、突然カミラが入ってきた。

「ね、ヒカル。そろそろ夕食にしない？」

ニコニコと笑顔で入ってきたカミラが、俺を見て目を吊り上げた。

「ちょっと！　ヒカル。貴方、いい加減慎みを覚えなさいよ！」

「いや、カミラもノックを覚えようぜ」

俺のプライバシーはどこに行った。

「……って、なに？　服を並べて」

ベットの上の制服を見つけて、カミラが聞いてきた。

「いや、結構ぼろくなったなーって」

「？　着替えればいいじゃない」

「着替え持ってないし」

「はぁ！？」

カミラは口に手を当てて驚いた。

「なんでよ？」

「なんでって。……こだわり？」

疑問形で答えた俺に、カミラはため息。

「――変な人だとは思ったけど、ほんとに変な人ね。着替えがないなんて、獣じゃあないんだから」

呆れたようにカミラは言った。

む、変わり者だと思われていたのか。女の子にそう思われていようとは。ショックだ……。

まあ、それは置いておいて。

――獣か。

「いっそ、変な服を着るくらいなら、裸になるかな」

半ば本気で呟く。

こんな外見になろうと、俺の意識は男である若月ヒカルだ。今の俺の姿は、強引に例えるなら若月ヒカルがゲームキャラクターの着ぐるみを着た状態に近い。

そういう考えを抱いているからこそ、現在の俺は羞恥心というものが希薄だった。下着姿だろうが裸だろうが、実際に俺が見られているわけではない、という思いがどこかにある。

「……」

裸を見られるくらいじゃ、なんにも感じないだろうし。むしろ、変な衣装よりも裸の方が見栄えがしそうな美少女なのだ。

名案じゃね？

「っていやいや。積極的に裸になる理由になってないから」

暴走しがちな思考に突っ込んだ。

どうもこの世界に来てから、考えが飛躍しすぎな感がある。ゲームだからといって自分本位な思考に陥りっぱなしだ。

「はだかぁ！？　つつしみを持ちなさいと言っているでしょ！」

カミラもぎゃんぎゃん吠えるので、素っ裸になるのは止めておこう。

「うーん。じゃ、どうしよ？」

うかがうようにカミラに訊いた。

「――はあ。しょうがないから、私の服を貸してあげるわよ」

「はあ。そう言われてもな」

カミラの服を着ることに遠慮しているわけじゃない。繰り返すが、可愛くない物は着せたくないのだ。

可愛い服を貸してくれるだろうか？

カミラの私服が野暮ったいエプロンドレスなので、失礼ながら、甚だ疑問だ。

「わかってるわよ。制服にこだわっているんでしょ」

「そんな危険な発言は止めようぜ。服だよ。服にこだわってんの！」

制服なんて、十数種類しかもってない。

「はいはい。貸してあげるわよ。ちょうど、今年制服を買い替えたばかりだし。前のヤツならヒカルにもぴったりなんじゃないかしら？」

制服？　買い替えた？

「なに、カミラって制服持ってんの？　ってか、制服なんてあるの？」

『エリュシオン』は中世をモチーフにした剣と魔法のゲームである。当然、そこに登場するノンプレーヤー達の衣服は、中世の衣装をファンタジー風にしたものだ。中には可愛らしいのもあるが、基本、カミラのエプロンドレスのような野暮ったいものが多い。

制服なんて、プレーヤーのネタ装備として存在するだけだと思っていた。

「当然よ。今は夏季休暇中だけど、ほんとは王都の魔法学校の学生だもの」

魔法学校!?　なんだそれ!?

「ちょっと待ってて」

驚く俺をよそに、カミラは自室へと戻って行った。

カミラのお下がりの制服を無理やり着せられてから、俺たちは夕

食を食べに酒場へ向かう。

……はあ。

――『王立魔法学院の制服・女』を入手しました。

やった。

いいものもらっちゃったな。

# 7　チート

「ね、マスター。なんでカミラ、機嫌悪いんだ？」

もはや指定席となった階段横のカウンター席に座って、俺はマスターに訊いた。

何気ない風を装って視線を向けると、カミラは不機嫌そうに頬杖を付いて椅子に座っている。

カミラは夏季休業の間、実家の宿屋に戻って家業の手伝いをするのが習慣らしい。俺がこの宿に来る直前に帰省し、ウェイトレスとして一階の酒場を手伝っているようだった。

今日も今日とてウェイトレスの格好をしているわけだが、俺以外の客がいないのをいいことに客席にどっかりと腰を落ろし、頬杖をついて黙っている。

「あー、うん。……今朝さ、広場にシルケスからの馬車が着てたんだよね」

シルケスと言うのは、俺がポートアークに来る前に寄った町だ。キースが活動拠点を置いている。

「ふうん。で？」

「休みのあいだは、馬車が来ると発着場まで様子を見に行くのがカミラの日課なんだ」

「なんで―って、なるほど。キースを迎えに行ってるのか」

かいがいしいな。普段の様子からは想像がつかない。

「そう。で、キースの方もそれをわかってて、大体カミラの休みに合わせて遊びに来るんだけど」
「今年は来ないのか」
「うん。もうカミラが来て2週間になるでしょ？　まあ、キースと会えばすぐに機嫌は直るんだけどね。それまではいつもあんな感じかな」
「へえ、そりゃ……こまったねぇ」
人ごとなので、へらへらと笑いながら同情する。
って、おい。
今まで忘れてた。
俺、カミラと初めて会った時余計なこと言ったんだっけ。『キースもカミラが好きなんだよ』みたいな、そんなカンジのこと。
実際はそんなこと知ったこっちゃないから、全部出まかせなんだけど。
もしかして、あいつ。
そのつもりで、待ってるのか？
「……」
俺は血の気が失せて行くのを感じた。
これって、やばくないかな？
キースが来ても、カミラが望むような展開にはならないだろう。

俺が言ったのは出まかせだから当然だ。不審に思ったカミラがキースに確認すれば、その出まかせもバレる。

「ヒカル？」

俺がぶるぶる震えていると、洗濯物を抱えたシャロンさんに声をかけられた。

「あ、シャロンさん……」

そういや、シャロンさんにも釘刺されてたな。やべー。

「あのさ。この間洗濯に出してた服、洗濯できたよ。裏にあるけど、どうする？」

裏と言うのは洗濯小屋だろう。

洗濯小屋はカウンター奥の裏口を通って、宿の裏手にある。

「部屋に置いておけばいいかい？　それとも今、着替えちゃう？」

今の俺の格好は、カミラのお下がりの制服だ。シャツにスカート、薄いケープみたいな物を羽織っていた。

ちなみに、スカートは折って丈を短くし、ミニスカート風にしている。

うん？

いやいや、そんなつもりじゃない。違うから。

着こなしって言ってくれ。

「あー、いえ。自分で部屋に持っていきます」

「そう？　悪いね」

トントンと軽快な音を立て、シャロンさんは階段を登っていった。
いつも思うんだけれど、シャロンさんといいマスターといい、この宿の人は動きが軽快すぎる。特にシャロンさんは、あの体のどこに俊敏性を秘めているのだろうか。
なんてことを真剣に考えないうちに、さっさとブレザーやら何やらを回収してこよう。

「マスター、裏口借りていい？」
「どうぞー」

▼

裏口を通って、洗濯小屋へ。ここには宿泊客の洗濯ものがまとめて干してある。割と長期滞在になってきた俺は、何度かここへ足を運んでいる。シャロンさんに頼めば洗濯してくれるのだが、それは日がかかるため、俺は一張羅の制服を夜なべして洗っていたのだ。
勝手知ったるなんとやらで、扉を開け、視界を埋め尽くす洗濯物の中から自分のものを探す。

「ヒカル。私やるよ」

「ひっ！？」

天井から無数のカーテンのように吊ってある洗濯物の向こうから、不意にカミラが現れた。

「あなた、一応お客でしょうが。こんなことしなくていいのよ」
「え、あ？　そ、そうか？」

俺がうなずく隣で、カミラが洗濯物を取り込み始めた。手にいっぱいになると、小屋の中央にあるテーブルに洗濯物を持っていき、丁寧に畳む。

「そこで見てるの？」
「あ、だめか？」
「だめじゃないけれど」

言ったきり、カミラは洗濯物と畳むことに集中し始めた。
俺はそれを呆けたように眺める。

へえ、手際がいいな。さすが宿屋の娘。

「自分のがあったら言ってね。分けておくから」
「わかった―あ、それ俺の」

カミラが手に取った布袋を指差して俺は言った。
俺が最初から所持していた、なにに使えるのかよくわからない布袋だ。

「……」

カミラはそれを手に取ったまま、じっと見つめる。

「カミラ？」

不審に思って声を掛けると、カミラが言った。

「ねえ、ヒカル。これ魔法が掛かっているようだけれど、洗濯して大丈夫だったの？」

「え、そうなのか？」

俺はカミラの手元を覗き込んだ。

カミラは布袋の、細やかな刺繍が施されいる部分を見つめていた。

「これ？」

「ええ。魔法が魔法陣の形で刺繍に織り込まれているみたい。最近じゃ誰もこんなことやれないわ……。こんなに綺麗な模様に仕上げるなんて、ものすごく凝ってるわね」

「どんな魔法なの？」

「妖精猫（ケット・シー）の魔法ね。普通は箱に使うんだけれど」

カミラは不思議そうに俺を見た。

「知らないの？」

「うん」

「なんで？　貴方のなんでしょ」

「え、それは。……ほら」

そういうこと聞くぅ？　詮索しない、いい子だと思ってたのにー。なんて、スマイル浮かべながら牽制するには、ちょっと間が開いちゃったな。

しどろもどろになりながら俺は答える。

「あれだよ。魔術師にもらったんだけど、俺って魔術師じゃないからさ」

「使い方がわからない？」
「そう！　それそれ」
俺が頷くと、カミラはふふんと得意げに鼻を鳴らした。
「ま、素人は魔術品の鑑定なんてできないのが普通だから」
おやおや、そんなガラじゃない嫌味を言うとは。さてはまだ機嫌悪いな？
「使い方は簡単よ」
そう言って、カミラは布袋に手を突っ込んだ。
「中を決して覗きこまないこと」
目を瞑った。
「え、それだけ？」
「そう。――妖精猫は、この袋の中にいるかもしれないし、いないかもしれない。……ヒカル、袋の中に何か入れてる？」
「入れてない」
俺は首を横に振った。
「本当に？　見てもいないのに、言い切れるの？」
「……え？」
どういうこと？
首をかしげると、カミラが笑った。

「何か掴んだわ。取り出していい？」
「え！？　――ま、まあ。うん。いいけど」
カミラの行動に驚いていた俺は、なにも考えずに許可する。
「よいしょっと」
一声上げて、カミラは勢いよく布袋から手を引き抜いた。
「え……？　――きゃっ！」
ガシャン！　とカミラは何かを取り落とした。
取り落とした物を見て、俺達は目を見開いた。
俺は純粋な驚愕。カミラは恐怖。
「ひっ……」
小さく悲鳴を上げてカミラは後ずさる。
俺はそんなカミラに気付かずに、地面に転がった物に近寄り拾い上げた。
「『死霊皇・レーヨン＝リノス』……」
それはある上位クエストで入手できる、杖系統の高級装備だった。
魔術師系職業の専用装備で、装備しているだけで近くの敵を恐慌状態に陥れる魔法効果が施されており、おまけに魔法攻撃力も高い。
欠点は通常魔法攻撃にＭＰを多めに消費すること。

そしてなにより、俺が所持していたアイテムの一つでもあった。

「なんで……？」

俺は『死霊皇』をマジマジと眺め、どうやら本物らしいと判断した。

『死霊皇』が纏う黒い霧。ゾクゾクと鳥肌が立つ感じは、いかにもコイツの魔法効果『恐慌状態』っぽい。

「すげぇ。……おい、カミラ。どうやったんだ！？」

興奮しながらカミラを振り返った。

「……カミラ？」

俺の視線の先で、カミラは頭を抱えて地面にうずくまっていた。自身を抱き締めてガタガタと震えている。

「おい？　どうした」

異変に気がつき、慌てて近寄る。

「ひっ……来ないで！」

目に涙を浮かべて、カミラは叫んだ。

その様子に驚く。

「ちょ、どうした？」

カミラの言葉に構わず、俺はカミラの傍に近寄った。

すると、カミラは目をいっぱいに見開き

「ッ！　きゃあああああああああッ！」

いきなり、ぐしゃぐしゃと髪を掻きむしった。

「っちょ！？　どうしたんだ！？」

俺は慌ててカミラの腕を掴む。

なんだ？　なにが起きてる？　また癇癪？

「いやッ！　いやアァァァァッ」

叫びながら俺の手を払う。俺が再度手を伸ばすと、めちゃくちゃに暴れ出した。

片手では抑えられない。

『死霊皇』を足元に置き、両手でカミラに組みついた。

とそこで、ようやく原因に思い至る。

「あっ、そっか！　魔法学校の生徒ってことは、カミラって『魔術師（メイジ）』！？」

おそらく、レーヨン＝リノスを掴んだことで装備と見なされ、付加効果が発動した。が、カミラのレベルが足りないせいで使いこなせなかった……とかか？

俺が恐慌状態にならないのは、『死霊皇』が８０レベルの装備品だからだろう。

「え、えっと」

緊急事態だと判断した俺は、『死霊皇』を掴んで小屋の外に飛び出す。

「ど、どうしよ??」

頭が真っ白だ。

突発的な事故に弱いなあ！　俺！

「ええい！　南無三！」

叫んで、俺は『死霊皇』を思い切りぶん投げた。『死霊皇・レーヨン＝リノス』はビュンビュン回転しながら――

どっかに飛んでいった。

……さらば。

合掌し、小屋の中に戻る。

「あ――」

「うっ……ひっく―」

カミラが一人、すすり泣いていた。

「大丈夫か？」

俺は彼女に近寄り、震える手を握る。

カミラは俺の手を、すがるように掴んできた。

▼

「あんなの持ってた俺が悪い。気がつかなくて悪かった」
「な、なんだったの……？」

ぶるぶると震えながら、カミラは呟くように言った。

状態異常（バッドステータス）・『恐慌』

こんなこと、初めてだったんだろうな。

「もう大丈夫だから」

いまだに震えるカミラが痛々しくて、俺はぎゅっと抱きしめた。
カミラもよわよわしく抱き返してくる。

「あれ、なんだったの……？」

俺の薄い胸に額を付けて、カミラは再び訊いた。

「死霊皇の杖だ。――昔、ギルドの仲間といっしょに手に入れた」
「――死霊皇？」
「可哀想な魔術師の、そのなれの果てだよ」

設定で言えば。
死霊皇・レーヨン＝リノスは、生涯のライバルであり最愛の伴侶

であった者によって蘇らされた魔術師だ。
死者蘇生の奇跡は、リノスがアンデットとして生き返ることで成功した。
しかし、生き返ったリノスはアンデットの性から逃れることが出来ずに生者を求め、後悔と憐憫に苛まれた伴侶がその身を差し出す。
その肉を食べながら、リノスは自身の手で伴侶を生き返らせることを決意した。
アンデットなどではなく、より、完全な形として。

「そんな……」

カミラは青ざめたまま、言葉を失った。
俺は続ける。

「『悔恨の地（ヘルオルレアン）』ってトコに引き篭もっていてな。そこで戦った」

死霊皇の出現するクエストは、プレーヤーたちの間ではかなり評価が高い。
クエストの導入やストーリー性、出現する敵の強さなど、かなり重厚な内容のクエストだからだ。ボスキャラである死霊皇を倒した後の演出、クエスト達成後の何ともいえない「やるせなさ」など、それらが一層あのクエストを叙情詩的にしていた。

「結構強かったな。……悲劇的なヤツでもあった」

しみじみと俺はつぶやいた。
もうあの、クエスト導入の死霊皇討伐を依頼してくる少女が、ま

さか娘だったとは。しかも最後に……報われることなく――。クエストをサポートしてくれるいい子だったのに。

と思わず感情移入してしまうくらいに、ストーリー性が秀逸なクエストだった。

「――その人の、気持ち、が……伝わってきた」

ポツリとカミラがつぶやいた。

「好意と怒りと憎しみ……嘆きと、諦嘆」

言ったきり、しばらくカミラは無言で泣いた。

カミラのそんな様子に、俺もしんみりする。

「……そっか」

それだけ言って、俺は無言で胸を貸し、その間ずっとカミラの髪を撫でていた。

しばらくすると、カミラが顔を上げた。

「ありがと」

頬を染めて、カミラは言った。

「いや、落ち着いたみたいで、よかった。――俺って考えが足りな

いんだ。何を持ってるかなんて、俺にしかわからないのに」
「ほんと、そう――でも、何を言うべきかは分かってるよね？」
赤い顔のまま、カミラはわざと眉を吊り上げて言う。
「ごめんな」
俺はあやまった。
「……いいわ」
照れたように、カミラは笑った。
「あのね……」
俺から視線を逸らし、顔を赤く染めたままカミラは言った。
「腰抜けちゃった……」
「あ、ああ。なんだ、もう。それくらい、俺が抱えて運んでやるよ。おんぶでもお姫さま抱っこでも肩車でも何でもしてやる」
申し訳なさに、ひたすら下手な申し出をする。
つかまれ、とカミラへ手を伸ばした。
カミラが俺の腕をつかみ、俺が勢いよく引き上げようとした瞬間
「ちょ、ちょっとまって！」

慌てた様子でカミラが叫んだ。

なんだ？　嫌なのか？　お姫様だっこ。

「……！？――！！」

挙動のおかしいカミラ。

俺が不審に思っていると、やがてカミラは真っ青になった。

「カミラ？」

「ひ、ヒカル！」

カミラは地面に顔を向けて叫んだ。

叫んだまま、俺とは視線を合わせようとしない。そのくせ、カミラの顔は赤くなっているようだ。かすかに見える首筋が赤い。

「これって、ヒカルのせいよね！？」

勢いよくカミラが顔を挙げ、俺を見上げた。

顔は真っ赤で、目には涙。

「う、うん。俺が全部悪い」

「じゃ、じゃあ……全部忘れてよ！？　今までのことも、これからのことも全部！　全部忘れて、絶対人に言わないでね！？」

「お、おう……」

どっちだ。

思いながらも、カミラの剣幕に押し切られて俺は頷いた。

俺が頷いたのを見て、がっくりとカミラは頭を落とす。

やがて、呟くように言った。

「着替え持ってきて……」

「え？　なんて？」

「着替えよ。――私の部屋から持ってきて……下着も」

かすかに聞き取れた単語に俺は愕然とした。

「し、下着て。……まさか、おまえ」

何も言わず、コクン、とカミラは頷いた。

いや、うなだれた。

## 7　チート（後書き）

批評・感想が真っ二つに分かれると思います。

ともあれ

もうしばらくはこういう描写で続きます。

８・２０　ダッシュ記号訂正

# 8　出発準備

俺の日課と言えば外出である。

外に出て、いろいろやってる。

まず戦闘訓練。

この世界に来てからの戦闘はもはやゲームの域を超え、すでに実戦と言ってもいい。

あえて殺伐と表現するなら「殺し合い」となるだろう。そしてそれは言い過ぎということはなく、手甲ごしに伝わる衝撃や、かすかではあるが確かな死臭を実際に体験した身としては、手に残る感触にいろいろ思わないでもない。

とはいえ、とりあえず生き残らなければならないし、死にたくはない。

この状況に適応するため、俺は１００レベルであるということに慢心することなく戦闘訓練に励んだ。大きな町の近くのため、エンカウントする敵のレベルはおそらく１５前後くらいだろう。格下相手のこの訓練、役に立つだろうか。

次に危険地域の情報収集だ。

危険地域にはプレーヤータウンがあるらしい。その情報の信頼度の調査と、危険地域自体の情報収集を行っている。

信頼度は、結構高い。

人々の噂話として様々なものが耳に入ったけれど、特に俺の注意を引いたのは紙媒体に記録された、危険地域についての伝承・昔話である。それには「伝承」として「ストーリー性のある長編クエスト」と思われるものが幾つかあった。

危険地域にプレーヤー都市郡が存在していた証拠と言ってもいいだろう。本格的に危険地域に向かわねばならなさそうだった。

最後に、プレーヤー探しである。

これは冒険者ギルドに通いながら行なった。俺と同じプレーヤーならば、やはり俺と同じチート性能を有していると考えたからだ。気がきくものなら、その能力を活用して何かデカイことをするだろう。俺もいずれは何かデカイことをしたいと考えているので、まず間違いない。

噂なりなんなり、そういう人物がいないか聞いて回った。

結果、俺の見た目のおかげか、飴やらお菓子やらを大量に入手しただけで終わった。

「そろそろ引き上げ時かなー」

カウンターの指定席に座り、俺はぼんやり呟いた。

この街での活動もそろそろ行き詰ってきた感がある。そろそろ新天地を求める時期かもしれない。

「え、なんだい？」

俺のひとり言にマスターが反応した。いい人なのだ。

「いやな、マスター。俺もこの街に来て、結構長いじゃんか」

俺の言葉に、ははは、とマスターは笑った。

ずっとこの街に住んでいるマスターにとって、俺の言葉は滑稽に見えたのだろう。

「そうだね。カミラが来たのと同じくらいだから、3週間くらいか」
「あれ。まだそんなもん？」
2か月くらい過ぎてた気がした。結構濃い毎日だったからなー。
カミラとか。
「で？　引き上げ時ってことは、冒険かい？」
冒険。
なるほど。確かに未開の土地である危険地域を目指すことは冒険と言えそうだ。
「そうだな。今まで自称冒険者だったし、そろそろ冒険するか」
「そうかぁ、行っちゃうのか。ヒカルがいると楽しかったけどなー」
「ははは。まあ、客が一人いなくなるだけだと思ってよ」
「なんだかんだで3週間だからね。宿屋にとっては、長期滞在だもん。情も移るよ」
マスターにこにこと笑いならも、ちょっと寂しそうだ。
「でもそっかー。もうそろそろ、カミラも王都に戻るだろうし、いきなり静かになっちゃうね」
「そうなの？」
「2か月の夏季休暇っていっても、移動を考えたら1か月くらいだよ。王都と往復しなきゃいけないもん」
「王都か……」
とりあえず次目指すべきはそこだろうか。王都と言うくらいだから、人も情報も多いだろう。危険地域のさらなる情報、プレーヤーの存在確認。この二つの目的にはちょうど良いかもしれない。

「でも、あれだね。今年はキース、ついに来なかったね」
「え？」
考え事をしていた俺はマスターの言葉を聞き流した。
なに？　なんかすっげぇ引っかかるんだけど。
俺に答えたわけではないんだろうけれど、マスターはしみじみと、その引っかかりの正体を口にした。
「カミラも可哀想にね。キースに会うの、楽しみにしてたのに……」
ガタン！
音を立てて俺は立ち上がった。
「ヒカル？」
「すっかり忘れてたぜ……」
どうやら目的地が決まったみたいだ。
▼
「嫌よ！　絶対いや！　そんなの着ないから！」
「はぁ！？　なんで。おめぇが今着てるやつより格段にいいモンなんだ。素直に着ておけって！」
「ぜったい、嫌！」

港湾都市、ポートアーク。
とある宿屋の一室。
出発の前日。ある一件以来カミラと急に仲良くなった俺は、自室にカミラを呼び出し、そして言い争っていた。

くどいようだが、当然俺は下着姿だ。

もうすでにカミラは俺の下着姿について何も言わなくなっていた。治らないと思って諦めたのだろう。俺は俺でそれをいいことに行動がどんどんエスカレートしていった。もはやこの宿屋は自分の家みたいなもんだ。廊下だろうが厨房だろうが、ガンガン下着姿で歩きまわっている。
ド級の美少女があられもない格好で泊まっている宿屋と言うことで、この界隈では有名になっているそうな。
上は余談。

今はカミラと口論の最中だ。
なぜかと言うと、俺がカミラにあげた服が気に入らないらしい。
突っ返してくるほど。ひどい。

「こ、こんなの――あり得ないわ！　肌が見えるどころの話じゃないでしょう！？」

カミラは俺があげた服を指差して言った。

ケット・シーの布袋（アイテム袋？）から取り出した俺秘蔵のコレクション、『清修学院制服・女』である。
これまたネタ装備で、なんかのアニメとタイアップしている期間に偶然手に入れた。俺が以前着ていた『黒羽学院制服』と同種の付加効果と性能を持っていて、多少の防御能力上昇、『炎属性反射』

を装備者にもたらす優秀な装備品だ。

ちなみに、俺がいくつも制服所持しているのに深い意味はない。

制服系統の装備品は高性能の割に、種族・職業・レベルを問わない優れた女性専用装備なのだ。さまざまな職業の新人プレーヤー（同ギルドなので、全員女性キャラ）に配るつもりだったため、汎用性の高い制服を持ち歩いていただけ。

そもそもなぜ所有していたかについては、俺の職業『制圧者（タイラント）』に可愛い装備が少ないからだ。この職業専用装備も所有しているので俺が制服マニアだということにはならないだろう。

制服は数多く所有するコスチュームの一部なんだから。

「肌がどうとかいってる場合じゃないだろ！」

俺はカミラに反論した。

「町の外に出るんだぞ。モンスターと戦わなきゃいけないかもしれないじゃん。見た目で選ばず、機能で選べよ！」

俺が言うのもなんだけれど『清修学院制服・女』は実際にカミラの装備品よりも格段に優れている。

「だからって、こんなの……！」

カミラは制服のスカートを手に取った。

「こ、これじゃ……」

ぼっと、顔を赤くする。

「ま、股が見えるでしょうが……」
「見せりゃええがな。見せりゃあいい」
俺だってブレザー着てた時は相当パンチラかましてただろうし。
「よくない！」
ブン、とカミラはスカートを投げつけた。
「投げんなよ」
べし、と俺の顔にあたった。
「絶対に着ないのか？」
「着ない！」
「絶対に絶対？」
「くどい！」
カミラは俺から顔を逸らした。
もう聞きたくない、という意思表示だ。
「そっか」
ふう。
しかし、カミラにはなんとしても着てもらわなければ。やましい理由を置いておいても、実際にモンスターと戦う可能性がある以上、万全の対策を講じたい。
怪我をしてから着ておけばよかったと後悔しても遅いからだ。
「なら、しょうがない。しょうがないくないけど、しょうがない」

まいった、と俺は手を上げた。

「この話は、もう終りでいいでしょ？　心配してくれるのはうれしいけど、やっぱり私にそういうのは無理よ」

「残念」

そう言ってクルリと背を向ける。

「ちなみに」

「え？」

「俺はこれを着て行くからな」

俺が取り出したのは、白い生地に青いラインの入ったワンピース型制服『聖クリミル学院制服・女』だ。

ちなみにワンピースは上半身装備で、下半身装備は二ーソックスである。

……うーむ。

これも何かのアニメとタイアップしているときに偶然手に入れた。偶然って不思議。

「また、そんな。貴方ってそういう服しか着ないの？　女性でしょう？　慎みはないのかしら？」

呆れたように言うカミラ。

「なんだよ。どんな服着ようが、俺の勝手でしょ。そもそもこういうのしかないし」

言いながら俺はワンピース制服を手に取った。

ワンピースの背中にある隠しジッパーをおろし、スカート側から頭を突っ込んですっぽりと着る。

「あれ。結構短いな」

膝上と言うのがおこがましほどスカートは短い。もう、股下１０ｃｍだ。

「はしたない」

そういって顔をしかめたカミラに、俺はニヤッとカミラに笑いかける。

「あー。もう、やべえよ。こんなん着て行ったら、キースになんかされちゃうんじゃないかな？」

「ッ！！　なぁっ！？」

口をぱくぱくと開閉し予想通りの反応を示すカミラ。

「でも着替えもないし、しょうがないな。しょうがなくないけど、しょうがない。襲われたら襲われたで、それもしょうがない」

それはしょうがなくないけど。てか断固拒否だけど。

まあ、方便だ。

「き、着替えなさい！」

顔を赤く染め、ものすごい剣幕でカミラは言った。

「だからー、着替えがないって」
どこ吹く風と俺は返答。
「貸すから！　私の貸すから！」
「やだ」
「着替えなさいってぇ！！」
「くどい！」
「ッ着替えろぉ！」
服を脱がそうと俺に組みついてくるカミラ。
わはは。
接近戦闘職で１００レベルの俺に敵うものかー。返り討ちにしてやるぜ。
俺はカミラを抑え込みつつその耳元で言った。
「まあ、カミラはじみーな旅行着でも着てろ。そんでじみーな服のままキースに会えばいいんだ」
「はっ！」
「あーあ。ま、そんなじみーなカミラの横に、こんな服着た俺がいたんじゃ、キースも間違いを起こすわな。と言うか、むしろ正解？」
「うぅ……」
俺がそう言うと、カミラはがっくりとうなだれた。
「カミラ？」
「……わかったわよ」

「ん？」
「着ればいいんでしょ！　その、娼婦みたいな最悪な服を！」
「そんなことを言うヤツにはやらん」
「なっ、なんなのよ！　――着ます！　着たいです！　これでいいでしょ！？」
「ははは。意地張らないで、素直に言えばいいのに」
真っ赤なりながら睨みつけてくるカミラの顔に、俺は制服を押しつけてあげた。

# 8　出発準備（後書き）

8・20　ダッシュ記号訂正

# 9　出発

そもそもの始まりは、俺が思わず言ってしまった出まかせだ。

そうである以上、誤解を解くなり、カミラとキースをくっつけるなりするしかない。

まあ、そろそろポートアークとサヨナラしようとしていたところだったので、知らないふりをしてしまうことも出来た。

しかし、知らないふりをするには宿の人達に親愛の情を抱きすぎたし、その好意を持っている以上、俺の出まかせ云々を置いておいてもカミラの恋は成就してほしい。

ということでお節介を焼くことにした。

とはいえ、肝心のキースがポートアークに来ない。

しょうがないのでこちらから出向く。

ちょうどカミラも休暇が終わる頃なので、王都に戻る予定を早めてもらい、一緒にシルケスまでぶらぶら旅行しようと誘った。キースのことが気になるカミラは一旦は断って見せたが割と簡単に了承し、諸処の準備を終え、今日出発である。

▼

「ねえ、ヒカル」

長いマントに身を包んだカミラは、俺のあとを歩きながら話しかけてきた。

何とか制服を装備させることに成功したが、カミラは人目が気になるらしい。宿を出てからこっち、ずっとマントを着っぱなしだ。最悪、キースの前でさえ恥ずかしがってマントを脱がないかもしれない。何のために着てるんだか。

「馬車の発着場は広場なんだけれど。まさか、歩き、とか言うんじゃないわよね？」

カミラは俺が広場とは反対方向、つまり町の外へ直接向かっていることに気がついたのだろう。胡乱気に言った。

「ふっふー。いいもんがある。馬車でゆっくり行くのもいいけど、時間がもったいないからな」

「え？」

カミラは首をかしげた。

俺は答えず、ニコニコと笑ったまま歩き続ける。

やがて、ポートアークの町を囲む巨壁の外に出た。

「カミラって、馬に乗れる？」

「え？　まあ、一応……」

すげえ。リアルで乗馬経験にある人に初めて会った。いいとこのお嬢様なんだろうか。

いや、宿屋の娘だった。

「それが、なに？」

「ままま。見てろって」

言って、ポケットから笛を取り出す。細やかな装飾が施された銀色の笛だ。

「なにそれ？」

「魔法の布袋（ケット・シー）の中にあったやつ」

うわ、とカミラは後ずさった。

あの一件があっただけに、警戒しているらしい。

その様子に苦笑しながら、俺は笛を吹いた。

「ちょっと、大丈夫なんでしょうね？」

「平気平気。こないだ試したし」

カラカラと笑いながら答える。カミラはなおも疑わしげであったが、実際になにも起きないようだと思ったのか、隣に寄ってきた。

「笛？　綺麗ね」

「うん」

俺はきょろきょろと周囲に視線を向けた。

「あ、来た」

「うん？」

なにが？　と首をかしげたカミラに、俺は一点を指して見せた。

「……。な、なに？　あれ」
「ユニコーン」

先ほどの笛は、移動用にユニコーンを呼び出すためのものだ。ゲーム時代、プレーヤーは様々な場所にクエストや素材アイテム回収のために出向いていたわけだが、マップは広い。遠方に出かけるときには、移動用アイテムは必須だった。

移動用のアイテムは普通に店で購入できたが、クエストでもいくつか手に入る。

ユニコーンもそれの一種で、購入可能な移動用の馬をある数揃えると発生するクエストで入手したモノだ。

ちなみに。購入できる馬はプレーヤーのレベルが上がると増えていき、その性能も上がっていく。ユニコーン入手クエストは８０レベルのクエストであり、入手するまでそれなりの金額と手間を要した。そのためかユニコーンは馬系統の移動アイテムのなかで最速を誇り、さらには『騎乗時体力回復』という優秀な効果まで備えていた。

「……そんな」

カミラはなぜか絶句し、ユニコーンを凝視する。

やがて、ユニコーンが俺たちの傍までやってきた。

「おー、よしゃよしゃよしゃ……」

わしゃわしゃとユニコーンの首を撫でる。ユニコーンはうれしそうに首を振ってこたえた。

おお。かしこい。

ユニコーンを撫でながら、今度は黒い笛を鳴らす。

すぐに黒い馬がやって来た。

９０レベルで購入できる馬で、ユニコーン程ではないが、かなりの速度で長距離を駆けることが出来る。

ユニコーンの横に並んだ黒馬を撫で、俺はカミラを振り返った。

「カミラ、どっちに乗りたい？　」

俺は乗馬素人なので、どちらに乗っても大して変わらないだろう。

なので、カミラに好きな方を選ばせ、俺はもう一頭の方に乗るつもりだ。

「の、乗るの！？」

俺の言葉に、カミラは驚いたようだった。

「当たり前じゃん。馬車よりずっと早いぜ――多分」

「ちょ、ちょっと待って……」

カミラは手をぶんぶんと振った。

「ゆ、ユニコーンって……本物？」

「？　じゃ、ないかな。俺はそうだと思うけど」

ユニコーン入手クエストの成功報酬だし。

偽物なんているのか？　ダイアホースの亜種？

「ね、ヒカル？　あなた……ただの冒険者よね？　エルフの」

と、なぜか疑惑の目を向けてカミラは聞いてきた。

「え？　まあ、そうだな」

「ユニコーンなんて……個人で所有している人なんて聞いたことないんだけれど。王国にも、第二王女殿下を守護するユニコーンが一頭いるだけで、それにしたって、王家の所有物ってわけじゃない。――王族以外には一生目にすることが出来ないような、物凄く貴重な生き物なのよ？」

「……」

またそんな。変な設定が追加されてるわけね。

意味がわからん。ユニコーンなんて高レベルのプレーヤーならだれでも持ってるただの馬だ。珍しくもなんともないわ。

「あっそう。じゃ、カミラはユニコーンに乗ったら？　いい機会じゃん」

ホレ、と背負っていた鞍を渡した。

「の、乗れるわけないでしょ！　王族しか触っちゃだめなの！」

「気にするな。乗れって」

「いい！　いいから！」

絶対いやだ、と言う風にカミラは手を大きく振った。

「なんだと！」

カミラの態度に、俺は思わず絶望の声を上げてしまう。

実は、カミラがユニコーンに乗るとこを期待していたのだ。

あ、ちなみに。言うのを忘れてたけど。

カミラは金髪碧眼の美少女です。

言うのおそっ。

まあ、そんなわけで。俺はそんな美少女が純白のユニコーンに乗っているとか、絵になるんじゃね？　と、事前に笛の機能を確認したり鞍を用意したりして、楽しみにしていたのだった。

「乗れ！　なんのために呼んだと思ってるんだ」

「ユニコーンに乗るのなんて、不敬だもの！　乗れない！」

「乗れって！」

「ほんと、いいから！」

半狂乱と言っていいほど、カミラは取り乱し、拒否した。

ちっ。

なんかそういう態度をとられると、無理やりにでも乗せたくなる。

これは俺の人格に問題があるんじゃなくて、カミラがそういう星の元に生まれたせいだろう。

「不敬って――おいおい、ユニコーン。おまえ、いつの間にそんなに出世したの？」

俺は攻め手を変えてみた。ユニコーンを敬っているのなら、それはそれでやりようがある。

幸い、ユニコーンは知性が高いという設定だ。実際に呼び出してみてわかったのだが、俺たちのやり取りを理解している様なフシがある。

通じるかわからないが、俺はカミラに隠れてしきりにアイコンタ

クトを送った。
ユニコーンは黒い真珠のような目で俺をじっと見ている。
……そんな目で見んな。
「此方のお嬢さん。すっかり恐縮しているみたいなんだけど」
俺が言うと、その予想通り、ユニコーンはカミラの方へと寄って行った。
首をカミラに寄せ、低く嘶く。
「え……？」
カミラは目を丸くして驚いた。
「おお、カミラのことを気にいったみたいだな」
「え？　ええ！？」
「お前もカミラを背中に乗せたいよなー？」
ぶるる……
ユニコーンはまるでカミラに頭を下げるように、何度か首を振った。
「えええ！？」
「本人がいいて言ってんだ。素直に乗っとけ！」
尻をこすり付けるようにして乗れ！
「えええぇぇぇぇ……いえ、あの――でも」

なぜかカミラは俺ではなくユニコーンにおずおずと話しかけた。
「あの、えっと――。本当に、乗せてもらってもいいかしら……？」
おそるおそる、そう口にする。
ユニコーンはだまってカミラを見つめている。
「……」
やがて、カミラはユニコーンへと手を伸ばした。
最初は指で触れるように。
ユニコーンが拒否しないとわかると、今度は掌でやさしく撫でる。
カミラに何度か撫でてもらうと、ユニコーンはまた、カミラへと体を寄せた。
「わぁ……」
ユニコーンのその様子に、カミラはうっとりと感嘆の声を上げた。
「……」
なんだか二人の世界って感じだ。
俺は隣にいる黒馬を振り返った。
「なんか、忘れられてるっぽいな、俺ら」

ぶるる、と黒馬は嘶いた。

# 9　出発（後書き）

9／12　―記号訂正

# 10　到着

旅は順調に進んだ。

ユニコーンと黒馬のおかげだ。

二頭の移動速度は俺の予想よりもずっと早く、そのうえ目的地をわかっているかのようにまっしぐらに走る。

初めての乗馬と言うことで緊張していた俺も、黒馬を操る、と言うことを早々に諦め、黒馬の自由に走らせた。ただ落馬に注意していればよかったので、つまらなかったけれどずいぶん楽。

馬車では4日かかった距離を2日で走破し、俺たちはシルケスの近くで馬を下りた。

「ありがとう」

ユニコーンの背に乗せていた鞍を外してから、カミラはユニコーンの首に手をあてがって言った。

ユニコーンはじっとカミラを見ていたが、やがてゆっくりと身を返し、草原の方へ走っていく。

「お前も、お疲れさん。――元いた場所に帰んな」

俺も黒馬の鞍を外して、そう声をかけた。

黒馬はユニコーンに追いついて、二頭はどこかへ去っていった。

カミラはじっと、二頭が去って行った方を眺めている。

「どうだった？　ユニコーンに乗ってみて」

「……とても素晴らしい体験だったわ」

呆けたような返事。

どうやら満足してもらえたようだ。

「ねえ、ヒカル？　二頭ともどこかに行ってしまったのだけれど、よかったの？」

「いいのいいの。呼べばすぐ来るんだから」

俺は首にぶら下げたユニコーンと黒馬を呼ぶ笛をいじりながら言う。

そんな俺を見て、カミラはほう、とため息をついた。

「なに？」

「いーえ。ただ、すごいなって思ってただけよ」

「なにが？」

俺が首をかしげると、カミラはちょっと怒ったような顔をして見せた。

「なんでもない。それより、行きましょ」

俺に背を向け、さっさと歩いて行ってしまう。

？

なにか気の触る様な事を言っただろうか？

▼

意外なことに、キースは割と名の知れた優秀な冒険者らしい。少なくともシルケスでは結構有名で、俺たちにとって幸いなことに、すぐに居場所が判明した。

しかし、すぐに会えるというわけではなかった

「『北の谷』に冒険中、か」

俺は生ぬるい飲み物を一口する。

あんまり美味しくない。

一通りの情報収集を終えてから入った酒場で、俺はカミラと二人でテーブルについている。

キースの居場所が分かったのはいいが、町にいないとは。

「どうするの？　待つ？」

「うーん」

まあ、表向きは旅行に来たのだから、シルケス観光をしてもいい。

「それもいいかも。――シルケスって、なにか名物とかあるの？」

「名物っていってもね。――基本、砂漠みたいな荒野にある町だから」

カミラはテーブルに置かれたナッツを手に取った。
とりあえず軽くつまめるものを、と飲み物と一緒に注文したモノだ。

「食べ物で有名なのは、こういうナッツくらい」
「あ、そうなんだ」

大して美味くはない。
名物に美味いものなし、か。

「観光地とかは？　名所とかないのか」
「『北の谷』ね。荒野にいきなり現れる大渓谷だとか」

あらら。
なら、キースに会いに『北の谷』とやらに向かってもいいわけだ。

「じゃ、観光がてら、『北の谷』に行ってみるか」

手でナッツをいじりながら俺は言った。

「えー？　……私はとりあえず、宿をとって休みたい」

――確かに。
先ほどこの街に着いて、すぐに移動と言うのもあわただしい話だ。

「じゃ、明日向かうか。今日は宿でのんびりしよう」
「そうね。――お湯も浴びたいし」

……。

「キースに会うから？」

俺がそう言うと、カミラはかすかに顔を染めた。

「……ふん」

おー。なんか、乙女チックだ。

「ちょっと。なによそのニヤニヤ笑い」

「いやー。別に？　――マスター！　お勘定！」

俺が叫ぶと、酒場のマスター（ポートアークのマスターとは違って、小太りなオッサン。あっちのマスターは痩身だった）がのたのたとやってきた。

「あれ。お客さん、もう帰るのか？」

「ああ。ごちそうさま」

「はいはい。――えーと、銅貨５枚だ」

俺は銀貨一枚を取り出して渡した。

「おつりはいらない。取っておいて」

勘定の１０倍の額を渡されて、マスターは驚いた顔をした。

「おお、気前がいい――というか良すぎる。ホントに、いいのか？」

「おうよ」

カミラと一緒に席を立つ。

「嬢ちゃんたち、キースを探しているんだって？」

グラスやナッツの入った小皿を片付けながらマスターは言った。

俺たちの会話が耳に入ったのだろう。

「そうは見えんけど、同業者なのか？」

「いや、友達」

ふうん、と　マスターは笑った。

「あいつは今、たぶん『北の谷』にいるぜ」

親切心からだろう、そう教えてくれる。

「知ってるよ。でも、今日は行かないつもり。のんびり宿屋で休んで、明日向かうよ」

手を振りながら俺は答えた。

「けど、『北の谷』に行くにゃモンスターと会うこともあるぜ。ちょうどさっき、キースに会いに来たっていう冒険者が『北の谷』に向かったから、同行させてもらえれば安心じゃないか？」

その話は初耳だ。

なになに。冒険者がわざわざ会いに来るほど、キースって有名人なの？

「なんせ腕はたつし、それにほら。嬢ちゃんも知ってるだろ？　とびきりの色男だ」

はあん。
色男な。
確かに、そう見えなくもなくもない。

「ねえ」

俺がしかめつらで頷いていると、カミラが声を上げた。

「冒険者が会いにきていることと、キースが色男なのは、なにか関係があるの？」
「そりゃあ」

マスターはニヤニヤと笑いながら言った。

「その冒険者も女だったんだよ。それも、これまたとびきりの」

「さあ、ヒカル！！　行くわよ！！！」

「――え！？」

振り返ると、カミラの後ろ姿が見えた。

▼

結局、キースに会いに来たと言う冒険者とは合流できなかった。
カミラなんかは先を越された、と憤慨しているが、まあそれはどうでもいい。
ぶちぶちと文句を言い続けるカミラに適当に相槌を打ちながら、俺は周囲を観察する。
砂っぽい荒野。
一見なにもないように見える。

「……」

女冒険者よりも俺は気になっているのは、あちこちにモンスターの死骸らしき物を認める点だ。
カミラは気が付いていない。
俺が気が付けたのは、レベルのおかげか。

ステータスは単に戦闘時のパラメータというわけではなく、日常の生活でも影響を及ぼすようだった。多分、命中率とか回避能力、幸運とかが感覚器官の機能を底上げしているのだろう。

例えばこの足元の白い石、見た目は石だが、何かの白骨の欠片だ。
こういうのがすぐにわかる。
で、そういうのがあちこちにあった。

『北の谷』
ダンジョンなのか？

「ねえ。あれ、何かしら？」

前方を歩いていたカミラは遠くの一点を指差した。

俺は目を凝らしてそれを見る。

崖のようになっている渓谷の中で、その垂直な壁に張り付く様に設置された幾つものテントがあった

「……。あれはキャンプの跡だな。キースたちが張ったんじゃないか？」

言いながら俺は脚を早めた。

カミラも小走りになる。

「じゃあ、キースが近くにいるかしら」

「いや、いない」

「？」

俺が即答したことに、カミラは首をかしげた。

「なぜ？」

「キャンプが荒れてる。――モンスターか何かに、襲われた後だ」

# １０　到着（後書き）

９／１２　一記号訂正

# 11　ワイバーン1

『エリュシオン』において、もっとも有名なモンスターは『オルタ』と呼ばれるモンスターだ。

プレーヤーたちの間で『オルタクエスト』と呼ばれるクエストに登場するモンスターで、『エリュシオン』の最新バージョンアップが施された一年前から、驚くことにいまだに攻略されていない。その原因である公式チートモンスターだ。

そんな規格外のモンスターを例外とすると、竜種とひとくくりにされるドラゴンタイプのモンスターたちが有名で、そして最もプレーヤーたちに愛されていた。

機動性能が高い『翼竜種』、防御力の高い『鎧竜種』、トリッキーな動きとスキルを持った『希少種』、攻撃力と防御力が高いレベルでバランスの取れた『純粋種』、意味深な設定をもつ『古代種』、などなど。さまざまなドラゴンが存在する。

人気の理由はその『強さ』だろう。

ドラゴンはパーティークエスト用のモンスターなのだ。

ソロでもクエストは受注できるのだが、通常、ドラゴン討伐クエストはパーティーを組んで挑むことになる。力押しのソロプレイでは攻略することは難しく、パーティーでの火力とチームワーク、そして戦術が必要なのだ。

順当にレベル上げをしてきたプレーヤーが初見でどうやっても倒せないように設定されているのがドラゴンであり、このクエストを

きっかけにパーティーを組んだというプレーヤーもいるはずだ。
ドラゴン討伐クエストは、通過儀礼、とも言えるかもしれない。
キャラクター越しでしか存在を確認できない「他人」との協力プレイ。
そんなオンラインゲームの「楽しさ」と、『エリュシオン』の奥深さを教えてくれるのが、ドラゴンの討伐クエストだった。

「あれれ。……ワイバーンじゃん」
キャンプ跡地を走り抜けて『北の谷』の奥へと進むと、空を飛ぶ大きな影を視界にとらえた。
目を凝らしてよく見てみると、フィール上ではお目にかかれないモンスター『ワイバーン』である。

「キースたちが戦ってんのか？」
俺は首をかしげた。
ワイバーンのレベル帯は５０～６０で、クエストの受注レベルもそれくらい。キースは推定３０レベルなのでクエストは受注できないはずだ。
高レベルの冒険者のパーティーに参加しているのだろうか。
それとも、受注レベルによる制約を受けるのはプレーヤーだけなのか。

よくわからない。

「どうする？　行く？」

俺はカミラを振り返った。

まあ、ワイバーンくらいなら、カミラを守りながら戦える自信がある。スキルを使えない今、一人で倒すのは面倒くさいと思うけれど、生き残るくらいは問題なく出来そうだ。最悪、カミラを担いで逃げればいいのだから。

「……行きましょう」

顔を真っ青にして、悲壮な決意を浮かべた表情でカミラは言った。

「……なんなの？　無理なら止めてもいいんだぞ」

思わず引きとめる。

そんな表情をされてまで行きたくはない。

「いいえ――キースが、あそこにいるんだもの」

「……。それはもはや愛だな」

片想いのくせに。

いや、関係ないか。

「――愛……」

カミラは呟くと、瞳に涙をあふれさせた。

顔を手で覆い、わっと泣き崩れる。

「うぅぅー！　キースぅ……」

「……どうしたの」

カミラのこういう振る舞いはいい加減慣れたので、俺はうんざりしながら訊いた。

「どうしたって……。キースがワイバーンと戦っているのよ！？」

「多分な」

「なら！　もしかしたら――死んで、しまったかも」

「その前に逃げるだろ」

そのくらいの機転はききそうだ。

「うぅ、キース……」

俺の話も聞かず、ほろほろと涙を流し続けるカミラ。

「ああ！　もう！」

俺は叫んだ。

「ほら、行くんだろ！？　なら、さっさと行くぞ！」

うっとおしい！

何ともいえない嫉妬心と共に、そう思ってしまうのは、男ならしょうがないと思う。

▼

『北の谷』

その絶壁から離れた広い場所に、古びた砦があった。

主にモンスターからの防備が目的で設置されたものであり、『北の谷』に生息していた大多数のモンスターを討伐した今では、その機能をほとんど失っている。

かろうじて、飛行能力をもったモンスターを撃退するための兵器が設置されているだけだ。

その弓櫓で、キースたちはワイバーンと戦っていた。

「来るぞ！　バリスタ死守しろ！」

剣を構えながらキースは叫ぶ。

あちこちがへこんでしまった鎧と刃こぼれした剣。致命傷こそ受けていないが、大小の傷は無数にあり、すでに満身創痍だ。

もういくらも立っていられないだろう。

キースの叫び声に応じて仲間たちも剣を構えたり、バリスタに取り付いたりしているが、彼らもキースと似たような状態であった。

ドン！

砦に体当たりする様にワイバーンがぶつかり、キースたちのいる弓櫓に取り付いた。

「バリスタ！」

キースが叫ぶと、攻城兵器が丸太のような槍を打ち出す。

『ＧＹＡＡＡＡ！』

槍を受け、ワイバーンが叫んだ。

瞳を怒りに染め、バリスタの方へと視線を向ける。

「早く次を装填しろ！　―それまで近寄らせるな！」

仲間たちを叱咤し、キースはワイバーンへと駆けた。

そもそも、キースたちは近隣まで馬車を護衛した帰りに、ついでのように『北の谷』に立ち寄った。

おもな目的は素材集めと最近問題視されはじめた流入モンスターたちの討伐。

ワイバーンと戦うには、まるで装備が整っていない。

まるで、と言うならワイバーンがここに現れたのも唐突過ぎた。

ワイバーンは『翼竜種』という竜種の一種で、王国では災害指定されているモンスターだ。

狂暴で獰猛。さらに飛行能力まで有しているワイバーンはまさに災害と言ってもいい被害をもたらす。

ひとたび暴れれば、対策を施していない都市など一晩で壊滅してしまうだろう。

そのワイバーンに突然、襲われた。

恐るべき初撃を何とか生き延び、キースは仲間をまとめて『北の谷』の砦にかけんだ。

そしてこれからのことを話し合った。

ワイバーンはもし討伐するとなれば王国軍が動くほどのモンスターであり、本来であればキースたち少数の冒険者が挑むようなモンスターではない。

逃げ込んだ砦にも大した武器はなく、ここで戦うのは絶望的だった。

しかし、逃げるわけには行かない。

『北の谷』の後方にはシルケスの町がある。

それなりの防備が施されているとはいえ、いきなりワイバーンに襲われればかなりの被害を受けるだろう。

何百人という人間が死んでしまうかもしれない。

それは避けなければならない。

キースが言うと、仲間たちも同意した。

キースは仲間たちを分け、キースを含む5人が砦でワイバーンを引きつけ、2人がシルケスへワイバーンの出現を知らせることになった。

至る、現在。

仲間はシルケスに到着しただろうか、とキースは思う。

仲間の報告でシルケスは防御態勢を整えるだろう。そうなれば、

もしワイバーンに襲われたとしても、その被害は少なくてすむはずだ。

だがそれは、キースらが生き残ることにはつながらない。

いくら防備を整えたと言っても、キースたちがわざわざ、ワイバーンを連れて町に逃げるわけにはいかないからだ。

つまりキースらが生き残るには、討伐は不可能だろうが、なんとかここでワイバーンを撃退しなければならない。

だが、それは絶望的だ。

三機備えられていたバリスタのうち、二機はワイバーンの攻撃によって大破し、残る一基も何とか槍を打ち出している状態だ。ワイバーンの攻撃を受けるまでもなく、あと何度かワイバーンが歩哨に取り付けば、その着地の衝撃だけで壊れてしまうだろう。

そうなれば決定打を失ったキースたちは敗北しかない。

そしてそんな未来はすぐそこまで迫りつつある。

逃げるわけにはいかず、勝つことはあり得ない。

キースたちは活路を開けないままワイバーンに挑まなければならない。

――それでも、戦うしか、ないんだ。

咆哮し、さらに勢いをましてキースたちを攻めるワイバーン。

その攻撃を必死に避けながら、キースは悲痛な決意を抱いた。

# 11　ワイバーン1（後書き）

ここから、ちょっと長編入ります。
主人公のチート戦闘です。

## 12　ワイバーン2

「へえ、ああやって戦うのか」

砦の弓櫓へと続くドアの陰に隠れながら、俺は外の様子をうかがう。

外ではキースたちがワイバーンと戦っていた。

基本的にワイバーンは飛翔しているようだ。

その間、キースたちはバリスタに槍を込めたり、傷の手当てをしたりする。弓を持っている者は果敢にもワイバーンに放ったりもしていた。これは、ワイバーンにかわされるどころか届きもしない。

そして、ワイバーンがキースたちを攻撃するために砦に突っ込み、弓櫓に取り付く。

この時にバリスタが打ち出される。バリスタは強力だが装填に時間がかかり、連射が効かない。そのため、外さないようギリギリまで引きつけているのだろう。

当然ワイバーンの注意がバリスタに向けられるが、キースたち剣を装備した冒険者がワイバーンに突っ込んで、バリスタへの攻撃を防いでいた。

「ずいぶん難易度高いな」

思わず呟いた。

ちょっと様子を見る限り、キースたちはかなり危うい戦いを強いられているらしい。

ゲーム時代、ワイバーンと戦うのにこれほどの戦術で戦うことはなかった。

一応、クエストやマップによってはバリスタが設置されていたりする。しかしそれはワイバーンと戦うためのギミックに用いるくらいで、戦闘になってしまえばほとんど使用しない。

戦闘中、ワイバーンは基本的に低空飛行や空に滞空しているため、通常攻撃で攻撃することが出来た。また、ある程度ダメージを蓄積すると地面に落ちてきて、その間はフルボッコにすることもできる。このときプレーヤーが寄ってたかって攻撃すればバリスタよりもはるかに攻撃効率が良かった。

まあ、レベルが高ければ力押しも通用すると言う、そういうモンスターなのだ。ワイバーンって。

「まだまだライフありそうだな」

キースたちの戦いの最中、弓櫓に取り付くのを除いてワイバーンは一度も地面に落ちていない。つまりそこまでダメージが蓄積されていないようだ。

プレーヤーである俺はワイバーンが地面に落ちた回数で大体の残りＨＰを予測できる。そのため今の状況がキースたちにとっていかに不利かを察することができた。

「レベルのせいか？」

キースたちの立ち回りは見事で、致命傷を避けつつ、かなりの攻撃をワイバーンに当てている。それなのにワイバーンが落ちてこないと言うことは単純に一発あたりのダメージが小さいのだろう。

「さて」

キースたちから視線を外し、俺のワンピースにしがみ付いているカミラを振り返った。

「どうする？」

「……」

カミラは顔を真っ青にして黙りこんでいる。

俺の服を力いっぱい握りしめることで震えを誤魔化しているような状態だ。

「帰る？」

ふるふると力なくカミラは首を振った。

まあ、ここまできて帰ると言うのも味気ない。一応訊いたのはカミラに気を使ってのことだ。

「じゃ、助太刀する？」

俺がそう言うと、カミラの首振りが止まった。

そのまま黙っていると、ドカーンと轟音が響き砦が鈍く揺れた。

おお、ワイバーンがまた突っ込んできたっぽい。キースそろそろやばいんじゃない？

のんびりそんなことを考える。

「どうする？　俺はカミラにつきあうぞ」

「……」

俺が言うと、カミラは静かに涙を流した。

全く理由不明。カミラお得意の癇癪でもないようだし、どうした

んだろうか。

「ねえ、ヒカル。……あなた、怖くはないの？」

怖い？　なにが？

ワイバーンと戦うことだろうか。

もしそうなら、ハッキリ言って俺は興奮している。カミラを放っておいて、今すぐキースたちと合流したいくらいに。

だって、画面越しでしか見れなかったワイバーンが目の前にいるんだぜ！？　竜だぜ！？　しかも、戦えるんだぜ！？

これほど男の子心をくすぐる出来事もないだろう。

「ないない」

なので、素直に答えた。

「私は……怖い」

うつむいてカミラが言った。

「え！？」

俺は驚いた。カミラが「素直に」、「怖い」なんて言うとは全く予想外だ。

平時のカミラは素直じゃないし、怖いものなどなさそう。

火のように怒るか、癇癪を起こすのは目に見えているので、こんなこと、口が裂けても言えないけれど。

「なによ……」

「いや、カミラって怖いものないと思ってた」

言っちゃった。

「なによ……」

カミラはぽろぽろと涙をこぼした。

「なによ、なによ、なによ！　なんなの！　―ワイバーンとか、なんでこんなところにいるの!?　なんでよ!!」

カミラは泣きながら喚いた。

おお、癇癪。

やっぱりこうでなくちゃな。そんな儚げにされても、扱いにこまる。

「おーい、しっかりしろ。喚いても泣いても、ワイバーンは逃げちゃくれないぞ」

「知ってるわよ!!―でも怖いの！　怖いんだもの！」

あらら、口調こそ攻撃的だが、内容は結構弱い。

カミラも女の子というわけか。

「キースは戦ってるぜ」

「それも、わかってるわよ！　でも、助けたいのに……体が動かないのよ！　怖くて！」

うーっ、うーっと唸りながらカミラは自身の足をぶった。

「腰、抜けたのか」

よいしょと起こしてやる。

「ねえ！　私は一体、どうすればいいの！？」

俺の腕のなかでカミラは叫ぶ。

うーん。何をしたらいいか、か。

難しい質問だ。

キースを助けたい気持ちもあるけれど、怖くて動けない。死んでしまう危険がある以上、逃げるのが正解な気もするけれど、それだと納得できないのだろう。かといってキースも助けるために出ていけば死んでしまう。それは怖い。―だから、こうやって喚いている。

結局は逃げるか戦うかの二択なんだけれど。

うーむ。

ムズかしいな。

カミラの中で生き死にが懸っているだけに、軽はずみなことも言えないし。

それに、対象は違うが、俺もいろいろ迷ってる。

いきなり『エリュシオン』の世界に来たこととか。

そんな俺がなにか言ってもいいものだろうか？

「ちょっと、わかんないな」

「私だってわかんないわよ！？」

「混乱してる混乱してる」

カミラの肩をつかんで頭を揺すってやった。
揺すりながら、俺は続ける。
俺でも、アドバイスくらいならいいだろう。
「まあ、カミラについては人ごとだからってものある。―でも俺なら、こういうときは」
「ひ、ヒカルなら？」
よし。混乱は収まったようだな。
「突っ込む」
「え？」
「困難っていうのは避けちゃいけない。ぶつかってナンボだ」
「し、死んじゃうかもしれないじゃない……」
「じゃ、知らん振りして逃げればいい。逆に言うと、たったそれだけで困難ってのは避けられるんだけれども―」
俺はカミラを腕に抱いたまま、ドアから外を伺った。
キースたちが、その仲間を減らしながら戦っている。
「ちびりそうになっても、突っ込まないといけない時っていうのはあるみたい」
そう言うと、カミラは呆然と俺を見上げた。何かを言いたそうに口を開け、閉じる。ただその名残か、唇がわずかに揺れた。

なんか、カミラに見上げられるのって不思議。不本意だが俺の方が背が低いので、いつも見下ろされている。

カミラを腰抱きするなんていう今の状況じゃなきゃ、こんな発見なかっただろうな。

そんなことを考えながら、俺は言葉を続けた。

「まあ、逃げるっていうのも、考え方によっては困難の一つかもしれないけど」

考え方によっては。

大学時代に暴力沙汰を起こし、家と大学から逃げ出した俺にはそれが良くわかる。

毎日が自己憐憫と自己愛に満ち、自分の不幸に酔うためだけにどれだけ必死に苦悩したか。

あの時は苦しかったけれど、振り返ってみるとくだらない言い訳を自分自身に言い聞かせていただけだった。

そういうことがあったから、俺個人としては逃げることは言い訳することだと思っている。

カミラが迷っていると言うのなら、出来れば逃げてほしくない。

それはカミラが自分で自分を貶める行為だ、と思う。

まあ。

ちゃんと俺が守るからさ。

勢いよく行こうぜ。

「というわけで、俺は行くぜ！　カミラはここで震えてな！」

俺は元気良くカミラを挑発する。

「なっ」

カミラは小さく口を開けた後、

「私も行くわよ！」

と叫んだ。

「無理すんな！」
「してない！　平気だし！」
「ちびってない？」
「ちっ……！？」

カミラは慌ててスカートの辺りをローブの上から押えた。

「ちびってないから！！　ほんとだから！！」

顔を真っ赤にしてカミラは叫んだ。

ああ！
ほんと、可愛いヤツめ。予想通りのリアクションをしてくれる。

「じゃ、行くか！！　心配すんな！　俺がついてる！」

「え―きゃ！？」

カミラを抱き上げて俺はキースたちの元へと駆けだした。

## 13　ワイバーン3

「バリスタの矢が尽きた！」

バリスタを操っている男が叫んだ。

「砦の中にはもうないですよ！」

仲間の一人、ダグが悲鳴を上げる。

どうする？　とダグはキースに素早く視線を向けた。

「壊れたヤツに装填していたのがあったろう！　それ持ってこい！」

キースの言葉に、おう、と応じて何人かが壊れたバリスタに取り付いた。

それを見てからキースはダグに近寄った。

「もう、無理だ。撤退するしかない」

「そうですね……」

ダグは大きく息を吐いた。

「とはいえ、シルケスにあいつを連れて行くというのは……」

「いや。街に向かわず、谷に向かう」

キースの言葉にダグは目を丸くし、それから頷いた。

「谷、ですか。……そうですね。単に逃げると言うのなら、あそこの地形は悪くはない」

『北の谷』

広大な平原に、不自然に出現する渓谷だ。地形によっては、ワイバーンも侵入できない様な場所がいくつかある。

ただ、キースの知っている該当しそうな場所まで、距離がある。

「時間稼ぎは充分だろう。俺達が逃げた後、あいつが町に向かっても、それはしょうがないことだ。町の防備は町に住むヤツがやるしかない」

「……ですね」

どこか諦めたようにダグは頷いた。

「しょうがないさ」

キースはダグに繰り返した。

綺麗に切りそろえられた髭を撫でながら、ダグはバリスタで作業する仲間たちに視線を向ける。

「私が知っている、ワイバーンが入り込めないような場所まで、それなりに距離があります」

「俺もだ。―と言うことは、近くにはないな」

シルケスを拠点に動くキースとダグは当然『北の谷』の地形を熟知していた。二人が知らないとなれば、そんな場所は付近には存在しないことになる。

「撤退戦、か……」

低く、ダグは呟いた。

ダグは犠牲が出ることに気がついているのだ。
古びた砦とはいえ、拠点に拠った闘いでは拠点側が圧倒的に有利であり、実際、キースたちも何とかワイバーンと戦えている。しかし撤退戦となれば話が違ってくる。キースたちは常に背後を気にしなければならないし、こちらが逃げている以上、ワイバーンの脅威は正面に相対して戦うときの何倍にも感じるはずだ。
もはやまともな戦いにはならない。撤退戦において、犠牲はからなず付きまとうのだ。
そしてそれはキースかもしれないし、ダグかもしれなかった。

「やるしかないさ」

ぼす、とキースはダグの革鎧を叩いた。

「来るぞォ！！」

仲間の一人が叫ぶ。
その声に視線を巡らせると、ワイバーンが大きく旋回しているところだった。この砦に入って何度も見た、狩りの旋回だ。

「―バリスタ！」

ワイバーンから目をはずさず、キースは鋭く叫んだ。

「まだだ！　もうちょいかかる！」
「くそっ」

その返事に、キースとダグは走り出した。

さっさと槍を装填し、迎撃しなければならない。
ここを生き延びて、撤退だ。
無理なら無理で、どうにでもなれ。
そうキースが考えた時―

「キース！　俺だー！　今回も助太刀するぜー」

走り出したキースの視線の先に、かつて聞いた、神話に出てくる妖精（エルフ）のような可憐な少女が立っていた。
ただ、神話とは違い男のような口調で、さらに今は女の子を腕に抱いている。

「ヒ、ヒ……ヒカルか！？」

そのエルフの正体がわかり、キースは叫んだ。

「カミラはキースと一緒に下がってろ。―キース！　お前もバリスタの準備しといてくれ」

ぽーん、と俺はカミラをキースに投げる。

「っちょ！　っきゃぁあ！？」

悲鳴を上げて空を飛ぶカミラ。

「なっ、おい……君な」

俺の登場に慌てていたキースは、カミラが投げられたことにさらに驚き、剣を放り出してカミラを捕まえた。

「っておい！　カミラじゃないか！？」

「ひ、久しぶり。キース……」

そんな再会のあいさつを交わす。

カミラ、そっぽ向いちゃって。

初々しいな！？

「君！　こんな所にカミラを連れてきて、どういう了見だ！？」

カミラを抱えたまま、キースは叫んだ。

どういう了見？

それは、まあ、本人たちには言えない。

というかキース、こんな状態でそんなこと気にすなんて以外に余裕じゃん？　それとも混乱しているだけ？

「うっさい。ほれ、退いてろよ」

しっしっ、と手を振り、俺はキースを追いやった。

「何を言っている！？　無茶だ！　ワイバーンだぞ！！」

キースは吼えた。

「相変わらず、かたっ苦しいな。―ラルファスのときもそうだったろ。人を見た目で判断すんな」

投げやりに答えて、俺はキースに背を向ける。
何やらまだ言っているけれど、気にしない。
そんなことよりワイバーンだ。

へへ！
では！　ワイバーン退治と行きますかー。

俺の視線の先で、ワイバーンが旋回を終え、ゆっくりとその姿が大きくなってー

いかなかった。

「ちっかぁ！？」

すでに目の前！？

俺の叫び声と同時に、ドン！　という衝撃。
ワイバーンが弓櫓に取り付いた。

『ＧＹＹｙｙＡＡＡａａ！』

ほとんど目の前と言っていいほどの距離でのワイバーンの咆哮。
ビリビリと肌を震わす大音響に、叩きつけられた熱い暴風に思わずふらつく。

やばい。

めっちゃ怖いんですけど。
こんなん、子供泣くぜ。マジでＲ１８指定だろ。

「ヒカルっ！！」

背後から、カミラの叫び声が聞こえた。

「っと、わかってらい！」

その声に押し出されるように、一歩踏み出す。
ワイバーンの振り回した巨大な鉤爪をかいくぐり、さらに一歩前進。
やたら動きが遅く感じるその攻撃を避けながら、俺はどんどんワイバーンに肉薄していく。

まただ。

狭まった視界にワイバーンを納めながら、俺は思った。

ヘルバウンドと戦う直前の様な、その最中の様な。

あの時の、興奮！

ニヤつく顔を必死に顰めながら、俺は装備している手甲で拳を作った。

『朽ちゆく機工神の腕』

接近戦闘職の一種である『制圧者（タイラント）』が装備出来る武器の内、この手甲はトップクラスの攻撃力と強力な付加効果をおびている。

９０レベルのパーティクエストのその最後。『エリュシオン』で朽ちていく機械仕掛けの旧神の、そのレアドロップ。

ワイバーン！

お前なんざこわかねぇ！！

「必殺の―物理パンチ！」

ドシン！

叫びながら突き出した拳は、ワイバーンの顔を捕らえた。

そして振りぬく。

俺の攻撃を受けたワイバーンは後ろ足で立ち上がってのけぞり、後方へと倒れこむ。

そのまま弓櫓の向こうへと落ちていった。

# １４　ワイバーン４

「あ……やった、のか？」

呆然とキースが呟くのが聞こえて、俺は背後を振り返った

「いや。まだまだ」

いくら俺のレベルが１００レベルで、ワイバーンとの間にレベル差があろうと、一撃で倒せるようなことはない。

『エリュシオン』はオンラインゲームだから、どんなにキャラクターを育ててもクエストモンスター相手にそんなことは出来ないのだ。パーティーを組んで巨大で強大なモンスターに挑むのが基本プレイで醍醐味なので、あからさまにゲームバランスが崩れるようなことはない。

これは戦闘職に限らず魔法職もそうで、いくら広範囲の大魔法といっても、せいぜいが視界内で発動する複数対象の攻撃魔法だ。

地形が変わるほどの必殺技を持った戦士とか、単機で国を攻略できる魔法使いとかはいない。

そういうのも面白そうだけれど。

「見てみ」

俺は弓櫓のヘリまで進み、覗き込むように地面へ視線を向けた。

ワイバーンが立ち上がり、ふらふらと歩いている。

ふらつき状態。この間に攻撃すれば完全にダウンだ。

ダウン中は攻撃し放題である。

「ホントはこの隙に攻撃したいんだけどなー」

「は、はぁ！？」

カミラを抱えてワイバーンを眺めていたキースは、俺の言葉に驚いたような声を上げた。

「な、なにを言ってるんだ君は！？　この隙に、逃げるべきだろう！」

逃げるぅ？

「えぇ？　お前こそ何言ってんだよ。せっかくワイバーンと遭遇したんだから、狩ればいいじゃないか」

「か、狩るって……」

ふらり、とキースはよろめいた。

「き、キース……あの、怖いんだけど」

キースの腕の中で、カミラが声を上げた。

確かに、弓櫓のヘリでキースに抱えらているカミラにとっちゃ、キースによろめかれると怖いだろう。

「す、すまない」

その言葉を聞いて、キースはカミラを下した。

キースの肩につかまって、カミラは地面に足をつける。

俺はカミラが自分で立ってからキースに言った。

「ここじゃダウン中に攻撃仕掛けられないから、下に行こうぜ」

そうなのだ。

ダウン中に攻撃をしないでワイバーンをしとめるとなれば、かなりの長期戦になる。レベルの低いキースたちでは耐えられないだろう。

「……」

俺の言葉にキースは無言。そのかわり、じっと俺を見つめてきた。

なんだよ。

「君が強力な冒険者だというのはわかる。……なにか、勝つ方策があるんだな？」

勝つ方策っていうか。

「攻撃して、ワイバーンを落とす。ダウンしたら総攻撃」

これがワイバーン戦での鉄板だ。

遠距離での攻撃が可能な『魔術師（メイジ）』系統や『弓士（アーチャー）』系統はその限りではないが、オーソドックスな戦い方である。

俺の言葉に、キースは失望の色を隠さずに言う。

「それでは、だめだ。そもそも攻撃を当てることが出来ない」

へえ。

ま、今のキースたちではそうだろう。

なんせ圧倒的にレベルが足りない。
しかし、今は俺がいる。
飛行中のワイバーンの隙をついて攻撃を当てることもできるし、ダウン中にもバリスタ並みの攻撃を仕掛けることもできた。

「いいからー、来いって」

遊びに行くような軽さでキースを誘ってみるが、バッサリと拒否された。

「行けない」
「どうしても？」
「無理だ」

キースは俺をまっすぐ見て言った。
複雑に構成された強い意志でもって、そう言っているのだろう。
俺も無言でキースを見返す。

多分、無理強いすることは出来ない。

俺はゲームとしてしかこの世界を受け入れられないが、キースはこの世界に実際に生きているのだ。
だから多分、俺のような甘い考えは一切なく、強烈に現実を見て判断している。
それはプレーヤーである俺には理解できないものなのだろう。

しばらく無言でキースと睨みあったが、俺は仕方ないと視線を外した。

俺とキースとの間でおろおろしているカミラも可哀想だし。
キースやカミラとパーティを組んで戦ってみたかったけれど、それは別の機会があったらでいいや。
そもそもが、一緒にパーティを組んだらキースとカミラが仲良くなるんじゃないかな？　なんていう安直な考えだったんだし、よく考えたらそれにはワイバーンは荷が勝ち過ぎている気がする。
一緒のパーティは、シルケスへの帰り道にでも組めばいいだろう。

「じゃ、いいや」

俺はそう言って、ふらりとキースに背を向けた。
そのままドアの方へ歩き出す。

「お、おい。君、なにをする気だ」
「なにって、ワイバーンを倒してくる。このまま放って帰ったら、あいつシルケスまでついて来るかもしれないじゃん」
「だから、なぜ君はそう、話が飛躍するんだ。―ひとりきりで勝つつもりなのか？」

俺に追いすがってきたキースが言った。

「飛躍してないって。放っておけばシルケスが襲われるかもしれないんだから、倒すしかないだろ。それにあのワイバーンなら余裕だし」

まあ、いくらパーティクエストモンスターといってもレベル差で４０くらいあるしな。
一撃では倒せないけれど、かなり余裕だ。単純なワイバーン討伐

クエストなら順当に戦えば5分クエストだし。

ちなみに、例外的に一撃で倒せる職種も存在する。『弓士（アーチャー）』の最上職のひとつの『探索者（スカウト）』がそうで、やつらは複数のトラップを一度に設置することが出来た。トラップ設置のスキルは再使用時間が長くて使いずらいスキルなのだけれど、上手な人が使えばめちゃくちゃ強い。一つの戦闘中のダメージ総量では『狂戦士（バーサーカー）』や『制圧者（タイラント）』に劣るだろうけど、複数トラップ同時起動による瞬間ダメージ量は間違いなく全職業中ダントツのトップであり、それは通常のワイバーンのＨＰすら上回っている。

とはいえ俺は『探索者（スカウト）』ではないので正攻法で殴る。

それでも楽勝だ。

「なっ……！」

俺の言葉にキースは絶句し、黙って俺を見送った。

ワイバーン討伐クエストでは、バリスタを使用して攻撃し、一度戦闘状態にしなければいけない。そうしないと、攻撃が当たらない高度を飛行したまま降りてこないのだ。

戦闘状態になれば、今度は低空飛行か滞空をするようになる。こうなれば後は簡単だ。ダウンを取ってフルボッコ。高レベルプレーヤーが挑めば、一回落とすだけでワイバーンを狩ることが出来た。

ただ、ダウンを取った後に倒しきれないと、ワイバーンは再び高度を上げて飛ぶようになる。これはバリスタを使用しなくともいず

れは降りてくるのだけれど、それまでプレーヤーは待ちぼうけだ。
先ほど、通常攻撃とはいえ一回落としているので、何もしなくともそのうち降りてくるだろう。

そういうわけで俺は、『北の谷』の砦の前にある広場で、地面にぺったりと座りながら空を見ていた。

遠く、ワイバーンが空を飛んでいる。
とんびみたい。

「早く降りてこいよー」

見上げて、呟く。

こういう待ち時間があるからワイバーン系統のモンスターは嫌いだ。
ダウン中に倒しきれないとすぐに飛んでなかなか下りてこない。
弱いくせに、いらん時間を食う。
こっちは社会人ゲーマーだぞ。この時間がどれほど貴重か……。

ボンヤリと空を眺めていると、ワイバーンがくるくると旋回しだした。

「お、そろそろくるか？」

よいしょ、と腰を上げる。
ポンポンとお尻についた砂を払っていると、後ろから声が掛けられた。

「ヒカル」

「ん？　キース？」

キースの後ろには、カミラまでいる。

来ないんじゃなかったのか？

「手を貸す。けれど、俺だけだ」

？

「どういうこと？」

俺が聞くと、キースはバツが悪そうに顔を掻いた。

「……つまり、手助け出来るのは俺だけなんだ。―ワイバーン相手に援軍一人では頼りないのはわかっているが、仲間たちが逃げるのは許してくれ」

「？、？」

よくわからん。

首をかしげて、カミラに視線を向けた。

わかるように説明たのむ。

「えっと……キースって、あのパーティのリーダーだったらしいのよ。―で、あそこでヒカルと一緒に戦うって言っちゃうと、パーティ全員が戦うことになっちゃうとか、なんとか？　よくわからないけど、そういう雰囲気だったの」

「へぇ？」

つまり、リーダーとして俺の誘いを断ったということか。
ただ個人としては手助けしたいから、仲間を逃がしてからちゃっかり手助けしてくれる、と。
お人よしすぎる。
こういうところが、女性にもてる秘訣なんだろうか。
同性の俺としては、見習いたいところではある。

「ふうん」

にやにやとキースに笑いかける。
キースはちょっと顔をしかめてそらした。

「っていうか、カミラも来たんだ」

俺にはそっちも意外だ。

「こわいけど、放っておくわけにもいかないし―困難には向かっていくことにしたの」

と、此方もそっぽを向きながら答えた。

あらあら。

あらあらあらあら。

「へへ。惚れんなよ」
「惚れるか！」

とかいいながら顔を赤らめちゃってー。
おいおいー、照れるじゃーん。

「言っておくけど、多分俺、最高にかっこいいと思うぞ」
「自分で言うな！　というか、同性でしょうが！！」
そうだった。
なんてやっているうちにも、ワイバーンの旋回の高度はどんどん下がってきている。
「ま、とりあえずは二人の出番はもうちょいないな。俺が合図したら来てくれな」
腕をグルングルン廻しながら、俺は一人で歩み出る。
後ろからキースの声がかかった。
「本当に、大丈夫なんだろうな？」
「平気平気」
「危ないと思ったら、君を連れてすぐに逃げるからな」
「大丈夫だから。ってかキース、お前もちゃんとカミラの盾代わりになれよ」
「……わかってる」
二人が距離を置いた気配。
では、二ラウンド目に入りますか。

ワイバーンの弾丸ような初撃を回避して、先ほどと同じように物理パンチを食らわせた。
ワイバーンは頭を揺らしながら、ふらつく。
俺はそんなワイバーンを牽制しながら、常にワイバーンの側面へと移動する。

ふらつき状態のワイバーンはブレスか突進しかしてこない。どちらも前方への攻撃判定がある範囲攻撃ではあるけど、側面にいると避けやすい。
この場合の避けるとは、キャラに設定された回避能力に従って確率で発生する『緊急回避』ではなく、プレーヤーのモーション予測と反射による回避だ。まあ、出来て当たり前の技能だ。

側面から攻撃を仕掛け続けると、やがてワイバーンはダウンした。
こうなれば後は楽だ。
俺はキースとカミラを呼んだ。

「総攻撃ー！」

「えっと、―『炎弾（ファイアボール）』！」
「『ダブルスラッシュ』」

炎弾は『魔術師（メイジ）』の通常魔法攻撃に炎属性の追加ダメージを付与した初歩スキル。ダブルスラッシュは『剣士（ソードマン）』の通常物理攻撃二発をほぼ同時に敵に与える初歩スキル。スキルの再使用時間と消費ＭＰのバランスがとれた、使い勝手の良いスキルだった。

「物理パンチ！」

物理パンチはスキルではない。
ただのレベルを上げた通常物理攻撃である。
以前、スキルを使いたいと試行錯誤してみたがどうしても出来なかった。それ以来、何かにつけて物理パンチを連呼している。
ひとりスキルを使えないと言うのは、やっぱりさみしい。

そんな俺たちの総攻撃もむなしく、ワイバーンは翼と一体になった前足を振り回して起き上がり始めた。

くそ。
やっぱり物理攻撃だけじゃ倒しきれないか。スキルが使えれば、一回のダウンで倒しきることが出来るのに。

「物理キック！」

俺はワイバーンの前足めがけて、苦し紛れのサッカーボールキックを敢行した。
クリーンヒットし、ワイバーンが低く唸り声を上げる。

「おお、効いた」

新技開発だ。これで自作スキルが二つに増えた。

なんて、言っている場合ではない。ダウンから起き上がればふらつき状態に戻る。そうなれば空に飛び上がるまでブレスやら突進やらをしてくる。回避だ。

「こらー！　ヒカル！　足を振り上げるな！」

と、俺がミニスカートでキックをしているのを目にしたカミラが、大声を上げた。

「ごめんて！」

というか、そんなことを言うとはずいぶん余裕がある。最初砦にいった時にはちびってたのに。

いや、わからんけども。

「って！　カミラ避けろ！　ブレス来るぞ！」

俺は、首を大きくのけぞらせたワイバーンを見て叫んだ。竜種の使う前方への範囲攻撃。ブレスの予備動作である。

「え！？　わっ」

俺の叫びで、カミラはバックステップで距離をとる。が、間に合わない。俺やキースもカバーに入るが、一歩足りなかった。

「っ！　きゃあああ！」

ボウ、とワイバーンの口から広がった炎に、カミラは飲み込まれた。

カミラを包んだ炎は渦を巻き、さらに勢いを強める。

強烈な上昇気流を伴った巨大な炎柱が出現した。

「そんっ……カミラアァァァ！」

キースの絶叫。
叫びながら、なおもカミラに向かって走ろうとする。
「キ、キース！　お前まで突っ込むなよ！」
炎に飛び込もうとしたキースの腰に抱きついて制する。
「し、しかし！」
俺を振り払おうと暴れながら、キースは叫んだ。
目の前、しかも届きそうな腕の先で炎にのまれたのだ。その振る舞いも当然だろう。
「いや、カミラは大丈夫だろ。うん」
そんなキースに、俺は比較的落ち着いて言った。
「な、なに！？」
「げほっ、げほっ……ごほっ」
炎柱が落ち着くと、その中央に激しくせき込むカミラがいた。
炎の熱が気管に入って、むせたっぽい。
「おお！　カミラ、ローブ燃えてんぞ」
カミラの無事は予想していたので驚かなかったけれど、俺が喜々として言ったのは、カミラがすっぽりと着ていた野暮なローブが焼

けて、俺が渡した制服の格好をしていることだ。
うーん。
はじめてカミラの制服姿を見たけど、これはなかなか、逸材ではなかろーか。
制服て、金髪にも似合うんだな。

「え、ごほっ……なんで？」

カミラは不思議そうに自分の体を見下ろした。
ローブが焼けてしまった以外、カミラには特に変化はない。肌も焼けていないし、髪すら焦げていなかった。

『清修学院制服・女』
その付与効果は、『炎属性反射』。
耐性・無効・吸収・反射という耐性効果の内、『反射』は対象属性の攻撃を完全に無効化し、相手に二倍にして返すカウンターだ。
カミラにこの制服を渡したのは偶然だったが、全く、僥倖といえる偶然だった。
いろんな意味で。

「これって、この服のおかげなの……？」

どうやら制服のおかげで助かったらしいと悟ったカミラ。
途方に暮れた表情を浮かべて俺を見た。

「だから、いい装備だっていっただろ」

俺は頷いて、マジマジとカミラの制服姿を眺める。
俺の視線に気がついて、カミラはスカートの裾を引っ張る仕草をした。

そういう仕草って、ちょっとHだ。

「ちょ、あり得ないから！　この短さは、あり得ない」

顔を赤く染め、もじもじとスカートをいじりながらカミラは言う。

俺はそれを叱った。

「ばか！　その短さがお前を救ったんだぞ。あと３ｃｍでも長かったら、いまこうしていることはないと思え！」

「ええ！？」

「いや、それでも本当ならアウトだ。ワイバーンに挑むんなら、あと１０ｃｍは短くしたいところだ」

「そんなに短くしたら下着が見える！　出来るわけないでしょ！」

「なんで！？　いいだろ！！」

「い、今は絶対にダメ！！」

「『今は』！？　言ったな！？」

―なんてね。

そんな風にカミラをいじっている場合ではないし。

というか、傍から見ていて、俺ってまるっきり変態だ。女の子に、スカートもっと短くしろとか、パンツ見せろとか、普通に考えてあり得ないしな。

戦闘高揚で、俺も多少混乱している。

こんなの普段の俺ではない。

反省反省。

ていうか、ワイバーンはどうなった。

俺が振り向くと、俺たちを呆然と見ているキースと、動かなくなったワイバーンがいた。

あ、ワイバーン、カミラのカウンターくらって死んだのか。

だせ。

# 15　連戦

「……終わった、のか？」

地面に横たわるワイバーンの巨体を眺めながら、キースは呆然と言った。

倒したのを信じきれない様子だ。

「いやいや」

「！？」

俺が否定すると、キースは慌ててワイバーンの死体から離れる。

俺は笑いながら声をかけた。

「素材をハギハギしたら終了」

「あ！？　そ、そうか。そうだな……」

にしても、ワイバーンってデカイ。

うつぶせの状態で倒れているのに、隣にいるキースの身長の二倍よりも高さがある。我ながらよく倒せたもんだな。

「ねぇ……？　素材回収とか、ワイバーン相手にどうやるの？」

カミラが俺の隣にやってきて、ワイバーンを見上げながら言った。

確かに。

こんな巨体じゃ素材の回収も骨が折れる。

俺がバッキバキに解体して全部持ち帰れば話は早いんだろうけど、そんなことしたくない。

本当に必要な部分だけ持って帰るのが正解だろう。

「キース、いいこと教えてやろうか」

「……なんだ？」

「ドラゴン系統のモンスターの素材でよく手に入るのは、爪とか牙とか鱗だよな」

「……。ドラゴンのような高位モンスターの素材なんて良く手に入らんぞ？」

「まあ、入るんだよ。―で、たまーに手に入るドラゴン系統の素材のレアドロップって知ってる？」

レアドロップはその名の通り、低確率で採取できる希少なアイテムだ。フィールドモンスターのものはいつの間にか入手していたりするんだけど、ワイバーンの様なクエストモンスターのものは狙わないと手に入らない。

具体的には、ドロップアイテムの希少性をあげる効果のあるアクセサリを装備し、入手するまでずっと狩り続けるのだ。

「知らん」

「心臓。ワイバーンなら『翼竜の心臓』ってのが手に入る」

「心臓……」

キースはごくり、と喉を鳴らした。

なるほど。

喉から手が出るほど欲しいってか。

「行け！　今なら確実に手に入るぞ！」

「な、なに！？」

「素材ハンターだろ！　ハラワタを食い破ってワイバーンの心臓を取ってくるんだ！」

「む、無茶だ！？」

そんなやり取りをしていると

不意に空が陰った。

俺はいぶかしんで空を見上げる。

隣にいるカミラが小さく悲鳴を上げ、キースが叫んだ。

「まさか！　もう一体！？」

太陽を隠したのは先ほどと同じシルエット。

黒い影は大きな弧を描いて旋回し、どんどん高度を下げている。

「まじかよ……」

俺は呆れて呟いた。

高度のせいで距離感がつかめないためハッキリとはわからないけれど、今回のシルエットはワイバーンよりもデカイ。目を凝らすとその細部が違うのもわかる。

あれはワイバーンではない。

ワイバーンとよく似た姿をもつ紫色の上位種「エルダーワイバーン」だ。

「違うワイバーンとの連続戦闘ってことは、『連戦』……もしかして『ポラリス討伐』か？」

『ポラリス討伐クエスト』

８０レベルで受注できるクエストで、ワイバーン系統の最上種『黄金翼竜（ポラリス）』を討伐するのが目的のクエストだ。

当然、これにはパーティーを組んで挑むことになる。

単純に相手がドラゴンだからというわけではなく、ポラリスの出現フラグ『連戦』をクリアしなければいけないからだ。

『連戦』はそれまで登場したワイバーン系ドラゴンとの連続戦闘で、『ワイバーン』、『エルダーワイバーン』、『バハムート』の三体と立て続けに戦うことになる。

そのあとにポラリスと戦うことになるので、難易度はともかく非常に面倒くさい。

「くっそ！」

バハムートの死体の陰に隠れてポラリスのブレスをやり過ごす。

バハムートは全攻撃属性に『耐性』があり、特に『炎属性吸収』持っている。そのため炎属性のブレス攻撃を防ぐ盾になった。

ポラリスのブレスをやり過ごして、俺はバハムートの陰から飛び

出した。

『ＧＹＡＡＡＡＡＡ！』

咆哮を上げるポラリスへと近づき、その足に攻撃を加える。

ドン！

俺の攻撃を受けポラリスはよろめくが、ポラリスはバランスを崩した体勢のまま尻尾を振ってきた。

猛烈な勢いで振られた尻尾を回避できずに、横からモロに喰らう。

「ぶッ」

弾き飛ばされ地面をボールのようにバウンドした。

「ヒカル！」

「カミラ！　来んな！」

俺はエルダーワイバーンの死体の陰から飛び出そうとしたカミラに叫んだ。

その叫びと同時にキースがカミラを後ろから抱きしめ、引きとめる。

「キース！　カミラを離すなよ！」

「わかってる！」

ったく。

一撃でもポラリスにダメージを与えたいというのに、余計な時間を食ってしまった。

エルダーワイバーンも『炎属性無効』を持っているから、そこに隠れて動くなと言っておいたのに。

「でもやっぱ一人はキツイ！」

何とか滞空状態からよろめき状態にしたが、ダウンまでまだまだ攻撃をしなければならないだろう。ポラリスはよろめき状態での隙が少ないため攻撃が当てづらく、ダウンを取りにくいのだ。

普通であればパーティーで挑むため、取りにくいと言ってもこれほど苦労することはない。しかし俺はスキルも封じられているため、一発あたりのダメージ効率が悪すぎだ。

ダウンはやっと二回取った。

多分、あと二回か三回で倒すことができる。

「って、もう！　飛ぶし！」

よろめき状態から回復したポラリスは、辺りにブレスをまき散らしながら翼を広げている。

飛び立つときのモーションだ。

本来なら苦し紛れに追撃したいところだが、今は止めておく。

ソロプレイのために被ダメージと回復のバランスを保てなくなっているからだ。さらに言うと、ステータスが確認できないことも一層状態を混乱させている。

やみくもには突っ込めない。

時間はかかるけれど安全第一。

「休憩休憩」

飛んでしまえばしばらくは降りてこない。
その間に回復だ。

「ヒカル！」

涙を溜めたカミラに抱きつかれながら、俺はキースを見上げた。

「回復薬は？」
「これでいいか？」

戸惑いつつもキースが差し出してきたのは『回復薬・大』が二瓶。
一本は中身を一気に飲んで、もう一本はすべて頭から浴びる。
キースに教えてもらったのだけれど、これが正しい回復薬の使い方らしい。

飲むだけじゃないのな。うまいのに。

傷に消毒液をぬったあとみたいに、ひりひりと痛む肌に顔を歪め、俺はキースに言った。

「秘薬クラスの回復薬もまだまだあったはずだから、出しといてよ」

キースが握っている魔法（ケット・シー）の布袋を示した。
俺のゲーム時代の所持品が入っているはずの布袋で、アイテムメニューの代わりと言ってもいい。

「ああ。なんとか探してみる」

と、キースが言ったのは、魔法の布袋がゲーム時代のような単純なアイテム欄ではないからだろう。
以前のカミラの件でもわかるように、出てくるアイテムは完全にランダム。俺が凶悪な代物を多々所持しているため「探す」と言ってもこれは大変な苦労だ。
俺も制服を探し出すのに、どれだけ苦労したか。

これはもう、システム変更どころか完全な嫌がらせだ。
運営側がウインドウとかコマンドとかのゲーム的な表示をよっぽど嫌ったのだろう。たしかに実際に『エリュシオン』を体験できるようになった世界でそういうものは「無粋」なのかもしれないけれど、一応、ゲームなんだぜ？
リアル志向なのかなんなのか知らないけど完全に失敗している。
ＶＲ実装だからって調子こいてんじゃねーぞ。

「おっし。じゃ、もっかい行くか」

上を見上げればポラリスは旋回を始めていた。
もう少しで、降りてくる。
先ほどのダメージが蓄積されているはずだから、今回は確実にダウンが取れる。そうなれば、全力攻撃あるのみだ。

「ヒカルぅ……」

俺が歩き出そうとすると、カミラが俺を強く抱きしめた。
逃げよう、と情けない声を上げる。

「情けない声を上げんな。ていうか、逃げない」
「なんで……！」

「ここで逃げたら回復薬無駄になるじゃんか。どんだけ使ったと思ってる」

回復薬秘薬と特大１つずつ、大中小を合わせれば１０本以上使用していて、これだけ購入するとなるとポラリス討伐クエストの成功報酬では足りない。これから使用する分も合わせると、ポラリス素材の売却費を足してもトントンだろう。

倒せてもマイナスなので完全に意地になっているだけなのだけれど、逃げたらその意地すら貫けない。

「ホントに、死ぬかもしれないのよ！？」
「ダイジョブだって。倒せるから」
「そんなにボロボロなのに！？」
「―でも、かっこいいだろ？」
「はあ！？」

１００レベルでもポラリスをソロで狩るのって結構つらい。通常攻撃縛りで倒すとなるとなおさらで、そんなことはオンラインゲームでやることじゃないけれど―

でも、そういうのってなんかいい。

ただの自己満だけど、ギャラリーがいればなおさらやる気が出てくる。

「まあ見てろ。―くれぐれも言っておくけど、惚れんなよ。特にキース。お前のことだ」

俺の中のロリコン疑惑が晴れたわけじゃないんだからな！

「あ、ああ」

呆けたように返事をしたキースを一瞥して、俺はエルダーワイバーンの陰から飛び出した。

## 15　連戦（後書き）

連続投稿を敢行します。

ストックすべてを放出し、第一部終了です。

## 16　チート覚醒

「よっしゃ！　ダウン取った！」

叫び、ひたすらにポラリスを殴る。

ポラリスは咆哮をあげて身をよじるだけで俺に攻撃はしてこない。

「うおー！　くらえー！」

ポラリスの正面に立ち、ダメージの大きそうな頭部を殴りまくる。

しね！

『ｇｙｙｙａａａａ！』

しばらく頭部めがけて滅茶苦茶に拳を振りおろしたが、しかし俺の攻撃を喰らいながらも、ポラリスは咆哮を上げて巨体を起こし始めた。

くっそ。

これでもだめか。

執拗に頭部攻撃を繰り返しながら俺は考える。

けど、合計四回ダウンは取った。

確実に次のダウンで仕留めることができる。
勝負時と見た！　ここは攻める！
俺は安全を考えずに一心に攻めた。
次確実に仕留められると言うことは、今仕留めることが出来るかもしれないと言うことだ。
安全策が常に最上とは限らない。
攻めるときは攻める。
回復薬も馬鹿にならないし。
『ＧＹＡＡａａａａ！』
「あっつうぅ！！」
ボウ、とポラリスがブレスを吐いた。
正面にいた俺は直撃。
泡食って攻撃範囲から逃げだす。
「っちょ！」
ポラリスが前足を広げながら跳躍。
俺の回避方向に向けて、ポラリスが突進してきた。
ポラリスの突進は『飛びつき突進』で、突進よりもリーチも攻撃範囲も広い。
これも回避できずに喰らう。

『ＧｙｙｙｙＡＡＡＡａａ！』

立て続けに噛みつき攻撃。

俺は胴体に食いつかれ、ポラリスは俺を咥えたまま激しく首振りした。

「くそッ！」

激しく揺れる視界の中でポラリスの口を見つけ、そこに腕を突っ込んだ。上下の牙を掴み、力いっぱい押し上げる。

胴体に刺さった牙という「楔」が外れ、俺はポラリスの首振りに合わせて放られた。

十メートルほど飛ばされ、地面に激突。

「いってぇ……」

先ほど噛みつかれたお腹が熱い。

地面から起き上がり片膝立ちで立つ。ワンピース制服の上から、お腹に手を当てた。

―ブチュリ

ポラリスの唾液や俺の血とは別に、そんな不快な音と手応えが返ってきた。

「……え？」

視線を下げる。

ワンピース制服はところどころが破れ、今まで俺が流した血で真っ赤に染まっていた。
そしてお腹の部分が大きく裂けている。
俺の腹には、ポラリスの牙によって大きな穴が開けられていた。
ドクドクと夥しい量の血が流れている。

「……」

あたまが真っ白になった。

なんで、こんな大けがしてんだ？

さっきも回復薬・大を二本使ったから、ＨＰにはまだ余裕があるはずだ。　一本で３０００ポイント。二本使えば体力の半分近くを回復することができる。それまで余裕をもちながら戦っていたから、実際のＨＰは全快に近かったはずだ。
ポラリスの攻撃だって、さっきのヤツ以外に大技は喰らっていない。
甘く見積もっても、５割以上のＨＰがあるはずなのに。

「ぐッ……！？」

いきなり体が反応して、俺は横に飛びのきポラリスの攻撃を回避。

回避率によるランダム発生の『緊急回避』。
しかしそれによって傷口が大きく開き、すさまじい痛みが俺を襲う。

「ッぎ、あああああああ！」

痛いと言うより、ひたすらに熱い。

『Ｇｙａａａａａａａａ！』

ポラリスが咆哮を上げ、地面に前足をつく。

『飛びつき突進』

だめだ……回避できない！

ドオン！！

「あああああああ！　いってぇぇ！」

またしても直撃を喰らい、今回は後方に弾き飛ばされた。

かなりの距離を転がってやっと止まったが、俺は起き上がれない。
痛みと混乱でパニックを起こしていた。

なんで!?　なんで腹に穴があいてんだよ!　めちゃくちゃ痛いし!

ずるずると這い、ポラリスから少しでも距離をとる。

ふっざけんなよ!　まだＨＰあんのに、なんでこんなことになった!?　くっそ!

やっと、倒れたバハムートの傍まで這い寄ったとき、俺は再びポラリスに胴体を噛みつかれた。
衝撃と共に放られる。

ふらつき状態がやたらなげぇ!　ダウンから回復したらさっさと飛べよ!

『ＧＹａａａａａ!』

ポラリスの咆哮が俺に叩きつけられた。
その大音響に、反射的にビクリと身をすくませる。

そんな無防備な体勢のまま地面にたたきつけられ、俺はようやくあることに思い至った。

それは―このままでは死ぬかもしれない、ということ。

神殿での蘇生はあるだろうかとか、死んだらログアウトできるだろうかとか、そんなことは一切思い浮かばない。

俺は今、死ぬかもしれないのだ。

そのあとどういう風に扱われるかは関係がない。

今死んでしまうことがすべての問題の核心で、『エリュシオン』に対する、疑いようのない確信。

全身を襲う激痛と、夥しいまでの流血。

それらによって引き起こされた「死ぬこと」への恐怖。

つまり―この『エリュシオン』では、「死」ですら完全に再現されている。

ゲーム的に扱われて蘇生することが可能なのか？

その「死の過程」がどういう風になるのかはわからない。ただ、「実際に死んでいく」という「主体としての死」は完璧に再現されている。

完璧に再現された「主体の死」はつまり、現実での「死」と同じだ。

「死ぬのか……？」

呆然と呟く。

なんで？

ゲームしてただけなのに。ありえなくない？

「……」

本当に、ゲームしてただけだ。

それなのになぜ？

「ありえない……」

なんでこんな思いをしなければならない？

お腹に大穴開けられて、情けなく喚くき散らすほど痛い思いをして。

あちこち傷だらけの、ボロボロだ。

こんなゲームってない。ありえない。

「ありえないって……」

ありえないというなら、ゲームをしていて死ぬというのもありえない。
そんなことが起きうるのならば、それは『ゲーム』ではなく『現実』と言うべきだ。そして、ゲームをしていた俺が現実に死んでしまうのはおかしい。なぜなら『エリュシオン』はゲームだからだ。

「なら、『現実』なのか……？」

というよりは『完璧に再現された死』によって、『エリュシオン』の仮想が『現実』と同じ意味と価値を持つ様になった……？
同じと言うことは、それは本物と大差ない。『仮想（ゲーム）』でありながら、それはもはや『現実（リアル）』だ。

―認識が、甘かった。

途方にくれるほど、俺は馬鹿だった。

確かに感じた、異界の風。荒野の暑さに、森の空気。
俺はそれらに何の感慨も抱かなかった。

人々の中にいるときの活気と、一人ではないという安心感。
俺は感傷と切って捨てていた。

カミラの涙に、キースの制止。
俺は、それらを単にノンプレーヤーキャラの行動と台詞としてしか受け止められなかった。

「……。ふざけんなよ」

俺は呟く。

確かに、『現実』ならば「死」はありうることだ。そしてそれは、この『エリュシオン』でもそうだろう。
しかし、だからといって許容はできない。
「ゲームをしていただけなのに」と、突然降って湧いた理不尽で不幸な『現実』から目を背けているわけではない。

なぜか。

それは、俺が『エリュシオン』で「生きて」いないからだ。

あくまで「プレイ」していただけで、今までの意識の上でもそうだ。
『エリュシオン』で生を受けたわけでもなく、いきなり性転換してこの世界に放り込まれた。俺の常識外の出来事ばかりの連続で、

そんな状況に対応するだけの日々を過ごしていたんだ。
「生」の実感なんて、あるはずもない。

やっと今、それを感じた。

血だまりにうずくまりながら、やっと得た。

なのに。

なぜ奪われなければならない。

理不尽な『現実』を前に俺が抱いたのは、爆発的で暴力的な「怒り」だ。

「ふざけんな!!」

飛び起き、ポラリスに突進。
激痛が体を襲うが、無視する。

この痛みは「死」にはつながっていない。

その証拠に体は動くし、視界も良好。意識だってはっきりしていて、全然平気。
お腹に穴が空いていようがなんだろうが、ＨＰは五割はあるのだ。

それは変わっていない。
そうやって自分を奮い立たせる。

「殺せるもんなら、殺してみろ！」

怒鳴りつけてポラリスを殴る。
ドシン！　とポラリスの巨体が揺れた。
ポラリスは咆哮を上げ、巨体を動かして俺へ攻撃してくる。
俺は回避行動も取らずそれを迎え撃ち、直撃を喰らいながらも一歩も引かず、ポラリスを攻め立てた。

「ＨＰはまだまだあんぞ！　タフネスが売りの『制圧者』なめんなよ！」

猛烈な勢いで振られた、ポラリスの全包囲攻撃「尻尾振り」
俺は体全体でそれを受け止め、尻尾をキャッチし全力で引っ張る。
俺の力に対抗できずにポラリスは体勢を崩し、轟音を上げて横倒しになった。

図らずも、ダウンだ。
それも五回目。
これで、確実に倒せる。

「この、雑魚が！　ビビらせやがって！！」

叫び、俺はポラリスの脳天へ全力で拳を振りおろした。

骨を砕いた手応えのあと、腕全体を生温かく「やさしい」感触がつつんだ。

心地よい温かさと安心感とを感じながら俺は、

「偉そうに説教したこと、あとでカミラとキースに謝らないと……」

そう、思えた。

やっと。

## 16　チート覚醒（後書き）

連続投稿中です。

一応、ここがヒカルの転換期と設定していました。程よいチートになったかな？

重要なお話なのにうまく書けないで悩んでいたところ、読者様から貴重な意見をもらいました。ありがとうございました。

# 17　ダグ

ポラリスを倒した二日後。
砦は、まるでお祭りでも行われているかのような喧騒に包まれていた。

様々な人々が砦の中を行き来する。
冒険者ギルドの関係者、さまざまなギルドに所属する冒険者、商人、多数の見物客、おまけに領主親娘もやってきているとか。

なんでも、ワイバーンは王国では数年に一度しか討伐実績のない強力なモンスターだったようで、それを倒したと言うのは大変な『事件』であるらしい。

確認と事後処理のために冒険者ギルドがやってきて、そこで話を聞いた冒険者もぞろぞろついてきた。またワイバーンの貴重な素材にありつこうと商人がやってきた結果、シルケス住民にまで話は広がり、多数の見物客も呼ぶことになった。領主一行はワイバーン見物と、それを討伐した冒険者を讃え、あわよくば抱き込みたいと思っているようだ。
さまざまな思惑の元に人々は『北の谷』の砦に集まり、そして砦に入りきらない人々はそこここにキャンプを張っている。

その光景はまさに、一大イベントという感じだった。

「ひまだ……」

そんな喧騒をよそに、俺はひっそりと静まり返った部屋でため息をついた。

砦の奥にある一室で、キースたちのパーティーが滞在しているフロアにある。キースの仲間や俺の傷の手当てのために、俺たちはこのフロアを無断で占拠していた。俺にあてがわれた部屋はそのフロアでも奥まったところにあるので遠くの騒ぎも耳に入ってこない。

結局、戦闘の後キースたちの手元に残ったのはワイバーンだけだった。

「エルダーワイバーン」「バハムート」「ポラリス」は未確認の新モンスターということで冒険者ギルドに接収された。研究のために王都にある冒険者ギルドに送るらしい。

貴重なポラリス素材を得ることも出来ず、キースたちは接収された三体の対価として金貨４０００枚を冒険者ギルドから受け取っただけだ。

キースの仲間などは降って湧いた途方もない大金を手放しで喜んでいたけれど、キースは終始しかめつらをしていた。

実際に討伐したのは俺なので、自分たちにその金貨を受け取る資格はないと思ったのだろう。

そうはいってもキースたちも実際にワイバーンと戦闘していたし、すべて俺が受け取ると言うのも悪い。それに、出来ればポラリス素材はほしかったのだが、それも得られないとなると欲しいものは特になかった。

もともとお金は充分にあるし。

キースたち冒険者もいろいろ物入りだろう。

そういうわけで全額をキースたちに受け取らせた。

そんな経緯で冒険者ギルドから大金を手に入れたキースたちだが、今度は領主から「褒章」を得ることになった。

まあ、冒険者ギルドだけがキースらを労って、この地を治めているという領主が何もなしというのもおかしな話だ。いろいろ体面などの問題もあるんだろうけど、これは順当な話だろう。

こちらは一人につき金貨３００枚。

しょぼい。

そんな褒章授与式（？）に出席するためにキースたちは領主の元へ赴き、俺も誘われはしたけど貰えるのがはした金と聞いて無視した。

というよりも、俺は領主とかいう存在が嫌いだ。

その権高な名称。

大学時代に警察のお世話になってから、俺は権力が苦手。

ということで、俺は部屋で一人ごろごろしていた。

「ひまだー」

特にすることはない。

カミラものこのこキースについて行ったので、いじって暇つぶしすることも出来ない。

全力で暇を持て余している。

ベッドでごろごろしてると、不意に、自分の真っ白なお腹に目が行った。

ポラリス戦で負った怪我は、すでに完治した。

あのあと回復薬を大量投与したところ傷がゆっくりふさがっていき、
翌日にはもとのつるつるの肌に戻った。
見た目に反して、大した傷ではなかったようだ。
いや実際には重傷なのだけれど、俺のＨＰに対して「腹に大穴があく」というのはそこまで深刻な事態ではなかったらしい。
俺なりに考察したところある推察に至った。ＨＰはプレーヤーの現在の状態を表す絶対量だ。負った怪我によってころころ表示をかえる相対量ではない。傍から見れば大けがでも、絶対量で考えれば大したダメージではなかった、というわけ。
結果、お腹に穴をあけた状態でも動き回ることができた。

ＨＰ制って不思議。

接近戦闘職、「制圧者」。さすがのＨＰ１００００越え。ゼロになるときはどういうときなのだろう。ぐちゃぐちゃになった時？

そんなことを考えていると、部屋のドアがノックされた。
客？

「どうぞー。開いてますよ」

俺が返事をすると、ドアが開く。
入ってきたのはキースとカミラ、それにキースの仲間の冒険者だ。

「っぷぁッ！」

いきなりキースが小さく叫んだ。

「？　なんだ？」

「ヒ、ヒカル！　君、なんて格好してるんだ！？　服着ろ、服！」
「ああ、そっか。悪い」
いっけね。部屋に一人きりだったから下着姿でくつろいでいた。
「なんで、どうぞなんて言ったんだ！？」
「はいはいはい……」
部屋でどうしていようと、俺の勝手だろーが。俺は宅配便だって半裸で受け取れるんだぜ。
「で、なんの用？　領主のとこに行くって言ってなかったけ？」
ボロボロのワンピース制服ではなく、元のブレザーを着ながら俺は訊いた。
「褒章なんて受け取れるか。戦いはしたが、実際に倒したのは君だろう」
「うん？　……生真面目な性格だな」
「そういうんじゃない。単に道理というものだ。―領主の不興は買うだろうが、仲間たちにも絶対うけとらないように言っておいた」
「そっか」
俺は頷いて、それから隣の冒険者に目を向けた。
俺が目を向けると、銀色の髭を生やした冒険者は自己紹介した。
「私は、ダグと言います。―さきのことで、お礼を言いに来ました。ありがとうございました。助かりました」
そういって深く頭を下げたダグ。

ちょっと驚く。
髭面に騙され、豪快な冒険者の一人なのだろうと思っていたけど、結構丁寧な人物のようだ。声からはハリのある若さを感じ取ることが出来た。
ダグはどうやらエルフだ。銀髪に、緑色の眼。似合わない銀色の髭のせいでちぐはぐな印象を受けるけれど、結構美男子だろう。

「あなたのことはキースから聞きました」
「あ、そうなんだ」
「……尊称は、必要でしょうか？」

？

そんしょう？
損傷、か？　うまく文字変換出来ないんだけど。

「いらないいらない」

深く考えないで俺は言った。
その言葉を受け、ダグはわずかに目を細めた。

「わかりました。―何やらお考えがあるご様子。里には伏せておきましょう」
「？、？」

なーに言ってんだこいつ？
変態だろうか？

「ま、いいや。ダグも褒章には興味ないの？　俺のこと気にしてんのなら、遠慮なんてするなよ」
「興味ありません。もともと、生活の糧のために冒険者になったわ

けではありませんので」
「ふうん？　―カミラも？」
ダグとはキースを挟んで反対方向にいるカミラに訊いてみた。
「あたしも―いらない。というか、領主さまの娘―シルヴィアって言うんだけれど、彼女と同級なのよ。どんな顔して会えばいいのか」
ああ。親娘連れで見物に来ているんだっけ。
それにしても同級とは、カミラが通う魔法学校のことだろうか。宿屋の娘から領主の娘まで通う魔法学校とは、一体どんな所なんだろう。
「で、だ」
キースが言った。
「騒がしくなってきたから、シルケスまで戻らないか。ここでは落ち着いて休めないし、シルケスには俺たちの拠点がある。そこならここよりもずっと快適だぞ」
隣でダグが頷いている。
「拠点？　どんなとこ？」
俺みたいに、宿屋の一室を借りているというだけじゃなさそうだ。
「一応一軒家だ。散らかっているが、部屋はたくさん空いてる」
「へえ」

おお。
自家持ちか。
冒険者ってそんな儲かるの。

「ワイバーンも解体し終わったしその素材も受け取ってある。仲間はしばらくここに滞在するようだが、俺たちは騒がしいのが苦手でな。一足先に帰ろうかと思っているんだ。―どうだろう？」
「いいね。改めてシルケス観光とか、面白そうだ」

そんなことよりも、当初の目的はカミラとキースをくっつけることだった。
ポラリスのせいですっかり忘れてた。
シルケスに戻ったら、なんか考えよう。
最悪、酒を飲ませて二人を部屋に閉じ込めておけばなんとかなるだろう。二人とも子供じゃないんだし。

「よし―早速準備しよう」

ぱし、と手を叩いてキースが宣言した。

## 17　ダグ（後書き）

現在連続投稿中です。

# 18　ニケ

午前のうちに砦を出発し、午後にはシルケスに到着した。
昼をいくらか過ぎたかという時間帯だったので、遅めの昼食をキースと一緒に取ることになった。
ちなみにダグは別行動。どうしてもやらなければいけないことがあるらしい。

昼食をとる場所は、俺とカミラがシルケスに来た日に立ち寄った酒場だ。

「キース―おまえ、よく、生きてたなぁ……」

小太りなマスターはそう言って、キースに抱きついた。

仲がいいらしい。

オッサンに抱きつかれたキースは迷惑そうな顔をしていたけれど、それでも嫌がるということはなく、しばらく二人は抱擁し合い、互いの健勝を祝った。

そのあと、キースと感動の再会（マスターの一方的なもの）を果たしたマスターの好意で、酒場を貸し切り昼から宴会を開くことになった。ちなみに飲食代はマスター持ちだ。

「ワイバーンと戦ったんだって……？」

一緒のテーブルに着いたマスターが、手酌で酒を飲みながらキースに訊いた。

「ああ」

「……どんなだった？」

「どんな、と言われてもな。―とりあえず、翼をもったドラゴンだな」

「ホントかよ……見当もつかねぇな」

「その方がいいさ。俺も初めて見たが、あいつのことは忘れられないだろうな。正直、一生会いたくなかった。―そんなヤツだ」

「『北の谷』にいたんだろう？」

「そうだな」

「また来るかな……？」

「さあ―な」

マスターの言葉に首をかしげるキース。

何かが腑に落ちないという表情だ。

うん。

なんで出たんだろうな。

だれかが『連戦』のフラグを踏んだのだろうか。

いやしかし、よりにもよってポラリスのクエストの？

受注レベル８０以上だぜ。

「……」

プレーヤー、だろうか。

あり得る、か？

「そういや、あの姉ちゃんは無事だったか？」
俺がひとり考える横で、マスターは急に話題を変えた。
「なに？」
「冒険者の姉ちゃんだよ、嬢ちゃんたちとは別の。行っただろう？」
「ああ―来たな」
冒険者の姉ちゃん？　誰だ。
俺が首をかしげると、カミラが口を開いた。
「ねえ。私、キースの仲間の中に女の人なんて見かけてないんだけれど」
「ああ、彼女はすぐに帰ったからな」
「―何をしに会いに来たのか、訊いてもいいかしら」
少しだけ声量を落としてカミラがキースに訊いた。
俺はそんなカミラの袖を引っ張る。
「うん？」
「誰？　女の人って」
「ここに来た時に聞いたでしょう？　キースに会いに―美人の冒険者が来てるって」
ああ！
そういやそんなことも聞いた。
完全に忘れてた。
会えなかったし。
「おいキース。そいつ、なにしに来たんだよ」

俺が改めて訊くと、キースが首をかしげた。
「さて。俺にもよくわからないんだ」
「何を話したんだ？」
「危険地域の冒険について訊かれた。俺は行ったことがないから答えられなかったんだが、とりあえず止めておけと忠告しておいた。もしかしたらそれで、気を悪くしたのかもしれないな」
危険地域の冒険？
なにやら引っかかる。
「そいつの名前とか訊いた？」
「ああ。ニケ、と言っていた」
ニケ。
ニケ！？
知り合いにそんな名前の奴がいるぞ！？
「ちょ、そいつの格好は！？」
俺はキースに掴みかかるようにして訊いた。
俺の様子に驚きながらもキースは答える。
「格好か？　―銀の全身鎧（フルメイル）だった。改造されたもので印象深かったから、よく覚えてる」
全身鎧（フルメイル）か。

じゃ、違うな。
俺の知っているニケはそんな恰好しないし。

「それが、やたら改造されたものでな。肩当てや首あてはなかったし、足の装甲も半分以上取っ払っていた」

……。
それはもう、「全身」鎧じゃないだろう。

「露出度は？　パンツ見えたか」
「な！？　なにを……」

おい！　どもんな！
ここ重要なんだぞ。

「どうなんだよ！？　パンツ見えたのか！？」

俺の剣幕に押され、キースは身を引きながらも頷いた。

「あ、ああ。見えた……かもしれない」
「かもしれないぃ！？　ハッキリしろよ、どうだったんだ！？」

今度こそキースに掴みかかる。
いやホント。ここは重要。

「み、見えた」
「間違いないだろうな！？」
「あ、ああ！　間違いない！」
「ちゃんと見たのか！？」
「み、見た！」

「本当だろうな！」
「ああ！」
「キース、ここが重要なんだ。色はどうだった？　白だったか？」
「いや、目に鮮やかなライトグリーンのストライプだった」
「よし。カミラ、ここに変態がいるぞ」
「ええ！？」

さておき。

キースとカミラのケンカは置いておいて、キースに会いに行ったという冒険者、ニケだ。

ライトグリーンでストライプの下着を身に付けた露出度の高い冒険者ならば、多分俺の知っているニケだろう。
これが水着ならば絶対間違いないのだけれど、下着を身につけることができる今となっては、ニケならば喜々として下着主体の装備に変更しそうだ。
そいつが危険地域の情報を欲しているならばなおさら可能性は非常に高い。

ニケ。

”勝利を呼ぶ男”

下着と見紛うようなデザインの水着装備を好んで装備し、コスチューム争奪クエスト達成競争では両手斧を振り回して常に先陣を切った、文字通りの『狂戦士（バーサーカー）』。

ギルド『ノーブル・パンツァー・ソサエティ』の副ギルドマスタ

ーを務める、防具を捨てた紳士だ。

うん。

つまりプレーヤーってこと。

あのニケか！？
マジかよ！！

「そいつ、どこに行ったかわかるか？」

カミラに一方的に罵倒されてうなだれているキースに尋ねる。
キースは恨めしそうに俺を見た。

「わかる」
「教えて」
「……カミラを何とかしてくれ」
「俺のパンツも見せるから」
「助ける気ゼロか！？」

いや、これは単純に俺の中のお前の変態疑惑を晴らしただけだ。
頷くようなら助けないつもりだったんだ。

「カミラ。許してやってくれ。ニケっていうヤツ、多分俺の知り合いなんだよ」

眼を吊り上げてキースを罵倒するカミラに言う。
俺は続けた。

「そいつ、人に下着を見せるのが趣味の変態なんだ。目を逸らしても全力で回り込んでくるようなヤツなんだ。キースも被害者なんだよ」

これは出まかせ。

キャラの下着を見るのが趣味な紳士で、スクショ対象が逃げると全力で回り込むヤツだった。

「そんな女性いないわ！」

「まあ、確かにな。でも、そういうヤツなんだ」

「いーえ。下着を見せつけるなんて、ありえない」

「……おいおい、カミラ。そんなセリフ、自分の格好を見てから言おうぜ」

「え……？」

俺の言葉に、カミラはきょとんと自分の格好をみおろした。

カミラは以前の様にはローブを身につけていない。俺があげた制服をそのまま装備している。

人目を気にしてか、だいぶスカートの丈を長くしているけれど。

でも、その制服も立派なネタ装備なんだ。ネタ装備はパンチラしてナンボなんだ。

「うそっ！？」

「嘘じゃない」

「う、うそよっ！！」

「ホントだ。な、キース」

俺はキースにアイコンタクトを送った。

「ああ」
「〜ッ！！」

カミラは真っ赤になってテーブルに突っ伏した。

あーあ。
泣いてる。

## 18　ニケ（後書き）

現在連続投稿中です。

# 19　アナザー　ダグ

ダグはシーカーだ。

出身はサニアス王国の北東にある、エルフたちの土地「聖なる暗き森」。

危険地域と呼ばれる、モンスターたちが跋扈する地と隣接しているため、魔族との長い戦いに明け暮れている。

それは長命種であるエルフでさえ、その始まりがわからないほど長く続く戦いだ。いまだに、終止符を打てずにいる。

エルフは英雄を熱望していた。

長命種であるものの常で、エルフは生殖能力が非常に不安定な種族である。大量の魔族に比してその数は圧倒的に少ない。

いまは拮抗しているが、かつては圧倒していた。いずれは、数の不利によりエルフは敗北し、あの森は蹂躙されるだろう。

そこで求められたのは強力な個人だ。

一人で魔族を滅ぼす力は必要ない。それはあまりに都合が良すぎる。ただ、並み以上に強大な力を有しながら、エルフを導けるだけのカリスマを備えた英傑を求める。

シーカーとは、そんな人物を求めてあてのない旅をする者たちのことだ。

他にも、大陸各地に散らばる『繁栄の時代』の強力な遺物を探索する役目をおっている。
英雄が現れなかった場合、望む望まないに関わらず誰かが英雄に仕立てあげられるからだ。
そのお膳立てをするためにも強力な遺物は必要だった。

４０年。ダグはシーカーとして大陸中を放浪して回った。

そして、そんな人物はいなかった。

唯一気になったのはキースだが、彼はその性向が優しすぎる。また、人間ではエルフが生きる時間には耐えられないだろう。

ならば、英雄として担ぎあげるか？

しかし友人として、一時のために彼を騙すようなことはしたくはなかった。

結局、４０年の放浪の末に得た物と言えば、いくつかの遺物のみだ。長い寿命とはいえ限られた時間の対価としては、あまりに報われない。

―みじめだ。

そんな思いを抱きはじめていた。

あるとき、キースから興味深い話を聞いた。
単独でヘルバンウドを蹴散らす冒険者の話だ。他にもアッシュグ

リードを一撃で倒したという。
しかもどうやら、エルフらしい。

ああ……！

と、かつてのダグならば期待に胸を膨らませただろうが、しかしそんな、かすかながらも確かな希望を抱くには、ダグはあまりにも長い時間裏切られ続けた。

とうとう、その冒険者を探すことはしなかった。

その話を聞いて以来、キースに尋ねたことすらない。
半信半疑だったせいもある。
大体が、キースは人を過大に評価しすぎるのだ。それは彼の本心なのかもしれないが、彼の他者に対する「親愛」の情を含んだ評価など、話半分で訊くのがダグの常だった。
やさしいキースには、冷酷かつ正確に他人に評価を下すことなど出来はしない。

だから今回もそうだ。

ダグと同胞（エルフ）達が心を焦がして待ちわびた人物であるはずがない。
ならば会いに行く必要もない。

どうせ裏切られるだけなのだから。

そう思っていた。

しかし『北の谷』で彼女―ヒカルを見かけた時、そしてその戦いに居合わせた時、ダグは眼がくらむような衝撃を感じた。

実際、視界が真っ白になって倒れた。

ワイバーンをいともたやすく屠る、その個人の強大さ。

さらに襲いかかってきた「紫翼竜」「黒翼竜」にひるむことなく挑み、戦い抜いた意志の強さ。

「黄金翼竜」を倒し、その背に立った時の神々しいまでの神聖さ。

どれもがダグが熱望していたものだった。待ち続けていたものだった。ずっと恋焦がれていたものだった。

いや、ヒカルはすべてがそれ以上だった。

出来るならば、ヒカルの足元に駆けよって、泣きながら我が身の断罪と一族の救済を願いたかった。

信じることが出来なくて、申し訳なかったと。

どうか同胞を救ってくれと。

しかし、ヒカルが「黄金翼竜」との戦いで怪我を負ってしまい、それどころではなかった。

長い時間の放浪の末に出会えた、たった一回の奇跡を、ここで失うわけにはいかない。

ダグは身を削りながらシルケスと『北の谷』を一日に何度も往復してみせ、大量の回復薬を運び、他のギルドに所属する優秀な医師

を攫ったりした。

やっと対面できたのは、ヒカルが怪我のために部屋に引きこもってから二日後だ。

ヒカルの無事に安堵しながら、最大級の感謝とエルフの悲願を懇願しようと思って訪れたその部屋で、ダグは言おうと思っていた言葉を必死に飲み込むことになる。

ヒカルを間近に見たのはそれがはじめてだった。

大きな碧の瞳の中で、金と銀に揺らめく光。

本来ならば銀色のはずの髪が、金色のようなクリーム色。

ヒカルは、ハイエルフだった。

ハイエルフは『繁栄の時代』にエルフを統べた王の一族だ。

いまはいない。

それは現在のエルフ世界が元老院による合議制だからというわけではなく、ハイエルフそのものががすでに失われたエルフだからだ。

神話と伝承にしか、彼らはいない。

なぜそのハイエルフがここにいるのか。

元老院だ、と一瞬でダグは考えた。

あの長老たちが秘蔵していたのだ。でなければありえない。「聖なる暗き森」はエルフたち最大のコミュニティだ。ハイエルフの存在を秘匿するなど、その頂点に立つ元老院くらいにしか出来ない。

なぜ彼女を隠匿していたのか？

彼女を英雄にするつもりだったのか？

わからない。

不意に、ダグの中に元老院に対する不信が芽生えた。

なぜ、彼女がここにいる。長い間探してきた英雄の資格を、彼女は間違いなく備えている。であるのに、なぜ庇護しない。どういうつもりなのだ。

そんな思いと共に、ダグは尋ねた。

敬称は必要かと。

敬称はエルフ世界では用いられない。なぜなら王に用いられるからだ。そしてそれはつまり、エルフを統べる気があるかという問いかけだった。

ヒカルはない、と軽く答えた。

つまり、ヒカルは自らの意思で元老院の庇護のもとから抜け出したのだ。そして少なくとも、その庇護下に戻ることを了としていない。

そう思い至って、ダグはシーカーとしての役目を放棄することを決意した。

長老たちがなにを思って彼女の存在を秘匿していたのか。なぜ彼女はその庇護を拒んだのか。

それはわからないが、すべきことは目の前にハッキリと提示された。

ヒカルを失うわけにはいかない。

元老院が庇護しないと言うのなら、自分が何を持ってしても彼女を守ると。

だから、拠点として使っている一軒家の防備を徹底的に固めて攻城兵器等の武装を設置している最中に、ヒカルとキースたちが戻ってきて王都に向かうといきなり言いだしたとき、ダグはすぐさま同行を願い出た。

## 19　アナザー　ダグ（後書き）

連続投稿終了です。ストックすべて放り込みました。

また、これにて一部終了となります。次回からは二部として再開するつもりです。

エリュシオンの説明とか、ほったらかしの部分も多々ありますので、そういう内容を含んだものとなると思います。

あとそれに関連してですが、再開前に小説タイトルを変更します。

「異世界てくてく記」→「だれかが綴ったエリュシオン」予定です。

もともと「異世界」のほうは章タイトルのつもりだったので……。

お読み下さった読者様方に多謝です。

## 20　再会

「ハッ……ハッ……」

俺は腹に手を当てる。

ぬるり、という感触。

血だ。

「はあっ……ああぁッ、くッそ！　なんで！？」

血を止めようと手を強く押し当てるほど、流血の勢いは増していく。

そのことに俺はひたすら焦り、より強く傷口を圧迫した。

「――あ！？」

ブツッという耳障りな音の後、押し当てていた手が腹の中に入って行く。

――なにかに、触れた。

温かな手応え。

「はっ――」

おいって――なんだこれ？

「……」

ぐにぐにぐにぐにぐにぐにぐにぐにぐに。

ずるっ！

「――」

視界が、真っ赤に染まった。

▼

「ヒカル！！」

「ッ！！」

誰かに呼ばれて俺は飛び起きた。

最初に視界に入ったのは薄いカーテン。続いて、やたらと豪奢な部屋の内装。

「ハッ、ハッ……」

何かに急かされて、俺は寝巻を捲った。

何もない。

つるつるだ。

「？、？」

ぺたぺたとお腹を撫でる。

「あ……夢か」

夢。

夢かよ。

ビビった。

「ヒカル？」

碧色の瞳を心配そうに細めて、俺を覗き込んできたのはダグだ。

「ダグ……？」

「大丈夫ですか？　うなされていましたが」

「あ！？　……ああ、そっか。――ダグが起こしてくれたのな。ありがとう」

「いえ……悪い夢ですか？」

「……。さあ？　多分、嫌な夢ではあったな」

忘れた。

どんなだっけ。

「……」

にしても、夢か。

『エリュシオン』に入り込んでしばらく経つけれど、そう言えば初めて夢を見た。

なんの夢か忘れたけど。

でも何かの夢は見ていたことはわかる。結構嫌な内容だったことも。

――なんだっけ？

ああ、もどかしい。

「というか、うなされてた？　俺」

「はい」

「あー……ゴメン。うるさかっただろ」

「いえ。――本当に、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫。ただの夢だから」

俺は軽く手を振り言った。

「悪かったな。俺はいいからさ、ダグは部屋に戻ってよ。まだ眠いだろ？」

「いえ、眠くはないです。ちょうど、起きたところだったので」

ダグはそう言って、窓際に寄った。

勢いよくカーテンを開ける。

かすかに色づいた光が入ってきて、俺はちょっと目を細めた。

「夜が明けました」

「……早起きなんだな」

おじいちゃんか。

▼

現在、王都『サニア』に滞在中。

王都『サニア』はその名の通り、サニアス王国の首都である。

俺が一月ほど歩きまわっていたのは、このサニアス王国の領地内だったらしい。

ようやく、ＲＰＧで言うところのスタート地点にやってきたのかな？

住んでいるのは人間が多く、次に動物系の亜人。エルフやノ―ムは見かけない。

これには、モンスターが関係しているとか。

なんでも、王都周辺には高レベルモンスターが複数存在し、そのモンスター達が人に懐いているという。

そのモンスターたちのおかげで、王都はモンスターによる被害が少ないと信じられているようだった。

プレーヤーのレベルが高いほど積極的な行動に出ないのがモンスターだけれど、それはモンスター間でも適用されるのだろうか？

それとも単純に、モンスターたちにも食物連鎖的なヒエラルキーが存在しているのだろうか。

いずれにしても、人懐こい強力なモンスター達に守護された都市は、人間が主役の街だった。

俺は宿屋から通りまでの道をてくてく歩いている。

連れはエルフのダグ。

キースは仕事があるのでシルケスに帰った。カミラも一足早いけれど学校に戻った。

残ったのがダグだ。

……。

まあ、いいんだけど。本当はあんまり良くないけど、まあいい。

そうして二人で王都に滞在して、かれこれ一週間ほど。

そろそろ事態が動きそうな頃合いだ。

というか動いてほしい。

慣れはしたが、あまり親しいわけでもないダグと二人きりなのはいまだにキツイ。

「ヒカル、今日はどうします？」

「えーと……。情報収集もしたいし、一回冒険者ギルドに行こうかな。そのあと大通りの宿に行ってみる。ニケが帰ってきてるかもし

れないから」

シルケスでキースからニケの情報を聞き、俺はすぐに王都へ向かった。キースの言うことが確かなら、ニケも王都に向かっているはずだからだ。

再びユニコーンと黒馬を呼び出し、全力で駆けに駆け4日で王都に着いた。

無事に到着したのは良かったけれど、しかしニケの居所がわからなかった。

昨日ようやくニケが滞在しているらしい宿を発見し、ニケが不在だったために伝言を残して来たのだ。

昨日の今日なので、伝言を受け取ったニケを待つより、張り込んだ方が早い。

「わかりました」

俺の言葉に、すぐにダグが頷いた。

「……」

ダグが頷いたのを見て、俺は少々げんなりする。

なぜか――ダグは俺の後ばかり着いてくる。

この一週間、文字通りずっと一緒にいる。

宿も、宿代は持つからと言って薦めてきた、幾つも部屋を備えた高級な宿屋に一緒に泊まっている。しかも寝室は隣だ。

同性（外見を除く）ということでさして気にはならないけれど、どういうつもりなんだろうか。

俺に惚れたのか、ダグが変態なのか。

「……」

「行きましょう」

「あの、無理して俺につき合わなくてもいいんだけど。――ほら、ダグも行きたいところとかあるでしょ」

「いえ」

じゃ、なにしに王都まで来たんだ。おまえ。

「しかし、ヒカルが冒険者ギルドに行くならばちょうどよかったです。いずれは行こうと思っていましたから」

「あ、そうなの」

ならいいか。

冒険者ギルドで別れて、俺はニケの泊まる宿に向かえばいい。

「速ッッ攻で私の用事は済みますので。そのあと一緒に、ニケさんの宿屋に行きましょうか」

「……」

「――なにか？」

ついてくる気？

えー。

またぁ？

「いやいや。ホント、つき合ってくれなくてもいいから」

「……」

「……」

「――私も、あの宿屋に用事がありました」
「なに？」
「実は……」
「おう？」
「あの宿の娘とねんごろなんです」
「ウソつけ！」

ねんごろて！

「あの、ねんごろって意味わかります？　にゃんにゃんの方が良かったですか？」
「なんでそれなら意味が伝わると思ったんだ！？」

古！
ライトでピンクなニュアンスは確かに増したけども！

「はあ。ま、いいか。良くないけど。――ダグはダグで好きなとこ行ったらいいさ」
「はい。そうします」

ほこほこ顔でダグは頷いた。

それを見て俺は思う。

髭、似合わねぇー。
腹いせに引きちぎってやろうか。

▼

大規模な施設が並ぶ大通りの広場。
その中にある冒険者ギルドを目指して歩いていると、人だかりが目に入った。
かなりの人数が広場に集まっている。

「？」

俺とダグは見合わせて首をかしげた。

「なんだろう？」
「さあ。お祭り、でしょうか？」

お祭り。

そういえば、北の砦の大騒ぎにはついに参加できなかった。俺が怪我で引きこもっていたのもあるし、いろいろ考え込んでいたせいでもある。それは仕様のないことだけれど、少しくらいはあの空気を味わいたかったとも思う。

祭りは好きだ。

めちゃ。

「行くかぁ！？」
「ヒカル！？」

祭りの言葉に一気にテンションが上がった俺は、ダグを置いて走り出した。

巨大な何か（神輿か？）を囲んでいる見物客めがけて俺は突っ込む。

俺も見たい！

「って、ちょ。　人多すぎ！　見えねぇ！」

群衆にぶち当たって俺の突進は止まった。

くっそー。全力で突っ込んでやろうか。

とも思ったけれどそういうわけにもいかず、俺は何とか人をかき分けようとする。

全然前に進めない。小柄だから。

その場でピョコピョコ跳ねていると、ダグが俺の肩をがっちりつかんできた。

「なんだよ」

「ひ、ヒカル。人前ですよ。そんな服を着ているんですから……」

「あ、これは大丈夫なんだ。ネタ装備じゃないから」

今身につけているのはエルフの種族専用装備だ。

種族専用装備とはその種族に設定された専用の装備品で、職業に関係なく装備できる。また、通常の装備品よりも性能が高いものが多い。

『エリュシオン』では選択職業によってパラメータの成長率に変動があり、種族ごとにはない。どんな種族でも基本的には同じように楽しめたけれど、こういう専用装備には種族の特徴が現れていた。

例えば、人間なら「俊敏性」、竜人族なら「筋力」、エルフなら「抗魔法」が上がる傾向がある。それ以外にも付与効果がついているので、自分の職業とうまく相性が合えばかなり強力な装備品となる可能性があった。

現在の装備は、それなりに露出のある結構かわいいものだけれど、ネタ装備ではないのでパンチラ率は低い。

狙えないわけではないけど。

「それにこうしないと見れないしさ」

俺はダグが肩を掴む力を緩めた隙にまた飛んだ。

だめだ！　見えない。

さすがのプレーヤーも、縦方向の移動は弱い。全力で飛んでこれだけとは……。

「あの、ヒカル」

「なに」

跳ねたまま訊く。

「肩車しましょうか」

「……。今度それ言ったら殴る。全力で」

俺が本気で言うと、ダグはコクコクと頷いた。

ったく。

２２の男に肩車してやるとか、なんていう侮辱だ。

俺はポンポンと足を軽く叩いた。

あーあ。

なんか、地面に小さい子供が倒れてた。

踏むわけにもいかないから、歳柄にもなくジャンプしちゃったよ。

２２でも、いきなり運動すると疲れるわ―。会社とか行ってると、ほんと運動不足だわ―。２２なのに。

「ひ、ヒカル……？　あっちの方、人がいないみたいですよ」

「あん？」

ダグが指差す方向をみると、たしかに人の少ない場所があった。

人混みが途切れ、そこだけぽっかりと開いている。

「お、ちょうどいいな。慌てず、ゆっくり行こうか」

「……そうですね」

でもなんでここだけ？

人混みを抜け、その開けた空間まで来ると、誰かが叫んだ。

「おいおいおいおい！　ポラリスじゃねえか！」

うん？

あ、ほんとだ。

巨大な荷車に積まれたポラリスがいる。ババムートも。でっけー。

そう言えば、王都に運ぶって言ってたっけ。

この人だかりはその見物客か。

なんだ、祭りじゃないのか。

――って、あれ。

いま「ポラリス」って言ったか？
なんで知ってる？　新モンスターなんだろ。

声がした方に俺は視線を向けた。

人の居ない場所の中央、少し離れたところに、誰かいた。

最初に目についたのは赤い髪に、オレンジ色の眼。
スラリとした高身長の女性で、出るところはばっちり出ている。
なぜか人目を引く部分の装甲を剥がした全身鎧を身につけていて、
さらに手には戦斧を握っていた。
どうやら、見物客は彼女の異容に圧倒されているらしい。
しかし俺は、そんな彼女に圧倒されることなくてくてくと近づき、
声をかけた。

「ニケ？」
「うん？」

女性はポラリスから視線を下し、俺の方へと向けた。

俺を見て、目を見開く。

「――ヒカル、か？」
「ああ」
「……マジで？」
「ニケだよな？」
「うん」
「「……」」

無言。

「ヒカルだよな」
「そっちも、ニケだよな」

再び確認。

いきなり、ダッと俺たちは駆けだした。

ぶつかる直前で何とか止まり、がっしりと握手を交わす。

「ヒ、ヒカルゥ！！」
「おおー、ニケー」

ホントは力の限りの抱擁をしたかったけれど、お互いのリアルの性別を知っているので何とか自制した。
直前で照れくささを感じたのもある。

多分ニケも同じ。

その代わり、俺たちは握った手を力いっぱい振った。

## 20　再会（後書き）

二章開始です。

一章の誤字訂正とあわせて、ぽちぽち投稿していきます。

# 21　勝利を呼ぶ男

「じゃ、ニケはいきなり危険地域スタートだったのか？」
「ああ。人の住んでる場所なんてなかったから、いきなりサバイバルだったぞ」

ニケの泊まる宿屋の一階。ここも酒場となっていて、俺たちはそこに移動して互いの近況を語っていた。
ダグは気を使ったのだろう、どこかへフラリといなくなった。
ないとは思うんだけれど、まさか本当ににゃんにゃんしに行ったのだろうか。

「よく無事だったな」
「１００レベルだしな。生き残るくらいは何とか。――でも、腹が減るのには参った。サバイバル知識なんてないからよ、何食っていいかわかんないし。モンスターは倒せるけど、生では食いたくねーし。とりあえず毒がなさそうな木の根っことか葉っぱとか食ってた。でも、ひもじいし一人っきりだったし……みじめだった」
「ああ……」

その時を思い出したのか、ニケが似合わずしゅんとうなだれた。
俺もその「みじめなニケ」が容易に想像でき、同意するように頷く。

「最初来た時は混乱したけど、サバイバル生活してたらなんとか落ち着いてよ。サバイバルの初めの頃は、エリュシオンを体験できるなんてものすげえ幸運じゃないか、とか思ってたんだがでも結局、最悪だったな」

ニケの言うことはよくわかる。
俺も、そう感じたからだ。

二人でそれぞれの苦労を思い出していると、すっかり暗い雰囲気になってしまった。
そんな空気を変えるように、カラリとニケが言った。

「まあ、あれだな。特に困ったのが装備だ。ぶっちゃけ、ぱんつだ。サバイバル途中に水着が壊れた時には、絶望感で思わず死を覚悟した」
「すんな。パンツで」
「葉っぱで大事なところを隠すアマゾネス装備を考案したことで、なんとか事なきを得たが」
「すげえ。めっちゃかしこいじゃん！」

見たいし。

「とはいえ紙装甲だったしな。やっぱメニューが開けないことが一番困ったな」
「ああ――わかる」
「メニューが開けないから、アイテムも使えんし。回復とか、アイテムなきゃどうにもならんぞ、単機の接近職は」
「ホントにな。――スキルは？　使えたか？」
「いや、無理だった。腹たったからいくつかオリジナル技作ったけど」
「……俺もだ」
「マジかよ」

などなど。

この世界に来てからの互いの苦労を、冗談ぽく労い合う。

ニケは危険地域で二週間ほどサバイバルし、彷徨っているうちに危険地域を抜けて、近隣にあった砦に保護されたらしい。その砦はサニアス王国の東、王国で唯一危険地域と接する場所にある。

砦で食べ物とパンツを手に入れ、体力と気力を回復したニケは王都を目指してひたすら走っていたのだけれど、途中でキースの話を聞いた。

危険地域での経験から、腕のいい冒険者とパーティを組みたいと考えていたニケはキースを訪ね、しかしニケが希望していた程のレベルではなかったためすぐに別れた。ニケが望んだのは危険地域への冒険実績がある冒険者だったからだ。

危険地域での経験。

いよいよ、本題に入った。

「で、どうだった。危険地域。戻る手掛かりはありそうだった？」

「いや、そこまで入り込めなかった」

ニケはそう言って、飲み物をグイッと仰いだ。

一気に飲む。

「あそこは、やばい。オレはあそこから出てきただけだけど、１００レベルだとしても深くまで入り込めないぜ。お前と二人で行っても、同じだろうな……」

「そんなにか？　でも、敵のレベルっていってもフィールドじゃ４０が限界じゃない？」

『エリュシオン』ではフィールド上でエンカウントできるモンスターのレベルは４０が限度だ。
それ以上のモンスターはクエストか、ダンジョンにしか出てこない。
そして４０ならば十分以上に勝てる相手だ。

「いや、クエストモンスターがうじゃうじゃいた。多分だが、クエストが開放――受注済みでアクセスフリーの状態なんだ。やたら討伐系の奴らが多かったから無関係に全開放されたんじゃなくて、なにか傾向はありそうだったけど」

『エリュシオン』ではクエストといってもさまざまなものがあった。

開拓ギルドで常時受注できる「常設クエスト」。プレーヤーの所属都市国家ごとに設定された「都市別クエスト」。複数のクエストが連続で提示される「連続クエスト」。壮大な物語を扱う「大型クエスト」などだ。

「常設クエスト」はモンスターの討伐、物品のお使い、ダンジョン探索など、一回きりで達成できるものが多く、「連続クエスト」では提示されるクエストがストーリー性を持っていることが多い。
「大型クエスト」は壮大な冒険の末に現れるボスキャラが難敵であり、大人数でのパーティープレイが必須など、さまざまな特徴がある。

例えばポラリスと戦うクエスト『黄金翼竜出現』は『黄金翼竜（ポラリス）』の討伐を目的とした常設討伐クエストであり、俺が『朽ちゆく機工神の腕（クスマキナ）』を手に入れた『朽ちた旧神』はダンジョンの探索と『機械（エ）

仕掛けの巨人』の討伐を目的とした、神々によるエリュシオン開拓神話をめぐる「大型クエスト」の一種だ。

「常設クエが開放されてんのかな。ワイバーンってそうだよな」
「ワイバーン？　――かもな。あいつら、夕方のカラスくらい湧いてたぜ」
「げ、そんなにか」
「バハムートだって、自販くらいのエンカウント率だった」
「……」

またそんな、微妙な例えを……。
ニケはフィーリングと勘で生きるエスパーだった。

「ってか、ポラリス！」

唐突にニケが叫んだ。

「うん？」
「あれ、誰が倒したんだ？　確か８０レベルクエだったろ、最弱で」
「うん」
「しかも連戦フラグ回収しなきゃならんし。今、そんな強いヤツいるんか？」
「おれおれ」

と手を振る。
ニケは驚いたような表情を作った。

「どうやったんだ」
「いや。回復薬大量に使ってごり押しした。苦戦したけど」

「回復薬？　おまえ、持ってたのか？」
「――うん？　アイテム欄は開けないけど、ゲーム時代の所持アイテムならそのまま持ってるだろ」

使い辛い魔法の布袋がそうだ。
大量のアイテムは保持できるけれど、それを選択出来ないため使い辛いことこの上ない。いや、選択できることは出来るんだけれど、ゲーム時代の便利さが完全に失われている。戦闘中に回復する、というような目的では使えない。
俺はもはや倉庫代わりとして使っていた。

「……なに？　アイテムなんて持ってないぞ。引き継いだのは装備品とレベルだけじゃないのか」
「あれ、気付いてなかった？　――これだよ」

俺は布袋を取り出した。

「持ってるだろ？」
「……。うん」
「なんか、目をつむって手を突っ込むとアイテムを掴めるんだ。ランダムだけど」

実演する。

む。硬い握りとつるつるとした手触り。なんかの剣だな。止めとこう――これは……お、やったコスチュームだ。しかも、質感と軽さ、この形はパンツのようだけれど……水着だな。
持ってたっけ？

「よっ」

出てきたのは確かに水着だった。

「おお、懐かしいな。『ちょっぴりオトナ水着』じゃない？　これ」

『ちょっぴりオトナ水着』

９０レベルクエスト『朽ちた旧神』で手に入る素材を必要とする、高級なネタ装備だ。

この装備を入手すべく、ニケを先頭にしてギルドの総力を上げて『朽ちた旧神』を攻略したっけ。

結局俺たちが最初に攻略したから、戦闘ギルドの面目丸つぶれ。

あいつら泣いてたな。

「水着様じゃねえか！」

「うわ、びっくりした」

「――あぁ……！！」

「拝んだ！？」

「くれ！！」

「やんねえよ！」

俺のだ！

てか、水着はお前の私服だろーが。お前だって持ってるだろ。

「くれよォ！！　水着がないと全パラメータ下がんだよ！　水着を着ないでエリュシオンなんて、オレにとっちゃ両手縛りプレイなんだよ！」

両手縛りプレイとか。
どうやって操作すんの。

「いやいや、ニケだって持ってるだろ？　布袋漁ればいつか出てくるって」
「……」

ニケは沈黙。

「なに？」
「オレ、それ持ってない」

俺から視線を外し、言いにくそうにニケは言った。
俺は首をかしげる。

「え？」
「……アマゾネス装備って言っただろ。でも堪えきれなくなって、その布袋でぱんつ作っちゃった」
「はあ！？」
「しょうがねえだろ。マジでパラメータさがるんだよ」
「下がるのはおめえの気分だろ！　ばか！　あほ！」

布袋なしとか、せっかくのチートを捨ててどうする。
マジで両手縛りプレイだ。

「あほ！　考えなし！」

俺はひたすら罵倒。
ニケは言い訳をした。

「考えてるって！　あの時は、状況を吟味して最善の対処をしたんだよ」
「お前が考えたのはパンツだろーが！！」
「おめえも一緒だろ！　その種族装備だってパンチラ装備じゃねえかよ」
「アホか！　パンツァー目線で物事を語るな！　この装備のパンチラスクショ出来んのは俺くらいだっつーの。俺は機能重視で選んでんだよ！」

この種族装備は「抗魔法」を上げ、いくつかの『状態異常無効』の付与効果を持っていた。
「抗魔法」は魔法に弱い接近職なら当然補強すべき弱点だ。付与効果で遮断するにも限度があるため、地力を上げるに越したことはない。

うん。

あのポラリス戦で、余裕こくのは止めたのだ。

まあ、ちょっと言い訳は入ってるけど。

「なあ、マジで頼む。本当に、水着くれ。――な、一生のお願いだから」
「……」

祈るような真剣さで、ニケは俺に懇願した。
まあ、一生のお願いって言われれば断れないわな。
俺もパンツァー、気持ちはわかる。

でもこれはやれない。

ゲーム時代に一回装備しているので。

つまり一度身につけているのだ。

この少し大胆だけど幼くもある可愛らしいビキニに、かつて脚を通したのだ。

くどいようだが、一回穿いているのだ。

恥しいわ。

「なんか、適当に見つくろっておくよ。それでいいだろ？」

「一番いいのを頼む」

「大丈夫だ。問題ない――とか言うと思うな。一番いいのはやんねえ」

## ２１　勝利を呼ぶ男（後書き）

本日二つ目。

あと追記。

「異世界てくてく記」→「だれかが綴ったエリュシオン」にタイトル変更しました。

タイトル「異世界」を気に入ってくれていた読者様方、申し訳ないです。

１１／３　一人称訂正

## 22　王都での活動

「～♪」
「ご機嫌だなー」
「あっはっは。とーぜん」

俺の隣には、陽気に鼻歌を歌うニケがいた。

なんで機嫌が良いかというと、俺が先ほど数着の水着を渡したからだ。ニケと話した日の夜の内に布袋を漁り、朝方までかけて何とか未着用の水着を何点か用意できた。

作業中にいくつか使えそうなアイテムを回収できたので文句はないのだけれど、かなり疲れた。

アイテム欄には、８０種類のアイテムを所持できた。多分、布袋もそうだろう。

たった８０種と思うなかれ。

一種類につき最大で×９９だ。

つまり、合計で８０００個ほどのアイテムを保有できるのだ。

俺は新人にあげるつもりでアイテムの大半は装備品だったけれど、それでも１０００以上のアイテムがあの布袋の中に詰まっている。

しかも所持理由が理由なだけに、俺には役に立たない物ばかりだ。

ダブりやスカを引いた時の気持ちと言ったら、もう。それを夜通しでやったもんだから相当疲れた。

「はあ、やっぱいいな、水着は。本当の姿に戻れた気がする……」

とろけるような顔で言ったニケは、俺があげた水着とビーチサンダルを着用し、上にパーカーのような衣服を羽織っている。

海水浴にでも行くかのような格好だが、しかしそんな恰好でニケは、プライベートビーチよろしく大通りを歩いていた。

ちなみに、ダグはいない。俺がニケと会うと言ったら、行ってらっしゃいと見送ってきた。

めずらしい。

とはいえ今回に限れば、ダグはいたほうが良かっただろう。

こんなニケでも、プレーヤーらしく絶世の美女だ。

そんな美女があられもない恰好で歩きまわり、隣にはそれなりの露出装備の俺がいる。

先ほどから、やたらと視線を感じていた。

「それが、お前の本来の姿なのか……」

「少なくとも、水着に対する欲望と愛。そんなオレのソウルの一面を表していることに間違いはない」

「無頓着と非常識もいかんなく現れてるぞ」

「……ヒカルだって脱いでいいんだぞ？」

「良くはねえよ！」

さっきから、どんだけの男達に話しかけられたか。知りもしない同性から矢継ぎ早に話しかけられるなど、うっとおしいことこの上ない。

とはいえ、注目を浴びること自体は大したことじゃなかった。人目を感じるのは今回が初めてではないし、気にしないようにすれば

意外と気にならなかったりする。
俺も美少女。
シルケスとポートアークを歩いた時は、すれ違う人々が良く振り返ったりしたものだ。こういう視線も、そろそろ慣れた。慣れたくなかったけど。

「まあ、嫌だって言うんなら強制はしない。――さ、調子も上がってきたし、なんかクエストでも行くか」

そう言って、ニケはぷらぷらと手に持っていた戦斧を振るった。

「え？　――やることは他にもあるだろ？　せっかく王都にいるんだし、情報収集とか」
「情報収集でぱんちらはできねえだろうが」
「お前のは水着だろ」
「いやいや、ヒカルの」
「俺ぇ！？」

なに言ってんの！？

「ふはははは。お前だって他人のキャラのぱんちらを楽しんでいただろう。当然、誰かもお前のぱんちらを楽しんでいたのさ」

とニケは得意げに笑った。

「そう言われちゃ、おいそれとパンチラをするわけにはいかないな」

俺はスカートを抑え、じりじりと距離をとる。

「おっと、止めときな。その種族装備はよく知っている。すこしで

も動いてみろ――」

ニケはぱちんと指を鳴らした。

「その瞬間、スクショだ」

「ばかな……お前にはそれだけの動体視力と反射能力はなかったはずだ」

狙ってパンチラをするには、フレームを見切る動体視力とそれに即応出来るだけの反射能力がいる。俺が今着用している装備もパンチラは存在するのだけれど、ゲーム時代にそれをスクショ出来たのはごくごく限られた、教養ある紳士のみだった。

「甘く見るなよ。オレは１００レベルだぜ」

あ、そうか。

レベルで補正かかっているんだった。

「ってもう。そういう冗談はいいや。見たきゃ見ろ」

スカートから手を放し、アホらしい、と俺はニケに言う。

「え、いいのか？」

「別によくはないけど。お前相手じゃ逃げきれないだろうし」

こいつの執念深さはよく知っている。

回り込みスキルはハンパないのだ。

「でも、言っておく」
俺はニケに言った。
「『偶然』という要素を欠いたパンチラは、その神秘性を半減させる。俺はそう思ってきたし、だからこそパンチラに魅了された。――お前も、そうじゃなかったのか？」
「――ッ！」
「たしかに、ゲーム時代じゃ俺たちは愉快犯過ぎた。無差別・積極的に狙っていったさ。――けどよ」
俺はニケを見上げた。
「パンチラって言うのは、かけがえのないものなんだ。――奇跡なんだ。この『エリュシオン』で実際にパンチラを見てみて、俺はそう実感したぜ」
「――っておい！！　良いこと言ってると思ったら、実際にぱんちらを見ただと！？　うらやましすぎる！！」
「え、うそ？　ニケまだなの？」
「こちとらずっとサバイバルで、この街に着いたのは最近だ！　いまだにゲット数０だっての！！」
「俺、４０ゲット位したけど」
主にカミラで。
あいつ、言葉の割に防御薄いんだもん。

そういうとこ、ほんと心配。
ちょっと注意した方がいいかも知れない。

「４０……」

ふらりとニケはよろめいた。
そして叫ぶ。

「クエストは、やめだ！　人通りの多いところ行ってぱんつハントするぞ！」

▼

実地視察。
この都市の街並みと、それと共にある人々の「流れ」を観察する。
人文地理的な、きわめて高度な理論に基づいた地形観察と言ってもいいだろう。
現実ではそうとは限らないのだが、『エリュシオン』の世界で人は、その居住地の地理的環境に制約されている。つまり地理地形を細かく観察すれば、人の流れやその集団の無意識の心理というものが推察できる。

たとえば、この階段は段差が急だからパンチラしないように気をつけようとか、この欄干は下の通りから覗きこむことができるから注意しようとか、こっちの道は変態がいるので通らないことにしよう、などだ。

ギルド活動を終え、俺たちは二人並んで歩いていた。

「満喫したぜ」

「おう」

暮れていく太陽を眺めながら、俺たちは息を吐く。

「ただ、注文をつけるとするなら、全体的に防御が固い」

「当たり前だろ。この世界の女の人なんて、基本ロングスカートだもの」

「画面移動によるスクリーンアウト時の処理もないしな」

「難易度は確実に上がった」

「ああ。――しかし、挑み続ける価値はある」

そう言ってニケは静かに拳を握った――。

――いや、もういいだろ。

この話。

誤魔化しきれない……。

▼

俺たちは宿への帰り道を歩いていた。

古い街並みに、なぜか懐かしい空気が漂う。古都の風情に感動したではなく、それは単に夕方の空気だ。

家に帰って行く人々。別れ際の言葉。哀惜。そしてかすかに漂う、夕飯の匂い。

それぞれがそれぞれ帰路に就き、そしてそこにも、それぞれの生活はあるのだろう。

夕方はいつも、変わらずに郷愁を誘う。

でもあんまり俺たちには関係ない。

帰りたくても帰れないからだ。

前進あるのみ。

「明日は（パンツゲットしに）どこいく？」

後ろ手に手を組みながらニケは言った。

副声音をばっちりと聴きながらも、俺は言う。

「ちょっと気になってる所がある。図書館とか事情通とかを探しての情報収集もいいんだけど、魔法学院に行かないか？」

「――おいおい……女学生のぱんつ、か？　燃えるぜ」

「スキルが使えないのは、もうお互いに確認してるよな。でも実際にスキルを使う冒険者がいるんだ。それがなぜなのか知りたい」

「に、かこつけてぱんつを狙おうってことだよな」
「俺の知り合いに『魔術士（メイジ）』がいてさ。ちょっと訊いてみたんだよ。なんでもスキルを使うには、「魔力」を制御しなければいけないらしい。――それって、多分ＭＰのことだよな？」
「……。そうだろうな」

おし。
無視し続けたら諦めた。
もうパンツの話はいいから。

「で、俺の考えなんだけど。実際には俺たちはスキルを使えるんじゃないか？　使い方がわからないだけで」

例えば、魔法の布袋。
あれはゲーム時代の「アイテム欄」だ。
しかしその姿が変わり、そのために俺は当初使うことができなかった。使えるようになったのはカミラに使い方を教えてもらってからだ。
そして使ってみると、俺はゲーム時代の所持品を引き継いでいる。
エリュシオンの姿と質がどれだけ変化しようとも、『ゲーム』であるという事実は変わっていないということだ。
ただ、受け止める俺たちがその変化に対応しきれていない。
ならスキルにも同様のことが言えるのではないだろうか。
俺たちが習得していたスキルは、そのシステムを変えていて、使い方が分かれば再び使用することが出来るのではないだろうか。

スキルは、重要だ。
危険地域に向かうということは、戦闘の連続ということである。
そして戦闘は単純な殴り合いではない。

モンスターたちとの殺し合いだ。
現実には決して存在しなかったモンスターたちに対して俺たちが出来ることといえば、単に殴る蹴るといった、いたって当たり前の暴力でしかない。
腕は二本しかないし、手は届く場所にしか伸ばせない。
この『エリュシオン』ではそんな当たり前のことが、すでに「当たり前のことしかできない」というハンデだった。

だからスキルの再習得は絶対に達成しなければならない。

「だからって魔法学園？　に行くのか？　そこに行けばスキルの使い方がわかんの」
「じゃ、ないかなー。――ゲーム時代にスキルを使うにはどうしたらよかった？」
「コマンド入力」
「あとは？」
「キーボード連打」
「……。それから？」
「実は一番重要、ぱんちらするキャラへの愛だ」
「なあ、そういうことを聞いてるんじゃないってわかるよな？　シヨートカットキー登録とか、パンチラへの愛とかでなんとかなったら苦労しねんだよ。――もっと、システム的なことで考えろ。エリュシオンのゲームシステムが、この世界に存在する法則性の元なんだから」
「システムか……」

うんうんとニケは唸る。
こいつ、ゲームする時画面見ないのか？
何見てプレイしてんの？

パンツ？

「実際に習得していること、ってのは必要だよな」
「そうだな」
「なら後は、ＭＰとか……スキルの照準とかか？」
「俺が言いたいのはＭＰだな。『エリュシオン』ではスキルを使うにはＭＰを消費していた。それはゲームじゃ当たり前のことだけど――ニケ、いまＭＰの消費の仕方とか、わかる？」
「スキルを使えば減る」

とニケは断言した。

「その認識じゃ正しくないんだ。スキルの結果としてＭＰが減るんじゃなくて、スキルっていう結果を得るためにＭＰを消費すんの。全体を見れば同じだけど、過程が逆」
「あ、なるほど、わかった。根本的にスキルを使えないんじゃなくて、ＭＰの使い方がわからないのがそもそもの原因なのか」
「たぶんな」

だからこそ「魔法学院」に行く必要があると思った。

魔法というスキルを体系的に教えているのが魔法学院だ。どうやって発動させるのかが分かれば、再習得は難しいことではないと思う。

「ふうん。なら明日からＭＰの使い方習いに、魔法学校とかに行ってみっか。コスチュームどうする？　お前は制服だろうけど、やっぱオレはスクール水着かな。――でもこのキャラってスクール水着似合わないんだよなぁ……。競泳水着でもいいよな？　ギリギリセーフだろ？」

「完全にアウトだ」
「じゃどうすりゃいいんだよ？　……ブルマ？　ブルマってこと？　オレ、下しか穿けねえからな！」

なあ。
俺だって自制することを覚えたんだぜ。
そんな暴走してさ。
一人ぼっちで木の根っこをかじっていたあのニケは、一体どこに行ってしまったんだよ。

「ん？」

俺が呆れてニケを見てると、ニケは不意に顔を上げた。
何やら怪訝そうな顔をしている。

「どうした？」
「いや……。なんでもない、か？」
「？　空になんかあるのか」

俺も空を見上げる。
整然と並んだ街並みの間から見上げた空は、とても暗い。
もう夜だ。

「さっさと帰るか」

俺はニケに言った。

「そうだな。――なあ、昼にヒカルの宿に行っただろ？　すごい広いのな。今日泊めろよ」
「いいよ。変な同居人いるけど」

「ああ、エルフの兄ちゃんな。いろいろ話が聞けそうだぜ」

そう言ってニケはブラブラと歩き出した。

とにかく、明日は魔法学院に向かってみよう。

最悪、ニケは置いていくことになるかもしれない。

▼

この二日間、ダグはヒカルに気付かれないように尾行していた。

あのニケという冒険者が気になったからだ。

赤銅色の髪に、橙の瞳。

猛獣のような雰囲気を纏い、相対するとエルフであるダグですら圧倒されそうになる。

長い間旅を続けてきたダグでも、そんな人間は知らない。いや、それほどの人間には出会ったことはない。

先ほども、ダグがわずかに向けた殺気を感知したような素振りを見せた。

あのヒカルですら気がつかなかったのに。

その鋭さは警戒に値する。ヒカルとは知古のようだが、それでも警戒心は緩めない。

あれは危険だ、と思う。

ニケに特別の不信感を持っているわけではない。ただ彼女は、あまりにも強大な力を持っている様に感じるのだ。それがヒカルに向けられることはないだろうとは思うのだが、それがヒカルの傍に存在していること自体がダグにとっては脅威だった。

強大な力とは、同種の力を呼びよせるからだ。

ヒカルと巡り合ったニケの様に。

あるいは、ヒカルが戦った「黄金翼竜」の様に。

ヒカルを守護すると決めたダグにとって、その種の不安というものはいつも感じていた。つまり、いつまた困難に直面するか、だ。ヒカルが呼び寄せたのなら、それは了承しよう。ただ、ヒカルが巻き込まれることは許容できない。未然に防げるのなら、ダグはそのために動く。

しかし今回、ニケはダグの手に余る。

単純な力量差でもおそらくそうだろうが、なによりニケはヒカルの知古だ。ダグが勝手に動けばヒカルが黙ってはいないだろう。そうなればヒカルは、ダグを遠ざけるかもしれない。

そう思うだけで、ダグは絶望に震えた。

それは何としても避けねばならない。それだけは何としても避けねば。

ヒカルは、何も出来ないのだ。

彼女がどういう考えの元に行動しているかはわからないが、長老たちはいつまでもそれを黙ってみてはいないだろう。いずれは何らかの行動を起こすはずだ。

もしかしたら、強行策を取るかもしれない。

その時、ダグがいれば交渉の場を設けることが出来る。しかしヒカル一人では無理だ。いかにヒカルが強力なハイエルフでも、エルフの頂点に立つ元老院という集団を個人で相手にすることはできない。

絶対に、折衝役となりうるダグは必要だ。

それになにより。

ヒカルは自己管理というものができないからダグが起こさなければいつまでも寝ているし食べ物も偏食になりがちだし服装はともかく自身の容姿に頓着しない振る舞いが多いから何かとトラブルに陥りがちだし高貴な身分というのは得てして奇妙な羞恥心を持つと言う話通りにヒカル普段の格好はあられもないからいちいちダグが気遣ってやらないといけないし何よりまだまだ幼いのだ！

とダグの思考が暴走していると、不意に影が差した。

ダグは顔を上げる。

ヒカルと泊まっている大きな宿屋の前。

その玄関に誰か居た。

「あ、ダグか。おかえり」

「よう、エルフの兄ちゃん。……突然だが、俺も今日からここの世話になることにしたぜ」

ヒカルとニケだ。

ダグは動揺した。

まさか、いきなり当の本人たちに会うとは。

「あ、ええ、はい。――わかりました」

とりあえず、動揺を表に出さないよう言い繕う。

「ニケさん、ですよね。私はダグです。お話はヒカルから聞いています。とても親しい友人でいらっしゃるとか」

ダグがそう言うと、ニケは笑った。

「ははは。まあ、一応は親しい、のかねえ？　友人、か」

そう言ってニケはダグに近寄る。

「まあ、そんなとこかもな。そういう理由で、ちょっと世話になる」

「はい」

「あ、宿代は自分で出すぜ。結構モンスターを狩ってるから、金は持ってんだ」

よろしく、とニケは手を差し出した。

ダグは応じる。
軽く手を握ると、小声でニケは言った。

「へへへ。なかなかの尾行スキルだ。あんたも相当に紳士らしいな」
「……はい？」
「とぼけなくてもいいって。――わかるんだよ。ヒカル（のぱんちら）に魅せられたんだろ？」
「……」
「大丈夫だ。お前が紳士である限り、その興味が身内に向けられようとも、オレは応援するぜ」

そう言ってニケは、ダグの背を叩いた。

ダグにはニケの橙の瞳が、爛々と輝いている様に見えた。

## 22　王都での活動（後書き）

やっとお話が進みそうです。
次回から魔法学院編に入ります。

# 23　魔法学院、潜入

直接、魔法学院に向かうことは出来なかった。
ダグに相談したところ、魔法学院は良家の子女が多く集まる王国有数の高等学府であり研究機関でもあるとか。
当然、人の出入りには細心の注意が払われている。
そこへ突然訪ねて行っても門前払いされるだろう、とのことだった。
ダグが自身の知人へ手を回してくれて魔法学院への紹介状を用意してくれたけれど、しかしそれでも審査に一月はかかるらしい。
もともと俺たちが身元不明者なのが原因だ。ダグが集めた紹介状でもその不審を晴らすことはできず、それでも魔法学院に入りたいというのならば、さらに有力者の紹介状が必要だった。
一応、俺もカミラに手紙を書いてみた。
入りたくても入れないので、その手引きをしてくれという内容だ。
返事は「私から会いに行くので、あんたは来るな」というような内容だった。ひどい。

こんなことなら、我慢してシルケスの領主とかに会っておくんだった。そんで、恩を押し売りしておくんだった。

とか思うものの後の祭り。どうしようもない。
そういうわけで俺たちは、審査の終わる一か月間をぶらぶらと王都観光に充てていた――――

ということはなく。

現在ニケと、魔法学院近隣に潜伏中。
入れないなら強行突破。
これに尽きる。

「作戦を確認するぞ」
「おう」

頷いたニケはいつも通りのビキニ姿だ。
どこから調達したのかTシャツのような薄いシャツをビキニの上に着ていて、一般の人にとってはとても目に毒。俺は慣れているから気にしない。風景みたいなものだ。

「まず、ニケが最初に魔法学院に入って騒ぎを起こす。そのあと俺が潜入する。つまり陽動作戦だ――潜入に際しては、俺が以前手に入れた『魔法学院制服・女』を使うから、正門前の警備員をどうにかしさえすれば、潜入してからは疑われないはずだ」
「昨日確認した通りだな」
「おう。最悪でも、警備員は何とかしてくれ」
「OK」
「あと、俺が戻るときは合図する。どこかで騒ぎを起こすから、それに合わせてニケも正門側で騒ぎを起こしてくれ。――何か質問はある？」
「一つだけ」

とニケは手を上げた。
この陽動作戦、なんと言ってもニケが作戦のカギだ。ニケが警備員たちを十分に引きつけられなければ、そのまま作戦が失敗。俺は潜入することが出来ず、ニケは捕縛されるだろう。なので事前に疑問事項があるならば解消し、陽動の成功率を上げなければならない。

昨夜徹底的に話しあったつもりだったのだけれど、実際に魔法学院を目にして気になることでもあったのだろう。
俺はニケを促した。
ニケは言う。
「警備員が女だった場合だ」
「――まさか」
「いや、なかにいるであろう女学生にも言えることだが――全て、ぱんちらしても構わんのだろう？」
「……もちろん。――ただし、パンモロだけはよせ。おそらくだけど、それに耐えられる女性はいない」
カミラなど、パンチラだけでも泣いてしまったのだ。
人前でパンモロした日には首を吊ってしまいかねない。
「わかった。――オレの崇高なる嗜好は知っているだろう。安心しろ。みすみすぱんつの担い手の、かけがえのない命を奪うようなことはしない」
「頼む。お前はパンチラのために本当に殺しかねないから、マジで心配だ」
勝利（ニケ）を呼ぶ男。
数々のクエストに挑み、そのすべてを生還している。無残に退却しようとも諦めることをしないコイツは、難攻不落と呼ばれたクエストですら長い戦いの末に攻略して見せた。
近いうちにオルタも、ニケが率いるパーティに屈するだろうというのが仲間内での通説だった。

様々な武勇に彩られた、ニケ。

いまだ、本当の敗北を知らない。

狙ったパンツは絶対スクショ。

ＰＫされるとパンツをはぎ取られるとまで恐れられた男だ。

コイツのＰＫを恐れて、どれだけのプレーヤーが自らパンチラを献上したか。

月例都市国家間戦争では、ニケの存在だけで多くの女性プレーヤーが逃げた。

学校の中に放り込むとか、本当はめっちゃ心配。

「頼むぜ。パンモロだけは……」

やる気ならパンツ回収だってできる世界だ。

しかしそれをやってしまったら最後、紳士であり続けることは出来ないだろう。

俺は懇願した。

「わかってるって！」

ニケは軽く笑った。

「じゃ、行ってくる」

ダッ。

『キャアアアアアァァア！？』『うおおおぉぉぉぉおおおお！？』

はっやあ！？
もう大騒動！？
天才！？

「予想以上の働きだぜ……ニケ」

あっという間に、詰め所に詰めていた大量の警備員がいなくなった。
誰もいない。
遠くから女子生徒の悲鳴と、男子生徒の歓声が聞こえるのみだ。

「俺も入ろっと」

口笛を吹きながら、あたかもここの生徒ですよという風な感じで、俺は魔法学院に入った。

▼

「潜入成功」

カミラのお下がりの制服を来て、俺は長い回廊を歩いていた。
廊下の一方には教室やら何やらに続くドアが並び、もう一方には壁がない。
中庭を囲むようにして続くこの廊下は、太陽の光が入ってきていてなかなか清々しく、現実ではお目にかかれない光景なのでちょっとわくわくする。

「どこいくかな」

事前に目星をつけていた場所を振り返る。

魔法学院の生徒たちが実際に実習を行う「教練棟」や屋外の「実習場」。書籍が大量に保管されている「図書館」と、職員がいる「職員棟」。

おそらくだけど、ニケの騒動によって「教練棟」や「実習場」は封鎖されているだろう。そこには金持ちの家の子弟たちが、生徒として多くいるはずだからだ。
となれば、書籍をあたるために「図書館」に行くか、教師を攫うために「職員棟」に行くか。

「最初は図書館に行ってみるか」

職員を攫うのは最後の手段でいいだろう。
ＭＰの扱い方が一朝一夕で習得できるとは思えなかったので、もともと長い潜入となることを覚悟してきたのだ。
いきなり襲撃することもない。

ということで図書館に向かう。

図書館は貸し出しに学生証が求められるだけで、閲覧するぶんには特に何かを提示する必要はなかった。

俺は悠々と図書館に入る。

図書館は木造の三階建て。

一階中央に円形で巨大な司書机があり、それを取り囲むように閲覧用のテーブルが設置されている。さらに外側には、個室になった閲覧室まであった。おそらく、自習用だろう。

2階と3階には蔵書が並び、司書机の真上、つまりフロアの中央が吹き抜けになっていた。

静寂に包まれた図書館内をめぐり歩き、いくつか本を選んで適当な椅子に座る。

俺が座ったのは、一階にある司書机から離れた閲覧用の机。

どさどさと本を置いて、早速ページをめくる。

事前に調べたことによると、この図書館には「禁書」と呼ばれる危険な魔法書物も保管されているらしい。ただ、今回の潜入の目的はあくまでＭＰの扱い方知ることなので、そういう本は必要ない。

内容の簡単な、入門書的なものがあればそれでよかった。

『魔法入門１』

『実戦魔法１』

『支援攻撃魔法』

かなり長い時間をかけて、それらを読む。

「……」

ないな。

全部魔法を使える前提で書いてある。

魔力の効率運用って一体何だ？

もっと簡単なヤツに載ってるのだろうか。

『魔術士ってどんなお仕事？』

『自伝　３０歳の魔術士転職』

『１１歳からの魔術士　～いきなり手紙が来たら編～』

ない。

もっと簡単なヤツ？

そんなのある？

『アルカディアものがたり』

『ちいさなまじゅつし』

『まじゅつしなぞなぞ』

「ふふ……」

絵本だけど、割とおもしろい。

じゃ、なくて

「ない。……はぁー」

ため息をついて俺は机に突っ伏した。

顔のみを動かして窓の方を見ると、すでに外は藍色に染まっていた。かなり長い時間を読書に費やしたことになる。

眉間を揉みながら、体を伸ばした。コキコキと軽快な音がした。

まあ、初日にＭＰの使用方法がわかるとは考えてはいなかった。そんなに容易いものならば、魔法学院が存在している意味がないだろう。

とはいえ、全く手掛かりすら掴めないとも思っていなかった。

魔法学院。

根本である魔力の制御法がどこにもないのはどういうことだ？

「……。外行くか」

短い期間とはいえこれからちょくちょく来ることになると思うので、出来れば目立ちたくはない。遅い時間まで残っていたら、司書の印象に残ってしまうだろう。

俺は一冊一冊本を元あった場所に戻し、それから図書館を後にした。

▼

「カミラ探そっと。どこにいるだろう」

図書館を出た俺は、カミラを探すことにした。

魔法学院に潜入できたのはいいけれど、潜入し続けるためにはカミラに保護をお願いしなければならない。食事や寝る場所の確保のためだ。

一応、手に持ったかばんの中には、日持ちする食料と着替え、それと魔法の布袋がしっかりと入ってはいる。最悪の可能性として実習林で野営することを考えてのことだ。しかしそれはあんまり考えてはいない。実際に魔法学院に来てしまっているのだから、カミラも無碍に追い出したりはしないはず。

「どこにいるんだろうなー」

ぷらぷらと夕暮れに染まった学院内をうろつく。

おそらくカミラは下宿か、寮生活だろう。

一人部屋なら余計な気を使わなくて済む。一人部屋だったらいいなー。

「誰かに訊ければいいんだろうけど」

先ほどから、誰もいない。

ニケの騒動で、生徒は早く帰ってしまったのだろうか。

学校に変質者が現れたとなれば、当然の処置かもしれない。

「学校は始まってるはずだから、誰かしら残っててもよさそうなのに」

試しに講義室らしき部屋のドアを薄く開けてみた。

講義室は円形で、すり鉢状の空間になっている。中央で講義するのだろう、それを囲むように段々と椅子が並べられていた。

しかし、誰もいない。

「……」

残っているだろう教師を求めて職員棟を目指してもよいのだけど、もしかしたら俺が学生ではないと発覚してしまう恐れがある。

尋ねるならば断然生徒だ。

「失礼しました」

俺は静かに講義室のドアを閉めた。

再び学生の姿を求めてうろつく。

「あなた」

声がかかった。

俺は声のした方へ顔を向ける。

そこには俺と同様の制服を着た、女子生徒が立っていた。

▼

「こんな時間に、なにをしているのだ？」

女子生徒は首をかしげながら訊いてきた。

直線的に切リ揃えられた黒髪が、それに合わせてさらさらと動く。

――すごい。

姫カットだ。

しかもどことなく和風な雰囲気で、さらに美少女。

「あ、人を探してるんです」

そんな人物との邂逅に感動しつつ、俺は一応丁寧語で答えた。顔には笑顔を張り付けている。

生徒に出会えた安堵感も手伝って、自然な笑顔になったはず。

「人探し？」

「ええ。――カミラって言うんですけど」

「カミラ？」

少女はちょっと考えるような仕草をした。

「あなたが言っているのは、２年のカミラ＝バスク嬢のことだろうか？」

「バスク……？　カミラのこと、知ってるんですか？」

「ああ。同級だ」

おお。

すごい幸運だ。
でも、バスクって名字だろうか。俺、カミラの名字なんて知らないから、人違いの可能性もある。

「あの、金髪の？」
「そうだな。あと、綺麗な青い目をしている」

本人っぽい。

「どこにいるかわかりますか」
「今は……寮に帰ったのではないかな。――急用か？」
「一応、そうです」

出来れば今すぐ会いたい。
とりあえず寝床を確保して安心したい。

「ふむ。私が取り次ごうか？」
「え、いいんですか」

かなりついてる。
可能性として寮は考えていたけれど、どうやって会うかまで考えていなかった。単純に寮を訪ねて呼び出せば注目を引いてしまうだろうし。

「かまわない。――下級生が上級生を呼び出すというのも、勇気がいるだろう」
「え？」
「一年生だろう？」

ちょいちょいと少女は自分のネクタイを指した。赤い。

俺は自分のネクタイを見下ろす。緑色だ。
へえ。
買い替えたって言ってだけど、学年によって色が決まってるのか。
毎年新品とか、経済的ではないな。

そんなことを考えながら、俺は少女の言葉に頷いた。
それから軽く頭を下げる。

「あの、――おねがいします」

「信じられない！」

先ほど会った少女に連れられて、カミラの部屋に案内された。
俺を見るなり言ったのがこれだ。

「私から会いに行くって言ったでしょう。なんで――というか、どうやって来たの？」

あれ？　とカミラは首をかしげた。

「昼ごろなんか騒ぎなかった？」
「ああ。なにかあったみたいね。――なんでも、物凄い非常識な人が学院に入り込んだとか……？」

言ったきり、カミラは俺を疑わしげに見つめる。

「俺じゃない、ニケだ。ニケにちょっと手伝ってもらった」
「ニケって……キースに会いに行ったっていう？」
軽く眉をひそめてカミラが言った。
そういえばカミラ、キースのことでニケに対抗心みたいなもの持ってたっけ。
「あ、うーん……。どっちかっていうと、俺に会いに来たっぽい、よ？」
「そうなの？」
「ほら。俺ってそれまでキースと一緒だったからさ。キースに俺の居場所訊きに行ったんだって」
「へえ」
納得したようにカミラは頷き、
「で、ヒカルはどうしてここにいるわけ？」
と話を戻した。
ここからが本題。なんとか泊めてもらわなければ。
「魔法学院に用事があったから、来ちゃった。無断で。――今日泊めて」
「なっ……い、いきなりは無理よ」
「えー、いいじゃんか。散らかってるの見られたくないとか？　そんなん気にしないって。部屋に遊びに行ったりしただろ」
俺の外見は同性だし、カミラ相手に何かするつもりもないから問題ないと思ったんだけど。

「散らかってないから！　――相部屋なのよ。同居人の確認も取らないで勝手に泊めることなんて出来ないわ」

あらら。

一人部屋じゃなかったの。

ならしょうがない。

「でも、どうしよう……。ヒカル、私以外に学院に知り合いなんて居ないわよね？」

「おうよ」

「カミラのルームメイトは、シルヴィア嬢だったか？」

俺の後ろで話を聞いていた少女が言った。

「そうなのよ……」

カミラはため息をつきながら言う。

「それでは、説得は難しいな」

「……。　ヒカル、ちょっと待ってて。友達あたってくる」

同居人ではなく、友達に頼むと言いだしたカミラ。

もしかして、仲が良くないのだろうか。

「いいよいいよ、悪いし。どっかその辺で野宿するから」

「ちょ、やめてよ！　待ってなさい、絶対探してくるから」

走りだそうとしたカミラを、少女が止めた。

「カミラ、私が彼女を泊めてもいい。幸い、私は二人部屋を一人で

使っているから、ベッドが一つ開いている」
「え、本当!?　アズリア！」
「かまわない」
「ありがとう！」

ヒカルもお礼言いなさい、とカミラは促してきた。

「あ、ありがとう」

ペコリと頭を下げる。

「うむ。ヒカルと言うんだな？　私はアズリアだ。アズリア＝リノス」

へえ。
アズリア＝リノスね。
そんで、カミラはカミラ＝バスクか……。
……リノス？

「ところで、ヒカル。あなたは魔法学院の生徒ではないのか？」
「「あ」」

ものすごく自然にアズリアが居たから、俺たちはそのことを隠すのを完全に忘れてしまっていた。

## 23　魔法学院、潜入（後書き）

魔法学院編です。
ちょっと長め。

一章で放り投げた伏線の回収を目指します。

# 24　魔法学院、日々

「ヒカル、起きろ。学院に行くぞ」
「うーん？」

俺はアズリアの声に目を覚ました。
布団の中で伸びをして、それから起き上がる。

「おはよう」
「うむ、おはよう。――私は学院に行くが、ヒカルはどうする？」
「――ついてく」

手櫛で髪を撫でつけて、ごそごそと制服に着替えた。

「顔、洗った方がいい。目が覚める」
「そうする……」

言って、俺はアズリアの部屋を出た。
寮生に見つかるのは拙いので、最近はかなり早い時間に目を覚まし、寮を出ている。
本当に早い。
ほとんど夜明け前だ。

「ねみー」

欠伸をしながら呟いた。

現在、アズリアの部屋を拠点として、魔法学院に潜入中だ。
朝アズリアと一緒に学院に向かい、日中は図書館に籠ったり実習場をうろついている。学院が終わるとアズリアに合流して、彼女の部屋まで帰る。

あの日、アズリアに俺が部外者であることがバレて、俺とカミラは必死に言い訳をした。

もともと学院側に知らせるつもりはなかったようだけれど、俺が冒険者であることが分かるとアズリアは強い興味を示し、是非来てくれと言いだした。

冒険者に興味があるようだ。

とはいっても俺は冒険者として特に実績があるわけではなかったので、この間のワイバーン戦のことを話してあげた。
アズリアは最初は疑わしげだったけど、カミラが話を補強し、真実だと証言したおかげでようやく信じたようだ。
そうなると、アズリアはどんどん質問してきた。
ワイバーン、エルダーワイバーン、バハムート、ポラリスの外見と特徴。どのような行動をとるのか。集団戦での魔術師（メイジ）の戦い方。他の冒険者との連携。他のモンスターとの戦闘。訓練の仕方。冒険者としての心構え、などなど。

俺は答えられる範囲で何とか答えた。一通り話終わるとアズリアは俺のことを「勇敢で歴戦の可憐な冒険者」と勘違いし、すっかり信用してしまったようだった。
信用に関しては、カミラの友人というのもプラスに働いたみたいだ。

そんなわけでアズリアは特に警戒することなく自室に俺を置き、俺は学院内に便利な拠点を持つことができた。

学院に向けて早朝の通学路を移動中。
寮は学院の敷地内にあるので、かなり短い通学路だ。

「今日は実習林で二年の実習がある」
「へえ、カミラとアズリアも？」
「もちろん。見に来るだろう？」

アズリアには俺が魔力の制御法を調べていることを打ち明けていた。
魔力制御は個人の感覚に拠るところが大きいということは以前カミラから聞いていたので、今回の潜入目的は書籍の検索だということも伝えた。
アズリアは、それならば実習も見学したほうが良いのではないか、と提案してきた。なんでも、実際にモンスター相手に魔法（スキル）を行使する実戦形式らしい。
初日の経験から、それも一理あると思った俺はなるべく実習を見学するようにしている。
今までは生徒や教員たちに見つからないよう遠くから伺う程度だったけど、彼女とカミラの手引きがあれば、かなり近くで実習を見学することが可能だろう。

他にもアズリアには、図書館の蔵書検索や俺向けの魔法入門講座、種々の情報のリークなど、かなり手伝ってもらっている。

「行こうかな。いつ？」
「3限だから、昼からだな。カミラにも言っておく」
「よろしく」
「うむ。プロの冒険者に見てもらえるとなると、張りきらねば」
「プロって……」

教えることは特にねぇよ。
『魔術士（メイジ）』じゃないもの。

「昼からは私たちのところに来るとして、それまでヒカルはどうするのだ？　また図書館か？」
「そうだな。もうちょい調べたい感じだし」

3日ほど図書館通いをし、夜はアズリアから入門講義を受けて、俺はようやく魔力の制御法を知ることが出来た。
そしてある事実も発見した。

それはＭＰ＝魔力は成り立たないということだ。
正確には、魔力＜ＭＰのようだった。
おそらく、魔法を行使できない戦闘職でもスキルは行使できるため、ＭＰの考え方に差別化がなされたのだろう。魔力とは、魔術士（メイジ）が魔法（スキル）行使を普遍・体系化するために生まれた単語のようだった。
そして、体系化したのはノンプレーヤーの『魔術士（メイジ）』達だ。
彼らが積み重ねてきたノウハウは、プレーヤーであり『制圧者（タイラント）』である俺にそのまま適用することが出来なかった。

さらに、魔法学院についても俺は勘違いしていた。

てっきり『一般人（モブ）』が魔法（スキル）を習得して『魔術士（メイジ）』になる場所だと思っていたのだけれど、実際には生まれつき『魔術士（メイジ）』の素質のある者が一定の水準に達するまで学ぶ場所らしい。
『魔法（スキル）』を使えるようになる場所ではなく、『魔法（スキル）』を使える者のみが入学できる場所。

スキルを使えることが前提だ。

……あーあ。

しくった。
普通に、スキルを使える冒険者を訪ねればよかった。

そう思いもしたけど、俺は学院潜入を継続した。
手ぶらで帰るというのも悔しい。
図書館の蔵書は膨大なので、探せばヒントくらいはありそうだし、それに学校は見学しているだけでもなぜか楽しかった。
なにやら空気を吸っているだけで、元気が湧いてくるような気がする。
学生時代は、学校なんてあんまり楽しくなかったはずのに。

「なにか修正すべき点を見つけたら、夜の散歩のときに教えてくれ」

小さく握り拳を作って、アズリアは言った。

「はいはい。なにかあったらね。頑張れよ」
「うむ！」

そう言って、てってっと走って行くアズリア。
すでに図書館の前。
どうやら、図書館まで送ってくれたようだ。

▼

「また、あんた。えらいものを持ち込んだなぁ」
魔法学院のどこかにある『院長室』。
その部屋の主であるレクトールが呆れたように呟いた。
古いが豪奢な椅子に腰かけ、これまた年代物の机の上に置かれた、木箱を見つめる。
正確には木箱の中身を見つめていた。
細やかな装飾が施された杖が入っている。
「ううむ……」
レクトールは杖にゆっくりと手を伸ばす。
すると、杖からゆっくりと黒い霧が出てきた。
偉大な魔術師と称賛されるレクトールでさえ、あまりの不吉さに眉をひそめるほどだ。
レクトールは伸ばしかけた手をひっこめた。
「なにか、強力な呪いがかかっておるようだな」

「それは、わかっている」

院長室の隅。応接用のソファに腰掛けた男が言った。
闇色のローブを身にまとった、壮年の魔術師だ。
レクトールのかつての同僚でもある。

「鑑定を依頼したい。出来れば、その杖の制御法も」
「……。そんなもの、お抱えの魔術士団を使えばよかろうに。研究部門は今でもあるだろう」
「彼らでは、近づくことさえできなかった。――触った者は発狂した」
「なんと。そのようなものを「学院」に持ち込むとは……」

レクトールは丁寧に木箱を封し、机の隅に自身の杖で追いやった。

「お返しする。いかな魔法学院でも、王国の魔術士団が放り出したものを受け入れるわけにはいかぬ」
「放り出したのではない。調べようにも、われらでは調べることができなかったのだ。――その杖は強力だ。なんとしても制御法を明らかにし、王国の管理下に置きたい」
「どうせ、モンスターたちとの戦いに使うつもりだろう」
「強力な物なのだ、当り前だろう」
「……そりゃそうか」

レクトールは椅子から立ち上がり、備え付けてあるティーセットの傍によった。
ゆっくりと淹れる。

「なら、あんたが自身で研究すればよろしいだろう。触れぬまでも、近寄ることは出来るのだろう？　実際に持ち込んできたのだから」

「魔術士団の顧問魔術師というのは、多忙でな」
「魔法学院の長も、多忙よ。研究者はともかく、遊びたい盛りの学生らにはいつも頭を悩ませておる」
「……私によって閑職に追い込まれたから、断るのか？」
「そうではないよ」
「であるなら、引き受けるべきだ。器が知れるぞ」

男の言葉に、レクトールはため息をついた。
そのような考えに至るということ自体、彼の器が知れようというものだ。
そもそもが、自身の後任者がこのような人物であると知った時、レクトールは再選考を宰相に直訴したのだ。
王国に二人しかいない秘儀の使い手。
その腕前を差し引いても、彼は魔術師団の顧問にはふさわしくないと。
ひょっとしたら、そのことが彼の人格に影を落としたのか。
しかし、その程度も払拭できないとは、あの頃から成長が見られない証でもある。
やはり、ふさわしくない。

「挑発だと受け取っておこう。……預かるにしてもだ。このほど強力な呪いが掛けられた杖では、わし自身が一人で調べるしかない。時間がかかるぞ」
「結構」

そう言って男はソファから立ち上がる。
そのまま背を向けてドアへと歩いて行った。

「あわただしいやつだな。茶くらい、飲んで行け」
「多忙なもので」

そう言って、男は出ていった。
男が出ていったドアを見つめながら、レクトールは自分で淹れたお茶を飲んだ。
まずい。
「「黒翼竜」と「黄金翼竜」がギルドから運ばれてきたり、強力な杖が持ち込まれたり。退屈しないのはいいことだが、いささか、忙しい」
楽隠居のつもりだったが、魔法学院の院長にはすべきことがあり過ぎた。

▼

アズリアよりもカミラが先に来たので、カミラと図書館で談笑中。
「どっちが強いか？」
俺の質問にカミラは首をかしげた。
「そう。アズリアと」
「うーん。どうとも言えないかな」
カミラは言って、杖を取り出した。

「魔力の最大保有量の測り方って知ってる？」
「ああ。こないだアズリアから訊いた」
「ふうん」

頷いて、カミラは杖を握り直す。
するとカミラの近くに一つの光球が現れた。

『魔術士』系統職業の通常魔法攻撃。その光球だ。
『魔術士（メイジ）』系統職業は『攻性術師（ソーサラー）』『聖職者（クレリック）』、『魔導師（ウィザード）』『召喚師（ナー）』『大司祭（プリースト）』を指す。

接近職の通常物理攻撃とは違い、『魔術士（メイジ）』系統の職業は通常攻撃も魔法攻撃だ。通常魔法攻撃はＭＰを１消費して光球を飛ばす遠距離攻撃である。『エリュシオン』では時間経過とともにＨＰとＭＰが回復するので、ＭＰ１という消費量は大したことはない。『弓士（アーチャー）』系統の通常攻撃と同様、連射の効く便利な遠距離攻撃だった。

アズリアに訊いたところ、この光球が魔術師の力を測る基本になっているらしい。
魔力の保有量を調べるには光球の個数、魔法行使の力を調べるなら威力を見るそうだ。
たしかに、魔術師の通常魔法攻撃がＭＰを１消費するということは、出現する光球の数がそのまま最大ＭＰと考えて良い。
あと、高位の魔術師の場合は『炎弾（ファイアボール）』や『霧弾（ミストボール）』が測定の基準になるとか。こちらは普通にスキルだ。

「私はこれを２００個くらい出せるんだけど」

ということはＭＰ２００くらいか。

クラスチェンジしていないレベルの低い『魔術師』ならそれくらいだろう。

クラスチェンジをすると基本ステータスが上昇し、その後のパラメータの成長率も変動するので飛躍的に強くなる。

『制圧者（タイラント）』のＨＰ同様、『魔導師（ウィザード）』ならＭＰ１００００越えはざらにいた。

「アズリアはこれを２５０個くらいかな。実際に見たことはないから、詳しくはないんだけれど」

「じゃ、アズリアの方が強いの」

「とも言い切れない。一発の威力は私の方が強いもの。威力だって重要でしょう？」

「なるほど」

カミラは「魔法力」が高いということか。

「魔法力」は魔法攻撃の威力に関連するパラメータだ。

多分、任意で振り分けられるレベルアップ時のボーナスポイントの振り分け方の違いだろう。

カミラとアズリアは同じ人間なのでパラメータ成長率は同じ。レベルも同じくらいだとすれば、カミラは「魔法力」に集中して振り分け、アズリアはＭＰ上昇のために「抗魔法」にも振り分けているのだ。

「じゃ、シルヴィアは？」

「シ、シルヴィアっ！？　―な、んで彼女の名前がでてくるのよ！？」

「カミラのルームメイトなんだろ？　どうなの？」

「シ、シルヴィアは……」

カミラはがっくりとうなだれた。

「個数も威力も彼女の方が上よ……」

「ありゃ」

てことは単純にシルヴィアの方がレベルが上なのか。

「でも、仕方ないでしょう？　彼女は貴族なんだもの。小さいころから魔法の英才教育を受けているから、それくらい当り前なのよ」

「そんな言い訳するとは……」

カミラが言い訳をするなんて、ちょっと意外。

シルヴィアにかなりのライバル意識を持っているらしい。

――あれ？

でもこないだ一応「連戦」に参加したし、ワイバーンにはトドメを刺した。もしかしたらレベルが上がっているのではなかろうか。

「最近、光球の個数確認した？」

「したわよ。休暇前に教練棟で」

ワイバーン戦以降は確認していないのか。

「今、確認してみたら？」

「えー？　そんなにすぐに魔力保有量は上がらないものなのよ？　ずーっと訓練して、ちょっとずつ上げていくものなの」

「ワイバーンとかと戦っただろ」

「って言ってもね……。ただ見ていただけだし、それに一回きりだ

ったじゃない」
「いいからいいから」
「うーん……」

渋りながらも、カミラは杖を構える。

「……いくわよ？」
「ごー」
「ふぅー……。――っ！」

カミラが杖に力を込めたのがわかった。
それに応じるように杖は淡い光を帯び――

突如、視界を埋め尽くすほどの光球が出現した。

「えッ！？」
「おぉ、すげえ綺麗。――カミラ、どう？　魔力上がってる？」

軽く見ても２００は超えてそう。
倍の５００位あるんじゃない？

「あ、上がってる！　すごいッ！」
「おー、やったな」

ＭＰ５００てどのくらいのレベルなんだろうか。
魔法職じゃないのでよくわからない。

「わ、やったっ！」

きゃんきゃんとカミラははしゃいだ。

ドン！　ドン！　ガシャン！

突然、そんな音が響いた。

「あ。やばい、カミラ。光球が着弾してる」
「えっ！？」

見ると光球が机や椅子に触れて小さな爆発を起こし、突然の魔法攻撃に生徒たちがパニックを起こしていた。

「や、やめなさい！！」

中央の巨大な机に座っていた司書が大音量で叫んだ。

「ご、ごめんなさい！」

カミラはあわてて杖をおろす。
すると、光球が消えた。

「あ、あなたが一人でやったの……？」
「すみませんすみませんすみません」

司書は目を見開いて驚き、カミラはそれに気がつかずにひたすら謝っていた。

「カミラ……？」

不意にそんな声がした。

俺は後ろを振り向く。

アズリアだった。

▼

「黄金翼竜!?」

アズリアから話を聞いて、カミラは叫んだ。

「そう。――多分、ヒカル達が倒したものだと思うんだが」

「まあ、だろうな。ポラリスがうじゃうじゃいるとは思えないし」

「ポラリス？」

「黄金翼竜の名前だよ。本当はポラリスって言うんだ」

「へえ……」

アズリアは感心したように俺を見た。

ひょっとして、こんなことでもアズリアの中の俺の冒険者株が上がったりしているのだろうか。

……。

上がれば、どうなるのだろうか。

なにか、期待してもいいのだろうか。

「なんで学院に黄金翼竜が運ばれて来るのよ！？」

「カミラ、ヒカルが言ってた。ポラリスだぞ」

「どっちでもいい！」

カミラはドン！　とテーブルを叩いた。

先ほどカミラの光球の被害にあった生徒がビクリと体をすくめる。

「なんでも、冒険者ギルドの依頼という話だ。これから数日かけて対魔法属性の検証を行うとか」

「対魔法属性？」

「うむ。――ということで、今日の実習は全て中止だ。あそこが搬入場所となるらしいからな。生徒は速やかに帰寮せよ、とのことだ」

「……帰寮？　講義はないの？」

「教員総出で行うようだぞ」

「……へえ」

カミラは頷くと、いそいそとバックに荷物を積み込み始めた。

「？　どっか行くの？」

なにか用事でもあったのだろうか、と思った俺は訊いてみた。

「教練棟よ。魔力保有量を測定してくるわ！」

「あ、そう」

はしゃいじゃって。

よっぽどうれしいんだな。

「そうだ、カミラ。先ほどのことは、どういうことだ？」

「え？」

「私が図書館に入ってきたときの光球。あれは……あなたがやったのだろう？」

「ああ――良くわからないのよ。なぜかいきなり魔力量が上がったみたいで……」

首をかしげながらカミラは言った。

本当に不思議そうだ。

それは多分、カミラが学院の実習だけでレベルを上げたせいだろう。

適正レベルの敵を倒せば、相応の経験値が入る。しかし学院の実習は低レベルのモンスターが相手、つまり格下が主だ。生徒に配慮してだろうけど、それでは少量の経験値しか手に入らない。

実習を通してしかモンスターとの戦闘経験がなかったカミラには、モンスターとの戦闘に間違った認識を持っていたのだと思う。

つまり、モンスター相手の戦闘を行ったとしても魔法の力は簡単に上がるものではないという認識だ。

だから突然ＭＰが上昇したことに驚いだのだろう。

「多分、光球の威力も増してるぞ」

「うそっ！？」

しかし、自身よりも格段に高レベルの敵からは、生き残るのが難しい代わりに大量の経験値を入手することが出来た。

一応俺とパーティを組んでの戦闘だったので、カミラはその恩恵に与ることが出来たのだ。ワイバーンを倒し、ポラリス戦も無事に生き残ったカミラのレベルは、一気に上がったはずだ。

「多分な。新しい魔術も覚えたり？」

「わっ、わっ」

ピョンピョンとカミラが跳ねた。

「な、なぜだ？」

アズリアがずいっと俺に詰め寄った。

ちょ、近い。

なんか恥ずかしい。

「ぽ、ポラリス相手に、カミラと一緒にパーティー組んで戦ったもの」

「……それは、ヒカルと一緒に戦ったのが理由だろうか？　それとも、ポラリスを倒したのが？」

「両方かな。直接的にはポラリスなんだろうけど、俺と一緒じゃなきゃ無理だったろうし」

「……そうか」

言って、アズリアは俺から離れた。

何か考え込んでいる。

「ね、ね。私、行くわよ？」

そわそわしながらカミラは俺に言った。

「はいはい。いってらっしゃい。――スカートはちゃんと押さえて走るんだぞ。カミラ、すぐパンツ見せつけるんだもん」

「見せるか！！」

叫んで、カミラは走って図書館を出ていった。

# ２４　魔法学院、日々（後書き）

コメディ少なめでした。
魔法学院編はこんな感じかな？

# 25　魔法学院、散歩

主の居ない『院長室』

不意に、そのドアが開いた。

この部屋の主ではない。先日、魔法学院を訪れた魔術師、フランキリルだった。

フランキリルは血走った眼で校長室を見渡す。

フランキリルは王国でも2人しかいない『蘇生魔法（リバイブ）』の使い手として魔術士団の顧問魔術師に抜擢された。

ただ、あくまで魔法の腕を買われてだ。

彼の人格まで考慮された選考ではない。

もともとフランキリルは、偉大な魔術師と呼ばれた筆頭顧問魔術師であるイクトールの代わりとして選ばれた。イクトールは愛嬌のある人格者だったが、王族以下の貴族はその強力な魔術師が去ることで魔術士団が弱体化することを恐れた。そしてそれに代わるものとしてフランキリルを抜擢した。

選考にあたり身辺調査や精神鑑定等も実施されたがそれはお粗末なもので、吟味の上でフランキリルが選任されたわけではなかった。

そのことをフランキリルは知らない。

揚々と魔術士団の門を叩いた時から、彼は違和感を感じていた。

ずっと違和感を抱きながらも、彼は顧問魔術師を務めてきた。

魔術士団の顧問魔術師という肩書と環境を持ったことで、彼が元々持っていたモノがいびつに歪んでいった。
彼は粘着質な、良く言えば研究者タイプであり、魔術士団のような実戦部隊にはなじまない。また、それを率いるだけの資質も持っていなかったのだから当然と言える。

ただ持っていたのは、人一倍の自尊心だ。

様々な軋轢や出来事を彼は経験したがそのすべてを退けた。
強い自尊心ゆえだ。
またそのことがさらに彼の自尊心を肥大させた。

先日、魔術士団にとある魔術品が届けられた。
邪悪で強力な呪いを帯びた杖。
魔術士団の研究者たちは興奮して研究に取り掛かったが、予期しない不運な事故が起きた。
杖の呪いは制御できるものではなく、触れた者のみならず付近にいた者を無差別に発狂させたのだ。
しかしここでも、彼の自尊心が彼を救った。
魔術士団の優秀な魔術師が狂ってゆくなかで、彼は自我を保っていられた。
フランキリルを除けば同僚の顧問魔術師以外ほとんどの魔術師が恐慌状態に陥り、魔術士団は壊滅的な被害を受けた。

その状態でこの強力な杖を研究することは不可能だった。何よりも魔術士団の再編が急務だ。
とはいえ、この杖をこのまま封印するにはあまりに惜しいとフランキリルは考えた。

危険を差し引いても魅力を感じすぎるほどに強力な杖だ。魔術師が触れただけで、広範囲に作用する呪いが発動するなど、信じられないほどに貴重な傑物である。

――この杖の制御法が知りたい。

そう考え、浮かんだのは自分の前任者イクトールだった。

彼は今、魔法学院で学院長をしている。

ちょうどいい、と彼は思った。

おそらく、イクトールでさえこの杖に触れられないだろう。もしかしたら、傍に寄ることすら出来ないかもしれない。

それはそれで愉快だ。

散々イクトールと比較されたフランキリルにとって、もしそうなれば自身が優れているという証左となる。

それに呪いの影響を受けないならば研究させればいい。どうせ自分はしばらく魔術士団の再編作業に追われる。その間の「つなぎ」になってくれさえすればいいのだ。

フランキリルは魔法学院に杖を持ちこんだ。

イクトールはしぶしぶながらもそれを受け取った。

フランキリルが本当に望んだ結果にはならなかったが、それでも彼にとって愉快だった。

あのレクト―ルも、魔杖に触れることは出来なかった。

あのイクトールでさえ、自分を拒むことは出来なかった。

それはつまり、イクトールよりも自分が優れている証ではないか。

ひとしきり愉快な気分を堪能し、彼の自尊心が満たされた頃、フランキリルは急に不安になった。

イクトールも杖に触れられなかったが、呪いの影響は自分と同じように退けた。

ならばイクトールは慎重を期しつつも自分が命じた通りに研究に取り掛かるだろう。

――あの杖の制御法を解明しかねない。

彼は素直にそれをフランキリルに渡すだろうか。

もしかしたら、それを持って魔術士団の顧問魔術師に返り咲くことはないか。

いや、あの魔杖の力ならばさらに栄誉ある地位に就くことさえ考えられる。

――イクトールのところに持ち込んだのは、早計だった。

そう考え、彼はすぐさま杖を取り戻すことにした。

至る、現在。

フランキリルはついに、魔杖を見つけた。

傘立てのなかに、放り込まれている。『壊れてます、使えません。持ち出し禁止』という張り紙をつけて。

――イクトール。……俺はお前の、人を軽んじる態度が、心底嫌いなのだ。

杖への扱いがイクトールのフランキリルへの態度を表しているようで、彼は激昂した。

愚かにも。

彼は激情に任せて杖を掴んでしまった。

▼

「うまっ」

野菜炒めを食べながら小さく叫ぶ。

「……うまッ」

根菜類が使われたスープを飲んで、また叫んだ。

「ヒカル、うるさいわよ」

俺の様子を見て、カミラが言った。

「俺は悪くないよ。料理が美味いのが悪いんだよ」

俺は今、食事中だ。
カミラとアズリアが寮の食堂から持ってきてくれた夕食を食べている。
一応食料を持参してはいたけれど、それは日持ちすることだけを理由に選んだ保存食のようなものだ。味など期待できるはずもない。
カミラ達が毎夜調達してくれる温かい料理のほうが、何倍も美味しい。

「うまーい」
「そう、言われると……いやいや。ヒカル、やっぱりうるさいから」
「うむ。寮の壁などあってないような物だからな。あまり声を出すと、隣の寮生に知られてしまう」
「ぐむ……」

アズリアの言葉に、俺は唸る。
バレるのは遠慮したい。俺はともかく、カミラとアズリアにまで迷惑がかかってしまうからだ。

「いやしかし、染みわたる様な美味さだなぁ。カミラ達、毎日こんなの食ってんの」
「……私たちで作ったのよ」

カミラは呆れたように言った。

「……。カミラ、料理出来たんだ」

なんとなくだけど、料理は出来ないと思っていた。
全然根拠はないのだけど、料理だけは酷い腕前のはずだと信じて

いた。
意外だ。
「実家が宿屋だもの。なんでも仕込まれてるの」
「へえ」
ズルズルとスープをすする。
「うまいなあ。なんか、沸々と力がみなぎってきた気がする」
「大げさな。ただの野菜の炒めものとスープだろうに」
ちょっと顔を赤らめてアズリアが言う。
「いやいや、ホントだって。なんか薬でも入れたか？　ってくらい、こう、不自然に力が……」
？
ホントに、不自然なくらいやる気が出てくる。
急に筋トレしたくなってきた。
「……」
俺はスープと野菜炒めを一口ずつ食べ比べてみた。
「……スープ、もしかしてアズリアが作った？」
「うむ。よくわかったな」
「そりゃ、これだけ餌付けしてたら覚えるわよ」
「餌付けて」

俺はヒモか。

……。

いや、さして変わらないか。

「まあ、餌付けはともかく」

疑問なのはアズリアの料理だ。

理由のない高揚感や正体不明のやる気。おそらくステータス上昇効果のせいだろう。

単純な「料理」ではなく、『食料アイテム』と化している。

『食料アイテム』とはキャラクターのステータスを一時的に上昇させる効果を持ったアイテムのことだ。

一部のイベントキャラからのみ入手できるものもあるが、購入できるものでは『お手軽パイ』『こだわりタルト』『クイーンショートケーキ』などがあった。

この世界に来てから実際にいろいろな食べ物を口にしたけど、それらは普通の「料理」だった。『食料アイテム』を実際に食べるのは初めて。

やはり普通の料理とどこか違う。

「なんか特別な作り方した？」

一時的なものとはいえステータス上昇の効果は大きい。スキルを

使えない今、俺の戦闘能力はステータスのみに依存しているので、レシピがあるなら教えてもらいたい。

「していないぞ。厨房にあったものをいくつか煮込んで、普通に味付けしただけだ」

「材料とかは？」

根菜類なのはわかるが、その種類まではわからない。

俺が料理に疎いのもあるけど、この世界独自の野菜まで入り込んでいるせいでもある。

「それも、特別なものは使っていないな。――気に入ったのか？」

「まあ……こういうのが作れる人が、一家に一人は欲しいよな」

なにせ『食料アイテム』だ。

使用頻度と消費量が多い消耗品。

安定供給は、かなり強力なサポートだ。

「そうか。また今度作ろう」

「おう。――できればほかの料理も食べたい」

俺が言うと、カミラが首をかしげた。

「そんなにおいしいの？」

「おう。一口飲んでみ」

「どれどれ」

俺から木製のスプーンを受け取り、一口すすった。

「うーん……。たしかに美味しいわね」

単純に好奇心からだろう、カミラはあれこれとアズリアに質問しつつ、ついでにスープを飲み干してしまった。

「さて、ヒカルも食べ終わったようだし、今日も講義を始めるか」

アズリアはそう言って立ち上がった。

俺も立ち上がり、外出の準備をする。

「どこか行くの？」

カミラが不思議をそうに訊いてきた。

「外だ。部屋では隣に聞こえてしまうからな。念のためだ」

アズリアが答える。

「アズリアの講義は、いっつも散歩しながらなんだ」

俺はカミラに外套を渡した。

俺が着替えとして持ってきた物だ。

「最近の夜は肌寒いから、それ着ときな。イチイチ部屋に戻るのも面倒くさいだろ」

「ありがと」

カミラは受け取ってそれを着こんだ。

▼

「今日は何の講義をしようかな」

アズリアは顎に手を当てながら考える。

そんなアズリアに俺は言った。

「魔法関係は、もういいや。それより訊きたいことがあるんだけど」

一週間ほどの潜入調査で、俺はなんとなく、スキルの再習得は今すぐには出来ないんじゃないだろうかと思い始めていた。

まだまだ目を通していない書籍はあるのだから本来ならそれを調べるべきなんだけど、ただ、それらをいくら調べたところでＭＰ制御につながるヒントはないような気がしている。

諦めたのではない。

突然、閃いたのだ。

スキルの再習得は魔法の布袋がそうだったように、突然判明するのを待つしかないんじゃないかと。

もちろん根拠はない。

ただ時間が立つにつれてその思いは強くなっていって、俺の中で

は半ば確信となっていた。

「うん？　魔法以外で私がヒカルに話してやれることなど、あまりないぞ？」

「アズリア個人のこと。――アズリアってさ、冒険者になりたいのか？」

「――そうだな」

「そのために魔法学院に？」

「そう、言えなくもない」

なぜか話しづらそうにアズリアは答えた。

「カミラは？」

俺はカミラに話を振った。

「学院に入った理由？　――私は、単に魔術師の才能があって、母さんが進めてきたからよ」

「へえ。ずいぶん受け身な理由」

カミラなら自分がしたいことを進路にするぐらいはしそうだ。しっかりしてるから。

「全くの受け身って訳でも、ないかな。――学院出の魔術師はねえ、ほとんどが官僚になれるの」

「ふうん？」

以前アズリアから訊いた魔術士のエリート集団『魔術士団』のことだろうか。

才能豊かな魔術士が選ばれ所属するこの機関は、サニアス王の直轄機関だとか。王国での魔法関連全般を扱う実働機関で、『魔法学院』と並ぶほどの研究部門も抱えているらしい。

「魔術士団のこと？」

俺は訊いてみた。

「違う違う。普通にお役所勤めよ。ポートアークに戻れたらいいなって考えてる。――実家に特別な便宜を図れそうじゃない？」

「真っ黒か」

「場末の宿屋の娘ですもの。したたかって言って」

「不正役人め」

「まだ学生です」

なんて話しているとアズリアが不意に言った。

「――シルヴィア嬢は、どうなのだろう？」

「……なんで彼女の名前が出るの？」

「カミラの同室だろう。知らないのか？」

「いえ、知ってるけど」

「訊きたい。後学のために」

後学て。

「他言はしない」

「でもね……」

「俺はシルヴィアってやつすら知らないぜ」

「はあ」

カミラは息を吐いて、それから手を唇にあてた。

「……言ってもいいのかしら？」

「言え！　しゃべっちゃえ！」

「そう言われるとなんか嫌だけど……なんでも自立したいんだって」

「自立？」

アズリアは不思議そうな声を上げた。

「なぜまた。実家は貴族だろう」

「だからこそ、よ。――政略結婚やら何やらで、シルヴィアの意志とは関係なくごたごたしてるらしいわ。だから官僚になって自立して、家を出たいらしいの」

「……彼女らしいと言えば、彼女らしいな。彼女はもともと、独立独歩の気性だからな。おとなしく家の言うこと訊いているお嬢様ではなかったのだな」

「まあ、フィアンセが主な原因らしいけど……」

「それこそ彼女らしい」

ふふふ、とアズリアはほほ笑んだ。

「でもアズリア。学院を出て冒険者になる、っていうのも珍しい進路ね。なにか特別な理由があるの？」

カミラがアズリアに尋ねた。

当然の疑問だ。

この世界での魔術士の地位は高い。なぜなら遠距離の範囲魔法を習得する魔術士は、都市防衛の主力を担うからだ。

学院を出た優秀な魔術師ならばなおさらで、カミラの言うように官僚として政治分野へ進むことも望めるだけの大きな社会的地位も備えていた。

「……あいにく、特に理由があるわけではないのだ」
「え？」
「カミラやシルヴィア嬢の様に、なにか目標があって、あえて冒険者を目指しているわけではない。ただ――いろいろな土地を回ってみたいというのが理由といえば理由だな」
「そんな理由で？」
「申し訳ないが、そんな理由だ。無計画過ぎて呆れただろうか？」

顔を伏せたアズリアに、カミラが慌てたように言う。

「いえいえ。冒険者らしい立派な理由――とは言えないまでも……きっと、なにか考えてのことでしょう？　少なくとも無計画な冒険者というのは実際にいるんだし、動機はそれで十分なのかも」
「カミラ、なぜ俺を見る」
「なんでかしら。他意はないわ」
「ウソつけ！」

俺だってなあ、いろいろデカイことを計画しているんだぞ！
まあ。こんな体で実行に移すのは憚られるので大半は計画止まり。
俺の良心に感謝しろよ？

「ヒカルはなぜ冒険者になったんだ？」
「俺？」

そんなことを訊かれると思っていなかった。

実際に話を振ったのは俺なんだけど。

「うーん」

プレーヤーだからこの世界では冒険者を自称してるんだよ、なんて言えるはずもない。

なので適当にごまかす。

「成り行きかな。ホントは『開拓者』なんだ」

基本設定上、プレーヤーは『開拓者』として所属都市国家を開拓し、その都市を発展させる。

『開拓者』はクエストをこなすことで成功報酬とは別に開拓ポイントというものを得ることができた。この開拓ポイントによって都市国家が発展するわけだが、当然プレーヤーが多く所属する都市国家は発展度が高い。ほかの都市国家の開拓ポイントを奪取すべく、月に一度は血で血を拭う都市国家間戦争なるものが開かれたりしていた。

上は余談。

「『開拓者』？　辺境地域の？」

「ま、そうだな」

「それでヒカルは強いのか」

なるほど、とアズリアが頷いた。

「――ねえ」

不意にカミラが口を開いた。

「あの光、何かしら？」

# 25　魔法学院、散歩（後書き）

魔法学院編、長いです。
収拾つかなくなってきた……

# 26　魔法学院、騒動

カミラが見つけた光源の方へとやってきた。
学院の大きな講義棟の前を通り過ぎると、どうやら光は実習林から漏れ出しているのがわかった。

「教師たちが夜通しで、ポラリスの魔法検証をしているのではないか？」

対魔法属性検証。
様々な属性の魔術をぶつけてみて、ポラリスたちの弱点属性でも発見しようとしているのだろう。

『エリュシオン』ではさまざまな属性が存在するが、プレーヤーたちが扱えるスキルの属性は１２種だ。
炎、水、風、土、雷、光、闇、混沌、無、それと回復、補助、物理。
前半はスキル攻撃や魔法付加の属性であり、高レベルになると扱える属性が増える。

ドラゴン系統は複数の属性に『耐性』を持つ場合がほとんどで、バハムートならば『全属性耐性・炎属性無効』、ポラリスはさらに『炎属性吸収』を持っていた。

「えー、何日かかるんだよ。ご苦労様だな」

運ばれてから3日も経つのにまだやっているということは、はかどっていないのだろうか。魔法攻撃ぶつければいいだけなのに。

「あのテントはなんだろう？」

俺は実習林の一角に設営されたテントを指差した。

魔法攻撃による発光のほかにもテントでも明かりを灯していて、実習林はとても明るい。

「研究員がいるようだから、仮の研究室ではないかな」

幾人かの白衣をまとった人々が、地面に横たわったバハムートやポラリスとテントを往復していた。

「見た目で判断するんじゃなくて、結構詳しく調べてるんだな」

感心しながら俺は言う。

「それはそうよ。冒険者ギルドからの依頼ってことは、「黒翼竜」と「黄金翼竜」の討伐適正も調べるってことなんだから」

「討伐適正？」

「冒険者でも倒せるモンスターか、軍規模でなきゃ倒せないモンスターかを調べてるの。ワイバーンが災害指定種だから、あいつらもそうなるんじゃない？」

受注レベルを調べてるって感じなのだろうか。

プレーヤー時代はなにも感じなかったけど、隠れてこういう努力があったのかと思うとなぜか涙ぐましい。

「ワイバーンが災害指定ねえ」

「討伐は軍規模になるわね。冒険者は見たら逃げろってレベルよ」

まあ、そうかもしれない。

今の冒険者はプレーヤーではないのだ。
そしてゲーム時代によれば、ワイバーンのレベルは６０以上で、兵士のレベルは２０に満たない。
レベル差があり過ぎて個々のダメージは１桁か２桁に満たないくらいだろう。
全然相手にならないわけだけどそれでも倒したいなら、単純に考えて数千人規模になる。

「だから弱点属性を探そうってか」
「そう。有効な攻撃手段があるなら、対策も取れるでしょ？　――まあ、それでもあいつらには意味ないでしょうね。弱点云々いうより、個体として強すぎるもの」
「俺は狩ってやったけどな」
「ヒカルは異常なの」
「いやいや。昔は俺くらいの冒険者ならざらにいたんだぞ？」
「ウソよ」

ホントだって。
面倒くさいのを気にしないなら、ポラリスの単独討伐は１００レベルにとってそれほど難易度が高いわけではない。まあ、大前提としてスキルは使えるわけだけど。

「――ちょっと待て。なにか、様子がおかしいぞ……」

俺とカミラが話していると、アズリアが言った。
視線を倒れたポラリスに向け、何やら険しい表情をしている。

「なに？」

俺はアズリアの視線を追ってポラリスを見た。
ポラリスとバハムートの傍にいた研究員たちが慌てて走り回っているのがわかる。

「なんかあったのか」
「動いた――ように見えた」
「はあ？」

動いた――ってまさか、生きていると言うのだろうか。
俺はきっちり倒したぞ。
脳みそぶち抜いてやった。

「そんなわけないだろ。死んでたからここに運んだんだろ？　研究するために」
「それはそうなのだが……ほら」

『……ｇａａ……』

「あのように、呻いている」
「うっそ！？」
「ヒ、ヒカル！？」

カミラが驚愕の表情で俺を振り返った。

「知らん！　なっ、なんでっ！？」

一度倒したモンスターが復活するなんて、ありえない。

一部には回復スキルを使用するヤツもいたが、復活だけはしなかった。
クエストを受注しなおさない限り、クエストモンスターは再出現しないのだ。そして俺は、クエストを受注した覚えがない。
ならば、他の誰かがクエストを受注してしまったのか？
いや、それにしても復活はおかしい気がする。新たに受注されたのなら、新しい個体が現れるほうが自然だ。
とするなら、やはり復活。
ゲーム時代のモンスターにはありえない設定だ。
「やばい！　これはマジでやばいぞ！」
そんな考察を半ばで放棄し、俺は叫んだ。
なぜなら、場所がまずい。
ここはシルケスの近くの荒野ではなく魔法学院で、ポラリスがいるのはその敷地内の実習林だ。
さらに言うなら魔法学院は、郊外とはいえ王都にある。
最悪だ。
こんなとこでポラリスが暴れたら、どんだけの人が死ぬか。

「ヒカル!?　どこいくの!?」

カミラ達を置いて、俺は走りだした。

「あいつ倒してくる！　カミラはニケ呼んできて！」

「ニケ!?　え――ど、どこにいるの!?」

「魔法学院の正門前で騒いだら出てくる！　ポラリスと俺のこと伝えてくれ！　――最悪、スカート脱いでパンツ露出させてたら絶対来るから！」

「ッ!?　――え、えぇい！　儘(まま)よ！」

そう叫んで、カミラは走って行った。

▼

木々の間を縫いながら全力で走る。月明かりも届かない林のなかは視界が悪いけど、俺は一度も速度を落とすことなく走りきった。

林を抜けた先にある広場。

俺がそこに着いた時にはポラリスだけでなくバハムートも、その巨体を地面に横たえたまま動かしていた。

「マジかよ……」

思わず、呟く。

クエストモンスターの複数同時戦闘は、『連戦』ではなく『大討伐』と呼ばれる。

『連戦』以上に難易度の高い、まさしくパーティークエスト。

そこに、俺はスキルを封じられたまま飛び込もうとしている。

「……」

不意に走る勢いが鈍った。

「まじかよ……」

ポラリス戦を思い出した。

また、あんなことになるのだろうか。

今回はパーティーを組んでいないので、以前のキースの様な回復薬のサポートも望めない。レベル差があろうともポラリスの『大討伐』にスキル・アイテム封じの単機で挑むとなれば、本当に死にかねない。

ニケが来るまで待つべきだろうか？

けど、あの研究員たちを見捨てて？

「……」

いやしかし、研究員達ぐらいの被害で済むのならば御の字だろう。
なんせ災害指定らしいワイバーンの最上位種、ポラリスだ。
なぜかポラリス達はダウン中で、研究者たちの一方的な攻撃を受けているけど、いずれは起き上がる。そうなれば付近にいる研究者と戦闘状態になる。ダウン時間と研究者たちが戦闘している間の時間があれば、おそらくニケの方からカミラを見つけるはずだ。
研究員が倒されてから俺が戦い、ダメージ最小でポラリス達を引きつけることが出来れば、何とかニケと合流できるかもしれない。
そうなれば『大討伐』だって生き残れるし、被害だって最小限で済む。

悪くない。

というか――

ベストだ。

「ヒカルっ！」

そんなことを考えていると、背後からアズリアの声が響いた。
肩で息をして、林を抜けて来る。

「ア、アズリア！？　なんで来んの！？」
「いや、私は特に指示を受けなかったからな。戦闘支援をしようと思い」
「ば、ばっかかぁ！？　おまえ！！」
「む、私は真面目だぞ。一応遠距離の魔法も習得しているからな。ポラリスの攻撃範囲外から狙える」

「ばか！　攻撃対象外ではないんだぞ！」

パーティーを組んでしまえば、そのパーティー全員が攻撃対象だ。俺が前衛として万全の力を発揮できない今、アズリアを守って戦える自信はない。

「攻撃対象？　なにを言っている――ポラリスがここにいる時点で、王都の住人はすべて攻撃対象だろう」

「あ」

いやしかし、それは俺がポラリスを倒せなかったり逃がしたりした場合だ。

ニケが合流しさえすれば、火力面では圧倒出来るだろうから問題はない。

「……だからってアズリアが戦闘に参加することはない。俺たちが倒すから、ちょっと待ってろ」

「待つって……研究者たちが殺されているんだぞ？　助けないのか！？」

アズリアはそう言ったけど、ポラリスたちはダウン中なので研究者たちには死者はいなかった。今から逃げるように言えば、もしかしたら彼らは助かるかもしれない。

「……助けたくとも、助けられない」

しかしそれでは時間を稼げないのだ。

俺が単機で時間を稼ぐには、物量的に問題がある。

「なぜ。ヒカルはあいつらを倒したのだろう！」

いっぺんには戦ってねえし、回復薬も大量消費したからだよ！

「だから、倒せないとは言ってない」

「……」

「俺の仲間の、ニケが来るはずだ。それを待とう」

俺が言うと、アズリアが俯いた。

そのまま、ただ黙って地面を見つめている。

失望、させてしまっただろうか。

でも、それはしょうがないことだ。しょうがなくないけど、しょうがないんだ。

なぜなら生き死にが懸っているから。

守りにも入る。

「そうか……」

小さく呟いてアズリアが立ち上がった。

「アズリア？」

「……何とか、研究者達を助けてみる」

「……無理だと思うんだけど」

「私一人ではな。――ヒカル、手を貸してくれないか」

暗がりの中でハッキリとわかるほど――アズリアは目に涙をにじませ、恐怖に震えながら言った。

――いや。

だからな？

なんか、まだまだ成長過程にある熱い主人公が、本来は敵であったはずのキャラと一緒に困難に立ち向う時のようなセリフで言われてもな？

「無理だと思う。なので拒否する。てか、そんなことするな」

「ヒカル。頼む」

いやいやいやいや。

「死ぬかもしれないんだぞ!?」

「だからって！　逃げるのか!?」

「逃げねーよ。ちょっと待とうって言ってるだけじゃん！」

「それが、逃げだと言っているのだ！」

「なんでそこまで戦いたがる！」

俺とアズリアは真っ向からにらみ合う。

アズリアはポツリと言った。

「戦いたいわけではない」

「じゃ、なんで」
「私は、逃げたくないのだ……。死ぬほど怖いけど、でもそれと同じくらい逃げるのも怖い。――だから私は、私が死ぬまで向かっていくしかない」

不意に――

ガツン！

と衝撃が走った。

「……なんつった？」

聞きおぼえがある。

いや、俺が以前似たような台詞を口にした。

まだ、この世界に対する認識が甘かった頃。
ただ感情にまかせて言ったセリフ。

「逃げたくない。――私は、困難に向かっていくことを是とする」

今度は、俺が言われているのか。

俺よりずっと『エリュシオン』を生きて、この世界の厳しさを理解している、アズリアに。

「……なんで？」

尋ねる。

ハッキリと自覚できる羞恥と、なにかわからない衝動を必死にこらえながら。

「やれないことはない――なんでも出来ると、その証明をしたい」

「証明したい？　なぜ？」

「そうでなければ、悲しいからだ」

それは、どういう意味なのか。

祈る様な、もしかしたら自身に言い聞かせている風にも聞こえる言葉を紡いだアズリアの目は、どこまでも真摯だ。

証明？

悲しい？

その言葉はアズリアにとってどんな意味を持つのだろう。

自分自身に言い聞かせているように聞こえた理由は？

さまざまなことか瞬時に駆け巡ったが、結局俺が言ったのは、ただの感情を吐きだしただけだった。

「……久しぶりに、感動した。さっき夕食を食べた時以来だ」
「割と感動しやすいのだな」
「人を動かすのは、理論ではなく感情だと改めて実感した。――俺はアズリアに感動した。死なない範囲で、手を貸そう」
「本当か！？」
「うん。やってやれないことはないと証明してやる」

なにがベストか。

それはハッキリしている。

あんな保守的な考えではない。

研究員たちを助け、俺も生き残る。当然ポラリスは倒すし、ついでにアズリアの好感度も根こそぎ頂く。

これが、ベストだ。

間違いない。

「テンションあがってきたー！」

まだ見ぬアズリアイベントに燃える。

そうだ。

何をビビっていたんだ。

この世界の現実に、遠慮など必要ない。

なぜなら上司や同僚に気を使わなければならないショボイ現実ではなく、剣と魔法が存在する『エリュシオン』の華々しい現実だからだ。

むしろ生きるためには、遠慮しないことが必要だ。

だから俺は俺として俺らしくやればいいし、それを責められる謂れもない。

「行くぜー！！」

「うむ！　行くぞ、ヒカル！」

アズリアが雄々しく叫んだ。

## 26　魔法学院、騒動（後書き）

魔法学院編続編です。
まだまだ続きます。やっと折り返しくらいです。

8／25　疲れているんでしょうか。指摘いただいてサブタイ入力し忘れたのに気がつきました。脱字すぎる……

# 27　魔法学院、共闘

「いやまて」

走り出そうとしたアズリアを止めた。

「な、なぜだ。　やる気を出したのではなかったのか??」

「やる気は出たけど、ちょっと問題がある。アズリアも行くの?」

「当然だ」

「なら、その装備は拙い。――これに着替えな」

俺はごそごそとカバンを漁り、あるものをアズリアに手渡した。

ニケに渡す水着を探している最中に偶然見つけた物で、カミラにプレゼントしようと思って大事に持参していたコスチュームだ。

「なんだこれは?」

俺が渡した物の中から、アズリアはスカートを手にとって不思議そうに眺めた。

ひっくり返したり、裏地を見たりしている。

「これは、下着……か?」

やがてアズリアは小さな布キレを持ち上げて言った。

「ノー。スポーツ女子の鉄壁装備、アンダースコートです」

手渡したのはテニスウエアセットだ。白いスカートとアンダース

コートがまぶしい秘蔵のネタ装備である。

最近はスパッツ主流ですが。

そういう意味でもレア装備。

ただ、そうはいっても今アズリアが着ているモノよりずっと性能はいいはず。

回避率と命中率を大幅に上げる効果を持ったテニスウェアは、レベル差があり過ぎるためにポラリスの攻撃を喰らうことが出来ないアズリアにはちょうどいい。

「あんだーすこーと？」

「うん。――さあ！　着るんだ！」

こんな状況でなんだけど。

うん。

調子戻ってきた。

「ちょ、ちょっと待て。着替えろと言うのか？　今、ここで？」

アズリアは慌てて俺に訊く。

まあ、確かに屋外で着替えというのは抵抗があるだろう。

「大丈夫！　それ下着の上に穿くヤツだから！」

スカートだって、今身につけているヤツの上から着替えればいい。

まあ、シャツは羞恥に堪えてもらうしかないけど。

「そ、そんな……」

縋る様な眼で俺を見るアズリア。

「無理に着なくても良いけど、その場合は支援禁止」

一応無理強いはしない。

ただ、戦闘に参加するなら着替えてもらうことが最低条件だ。

「……いきなりこんな服を渡すということは――なにか、理由があるのだな？」

「おうよ」

俺の理由は置いておいて、アズリアが生き残るためだ。

「……。信じるぞ」

そう言って、アズリアはごそごそと着替え始めた。

「……ッ」

やばい。

アンダースコートがちゃんと仕事しなかった。

不意打ち喰らった。

▼

部下から報告を聞くまでもなく騒ぎを聞きつけたイクトールは、実習林へと急いでいた。
近づくにつれ、不可解さに困惑する。
人の叫び声と、モンスターの低い唸り声。
それは決してありえないことだ。
研究員はイクトール自身が魔術士団から引き抜いた優秀な者ぞろい。そうでなくとも魔法学院の研究員となるにはかなりの腕をもった魔術師でなければならない。
生徒の実習のために管理されている実習林に出没するモンスター相手に、後れを取るなどありえない。
――強力なモンスターの流入。
実習林に向かう途中でそういう報告を聞きはしたが、それは考えにくい。
この王都は4体の「王都守護聖獣」に守られている。
人を決して傷つけない彼らによって、人を害するほどのモンスターは王都近郊には近づけないはずだ。
そういう理由から、イクトールは不可解さをいぶかしみながらもそれほど深刻には考えていなかった。　彼が出向いたのは単に、何らかの事故がおきたであろう実習林の早期収拾のためだ。
――研究中の事故、にしてはモンスターの唸り声というのが引っ

かかるしの。

考えられる可能性として、事故とモンスターの襲撃が同時に起きたか。

そうあたりをつけ、急ぐ。

それ以上は深く考えなかった。

先入観を持てば、事態に即した対応を取れない。

――忙しい……

そんな愚痴を内心で呟きつつ、しかし現場についたイクトールは我が目を疑った。

先日冒険者ギルドから搬入された「黒翼竜」と「黄金翼竜」。

それらが、動いている。

イクトール自身も対属性魔法検証に参加していただけに、そのことがすぐには信じられない。

なぜなら翼竜たちは完全に死んでいたからだ。

さらに言うなら、翼竜たちのあまりの魔法耐性の高さについて先ほどまで意見書をまとめていた。

それは王に直接報じるためのもので、もし仮に黄金翼竜達の再襲撃が起きた場合に対する国防論を論じたものだ。

今までの検証結果を報告し、新たな国防策を論じた後、

「もしまた彼らが現れるならば、それは巨大な脅威となる。討伐したという冒険者たちはもちろん、国内魔術師を整理し、かように国防を固めることが急務である。またエルフたちに「黄金翼竜」「黒

翼竜」の詳細な情報を求めなければならない」とした。

国内屈指の魔術師であるイクトールでさえも黄金翼竜達には驚愕し、その死体にすら畏怖を感じた。

その翼竜達が、動いている。

――これは、一体……

予期できなかった出来事に思考が鈍りながらも、体は動いた。

実習林へ駆けながら、魔力を繰りつつ言葉を紡ぐ。

――『大暴風（テンペスト）』

それはイクトールが扱える魔法の中で最大級の威力と規模を誇る魔法だ。

ごく限られた魔術師しか扱うことのできないこの秘儀を、惜しげもなく行使する。

出し惜しみをしていて、勝てる相手ではないと感じた。

出し惜しみをせずとも、勝てる相手ではないことも承知だ。

それでもイクトールは挑む。

軍には、騒ぎを察知した部下がすぐに連絡するだろう。学生の避難も任せて良い。

ならばイクトールのするべきことは、翼竜達に挑んでその時間を稼ぐことだ。

また、王都には数万の住人がいる。

そのなかで、微かでも彼らに対抗しうるのはイクトールしかいないだろうということも、彼を難敵へと前進させた。

暴風の中を猛烈な勢いで突き進みつつ、さらに魔法を唱える。

――『雷帝（トール）』

横に落ちる稲妻。

それを杖に纏い、起き上がろうとする黄金翼竜に放とうとしたとき――

「この、馬鹿野郎！　いきなり範囲攻撃する奴があるか！」

場に似合わぬ可憐な声に罵倒され、その刹那の後、イクトールをすさまじい衝撃が襲った。

▼

「あほ！　巻き込まれるとこだったぞ！！」

バハムートとポラリスを相手取っているときに突然襲った暴風。
俺はとっさに回避し、攻撃支援をしていたアズリアを抱えてポラリス達から距離を取った。

俺がその場を離れると、竜巻のような暴風がポラリス達とまだ残っていた研究員達を直撃した。

この不自然に発生した暴風は魔術師系のスキルだと直感した俺はすぐに付近を見渡し、傲然と走り寄る髭の老魔術師を見つけ、張り倒した。

「攻撃支援なら、する前に声かけろ！　味方を巻き込んでどうする！？」

地面に仰向けに倒れた爺さんを怒鳴りつける。

「が、学生か？　なぜ学生がここにおる……早う逃げろ」

起き上がりつつそう言う爺さん。

「逃げるか！　爺さんこそ逃げろ。誰か知らんけど、一人で手に負える相手じゃないぜ」
「それでもやるしかあるまい。わしが逃げたら、学生や研究者たち

はどうなる」

爺さんは手にもった杖を構え、振るう。

帯電していた雷が放たれ、轟音を上げてポラリスに直撃した。

「……。もしかして爺さん、結構強いのか？」

属性『雷』。

一次職の『魔術師（メイジ）』も扱えるが、この威力と規模のスキルを本格的に扱えるのは二次職になってからだろう。

現在、『開拓ギルド』がなくなってしまったためにクラスチェンジのクエストが受注できない状況にある。

しかし先ほどの暴風や雷属性の攻撃から考えると、この爺さんは魔術師系統の2次職『攻性術師（ソーサラー）』か3次職『魔導師（ウィザード）』だ。

この世界に来てから、これほど強い人ははじめて見た。、

「学生だろう、なぜ知らぬ」

そう言った爺さんに、腰に抱いたアズリアが答えた。

「い、院長！？」

院長？

「君は……なんちゅう恰好をしとるのかね」

爺さんが呆れた風に声をかけたのは、俺が渡したテニスウェアを

着こなすアズリアだ。

「――学生かね？」

「２年の、アズリア＝リノスです」

「学生か……さっきも言ったが、はよう逃げろ」

そう言って爺さんは背を向けた。

『炎獄（インフェルノ）』

叫び、杖を掲げる。

「ば、馬鹿！　ポラリス相手に炎攻撃してどうすんの！？」

俺がすかさず言うのもむなしく、スキルは行使された。

炎がバハムートとポラリスを包む。

『ＧＹＹＡＡＡａａａａ……』

ポラリスは叫び、炎を纏いながら巨体を起こした。

ふらつき状態。

ダウンから回復してしまった。

「む？」

ダメージがないばかりか、ポラリスが起き上がったのを見て爺さんが低く唸った。

「ポラリスは『炎属性吸収』を持ってんだよ」
「『吸収』？　何だそれは。――黒翼竜が『無効』を持っておるのは知っとるが……」
「回復すんの。検証したんだろ！？」
『属性吸収』
受けた属性攻撃を無効化し、そのダメージ分を回復する。
厄介なパッシブスキルだ。
「回復――そうか。死んでおったから……」
回復も何もなかったと。
爺さんは顔を顰めた。
『ＧＹＡＡＡＡＡＡＡ！！』
「あー、もう！　使うなら炎属性以外にしてくれ。範囲攻撃も禁止！」
せっかく蓄積していたダメージが回復してしまった。
早くダウンさせないと、ふらつき状態からも回復して飛び立ってしまう。
俺はポラリスに向けて走り出した。
「おい！　向かってはならぬ！」

「アズリア、爺さんに説明しといて。あと、支援よろしく！」
「わかった！」
アズリアの返事を聞きながら、走る。
なによりもすべきことはポラリス達をダウンさせることだった。

▼

ポラリスとバハムートを空に逃がすわけにはいかなかった。
北の谷の荒野とは違い、この王都には「攻撃対象」があり過ぎる。
一度逃がしてしまえば、再び俺の元へと降りてくるかわからない。
そのため、危険を承知で決死強襲主義を貫く。

以前戦った時に、ダウンから回復後のふらつき状態でも、攻撃を蓄積させれば再度ダウンすることが分かっている。
一度たりとも逃がさない。

俺はポラリスとバハムートの間を縦横に駆けまわる。
攻撃を回避しつつ、反撃。
威力の低い攻撃はわざと喰らい、その間にも反撃。

血みどろになりながらも攻撃を繰り返すが、やはり二体相手では攻撃効率が悪すぎた。

一度もダウンさせられないままバハムートとポラリスが大音響で

叫び、翼を大きく広げた。

「だあ！　くっそ！」

俺は突進し、ポラリスの後ろ脚に組みついた。

しかし、どうしようもない。

横方向への力の発揮は絶大だが、縦方向へは俺は無力すぎた。

なぜなら垂直方向に働く力に対して、あまりにも軽い。ポラリスは見上げるほどの巨体で、俺はカミラに見下ろされるほどの小柄だ。

体重差はいかんともしがたい。

俺が脚に組みついたまま、ポラリスは飛び上がった。

隣にいるバハムートもそれに続く。

『雷帝（トール）』

『霧球（ミストボール）！』

後方からのアズリアたちの援護。

魔法はバハムートに直撃し、咆哮を上げてバハムートは墜落した。

「アズリア！　そのままバハムートを攻撃しといて！」

「ヒカルは！？」

俺は滞空しているポラリスの足にしがみついたままだ。

「知るか！！」

もしかして、このまま空中戦だろうか。

そんなんゲーム時代ですらしたことないんだけど。

「と、飛び降りろ！　今ならまだ間に合うぞ！」

俺が空でポラリスに振り落とされる場面でも想像したのだろう、アズリアが叫んだ。

たしかに、今はまだ高度が低い。これくらいなら飛び降りても問題はない。

しかしそれではポラリスが完全に飛び立ってしまう。

そうなった場合、攻撃対象は「王都」になるだろう。

「このやろ、墜ちろ！」

足を掴んだまま、片手で殴る。

『ＧＹＡＡａａａａ！！』

俺の攻撃に苦しむような咆哮を上げるが、ポラリスはそのまま高度を上げる。

このままでは、本格的にマズイ。

俺がそう思った時、

ぐしゃ

音を立てて、どこからか飛来した巨大な斧が、ポラリスの胴体に突き刺さった。

しかも俺の頭のすぐ上。

血の気が引いた。

「この斧は……ニケか！？」

俺が斧を確認すると同時に、はるか下方からニケの声がかかる。

「ヒカルゥ！！　そいつ、墜っこちるぞ！」

確かに、空中でバランスを崩したポラリスはそれを立て直そうともせず、俺は気味の悪い浮遊感を感じていた。

「斧ブーメランは、対象に当たると戻ってこないのが弱点だな！」

溌剌とした声を上げ、ニケはポラリスに突き刺さった斧と下敷きになった俺を回収する。

「助かった……」

「気にすんな。さっさと狩っちまおうぜ」

俺の言葉にニケは軽い返事を返した。

ニケの腰に抱かれたまま視線を向けると、２頭は地面に伏せている。

「ダウンだな。今のうちに２人でフルボッコにしよう」
「いや、とりあえず俺はあいつ等の両足切り落とすから、そのあいだ攻撃頼む」
「両足！？」
「おう。そうすりゃ常時ダウン状態。――まあ、ブレスは吐いてくるんだけどな。危険地域じゃワイバーン相手によくやったもんだ」

へえ。
ゲーム時代はなかったけど、そういう戦い方も出来るのか。

俺を地面におろし、二頭に走り寄るニケ。
俺もそれに続いた。

「自作スキル・ギロチンスラッシュ！」

叫び、ニケは地面に叩きつけるように両手斧を振りおろした。
その攻撃を喰らったバハムートの脚は、肉と骨を同時に断つ耳障りな音を上げて両断された。

「ははは。今宵の水着は、血を欲しておるわー！」

狂声を上げて、ニケは２頭の間を走り回った。

あっという間に、４本の足を切り落とす。

翼竜達は翼を兼ねた前足のみの姿だ。

なんか無残。

「よし。これでフルボッコだ」

ニケは全身に返り血を浴びながらも、凄惨な笑顔を浮かべながら言った。

「アズリア、爺さん！　全力で行くぞ！」

俺は叫んで、全力でバハムートを殴る。

それからほどなく、俺たちは2頭を討伐することに成功した。

# 27　魔法学院、共闘（後書き）

予定より遅れました。

## 28　魔法学院、一息

「ヒカル！」

歓声を上げて抱きついてきたアズリア。
俺はそれを受け止めた。

「すごいな！」
「おう……」

無邪気に抱きつくアズリアに驚く。
結構長い期間一緒にいたカミラでさえ、こういう振る舞いはしなかったのに。

「……。いいけど」
「？　何がだ？」
「なんでもない」

まあ、女性が俺に対して無防備なのは俺が女性キャラに性転換した数少ない利点だ。
アズリアには後で注意するとして今は役得と受け取っておこう。

「あんたら――いったい何者だ……？」

胴体と首が切り離されたポラリスとバハムートを眺めていると、不意に爺さんが声をかけてきた。

「オレたちか？　しがない……ただの、パンツァーさ」
「もったいつけて何言ってんだ。冒険者でいいだろ」

俺はニケに言った。

「冒険者だと……？」

目を見開いて驚く爺さん。

なんだよ。

「まさか、あんたらが翼竜４体を討伐したという冒険者か？」

「うん？　それはオレじゃないな。ヒカルか？」

「うん。シルケスでこいつ狩ったんだけど……そういえばなんで復活したんだ？」

一体どういうことだろう。

「復活？」

ニケは首をかしげて訊いてきた。

そこらへんの事情はニケは知らなかったんだった。

「こいつ、一回倒したんだよ。ここには死体の状態で運ばれたはずなんなけど」

「ん？　新しいヤツじゃないのか？　復活？」

「だと思う」

俺が言うと、ニケはポラリスを仰いだ。

「……そういやバハムートはともかく、ポラリスはあっけなく倒せたな」

ダウン回数は一回だ。
ニケが両足を切り落としたおかげというのもあるんだろうけれど、それを含めてもさほど苦戦することなく討伐出来た。

「中途半端に復活っていや、蘇生か？」

『蘇生』。
『聖職者』や『大司祭』が扱うスキルだ。他にも『完全蘇生』や『全体蘇生』などがある。
蘇生系スキルは回復スキルの最高峰だけど、再使用時間が滅茶苦茶長くて使い方が難しい。その中でも再使用時間が比較的短時間である蘇生は常用されているスキルだった。

その他の蘇生手段としてはアイテム『不死鳥の羽』があるけど、これは初回プレイ時に配布される限定アイテムだ。対象を全快まで回復させるアイテムなので考えなくていいだろう。

「けど、モンスター相手に効くのか？」

ひとり言のようにニケに尋ねた。

「どうだろな。スキルの対象選択の問題で、ゲーム時代には使えなかったが……」

可能性はある、とニケは考えているようだ。
持ち前の感性と勘でこの世界を生き抜いたニケだ。俺なんかよりずっと深いところでこの世界の性質を本能で感じ取っているはず。
となれば、検証はしていないけど可能性は大いにある。

「蘇生（リバイブ）か」

蘇生（リバイブ）は高レベルの『聖職者（クレリック）』が習得する専用スキルだ。

開拓ギルドのない今、クラスチェンジは難しいはずなんだけど。

「いや、まてよ……」

俺たちを凝視する爺さんに目を向けた。

「爺さん。あんた、『攻性術師（ソーサラー）』か『魔導師（ウィザード）』だよな？」

「……なにを言っておるかはわからぬが、違うと思うぞ。ずっと魔術師として研鑽を積んできた」

「……」

クラスチェンジのためには、クエストを必要としないのだろうか？

しかし、それではおかしいところもある。

二次職へのクラスチェンジクエストは、３０レベルに達し、それまで達成したクエスト数が一定以上になると受注出来るようになる。

レベルを上げていれば自動的にクラスチェンジするのならば、二次職の冒険者というのは存在するはずだ。

けれど情報収集のために冒険者ギルドに入り浸っていた俺は、そんな人物を見たことがない。

おそらく３０レベルに達しクラスチェンジの条件も満たしているであろうキースにしても使うのは『剣士（ソードマン）』のスキルだし、キース以上の使い手であるダグでさえ扱えるのは『弓士（アーチャー）』のスキルのみだった。

「……ま、いいや。爺さんに匹敵する魔術士って他にもいるのか？」

クラスチェンジに対する考察を放棄し、俺は尋ねた。

今問題なのは、蘇生（リバイブ）を扱える魔術士がいるかどうかだ。

「多くはないが、おる。王国の顧問魔術師クラスならば、わしと同等かそれ以上だろう」

「蘇生（リバイブ）を扱えるやつは？」

「……」

俺が訊くと爺さんは盛大に眉を顰め、手で顔を覆った。

「おるな。それも二人しかいない」

「へえ。誰と誰」

「一人は、第二王女殿下。――もう一人は、魔術士団顧問魔術師フランキリル＝クロウン」

となれば、ポラリスに蘇生をかけたヤツは大体分かる。

順当に疑えばそのフランキリルとかいうヤツだろう。

「王女がこんなことするはずない」

なぜかニケが断言した。

「なんでだ」

「勘だ。きっとお淑やかで、いかにもって感じの女の子のはずだ」

「理由はともかく、疑う順番でいえばフラなんとかウンってやつが先だろうな」

俺が言うと、ニケは実習林へと目を向けた。

俺も頷いて続く。

「どうした？」

アズリアが不安げな声を上げた。

「蘇生（リバイブ）は近距離でしか使えない。――多分、まだ近くにいるな」

ポラリスの復活から３０分ほどだ。

どのような目的があれ、復活させたのならばそれだけってことはないだろう。

どこかで事態の推移を見守っていたはず。

俺たちがポラリスを仕留めてから場を離れたとしても遠くには行っていないだろう。

「山狩りでもすっか」

ニケは気楽に言った。

「……待て」

歩き出そうとしたニケを、爺さんが止める。

「あやつの身元はハッキリしておる。急がずともすぐに捕まるゆえ、逃げたのならば放っておけばよい――それとも、急いであやつを捕えたい理由でもあるのか」

「……。ないな」

言われてみれば、そうだ。そこまで世話を焼く必要もないか。

「それよりも、あんたらのことだ。訊きたいことが山ほどある」
「……なんだよ」
まさか学院生でないことがバレ……？
というか、ポラリスと大乱闘したうえにハレンチ水着姿のニケまで来てしまったのだ。今更ではある。
「色々、だ。院長室まで同行願えぬか」
爺さんがそう言うと、ニケはため息を吐いた。
「なんだなんだ。取り調べでもしようってか？」
「そういうことではない」
「どうだか。――清純な女学生２０人のぱんちらで、協力してやってもいい」
「……。ちと高い。教頭のマチルダならすぐにでも用意できる。それで手を打たんか」
「ほう。――ちなみにそのマチルダとやら、女学生２０人に値するぱっつんぱっつんの姉ちゃんのようだが、相違ないな？」
「５０過ぎのご婦人だよ」
「決裂だ！」
ニケは叫んだ。
「ニケ、おまえどんどん発言が変態になっていってるぞ」
俺はニケを嗜めた。
「え？　うそ？」

「ホント。なんか紳士っぽくない」

パンツァーとは卓越した技術でもってキャラクターのパンチラをスクショし、それを仲間内で観賞したり称賛し合ったりする、変態的だが犯罪的ではない者のことだ。

無差別大量に狙うこともあったが、そういうのは月例都市国家間戦争など対象が無数にいる場合のみ。

積極的に狙いはするが、対象にパンチラを強要するなど紳士の嗜みとしてありえない。

「えぇー、まじかよ。――そっか、改めないとな……」

ニケはしょんぼりと肩を落として言った。

「じゃ、5人でいいや」

「人数の問題じゃねぇよ」

「なら、どうするの。マチルダとかいうオバサンので我慢しろってこと？　美人でも、オレ、年増はちょっと……」

「それは俺だってチェンジだけど、そういうことでもねんだよ！　自重しろってこと！」

「自重？　おいおい……ぱんつへのあくなき情熱と探究心。それがパンツァーの資格だったはずだ。自重なんて言葉はパンツァーの生き様に反する」

「まあ。そうだな」

たしかにゲーム時代ならそれで良かったんだけどさ。

でもそんなお気楽な世界じゃないだろ？

いまその生き様は壮絶すぎる。

「言い方が悪かった。強要するのはどうかと思うんだけど」

「あ！　そっか……。そうだな」

俺が言うとニケは頷いた。

「たしかに、それは良くなかった」

「だろ？」

「ああ、オレが良くない。悪かった」

そう言って、ニケは爺のほうを向いた。

「女学生１００人のぱんちらは取り消しだ。――ただ、オレに学校への出入りを許可してくれればそれでいい」

「ひゃく……。――いいだろう」

ニケの言葉に呆れながらも爺は頷いた。

ニケはよっしゃ、と小さく歓声を上げ、爺さんと握手したりしている。

「自分で勝手に見るってか……。まあ、それならいいかな？」

俺は苦笑い。

ニケらしいっちゃ、ニケらしい要求だ。

自分の非を認めて、すぐに訂正するとこなんかも含めて。

「ヒカル。あなたたちは……その、なんというか――変態的な、嗜好の持ち主なのか？」

俺の腕の中で、アズリアが視線を逸らしながら尋ねてきた。

俺が目を向けても、合わせようとしない。

すっかり忘れてた。

▼

「んじゃ、校長室だかに行くとするか」

ニケはそう言って、がさがさと藪に突っ込んで行った。

「俺も場所はわからないけど、そっちではないと思う」

「学院の中だの」

爺さんと二人で呆れていると、藪の中からニケが出てきた。

「違うって。忘れ物取りに行ってたんだ。戦っている最中、そこに隠してたんだよ」

見ると、大きな布袋を抱えている。

「なにそれ？」

「これか？　ふっふ、学校の前でキャプチ……もとい保護したぱんつの妖精か、あるいはぱんつの女神だ」

「？」

「見たい？　見せてやるか」

ニケは鼻歌を歌いながら布袋を縛っていたロープをほどく。

ごろりと出てきたのは、ぐったりしたカミラだ。

「ぶっ！？」

こっちも忘れてた！

ニケ呼んでくるよう頼んでたんだった！

「なぜか、校門の前でオレを呼んでいてよ。可愛らしいけど怪しかったから遠くで見てたら、なんとなんとスカートをたくしあげるじゃねえか。これはいよいよ、オレのぱんつへの愛が女神に伝わったのかと思って急いでキャプチャ――じゃなくて保護したんだよ」

「うるせえよ！　カミラ！　大丈夫か！？」

ぐったりしたカミラを抱き上げ、がくがくとゆする。

「――ヒカル？」

「カミラ！　大丈夫か！？」

「私は――もう駄目……。まさか、あんなことをしてしまうなんて……死にたい……」

まさか――ニケに人前でパンモロを……？

「ニケ！　あんだけパンモロだけはやめてくれって言っただろう！？」

「し、してねえよ！　オレは女神の貴重なパンチラを保護すべく、速攻でキャプチャーしただけだって！」

「じゃ、じゃあなんで！？」

腕の中のカミラを振り返った。

「見た見られたは、関係ないのよ……。問題は、それを私がどう思うかってこと。そして今回は、自分から……見せ、て――しまったわ」
「そんな……」
こちこちの貞操観念を持つカミラが？
自分から？
……。
「それも、アリだな」
「顔を赤らめた！？」
ギャップ萌えというやつだろうか。
想像したら胸が熱くなって来た。
「とりあえず！　私が言いたいのは！」
耳元でカミラが叫んだ。
「私があんな恥しい思いをしたのはヒカルのせいなのよ！　あんな事やらせといて、ふっざけんな！」
「ごめん」
たしかに、スカート脱げばニケが出てくると言ったけれども。
しかし緊急事態だったのだ。
しょうがなくない？
「でもニケはちゃんと出てきたんだし、いいじゃん」
「よくねえ！　なんで事前に合図決めとかないのよ！？　それを教

えてくれたら済んだ話じゃないの！　なんでパンツなの！？　馬鹿なの！？」

「いやいや、ありがとうって。カミラのおかげで俺は助かったし、他のいろいろも助かったし、なにより王都も助かったんだぜ？」

「私は救われないのよ！　なんで私だけが！！」

ギャーギャーと泣き出すカミラ。

あーあ。

癇癪だ。

とりあえず俺はカミラを抱き上げた。

「ということでニケ。カミラは俺の知り合いだから、返してもらうぜ」

「むう」

ニケはちょっと口をとがらせた。

「まあ。事情は大体想像できたし、しょうがねえな。――あーぁ……」

よほど気落ちしたのか、ニケはボンヤリとため息をついた。

## 28　魔法学院、一息（後書き）

11／11　誤字訂正

# 29　魔法学院、転機

『独立寮』

「ヒカル、起きないか」
「う～ん……」
「ニケも、起きろ」
「あぁ～……」

アズリアの声に目を開ける。
まぶしい。

「朝か……」
「うむ。起きろヒカル」

アズリアはそう言って、俺のタオルをはぎ取った。
しょうがなく起きる。
隣のベッドであられもない姿で寝ているニケに驚き（一応美女）、それからアズリアに顔を向けた。

相変わらずアズリアは早起きだ。
学生たちの一般寮から、わざわざ俺たちを起こしに独立寮まで来るとは。

あの後、爺さんは教員達を呼び出して事後処理と学院内の警戒などの様々な指示を出した。
その一つとして、俺たちは空き家だった独立寮に泊まるよう言わ

れた。　独立寮は一般寮とは違い、学院に多額の寄付をしている貴族なんかが一人で住む場所らしい。その空き家をあてがわれるというのは破格の待遇だろうけど、おそらく部外者である俺たちを監視するためであり、俺たちが逃げ出さないための措置でもあったのだろう。

　すぐにでも院長室に向かいたかったのだが、学院への出入りのためならばとニケは了承し、俺も公然と泊まれるならそれに越したことはなかったので、アズリアの部屋から荷物を持って引っ越してきた。

　俺たちが寝起きする独立寮は教員棟の横にあり、学生の一般寮からは遠い。

「おはようさん。アズリア」
「うむ、おはようヒカル。――ニケもおはよう」

　アズリアが声をかけると、ニケはもぞもぞと体を起こした。

「ねみー……」

　ベッドの上で胡坐をかいてニケはそう言い、ぐーっと体を伸ばす。
　それから俺へと視線を向けた。

「……天使っ!?」
「ちげぇ」
「――あぁ、なんだヒカルか。下着姿の美少女だったから、つい天使かと思ったぜ」

　俺もさっき寝ているお前を見て、似たようなことを思ってしまった……。

宿屋では別室だったし。
寝ぼけていたとしか思えない。

「まあ。この年になっちゃ、中高生くらいの可愛い女の子と出会う機会なんてねーし。いきなり下着姿を見せつけられちゃ、そう思ってもしょうがないよな」
「見せつけてねぇ。ってか、そういう発言は止めようぜ」

ちなみにニケは現実では大学４年生だそうだ。
体育の先生を目指して、そういう大学に在籍しているらしい。
コイツが中学なり高校なりの体育教師になるなんて、猫に鰹節の見張りを頼むようなものだと思うんだけど。
……。
まあでも。根はしっかりしているので、ただの杞憂かもしれない。
案外、生徒に人気の教師になりそうな気もする。

「ヒカル、ニケ。顔洗ってきたらどうだ」

テキパキとシーツを畳みながら、アズリアが言った。

「そうすっか」
「おう」

俺とニケは頷きあい、部屋から出た。

途中、あんな可愛い子に起こされるなんてすごい体験したな、とニケが話しかけてきた。
俺も大いに感じていたことだったので洗面所の近くで語り合い、

帰って来るのが遅いことを不審に思ったアズリアが迎えに来て、怒られた。

▼

「男子ー！　おめえらビビってんなよ！　死ぬ気で前出ろ！」

実習林にニケの声が響く。

ニケは6人編成のパーティーを組んでダイアホースの群れ（3体）と戦闘していた。

学生相手に、冒険者の戦い方を講義中。

騒動の翌日、ニケと2人で院長室を訪ねると爺さんが謝ってきた。

なんでも騒動の原因であろうフランキリルの追跡隊が組織され、爺さんも召喚されたらしい。そのために俺たちとの談話が中止になってしまったからだ。

爺さんは自分の都合で俺たちを振り回したことを詫び、それから俺たちが騒動を収拾したことに対して礼を述べた。

あのままでは王都壊滅まで爺さんは考えていたとか。

前日との態度とは打って変わって深く感謝してきた爺さんだったけど、俺たちは笑って受け取るに留めた。多すぎる礼金や物品なんかは受け取れない。

ただ爺さんとしてはそれで納得できるものではなかったようで、しばらく学院に滞在して楽しんでくれとのこと（ニケ狂喜）。

はしゃぐニケと共に、教員宿舎を拠点としてさらに数日を学院で過ごすことにした。

ニケが教師まがいのことをしているのは、爺さんから自由にしていいと言われてから数日間、実習生相手にぱんつハントをしていてたまたま学生の危機を救ったのが原因だ。

院長に招待された冒険者、ということで俺たちの存在はかなり知れ渡っていたらしい。

見た目に反して精神が幼い学生たちは俺たちに強い関心を持っており、それを機にニケとの交流が始まった。

公然と実習を見学し、気になったところを注意しているうちに自然とニケが教師役になってしまった。本来の教師も、ニケが実際に戦闘して見せるとその腕前に心酔しもっぱら聞き役に回っている。

「やはり、ニケはすごいな。集団戦でも視野に余裕がある」

ニケたちから離れて戦闘を見守っていると、隣にアズリアがやってきて言った。

まあ、当然だろう。

ニケクラスのプレーヤーなら、最大１８人パーティーで挑む難関クエストだって経験している。さらにいうならその指揮経験もあるニケにとって、学生を指導しながら低レベルモンスターと戦うなんて造作もないはずだ。

「言うことも的を射ている。なにより教えるのが上手い」

「確かにそれは意外だったな」

なんだかんだ言いつつも、良い教師役だ。
本当に向いているのかもしれない。

「前出ろって言ってんだろーが！　女子も、男子に魔法当てること怖がんな。　自信もってガンガン行け！」

ニケの叱咤。
そのおかげというわけではないだろうけど、女子が次々に魔法を放ちダイアホースに命中させる。

ニケが直接手を出すまでもなく、男子学生が何とか前線を支えている間にモンスターたちを殲滅させることが出来た。

「や、やった……」

そう言った男子は、慣れない接近戦に苦戦しボロボロ。
低レベル相手にさすが魔術師。紙装甲だ。

この世界でモンスターとの戦いは、ゲーム時代とはいささか異なる。
戦闘職なら集団で密集突撃陣形か包囲殲滅陣形。魔法職なら遠距離狙撃陣形が一般的で、異職種が一緒くたになって戦闘を行うというのは一部の冒険者以外では稀のようだった。

これは一人ひとりの技量が足りないのが原因だろう。

接近職といえども集団でないとモンスターの攻撃に耐えることはできず、魔法職も決め手となり得る高威力のスキルを習得している者がいない。

プレーヤーが行うような役割分担型の戦い方では、それぞれが十分に役割をこなせないのだ。

ただ、ニケの様に高レベルの者がいるとパーティーにしっかりとした芯が入るらしく、学生でもそれなりに戦える。

「すごい」

驚いた様子でアズリアが言った。

「とても、実戦的だ。ダイアホースの群れの殲滅なんて、２年の実習の水準を超えている。それもあんな少人数で」

見学していてわかったのだけど、２年生のレベルは多くが２０に届かない。ごくごく少数の学生は魔法付与付きの装備品を使っているけど、平均すれば１０後半くらいだろう。

ダイアホースは多分２０レベルくらいなので普通の学生にはちょっと難敵。

今回はパーティーを組んでいたので、多少の無茶は効いたわけだ。

「なんでもやり方次第ってことなんだろうな」

「むう。……いっそ冒険者に直接師事した方が、冒険者になるには近道なのかもしれない。学歴なんて関係ないわけだし」

「いやいや、学歴はあって困るもんじゃないぞ？　むしろ、なくて困ることのが多いもの」

俺も、大学を中退してしまったために就職に苦労した口だ。
結局、縁も所縁もない地方の中小企業に勤先を見つけることが出来たけど、最終学歴が高卒なのは何かとキツイ。
３年目なので４大卒の新人が後輩としてちらほら入ってきたり。
初任給聞いてビックリしたもん。

「しかし順当に行って後４年だ。――長すぎる」

ポツリと呟いたアズリアの言葉に、俺は首をかしげた。

アズリアってカミラの１個下で１７だよな。
最高学府を卒業して２１なら全然余裕だと思うんだけど。
なにか事情があるのだろうか。

「ヒカル、弟子を取る気はないか？」
「俺、魔術士じゃないんだけど」
「私は別に、魔術師として大成したいわけではない。冒険者になりたいのだ」
「……」

まあ。弟子はともかく、パーティーを組むならいいかもしれない。
今の俺たちに魔法職の仲間はいないし、たとえ低レベルでもスキルによる援護は強力だろう。
ただ、俺達の目的地がな……。
最終的には危険地域入りをしたいので、アズリアを連れて行くっていうのは気が進まない。

と、俺がそんなことを考えていると、前方がどよめいた。
視線を向けるとモンスターの姿。

どうやら新手とエンカウントしたようだ。

「よーし！　順が回ってきたヤツは前にでな。さっき決めた順番だぞ。割り込みするなよ」

ニケが大声で言った。

「む、次はカミラの順番だ」

アズリアが言うのでカミラを探すと、カミラはニケの方へと小走りで向かっていた。

合流し、モンスターとの戦闘を開始――――

「『炎波動（ファイアウェイブ）』！！」

戦闘開始直後に行使したカミラのスキル『炎波動（ファイアウェイブ）』は複数対象の炎属性範囲攻撃魔法。

「『炎槍（サリッサ）』！」

さらに魔法を行使。

カミラの周りで炎が燃え上がり、長大な槍のシルエットへと形を変えた。

杖を振るうと、炎槍はモンスターたちへと一直線に飛んでいく。

数体を串刺しにして動きが止まり、そして火柱を上げて燃え上がった。

火勢おさまるとモンスター達は倒れていた。

瞬殺。

先ほどの戦闘はなんだったんだろう。

「おお！　さすが女神！」

カミラの魔法をみて立ち尽くす学生と、予想外の強さに喜ぶニケ。

「うーん。カミラは見たカンジ、２年生レベルは超えているような」

「……間違いなく超えている。あの威力、６年でも出せるかどうか」

アズリアは呆然と呟いた。

▼

「帰るのか？　明日？」

「うん。そう」

学生達をいくつかのグループに分け、アズリアたちと一緒にモンスターを求めて実習林を歩いているとき、俺はアズリアに魔法学院を去ることを告げた。

スキルの再習得という目的を果たせなかったのに加えて最近はブラブラとしすぎた。

そろそろ街に戻って、危険地域なりなんなりの情報収集に戻るべきだろう。
置いてきたダグも気がかりだし。
戻ってみたら王都を去った後だった、ということも考えられる。
それはそれでいいんだけど、なんか後味悪い。そこらへんも確認しないと。

「――急だな」
「でもないだろ。2週間はいたんだし。いろいろやることもあるから、そろそろ帰る頃合いだ」
「……」
「目的も、果たせたしな」

唐突にニケがやってきて言った。

「驚いた。なんでお前がここにいるんだよ。班、違うだろ」
「さっきたまたま合流した。一緒にやろうぜー」
「……いいけど。――あと、目的は果たせてないだろ」

スキルの再習得は不発に終わった。
収穫なし。トラブルに巻き込まれただけ、マイナスだろう。

「それとは別口よ。――魔法学園に、旋風を巻き起こしてやったぜ」
「はあ？」
「うん？」

俺とアズリアがそろって首をかしげる。
ニケが俺に顔を寄せて言った。

「ここ数日、女子の露出が上がったと思わねーか」

「……」

俺は無言。

ぱんつハントをせずに、のこのこ実習についてきているのが何よりの答えだ。

うしろから眺めているだけで、結構見かける。

この喜ぶべき事態は、最近のニケの啓蒙活動による。

いわく、女子は薄着装備の方が強いとかなんとか。

眉つばモノの話だけど、なんでか学生に広がった。たぶん水着のニケや軽装の俺がそれなりの実力を持っているのが原因だ。あと最近急成長したカミラが、以前俺が渡したネタ装備を実習中に着ているのもその噂に拍車をかけたっぽい。一般の学生からみれば、あの制服装備のスカートの短さとカミラの強さに何らかの相関があると考えてしまうらしい。

実際は全く関係ないわけだけど、そんなこんなで最近女子学生の露出が増えた。

少なくとも、実習中に噂の効果にあやかろうとしている女子学生はかなり存在する。

「あの噂は、ニケが流したのか」

アズリアが呆れたように言い、ニケが笑った。

「偶然だけどな。なんで強いのか聞かれたから、水着のおかげって答えたんだ。そしたらそんな噂になってた。――ほんとだぜ」

「……効果はあるのか？」

「モノによるな。オレの水着やヒカルの制服、あと女神が着てる制服とアズリアのテニスウエアは効果がある」

「そうなのか」

ニケの言葉に、アズリアが頷いた。
そしてなぜか、スカートの端を握りしめる。

「……」
「なんだヒカル」
「いや。アズリアもあの噂を本気にしてんのかなって」
「す、するわけがないだろう！　肌を露出させて強くなれるなんて、どういう理屈だ。ありえない。――いや、実際には例外があるにしても、私は信じてないぞ」
「とか言いつつ、アンスコ着用してたり？」

と俺がからかうと、

「え……。鉄壁装備って、言ったではないか――」

とアズリアはショックを受けた顔をした。

「え!?　うっそ!!　着てんのか、今!?」
「き、着てない！」
「ちょ、誰にも言わないから、正直に言ってみ」
「着てない！　ほ、ほんとだぞ」

アズリアが俺から距離を取った。

「ヒカルゥ!!　アンスコって、どういうことだ!?」

反射的にアズリアを追おうとした俺に、ニケが組みついた。

「て、テニスウェアは、アンダースコートセット装備だ」
「ま、マジかよ！　スパッツやショートパンツじゃなくて、あえてアンスコ！？」

ぶわ、とニケを中心に風が吹いた。
アズリアは素早くスカートを押さえる。

――え。何それ？

スキル？

「ニケ！　落ち着け！　俺が言うのもなんだけど！」

ニケの興奮を見て冷静になった。
あぶねー。
俺まで変態になるとこだった。

「落ち着いてられるか！！　アンスコなんてなァ、今やブルマと同じくらい絶滅危惧種だぞ！！　実際に穿いてる女子がいるんだ、全身全霊で保護せにゃならん！」
「お前の言う『保護』が怖えよ！」

絶対脱がすつもりだろ！？

おめえみたいのがいるから、滅んだんだよ！！

なんて。

そんなことを言っていると、他の学生と一緒に先行していたカミラから声がかかった。

「ちょっと、ヒカル！」

「え、なに！？」

「――あそこ、なにかいる」

そういってカミラは手を伸ばし、ある方向を指差した。

カミラが指さした方を見ると、地面になにかある。

「うん？　……生き物っぽいけど、モンスターじゃないな」

俺はニケをどついた。

「ああ？　……人間だ。それも死体」

ニケが一瞥して答えた。

「死体！？」

カミラが驚く。

「ど、どうしよう。が、学生かしら？」

「女子学生でないのはハッキリしてっけど……確かめるか」

言ってニケはずんずんと近づいていく。

俺とカミラ、それに学生らは気おくれしてその場に留まり、アズリアだけがニケを追って走って行った。

アズリアは『なにか』を覗き込み、言った。

「カミラ、どうやら学生ではないようだぞ。人ではあるが」

「えぇー。なんで学生じゃない人が死んでるのよ。研究員かしら」

「いや……。うーん」

判断がつかないようにアズリアは唸った。

見た目だけではわからないのだろう。

しかもどうやら、うつぶせで倒れているようだ。

「うりゃッ」

掛け声とともに、ニケは斧で死体をつついた。

勢いよくひっくり返る。

その無残な扱いに、俺の周囲の女子学生たちが息をのんだ。

しかしアズリアはそんなのどこ吹く風で仰向け状態になった死体をじっと観察する。

やがて弱々しく言った。

「カミラ、研究員でもない――魔術士団の関係者だ」

「――はあ!?」

「しかも……」

アズリアは自分の杖で死体が纏っていたローブをはだけた。

銀色のペンダントをしている。

「……」

「しかも、なに?」

「銀色のペンダントに、国章が彫られている。――魔術士団の顧問魔術師だ」

顧問魔術師て。

おいおい。

それ、こないだ爺さんから聞いたぜ。
もしかして本人だろうか。

「なに!?　じゃ、こいつ悪者かよ!」
「ちょ、ニケ!　勢いよく死体を漁るな!」
「ワルの手掛かりがあるかもだぜ」
「いや、そんなことより。躊躇なく死体に触れるお前が怖い」

モンスター相手ならばともかく。
俺はモンスターの死体でも触りたくないけど。

なんて思っている内にもニケはごそごそと漁り続ける。

「……めぼしいもんはなんもねーな。杖くらいか」

そう言ってニケは死体の手から杖をはぎ取った。

「ワルっぽい杖だなー。趣味悪っ」
「そうか?　装飾などをみれば、さすがに見事なものだと思うが」

アズリアがニケの手にある杖を見ながら言った。

「うん?　興味あんのか――そういや、アズリアもポラリス戦で戦ってたよな。コイツが原因だし、成功報酬代わりにこれもらってもいいんじゃねぇ?」

「いや。さすがに良くはないと思うのだが」

ひょいとニケはアズリアに杖を向け、向けられたものだからアズリアは手に取った。

「教員か、院長に直接報告すべきだろう。この杖だって……ぁ？」

「あ？」

「――はッ、ああ、あ……あ――あぁぁっあぁぁああ！！」

突然の、アズリアの絶叫

それと同時、ぶわ、と黒い霧が杖から噴き出した。

黒い霧はアズリアを中心に広がり、俺達と遠巻きに見ていた他の学生たちも包みこむ。

霧に触れた途端学生たちも叫びだした。

「な、なんだ！？」

学生たちの様子にニケが驚いた。

突然のことに俺も驚いたけど、

「アズリア！」

俺は真っ先に、異変の中心であるアズリアに駆け寄ろうとした。

走り出した時、ぐいと制服の裾を引っ張られる。

カミラだ。

「ヒカルっ！　あれ……あの杖よ。この、黒い霧と――最悪な気分……！」

カミラは顔を歪め、地面にしゃがみながら言った。

あの杖!?
それに黒い霧と、気分って……。

「『死霊皇』、の杖……」
「あ!?」

『死霊皇・レーヨン＝リノス』
８０レベル連続クエストの成功報酬で、魔術師系統職だけが装備できる杖。
付与効果は『恐慌』。
対象の攻撃行動を封じ、その防御力を大幅に下げる。

以前、俺がぶん投げた。

「なんでここに!?」

たしかにあの黒い霧は見た覚えがある。
アズリアの状況も以前のカミラと同じだ。
しかし、俺があの杖を手放したのはポートアークだ。サニアからどれだけの距離があるか。

「アズリアを……」

カミラは浅く早い息をつきながら言った。

「あ、ああ！」

アズリアに走り寄り、その手に握られた杖をはぎ取ろうと手を伸ばす。

「アズリア！」

「はっ、はぁッ――ぁぁぁああ！　く、くるなッ！」

アズリアは座り込んだまま、滅茶苦茶に杖を振り回した。

俺はアズリアに抱きつきその動きを止める。

「ニケ！　杖奪え！」

「あ……！？　――ああ！！」

呆けていたニケを怒鳴りつけ、アズリアから杖を奪わせた。

「どうすりゃいい！？」

「ぶん投げちまえ！」

わかった、とニケが杖を振り上げた時、カミラの弱々しい声が届いた。

「馬鹿、やめなさい。またこんなことになるわよ……」

「じゃ、どうしよ！？」

なにが『装備』と判定され、どのような基準で付与効果が発生、または暴走するのか。十分に検証しきれてはいない。

装備を解除するには、かつて俺がやった様に装備者から装備品を遠ざければいいということしかわからなかった。

「――ニケ、　実習林の奥の方へ走って……」
「他の学生もいるぞ！」
「じゃあ、あの布袋を……」

そうだ。
カミラが死霊皇を発動させたのは、布袋から出してから。
布袋の中にあるぶんには魔術師が近寄っても発動しなかったし、たとえ発動していたとしても効果が布袋の外に漏れだすということはないようだった。

「回収ー！　これに突っ込め！」

俺はニケの方へ向けて布袋をぶん投げる。ニケは布袋を空中で掴み、間髪いれず杖を突っ込んだ。

途端、黒い霧は霧散した。

「「……」」

俺たちは無言で警戒する。
ちょっと間をおいてからニケが言った。

「……おさまったのか？」
「ぽいな……」

アズリアに覆いかぶさったまま、俺は答える。
周囲を窺うと黒い霧は完全に消えたようで、学生たちも混乱はしているようだが、暴れたり叫んだりはしていない。どうやらあの霧が恐慌状態を引き起こすらしい。
恐慌状態から一番に回復したカミラが俺に近寄ってきた。

「――アズリアは？」

腕の中のアズリアの様子を窺う。
アズリアは気を失っているようだった。
ただ、髪は乱れているが呼吸は穏やか。
怪我もなさそうだし、大丈夫っぽい。

「大丈夫。怪我とか、ダメージとかは受けてないはず。あの杖にそういう効果はないから」
「そう……」

一つ頷き、カミラは辺りを見渡した。
地面に座り込んだままの学生たち。
ニケ采配だったので、俺の班はほとんどが女子学生だ。

「ニケ、ヒカル。一旦、みんなを連れて寮に戻りましょう」
「え……、なんで？　先生とかに報告した方が良くないか？　なんか知らんが、やばそうだったじゃん」

ニケが言った。

「後でいいわよ。それより着替えさせなきゃ」

カミラはそう言って、座り込んだ学生の一人に近づいた。

「？、？」

ニケは首をかしげる。

「ニケ、お前も手伝え。俺はアズリア運ぶから」
「？　わかった」
良く理解していなさそうだったけれど、ニケはカミラを手伝いに行った。

## 29　魔法学院、転機（後書き）

2話分を1話にまとめました。
そして上手にまとまりませんでした。

次からは週一更新目指します。

# 30　魔法学院、加入

「……」

ニケと2人で院長室のソファに腰掛けていると、そのドアが開いた。部屋の主である爺さんが入ってくる。

爺さんはドアを閉めながら俺たちを見て、目をしょぼしょぼさせながら言った。

「確認できた。――間違いなく、フランキリルだった」

「そっか」

アズリア達を寮に運んでから、俺は学院関係者を探して爺さんに取り次いでもらった。

あの魔術士を見つけた状況と杖の詳細を伝えてある。

ニケが頭を掻きながら、明るく言った。

「じゃ、悪者はくたばって一件落着？」

「――いちおうは、そうも言えるかもしれんの」

爺さんはゆっくりと歩き、机の向こうにある椅子に座る。

ふう、とため息をついた。

「なに、疲れてんの」

「もちろん。ここ最近は寝ずにヤツの行方を捜しておったからな。――まさか学院の敷地内で死体になっとるとは、思いもせなんだ」

「ふうん」

爺さんは眉間を揉みほぐし、言った。

「報告は聞いとるんだが。あんたらが殺したのではないのだな？」

「当たり前だろ」

「……。『恐慌』の、呪いな」

状態異常『恐慌』。

効果は対象の攻撃行動を封じ、防御力を大幅に低下させる。

あの魔術士は、多分自滅だ。

紙装甲の低レベル魔術師がさらに防御力を低下させられたことで、実習林に生息するモンスターの攻撃にも大ダメージを受けるようになってしまったのだろう。

ただの状態異常ならそのうち治るけど、装備品の暴発なのだとしたら装備中は途切れることなくずっと恐慌状態だったはず。

その間反撃も出来ずにひたすら攻撃を喰らい、結果、死んでしまった。

……。

なんかもう、嘸り殺しだ。

哀れ。

「なぜあんなことをしでかしたのやら」

息を吐きながら爺さんは言ったけど、返事を期待してのことでは

なさそうだ。当の本人は死んでしまったし、あの魔術士と面識のない俺が答えられるはずもない。
ただの愚痴だろう。

爺さんはしばらく宙に視線を向け、それから俺に言った。

「あの杖は元々、あんたの持ち物なんだって？」
「うん。いろいろあってポートアークに捨ててきたんだけど、巡り巡って王都まで来たっぽいな」

高レベルで強力な装備品。
人づてに渡って、魔法学院に持ち込まれたというのは考えられる。

「杖はフランキリル自身が学院に持ち込んだものだ。魔術士団でも研究できない故、わしに研究しろとな」

予想通りだったので、俺は頷いた。

「それほどまでに強力な杖だった――そこで疑問なのだが、あんたはあの杖をどうやって手に入れた？」

姿勢を正して爺さんは訊いてきた。

「うん？」
「あれは『繁栄の時代』の遺物だ。王国中を探しても、二つとないだろう。あるとすれば遺物を蒐集している『聖なる暗き森』のエルフの所くらいだ」
「聖なる……？」

『聖なる暗き森』

地名だろうか。
ゲーム臭い名前だ。

「よくわかんないけど、あの杖はずっと前に仲間と一緒に手に入れた物だ」
「……最初に尋ねようと思っとったことなのだが、あんたはただの冒険者ではなかろう。普通のエルフとは髪の色が違うし、なにより強すぎる。――元老院の関係者なのか？」
「げ、元老院？」

聞き慣れない言葉に、俺は首を振った。

「違う違う、関係ないって。俺、そういう政治的なことには無関心だもん」
「しかし、ただのエルフということはあるまい」

爺さんが質問を重ねた。
この世界でエルフがどうなっているのかわからなかったので、俺はすぐには答えられない。
俺みたいなエルフって珍しいのだろうか。

戸惑っていると、ニケが言った。

「ヒカルって、エルフじゃなくてハイエルフだろ。いつだかの期間限定のユニーク種族じゃなかったっけ」
「あ、そうそう。厳密にはエルフじゃないんだ、俺。ハイエルフなの」

そもそもエルフという種族が存在するのにもかかわらず、なんでハイエルフなんていう紛らわしい種族が存在するかというと、元は

ネタ的な種族なのだ。コンシューマーの長編ＲＰＧが新作を出した時にタイアップしたヤツで、期間中に招待券を持って始めると選択可能。

追加の新種族ではないので、種族装備も大半がエルフのものに準じている。

初期の配布アイテムに特典がつく以外、エルフとは外見が幼いことくらいしか差別化がなされていない。

俺が言うと、爺さんが驚いた様な表情をした。

「……やはりハイエルフな。こっちにもおったんか」

「？　まあ、もともと数は少なかったけど」

知り合いにも、ハイエルフはあんまりいない。片手で数えるほどだ。

「本当に元老院とは関係ないのか？」

「ないって。何とかの森には行ったことないし、エルフにも知り合いは一人しかいない」

爺さんは何事かを考えながら、コツコツと机を叩いた。

「出身を尋ねても構わんかね」

「出身……」

なにやら、爺さんには疑われているようだ。

しかし素直に答えても疑惑は晴れそうにないし、ここはそれっぽいことを言っとく。

「『都市国家・ラース』」

『ラース』はゲーム時代の俺の所属都市国家だ。
今は危険地域にあるらしいのだが、少なくともこの世界に実際に存在する。日本での現住所を答えるよりは幾らかマシだろう。

「――。なるほど」

俺の言葉に爺さんは納得したように頷いた。
何に納得したのかはわからないが、そのあと爺さんが気楽気に話しかけてきたので、ほっとする。
身に覚えのないことで疑われるのは気分が悪いからな。

「疑うようなことを言ってスマンかったな。いろいろ合点がいった。わしの思い過ごしらしい」
「ああ。ならいいんだけど」
「――そろそろ、学院を去るとか」

爺さんが話題を変えた。

「明日戻ろうかと思ってる。いろいろやりたいこともあるし」
「ありゃ、残念だの。気楽に世間話でもしたいところだが、これから報告に行かねばならぬ。わしは相手を出来そうにない」
「いいって。友達も出来たし、そっちでゆっくりするよ」

爺さんは申し訳なさそうに肩を落とした。

「あまり、もてなしも出来ないで……」
「いやいや。お構いなく」

▼

院長室を出て、ニケと別れた。
ニケには独立寮に置いてある荷物の整理を頼み、俺はアズリアたちの学生寮へと向かう。
気を失ったアズリアが気になっていたからだ。
部屋に運びこんだ時もアズリアは目を覚まさなかったし、カミラに着替えさせてもらった後も眠ったままだった。
そんなアズリアを単純に心配しているというのもあるけど、ちょっと疑問に思っている部分があり、それを確かめたい。
疑問に思っているのは、なぜアズリアが気を失っているかだ。
『気絶』という状態異常もあるにはあるけどあの杖にそんな効果はないはずだし、以前カミラが持った時もそんなことは起きなかった。
付与効果の暴発の影響がその時々によって変化するということは考えられるけど、それならそれで確認しておきたい。
ただ俺は、もっと深刻な状況を考えている。

それはアズリアが『死霊皇』のクエストに関連したイベントキャラであり、杖を持ったことでなんかのフラグを踏んでしまったのではないか、ということだ。

アズリアがイベントキャラ――あるいはその末裔か――ではないかというのは以前から考えていたことだ。
リノスという家名は死霊皇の魔術師時代のものと同じだし、なに

より『食料アイテム』を作成しプレーヤーに配るという行為が『リノスの娘（ベントキャラ）』と一緒だ。

アズリアにそんな意識はなかっただろうけど、プレーヤーである俺は思わずあのクエストを思い出してしまった。

もちろん、リノス姓は物凄い一般的な家名でアズリアはクエストとは全く関係がなく、『食料アイテム』もただの偶然ということはあり得る。

仮にイベントキャラと関係があったとしても、アズリアがその役割まで引き継いでいるとは限らない。そもそもが、ゲーム時代にそんなフラグは存在していないのだ。

そういう諸々を考えると、俺の心配は高確率で杞憂なんだろう。

だけど現実として、杖を握ったあとの事態を考えるといろいろ勘ぐってしまう。

ゲームではあり得ないことが今でもそうとは限らないし、その実例も知っている。そんな風に、この世界のクエストがゲーム時代のクエストとは形態を変えて存在しているのなら俺の理解は及ばない。

「はあ……」

俺はため息。

『死霊皇』クエストは、受けたくない。

クエストの最後でリノスもその娘も死ぬからだ。

悲劇的で哀切なストーリーには感動したけど、それは俺があくまで画面越しの観客だから感じたことであり、そして今の俺は当事者

だった。
受注することで、「クエストを進めることでイベントキャラを殺す」という無意識的な加害者になり得る。
仲良くなったアズリアに死んで欲しくはないし、間接的だとしても俺は殺したくない。

全部、俺の気にしすぎならいいんだけど。

考えることが多すぎ。

よくわからん。

「ごっちゃになってるのがなー」

ゲームとして。現実として。
二つが混じり合ったこの世界は、あまりに複雑だ。
今回みたいに一つの物事を二つの側面から理解しようとするとわからないことが多すぎる。

スキル云々、パンツ云々言うよりも、俺はもっと根源的なことを考えなければならなかったのではなかろーか。
ゲーム時代ではあり得なかったパンツの白さが目に眩しくて、俺の視界は狭まっていた。そんな風にしていろいろなことを見ないようにして、様々な検証作業を怠り、つまりは怠けていたのだろう。
生き残るという、そういう厳しさをもった世界に臨む態度ではなかったかもしれない。

「――いやでも、ここでパンツを諦めたら負けな気がする……」

「……なにを言っているのだ、ヒカル」

突然。

俺の呟きに、アズリアの呆れたような返答が返ってきた。

▼

「お、アズリア。起きたのか」

振り向き、俺はアズリアに言う。

学生寮の入り口、その横にあるラウンジで、アズリアは一人で椅子に座っていた。

俺が近づくと立ちあがる。

「うむ。さっきな――カミラから聞いた。迷惑をかけてしまったな」

「いや、いいって」

俺は首を振り、それから尋ねた。

「体、おかしい所とかない？」

「ないな。とりあえず、今は平気だ」

それはよかった。

カミラとは様子が違ったけど、やはり杖の直接的な影響は一時的なものらしい。

あとは後遺症というか、先ほどまでのことを詳しく聞きたいところだけど、どう尋ねようか。
自覚症状とかはないっぽいし。

「……な。今と以前とを比べて、どっか変わったこととかないかな。どんなことでもいいんだけど」
「？　いや、ないと思うが」

否定しながら、アズリアは眉をひそめた。

「カミラから杖のことも聞いた。あの杖には、あとを引くような呪いはないのだろう？」
「そうなんだけど……」

杖を握った時の様子がカミラとは違っていたことを、正直に話すべきだろうか。

いやでも、不安にさせるだけだな。
仮におかしなとこがあったとしても、俺が何か出来るというわけでもないし。
無責任だけど、今平気というなら今後もそうだと信じよう。それしか出来ん。

「ちょっと心配になっただけ」

手を振りながら言うと、アズリアはそうか、と頷いた。

「――あの……ヒカルに話があって、それで待っていたんだ。今、時間はあるだろうか」
「話？　いいよいいよ。聞く聞く」

「ぅむ……」

俺が気軽に応じると、アズリアは先導してラウンジを移動した。
ラウンジの一角にあるソファに、向かい合うように腰を下ろす。

「で、なに？」
「……。単刀直入に言うのだが――街を出て、旅がしたいんだ」
「うん」

ほう。
旅――旅行ね。
したいならすればいい。

「連れて行ってくれ」
「うん？」

俺は首をひねった。

「連れてけって……え、アズリアどっか旅行でも行くの？　付き添いしろってこと？」
「違う。冒険者になって、旅をして回りたい」
「……」

それは以前聞いた。
なので続きを促す。

「私は旅することが目的だから、目的地は定めていない。――だから、出来るならヒカルについて行きたい」

俺の眼をまっすぐ見ながら、アズリアはハッキリと言った。

慌てる。
俺達の目的地は危険地域。連れて行けるわけがない。
「え、ちょっと待った。……学院あるだろ。どうすんの」
「退学しようかと思ってる」
「いやいや」

突然何を言い出すんだ!?
冒険者になりたいのはともかく、退学?
学院は、リアルで言えば大学みたいなもんだ。それをいきなり中退するなんて、考えが奔放すぎて行動が軽率すぎる。

「――親御さんとか、ねえ? そういうの、ちゃんと相談した?
思いつきで言ってもダメだよ」
「親は……私が冒険者になりたいことは知っている。それに学院に入るときに私の好きにすれば良いとも言って送り出してくれたんだ。今冒険者になっても理解してくれると思う」
「いや、『思う』とかじゃなくてさ」

話せよ! ちゃんと!
これだから10代は!
もー!

「学校を退学するなんて重要なことじゃん。そういうことはちゃんと面と向かって話すべきだし。――それに進路のこととかさ、親もしっかり納得してるのか? 女の子が冒険者とか、親として本当のところはどうだろうなーって思うんだけど」
「……」
「アズリア?」
「うぅ――……」

アズリアは、ちょっと俯いた。
俺に顔を見せないままで、言う。

「そんなに、私を連れていくのは嫌だろうか」
「あ、いや――。嫌というわけでは」

ないんだな。これが。
ただ俺たちの目的地が問題なわけで。
アズリアには全く問題ない。

「――もちろん、私がヒカルにとって足手まといだということはわかっている。もし連れて行ってもらえても、きっとたくさん迷惑をかけると思う」
「……」
「頑張るから。頑張って、足手まといにならないよう強くなる。そのためにヒカルが言うことなら、なんでもする」
「え……えぇー」

な、なんでも？

「頼む」
「いや、あの……。まあ――ほら、ね？　俺はいいんだけどさ、だからアズリアの親がなんて言うのかが問題なのであってだな……」
「本当か？　ヒカルは、私を連れていくことは嫌じゃないのか？」
「嫌なんて、そんな。　あるわけないじゃん」

俺がそう言うと、アズリアは顔を上げた。

「では、親の了承が貰えれば連れて行ってくれるんだな！」

「う、うん？？」

あれ。そういう話だっけ？

「ヒカルはいいって言ったぞ」

「あ、ああ。――言ったな……」

確かに言った。というより……言わされた？

「――すまない。どうしても行きたかったんだ。しかし言質は取ったぞ」

笑いながらも気まずそうな、まるで照れているかのような顔。

「……」

――え？

アズリアって、こういう子だっけ？

なんか様子違くない？

「一度言ったんだ。途中でひるがえしたりは、なしだぞ」

「いや、あの……」

口を開きながら、言うべき言葉を探す。

確かに、「いい」と言ってしまった。親の了解がもらえるなら連れて行く、ともとれる内容でもあった。

そしてそれは、俺がアズリアを諭すかの様に言ってしまったのだ。

ここで俺がいきなり「やっぱり連れて行かない！」なんて言ってしまえば、先ほどの説教めいた説得の正当性が失われるばかりか、俺が駄々をこねている形になってしまう。なので言えるはずがない。

かといって、このままアズリアを連れていくこともできない。

なにか、アズリアの思いがくじける様な事を言わなければ。

求められるのは、アズリアが冒険者になることを諦める様な言葉であり、あるいは学院をやめるのを思いとどまるような言葉だ。

それか、俺と一緒に行くことを思いとどまる様な、そんな発言でもいい。

「――ッ」

俺は必死に言葉を探し、やがて自爆とも取れるような言葉を吐いた。

「なんでもするって、言ったよな。――俺は……滅茶苦茶になんでも要求するぞ！」

「うむ！　望むところだ！」

あ、くそ。

だめだった。

通じてないっぽい。

## ３０　魔法学院、加入（後書き）

魔法学院編、終了です。
長かった……。

散らかした伏線は、後でどっかで拾います。

１１／１１　誤字訂正。

# 31　仲間と、新たな活動

俺たちは学院から王都の中心部へと移動した。

アズリアが新しくパーティーに加わることになったので、俺たちは学院滞在を一日伸ばしてアズリアの諸手続きと準備に当てた。

とはいえ、様々な準備が一日で終わるはずがない。多くはほったらかして最低限の身の回りの準備だけを済ませて来た。

幸いにもアズリアは学院を中退ではなく休学ということになった。これは爺さんに直接お願いしたことだ。コネを使うようで不快に思われるかと思ったけど、多様な事情を持つ学生を抱える魔法学院では長期休学はそれほど珍しいことではなかったらしく、あっさり聞き届けられた。それに関係する書類等も後日送付でよいということだったので手続きも簡単、すぐに終わった。

アズリアの準備も早く終わり（必要と思われるものを片っぱしから魔法の布袋に放り込んだ。後で整理する）、その夕方にはアズリアは友人たちに休学と別れを告げて回った。

突然のことに友人たちは驚いていたけれど、夜には彼女たちが送別会を開いてくれた。

さすがに寂しくなったのかアズリアは涙を浮かべ、俺はカミラに「アズリアを誑かすな」と説教された。絶対に無茶させるな、とも言われた。

なにはともあれ、そうやって急ぎ足で別れの準備を済まし、俺たちは三人連れだって学院から離れた。

歩きがてら、アズリアに冒険での注意点を思いつくままに話す。

「まあ、実習でやった様にすれば間違いないな」

水着のニケが後ろ手に手を組みながら言った。最近朝は冷え込んで来たからか、上に着ているジップアップパーカーのジッパーは首まで引き上げられている。パーカーはニケの股下までであり、ぱっと見は下になにも穿いてないように見える。

ぶっちゃけ――いや、言うまでもないか。

つまりはいつものニケなのだった。

「魔術師は後衛で、接近職が前衛というやつか」

アズリアが真剣な表情でニケに確認した。

「おう。オレとヒカルがタンク役になるからさ。アズっちはその間にババッと範囲魔法を使ってくれよ」

「ふむ。そのあたりの連携は、実際に戦う前に練習しておきたいのだが」

「そんなん戦いながらでいいって。その都度修正していけばいいじゃん」

「……。私は、実習以外でモンスターと戦ったことがない」

不安げにアズリアは言い、俺とニケは笑った。

「最初は空気を吸って慣れることだな。慣れれば自然とやれることってのが増えてくっから、連携の練習すんのはそれからでもいい」

「そーそ。あんまり気負うなよ。緊張して動けなくなるぞ」

俺たちがそう言うとアズリアは頷いた。
その様子が不承不承という感じだったので俺はさらに言う。
「当分は連携云々よりも身を守ることを意識しとけよ。魔術士なんだから、後ろにいて攻撃はなるべく喰らわないように」
「……わかった」
頷くアズリアは真面目な表情なんだけど、どこか思いつめている様にも感じる。
もしかして「後ろにいろ」ってのをハブられてるとでも感じているのだろうか。
足手まといになるのを気にしていたので、考えられるな。
「直接敵を攻撃するのは俺たちの仕事だからな。絶対前には出るなよ。『しっかり私を守りなさい！』くらいの勢いで後ろにいろ」
「後ろには下がっているが、その勢いは無理だ」
「『この程度で動けなくなるなんて、情けないわね！』って応援するのでもいいけど」
「それは応援じゃない。でもヒカルがそれで元気になるなら、善処する」
「あの、そんな真面目に返されても……」
ジョークじゃん。
緊張をほぐそうとしてるのに。
「ヒカルゥ、お前そんなんがいいのかよ」
ニケにまで言われた！？

▼

滞在していた宿屋の前に来ると、タイミング良くダグがいた。
通りの端でなにやらオジサンと話し込んでいたのだけど、俺たちに気付いて声を上げる。

「ヒカル！　戻ったのですか！」

それに連られてオジサンもこちらを向き、ニケを見てちょっと頭を下げ、ダグと短く言葉を交わして去っていった。
去り際こちらに向かってお辞儀。
誰だろうな？

さておき、オジサンと別れたダグが俺達の方へと駆け寄って来た。

「おお、ダグ。どっか行っちゃったかと思ってた」
「まさか」

とダグは笑う。

「――最近は忙しく動き回っていて、王都を離れることはできませんよ」
「あ、そうなん？」
「ええ――お帰りなさい」

そう言って、眩しそうに俺を見つめた。
久しぶりの、ダグとの再会。

お帰りなさいと迎えられた俺は――――

「あ、鳥肌立った。どうしてくれる」

「ええ！？」

「お帰りなさいはないだろ！　俺の嫁か、お前！」

なんて言いつつ、ダグの足を軽く蹴り飛ばした。

まあ。

なにも告げずにどっか行ってなくて良かった。

覚悟していただけに何事もなく再会できたことは割とうれしい。

「ヒカル。洒落にならないくらいに脚が痛いのですけど」

「良かったな。夢じゃないぜ」

しばらく会ってなかったからだろうか、ダグの印象は俺が思い出せるものとはすこし違っていて、それにどことなく痩せた様にも見える。

「あの、そちらの方は？」

おっと。

アズリアのことを紹介するの忘れてた。

「えーと、新メンバーのアズリアだ。将来有望な大物新人だよ。――アズリア、こっちはダグ」

俺がそう言うと、アズリアはペコリと頭を下げた。

「アズリアです。魔法学院の元学生です。――学院ではヒカルに色々お世話になって、その縁あって一緒に冒険することになりました。

これからよろしくお願いします」

？

～のだ口調じゃない。

意外に人見知り？

「私は、ダグです。少し前から、ヒカルと一緒に旅をしています。よろしくお願いしますね」

あれ？

なんで先輩面してんの？

言っとくけど、お前はレギュラーメンバーにしたつもりはねーぞ。

「ご高名は伺っています。こんな風に会えるとは思わなかった」

「そう、ですか。――ヒカルの周りには、不思議と人が集まるみたいです」

うん？

高名って何だ。エルフの兄ちゃんじゃないの？

「通りで話すというのはなんですし、部屋の方へ行きませんか。ヒカル達も疲れているでしょう」

「あ、そうだな」

確かにここでは打ち解けて会話することは出来ないだろう。

酒場から飲み物か何かを持ち出して、部屋に戻ってゆっくりしよう。

「それと、ニケ」

ダグはニケに近づき、耳打ち。

「――例の件、つつがなく手配しておきました」

「マジかよ!?　はえぇな!!」

「人材と物件と材料。一通りのものをそろえて運ぶべきものは搬入しています。すでにいくつかの試作品も出来あがっていて、事前の調査でも好意的に受け止められているようです」

「おお！　すげえじゃん!!」

興奮気味に言うニケ。

何のことかわからない俺は2人に訊いてみた。

「なんの話だ?」

「ふふん。昼飯食べたら、教えよう。それまで楽しみにしときな。絶対ヒカルも喜ぶから」

▼

午後。

ニケとダグに連れられて大通りを歩く。

午前に通った道を引き返すように歩き、通りの端の方で曲がる。

裏通りというほどでもないけれど大通りよりは人の少ない通りだ。

それに面したとある店舗の前でニケは立ち止まった。

「これよ」

腕を組み、顎で示す。

「……服屋？」

ニケの示した先には小奇麗な店があった。

この世界での店は露店を除いて、外からはどういった店なのかはイマイチわかりにくい。標識代わりの看板をぶら下げてなんの店かを示すのが一般的なんだけど、しかしこの店は外からでも何の店かすぐにわかった。

窓を多数配置してあり、その窓に面するようにマネキンが置かれているからだ

「おう。『ＰＡＮＴＳｅｒ』ってブランドを立ち上げたんだ」

「はあ？」

「入ってみ。いいから入ってみ」

ニケに押されるようにして店に入る。

扉を押し開けると、カランカランと鈴の音がした。

「――」

中に入ると、予想通り服屋だった。

棚が幾つも並んでいて服が綺麗に畳まれて収納されている。壁には服がつるされていたり鏡があったりするけど、全体的に割と落ち着いた印象だ。

うん。

普通の服屋。

あまりに普通だ。

ただこの世界でこういう形式は見かけない。こっちでは小売り形態ではなく、仕立屋が直接商売している。

「で？　なにここ？」
俺はニケに尋ねた。
「オレの店」
「はあ？」
「オレがプロデュースした」
「……よくわかんないんだけど」
首をかしげると、ダグが説明した。
「ヒカルが魔法学院に行っている間に、私とニケで手配しました。ニケがヒカルに合流してからは私が引き継いで形にしました。役所の許可も取ってある正式な店舗です。この建物自体は貸店舗ですが」
「はあ――で？」
よくわからない。
というか、意味がわからない。
ついていけてないんだけど。
「なにお前。商売でもするつもりなのか？」
帰る気あんの？
「まあな」
「いや。まあな、じゃなくてよ。――商売して、そんでどうすんだよ」
「おいおい。ヒカルともあろうものが、このオレの先駆的業績を理解できないわけじゃあるまいな」

「いや――なに言ってんの？　服売るよりもすることがあんだろーが」

住みつくつもりだろうか、という不安を感じつつ俺はニケに言った。

「まあ、見てろ」

ニケはそう言ってダグと共に店の奥へと入っていき、やがて紙袋を抱えて戻ってきた。

紙袋は二つ。

一つを俺に差し出す。

「開けてみな」

「何が入ってんの」

「いいから」

言われ、紙袋の中を覗く。

「ッ！！！」

おぉい！

俺は紙袋を速攻で閉じた。

な、なんでこれがこの世界に！？

神々しくて、目がくらんだぞ！

「に、二ケ……。どういうことだ。なぜコレが、ここにある」

「ふふふ。つまりは、そういうことよ。――この店を出発点にして、

オレはこの世界に新たな常識を打ち建てるぜ」
「……これは、世に出していいものなのか？　下手をすれば――俺達ですら喰われるぞ？」
「はっはっは。あまねく世界にそれが広がるのは、オレの本望」

そう言って笑うニケ。
コイツは、もしかしたら大物なのかもしれない。それも馬鹿と紙一重の。
俺はかすかな戦慄を感じた。

「あ、アズっちにもやろう。新メンバーになったお祝いだ」

とニケはもう一方の紙袋をアズリアに手渡した。

「うん？　いいものか？」
「おう。いいものだ」
「へえ」

目を輝かせてアズリアは紙袋を開ける。
ガサガサと音を立て、中に入っていたものを取り出した。

「？　下着だ」

つまみあげるように広げたのは、水色と白色がボーダー状になった下着。

俗に言う、

縞パンである。

「これがいいものなのか？」
「アズリア……それは途方もなく良いものだぞ」
「けど――下着だ」
そう言ってアズリアは下着の両端を持ち、まるで見せつけるように俺に示した。
「ぐっ……。すげぇ威力だ」
思わず顔の前に手をかざす。
「美少女が不用心に下着を手に持つ――このシチュエーションがこれほどとは……」
ニケは顔を盛大に歪め、呻いた。多分頑張って緩みそうになる表情を維持しているのだろう。
俺も顔をしかめながらアズリアに説明した。
「ほら、あれだ。――アズリアは、そういうデザインの下着って見たことある？」
「いや、ないな。というか、私は服にはあまり頓着しないので、下着のデザインには詳しくない。こういうものは珍しいのか？」
「多分、持ってるのは俺達くらいだな。その縞々。それを出すのは技術的に難しい」
「染めればいいではないか」
違うんだ。
縞々の精度。

そして材質。
シンプルに染色しただけなのに、これほどまでに情熱を掻き立てるデザイン。
逸品だ。
俺にはわかる。
「とりあえず――着替えるか」
俺は言った。
「それがどれほど良いものかは、穿いてみりゃわかる。――さ、アズリア。着替えようぜ」
「ん。今か？」
「おお。ニケ、試着室とかあんだろ？」
「あ、ああ――いや、ちょっとまて。オレも一緒に着替えよっかな」
「おお。そうしろそうしろ」
アズリアを押し、俺は試着室へと向かう。
「え――ち、ちょっと待ってくれ。一緒に着替えるのか？」
「いくら俺でも、そんなことはしないって。ただ、下着姿見せてくれればそれでいいから」
「は、いや……え？　なにを言っているのだ？　ヒカル？」
戸惑いの声を上げるアズリアを試着室に押し込む。
その前で仁王立ちしていると、ダグが傍にやってきて俺に何やら手渡してきた。

「私は、ヒカルにはこういったものの方が良いと思うのですが」

そっと渡されたのは、デフォルメされた動物が描かれたパンツ。

「マジかよ」

おいおい……。

死角なしってか。

じゃ、なくて。

「いや、ニケ!!　これは狙い過ぎだろ!!」

俺の叫びにびっくりしたアズリアが着替えずに出てきた。

## ３１　仲間と、新たな活動（後書き）

パンツしか書いてない気がする。
おかしい。
投稿当初はこんな話じゃなかったのに……。

１１／１１　誤字訂正。

と言うことで、次回もパンツ回です。

## 32　なんかのフラグ踏んだ。（前書き）

今回から事前告知します。

パンツ回です。

不快な方は引き返すか、さらっと飛ばし読みしてください。

## 32　なんかのフラグ踏んだ。

「ちょい早いけど、そろそろ閉めるかー。もう売るもんねえよ」

カウンターの奥にいるニケの声が聞こえた。

それを聞いて、俺は閉店の準備を始める。

客の出入りが途切れるのを待ってから店の扉を閉め、そのノブへ『Ｃｌｏｓｅｄ』と書かれた板を吊るす。

結果をいうと、ニケの店は大繁盛した。

繁盛しすぎて事前に準備しておいた商品の在庫が底をついたくらいだ。

当初は大量生産格安供給の方針のもと一般の若い女性客をターゲットにしていたのだけど、その予想に反して大口の貴族の顧客を大量に獲得したからだ。目新しいものに多大な興味を抱くのが貴族の習性らしく、ニケが提案し専属の仕立屋がデザインした衣装はそういう貴族に大人気で、そして貴族の大半がそんな様子だった。

それと、目論見どおりに下着類が飛ぶように売れたせいもある。

こちらも貴族が大量購入。何かと堅苦しい衣装を身につけないといけない貴族階級では、外からは見えない下着類でおしゃれをするというのが昔からの常識らしい。

その習慣は一般階級にも広まっていて、顧客単価では劣るものの多数の一般女性が来店し短期間のうちに莫大な利益が出た。

開店にあたって、ニケとダグが様々な人物と交渉し人材を雇い入れ、また膨大な原材料を準備したために借金までしたとのことだったけど、こちらはすでに解決済みだ。

元々大した額ではなかったらしい。ニケだけじゃなくダグもお金を出していて、ダグはワイバーンを冒険者ギルドに接収されたときに大金を手にしている。俺が金貨で５００枚ほど援助すると、それで借金は返済し終わったとのこと。

いざ開店、となってニケは「後は儲けるだけだな！」と張り切っていたけれど、一週間もすると客の多さに慌て初め、商品の在庫が底をつき始めた二週間後には、運悪く買うことができなかったお客に悔しさに震えながら謝っていた。

その間俺は、こんなにボロイ商売があるのかと冷や汗流しっぱなし。

純利益がどれほどなのかはわからないけど、売り上げは二週間で金貨１０００枚を超えている。

短期間でそれも客層は女性だけと言うことを考えるとあまりにボロイ。

女子すげえ。

「ヒカル、お疲れ様」

店を閉め、後片付けをしているとアズリアが俺の傍にやってきて言った。

「おう。アズリアもお疲れさん」

アズリアは店員として手伝ってくれている。

開店前にダグが四人の女性店員を雇っていた。

しかしなんと、このうち二人が他のブランドからのスパイだった

らしく、大量の在庫を持ち逃げされた。
あらかじめ用意していた材料に比べれば些細なものではあったけれど、完成した商品を持ち逃げされたのが腹立たしい。現在３つの工房に製作を委託している。そしてその供給が需要に全く追い付いていない状況だからだ。
新たに雇うと同じようなことが起こる危険性があり、それを避けるために知り合いで信用できそうな人物に店員をしてもらうことになった。
冒険者になると学院を出てきたアズリアに手伝いをお願いするのは気が引けたけれど、お客の回転を考えてやむなくお願いし、引き受けてもらっている。

「なんかゴメンな。こんなこと手伝わせちゃって」

何度か口にした言葉を言う。

「いや、気にするな。自分でも意外だったのだが、割と楽しんでいる」

アズリアはニコニコと笑いながら答えた。
昼間の様子をみる限り、その言葉にはウソはないように思える。
本当に生き生きと接客しているのだ。
けど俺はまた謝った。

「いや、でもゴメンな。――多分そろそろ、冒険に出ると思う」
「そうなのか？」
「なんかニケがな。いろいろ言ってる」

――店員なんかしてらんねえ！　新たなぱんちらがそこにあるん

だぞ！

なんて言いながら店を出て行こうとするのを、仕立屋のオジサンが必死に引き止めている場面を目撃した。

そろそろ、パンツを売るのに飽きてきたんだろう。

創業者として経営業務全般をもこなすニケだったけど、そちらの方面の才能はなかったらしく日々鬱憤が溜まっていたようだ。近々、専属の仕立屋を共同経営者にして店を丸投げするつもりらしい。

「あと耳寄りな情報も仕入れたし」

服を棚に納めながら、俺は言う。

人が集まるところというのは、場所や時を選ばずに常にある種の性質を帯びるらしい。客でにぎわう店内には様々な会話が飛び交い、情報交換の場としても機能していた。

その大半はおもに衣服関連の話だったのだけど、ある会話が注意を引いた。

冒険者と思しき集団の女性客がしていた会話。

なんでもエルフ達の間に危険地域侵攻の話が出ているとか。

「多分次は、エルフの国を目指すんじゃないかな。ダグに頼めば案内してくれるだろうし」

土地を巡ってエルフは長いこと危険地域に出入りしている。

事前の情報収集でも、危険地域の詳細な地図を持っているはエルフだけだということがわかっているので向かうにはちょうどいい。

地図を入手しつつ、エルフの侵攻に合わせて俺たちも危険地域に

入る。
道中の危険も分散されるいい案だ。
「エルフと言えば、『聖なる暗き森』のことか？」
「たぶんな」
「ふうん」
そう言って、アズリアは頷いた。
「しかしその前に、実家に一度帰っておきたい。私が同行するには親の了解が必要ということだったからな」
「あ、そうだった」
最近ずっと一緒にいたので、忘れていた。
アズリアは正式加入ではないのだ。
親の意見如何では学院に戻ることもあり得る。
「ヒカルも、一緒に説得してくれるのだろう？」
「う……まあ、ああ言った手前、しないとアズリア怒るよな？」
窺うように俺はアズリアに訊いた。
「怒りはしないが、がっかりするな」
「……」
がっかり程度の被害で済むなら、行きたくない。
「な。一緒に来てくれ」
しかし無邪気にそう言うアズリアは、多分俺が拒否することを全

く考えていなくて。
ここで断れば『がっかり』どころではなくなるんだろう。

「……」

アズリアの両親に会うとか。
……ねえ？
物凄い億劫なんだけど。

「わかった」

けど、俺はそう言った。

▼

カランカラン、と不意に鈴の音がなった。
それは来店を告げる音だったので、俺は反射的にドアの方を見る。

「……」

ドアの前には、アズリアよりもさらに幼いように見える少女が立っていた。
不機嫌そうに眉をひそめ、睨みつけるようにして店内をぐるりを見渡す。

「あの、もうお店閉めたんですけど」

『Ｃｌｏｓｅｄ』の看板が見えなかったのだろうか。
俺はそう思って少女に近づいた。

「すぐに済むわ」
「え、ちょ……」

ぞんざいに言い捨て、少女はノシノシと店の中へと入っていく。
なんて勝手な客だ。閉めたって言ってんだろーが。
この――お客ちゃんめ。

そう思いつつ、俺はカウンターへと引き上げた。
さっさと買い物済ませて、帰ってくんねーかな。

「……」

少女は店内をうろつきまわり、やがて下着売り場で品物を物色し始めた。
あまり品数はない。すでに売れてしまったので、翌朝の入荷待ちだ。
ボンヤリとそれを見ていると、少女はカウンターまでやってきて言った。

「ねえ、他にはないの？」
「すみません。今あるもので全てです。明日の朝には入荷します」
「探してるのは、ああいう普通のじゃないんだけど」
「……」

パンツァーである俺とニケがプッシュするオススメ商品なんです

が。
シンプルなものも多いけれど、この世界では斬新なデザインと履き心地のはずだ。
それを普通と言い切るとは、この娘、さてはエリートか。
「ねえ？　ないの？」
俺が無言でいると、少女は重ねて訊いてきた。
「申しわけないですけど、ウチでは普通のものしか扱ってないです」
「……隠している訳じゃないでしょうね。アタシが子供だと思って」
「え――は？」
なに言い出すの、この娘？
「あなた、店員よね。話にならないみたいだから、店主を呼びなさい」
「……あの？」
「いいから呼びなさいって。あなたはお呼びじゃないの」
「……」
おいおい。
失礼なガキだな。
閉店後に無理やり入店する無神経さといいこの横柄な態度といい、温厚な俺も、そこまで言われちゃカチンとくる。
こちとら従順な雇われ店員じゃないんですよ。
いつまでも下手に出ると思うなよ。
「普通じゃない物をお探しなんですよね？　ちょっと待っててください。とっておきの逸品を持ってきます」

「なんだ、あるんじゃない。最初から出せばいいのよ」

フンと鼻を鳴らし、腕を組んで俺を睥睨するガキ。

へへ。

そういう態度をとってられるもの今のうちだぜ。

あいにく、ここはお前みたいな子供が来る場所ではないのだ。

実働メンバー３０人に満たないながらも協賛員を含めれば実質１０万人は下らないと言われ、かつて『エリュシオン』を席巻した巨大ギルト『ノーブル・パンツァー・ソサエティ』。

この店はその直営店だ。それがどういう意味か、図らずも教えとく必要があるようだな。

「お待たせしました」

そう言って、俺は木箱を差し出した。

この中には、さすがの俺でも封印せざるを得なかった危険なものが入っている。

ニケが徹夜明けのテンションで発注し出来あがったもので、そのあまりにあまりのデザインから試作品が出来あがった段階で製作にストップをかけた品だ。

著しく風紀を乱すデザインであり、パンツァーの純な理想を打ち砕く一品。

冷静になったニケと俺は、そう判断した。

つまり、歴戦のパンツァーですら恐れた品物である。

言いかえれば『エリュシオン』のプレーヤーの約半数が恐れる品であり、今の世界に持ち込めば人間社会のバランスを崩しかねない危険な品でもあった。

そんな危険物ではあるけど、まあ、こんなガキならいいだろう。
使いこなせるとは思えない。
へへ。爆弾を抱えて――もとい、穿いて生きるんだな。

「へえ、これがそうなの……」

言って、ガキは木箱に収まっていた下着を手に取った。

「――？」

手に取り、首をかしげた。

「下着、なのよね？」
「そうです」
「この切れ込みは……どういうことなの？」
「どういうことだと思います？」

俺が手渡したのは、クロッチ部分がオープンになっている下着。

「？、？。　何かしら……」

いわゆる、セクシーランジェリーの一種だった。

もはや、ネタを超越している。
こんなん、マジで世に出せない。
流行ったりしたらかなり嫌だ。
ゲームなら存在意義と運営の頭を疑う。

「――わからないわ」

「ふふふ。それ、差し上げますね。うちの準備不足のお詫びです。受け取ってください」
「あら、ありがとう」
「家に帰ったら、どういったものかお母さんに訊いてみてください」
「訊けばわかるの？　そうするわ」

ははは。

訊いて母ちゃんに怒られろ。

そんで恥しさに泣け。

「では、またのご来店をお待ちしてますー」
「ええ、今回は残念だったけど、また来るわねーー」

と少女はくるりと背を向けーー

猛然と振り返った。

「ーーじゃ、なくて！　アタシが探してるのはこれでもないのよ。店主！　とりあえず店主呼びなさいよ！」
「えぇー……。それあげたんだから、もう帰れよ。閉店したんだって」

めんどくせえガキだ。

「なっ……客になんて口のきき方！　店主ーっ！　出てきなさい！　ロクに接客できない不良店員がいるわよ！」
「うっさいうっさいうっさい」

なんてやり取りをしていると、奥からニケがやってきた。

あらら。

タイミングがいいというか、さらに厄介になりそうというか。

「なに、なんかあったのかヒカル？」

「いや、閉店後に面倒くさいお客が来てな。帰ってくれないんだ」

目を吊り上げて睨んでくる少女を示す。

「客？　この娘か」

そう言ってニケが前に出た。

「あなたが店主？」

「まあな。なにか探してんの？」

ニケがそう言うと、少女は声を潜めて言った。

「強力な矯正効果を持った下着を取り扱っていると聞いたわ。出しなさいよ」

「強力な……下着？　装備ぱんつのことか？」

装備パンツ。

ニケの水着にヒントを得て、専属の仕立屋が開発した完全ハンドメイドのパンツだ。

試行錯誤の末、そのパンツに多少のステータス上昇効果と『炎属性耐性』を持たせることに成功していた。

「あれは、もう売れちゃったぜ。女の子の冒険者に大人気だったもん」

その製作工程の複雑さと必要材料の希少さから、あのパンツは事

前に数点しか用意することが出来なかった。そしてすでに冒険者に売却済みだ。

装備できるものが限られている冒険者にとって、必ず身につけなければならない下着にステータス上昇等の付与効果があるというのは大きかったのだろう。

説明と共に店に並べた途端、ちょっとした騒動と共に売れてしまった。

「そんな……。もうないの？」
「売るのはな。オレ個人がいくつかキープしてるのはある」
「それ！」

少女が叫んだ。

「アタシに売って！　言い値で買い取るわ！」

俺とニケは顔を見合わせ、首をかしげた。

「おまえ、名前なんて言うの？」
「アタシ？　エリカよ」
「エリカにゃ、必要ないと思うがな」
「なっ……」

あのパンツは完全に冒険者向けに作った品だ。
用途を考えれば、エリカみたいな子供が持っているのは宝の持ち腐れだろう。

「ホレ」

ニケはエリカに何かを手渡した。

デフォルメ動物のキャラクターパンツ。

「そっちの方がお似合いだ。あげる」

「いらっっ――ないわよ！」

べし、とエリカはパンツを投げ捨てた。

「おまっ！　なんてことする。これだってなあ、このヒカルが生産中止をかけたせいで数が少ない貴重な代物なんだぞ！　これを穿けることがどんだけ栄誉なことか……」

「こんなのッ、子供だって着ないわよ！　いいから装備パンツっていうの出しなさい！」

「嫌だね、５年は早い。お前みたいなのは子供ぱんつを穿けばいいんだ。装備ぱんつはやれない」

「お金なら出すわよ！　文句ないでしょ！？」

「あるぜ」

そう言って、ニケは腕組み。

エリカを見下ろす。

「オレのストライクゾーンは、１５から２９までだ。お前みたいなジャリに譲る理由がない」

うわぁ……。

最低だコイツ。

「な、なによ……」

理不尽な拒絶理由に、エリカは涙目。

「帰れ帰れ」

「……っ」

なんか、全くそういう義理はないんだけど、可哀想になってきた。

完全にニケが上手で、エリカは終始圧倒されっぱなし。

涙をこらえて立ち尽くしてる。

「か、帰らないわよっ……。売ってよ！」

「やーだ、め」

弱いものをつい応援したくなるのは、無責任な立場にいる傍観者の常だろう。

……。

ってか、弱いものイジメを見ている気分。

偲びねえ。

「それで帰るって言うなら、あげればいいじゃん」

俺は言った。

「おいおい。ヒカルともあろうものがなにを言う。ぱんつを一つ失えば、その分ぱんちらが減るんだぞ」

「その考え方には心底感心する」

すげえ。

徹底してる。さすがニケ。

「それにこんな子供にやってどうする。装備ぱんつ穿いてやんちゃして、怪我でもされてみろ。後味悪いじゃねぇか」

ちゃんとした理由があるじゃん。

そっちを言えよ。

「そんなこと言わずにさ。――女の子だもんな？　危ないことしないよな」

俺はエリカに訊いた。

エリカはコクコクとなんども頷く。

「な」

「いや、でもなぁ――」

「なんなら俺が、代わりに水着をやってもいいけど」

「ちょっ……わかったから、それは駄目！！」

ニケが慌てて奥に引っ込んだ。

キープしておいたパンツを取りに行ったのだろう。

「……礼を言うわ。不良店員」

「なら不良店員はやめろ。美人のお姉さんって言って」

――いや。

それも嫌だな。

自分で言っておいてなんだけど、言ったヤツはただじゃおかない。

そんなことを思っていると、ニケが紙袋を持ってバタバタとやってきた。

カウンターを回り、エリカに紙袋を手渡す。

「ほれ」

「ありがとう。――お代は？」

「そんなん、子供がいちいち気にすんな。あげるって、ロハでいい」

「良いサービスね」

満足げなエリカ。

「あー……」

がしがしと頭を掻き、でもな、とニケは膝を折った。

エリカに視線を合わせる。

「危ないことはすんなよな」

エリカはそれに返事をせず、コクンと一つ頷いた。

## 32　なんかのフラグ踏んだ。（後書き）

サブタイのスタイル変えました。
前回までのヤツは、考えるのめんどい。投稿済みのも修正するかもです。

あと、前回からニケ編始まってました。
尺は短め。その上新キャラ。
まとまるかだろうか……

# 33　遠征の予行練習。

冒険に出るにあたり、いろいろ準備しておかなければならないことがある。

今回は街から街への移動ではなく、国境を越え、さらには未開の地へと入ろうというのだ。移動距離も長く、エルフの国へ行くだけでも2カ月の長旅になるらしい。その間には当然戦闘もあるだろうからその準備だって怠れない。

回復アイテム類の準備や、野営の練習。アズリアの個人練習に連携訓練など、することは山ほどあった。

もちろん、アズリアの両親への挨拶も忘れない。

ただこちらは後回しということになった。訪問は早い方がいいと思ったていたら、それをやんわりとアズリアが断ってきたからだ。同行するかどうかは両親の回答次第なのだけど、アズリアには説得する自信があるらしい。

なので旅の途中に寄ることになる。アズリアの実家もエルフの国も、王都から見ると北にあるので一緒に済ませてしまうつもり。

そう言うわけで、旅の準備を優先している。

今は冒険者ギルドの貸し倉庫で魔法の布袋のアイテム整理をしていた。

魔法の布袋は今回の冒険で使う大きな荷物を収納する予定だから、あらかじめ入っているアイテムを全て出してしまわないといけなかった。何せ出てくるアイテムはランダム。このまま使用すると、必要な時に目的のものが取り出せないのが目に見えている。

「ヒカル。これどこに置く？」

石壁に囲まれた貸し倉庫内。いくつか設置されている燭台の明かりを頼りに作業しながら、ニケが訊いてきた。

ニケは蒼い地金に金色の装飾が施された全身鎧を持っている。

「どっかその辺に積んどいて」

「わかった。――うりゃ！」

ぽい、と部屋の一角に築かれた装備品の山に向かって投げる。

ガシャガシャと山の一部が崩れた。

「ニケ、それは貴重なものだろう。もっと丁寧に扱った方がいい」

「けどよアズっち、俺たちには役に立たないもんだぜ。『守護騎士（ガーディアン）』の装備だもん」

「しかし、『称号持ち』でなくとも身につけることはできるだろう」

『称号持ち』はアズリアが作った単語だ。

ゲーム時代の『制圧者』、『狂戦士』などの二次職以上職業を指す。

この世界では職業の分類は大ざっぱで、どの職業も一次職４職のいずれかに振り分けられている。二次職以上であろう爺さんにしても『魔術師』を自認し、周りからもそう扱われていた。

俺たちの職業を説明したときにアズリアはなかなか理解できず、その名称を何らかの『称号』だと思ったらしい。以来『称号持ち』

という単語で一次職と二次職を区別するようになった。

「いや、『称号持ち』じゃないとちゃんと装備できないよ。なんかの魔法付与が付いてたはずだから」

「これもなのか……」

最近検証作業を進めていて判明したことなのだけど、装備品の装備はゲーム時代の職業に関係なく出来るようになっていた。

ただ、付与効果は『適正レベル』と『職業系統』の条件を満たしていないとキチンと発動しない。適正レベルが足りないと効果は暴発し、レベルを満たしていても職業系統でなければ単に性能のよい装備品だ。

ただの高性能装備なら使い道がありそうだけど、装備判定は狭いながらも一定の範囲をカバーしているようで、そのせいで魔法付与付き高位装備品はめちゃくちゃ扱い難くなっている。

例えば、『魔術師』が『守護騎士』装備品を装備することは可能なのだけど、その効果までは発動しない。そしてその『魔術師』の近くに『剣士』系統職種がいればそちらが優先され装備判定が移る。判定が移って、もしレベルが足りていなければ付与効果が暴発。運が悪ければ周りにいる人も被害。

ダグを実験台にそういう事態を確認済みだし、思えば『死霊皇』もそうだった。

たとえ性能が良くても、そんな危険がある装備品では誰も装備しないだろう。

容易に売却するわけにもいかず、ああして山になっている。

「あ、やった。当たりだ」

ズルリと布袋の中から出てきたのは、豪奢な真っ白のドレス。
フリルがたくさんついたミニスカートというけしからんデザインの、女性専用装備品だ。

「アズリア、これもあげる」
「……遠慮しておく。もうそういう服はたくさんだ」

アズリアの足元には高位の魔術師装備のほかに、大量のネタ装備が畳まれている。
見つけるたびにアズリアにプレゼントしたものだ。

「一回着てみるだけでいいから」
「そういう態度が、もうたくさんなのだ。私は着せ替え人形ではないのだぞ」
「えぇー」
「今日だけで何回試着したと思っている……」

はあ、とアズリアはため息をついた。
確かに最近、カミラの代わりにアズリアを着せかえて遊んでいた。
なんせ服屋を開いているし、アズリアは容姿も抜群。着せたい服はいくらでもあった。
でも、着たくないとはっきり拒否られちゃった。
あーあ。
飽きちゃったのだろうか。

「じゃ、しょうがないな。――ニケ、これもどっかに置いておいて」

俺はニケにドレスを渡した。

「ちょっと借りてもいいか？　工房に持って行って、同じようなデ

ザインの服を量産させたい」
「いいけど」
「よーし。今度はミニスカワンピを流行らせよう」
「……試作品の試着会には呼べよ」

言いながら俺は布袋を漁る。
以前にしまってあったアズリアの私物を取り出すと、ようやく布袋は空になった。

「しゅーりょー」

ばさっと布袋を放る。
アズリアが空中で掴み取り、丁寧に畳んだ。

「結構あったな」

感心したようにニケが言った。

「だな」

貸し倉庫を見渡すと、おおよそ１５メートル四方の空間が様々なもので埋まっている。

「やっぱ、いらんものが沢山あったな」
「いやいや、さすがはヒカルのファインプレイだぜ。こんなに水着を所有しているとは。ほとんど持ってたんじゃねえ？」

そう言ってニケは持参したバックに俺があげた水着を詰め込む。

「１００レベクエのは、いくつか持ってない」

そこまで集める暇がなかった。なにせ土日しかプレイすることが出来なかったからな。

思いつつ、俺は改めて倉庫を見渡した。
さて、今度はこれをきちんと整理したいとこだけど。

「めんどくせー」

ほっとくか。
どうせ俺は使わないし。

「よし。終わろう終わろう」

スカートを払いながら俺は立ちあがった。
アズリアが言う。

「整理しなくていいのか？　これではどこに何があるのかわからないぞ」
「いいって。俺は使わないし――使いたい他の誰かがやるだろ」
「他のだれかって？」
「ギルドのメンバーかな」

この貸倉庫は、『ノーブル・パンツァー・ソサエティ』名義で借りた。ギルドメンバーなら、自由に持ち出せる。

ギルド名義で倉庫を借りることは、ニケが店を開いた頃に思いついたものだ。
ニケにも会ったことだし、この世界に迷い込んでいるプレーヤー

は複数いるはず。そしてプレーヤーなら俺たちと同じように、人が大勢いる街を目指す可能性が高い。
もし、王都へとやってきたプレーヤー中に他のギルドメンバーがいれば、いつかギルド名義で借りたこの倉庫にも気がつくだろう。サニアには『ＰＡＮＴＳｅｒ』という店もある。勘がいいメンバーはすぐにわかるはずだ。
その時、なんかの助けになればいいと思う。

「いろいろやんなきゃいけないこともあるし、帰ろうぜ」
俺は言って、さっさと倉庫を引き上げた。
後ろからついてきたアズリアが、おずおずと言った。
「ヒカル。この装備品、本当に貰って良かったのか？」
「いいんだって、アズっち。いちいち気にすんなよ。――でも、ちゃんと着るんだぞ。貰った服は、全部着ろ」
ニケがそう言った。
全くその通りだったので、俺は笑った。

▼

午後の速い時間に王都を出て、近くの森まで出かけた。

これはアズリアの戦闘訓練と、俺の野営練習のためだ。
アズリアは学院での実習以外ではモンスターと戦ったことがないということだったので、今回実戦を行ってもらう。ある程度の個人練習を積んだ上で、俺たちの連携訓練に入る予定だ。集団戦では自分が出来ることと出来ないことを見極め、それに則した行動をとることが重要なので、アズリアには自分がどれだけの技量を持っているかを徹底的に理解してもらい、そのうえで俺たちとの連携を学んでもらうつもりだ。
俺は俺で、野営の練習というものをしている。危険地域から走破してきたニケはともかく、俺は野営の準備をしたことがない。あちこち出歩いてはいるけど、それは日程の短いものだったり、多少無理をすれば近くの街に駆けこんで宿をとることが出来た。そして道中にキースやダグといった熟練の冒険者が同行していたこともある。野営するとなれば彼らに任せっぱなしで俺はその準備を手伝うくらいしかしてこなかった。
しかし、危険地域に行くとなれば野営の知識は必須だろう。誰かに任せっぱなしだといざという時に対処できない。全員が共有して学んでおくべきだった。

アズリアの訓練にはニケに同行してもらい、俺はダグと一緒にベースキャンプを張る。
二泊三日の日程の、いわば遠征だった。

「ヒカル、それはずるいです」

俺の後ろに立って、ダグが言った。

「え？」

今は夕食の準備中。

なんとか天幕を張り終わり、王都で買い集めておいた食料や水を魔法の布袋から取り出している最中だ。

「なんでさ」

「野宿で、こんな豪勢な料理がありますか？」

訊かれて、見下ろす。

調理した肉料理をメインに、パンや野菜、さらにはデザートまで用意してあった。

地面に直置きというのが残念だけど、まあ、文句をつけられるような品ではないわな。

「ふむ。ちょい張り切りすぎちゃったかな」

「ではなく。その布袋に頼る姿勢がいけません」

「あ、やっぱり？」

天幕を張って薪を集めるのに苦労して、あいにく夕食の食材までは調達できなかった。

急遽魔法の布袋の出番となったわけだけど、やっぱり駄目らしい。

「もしそれをなくしてしまったら、どうするつもりです」

「と言われてもな。食材を集められなかったんだし、しょうがなくない？」

「……そう言う時、冒険者はどうするか知っていますか？」

「携帯食で済ます」

「それはそうですけど……ヒカルみたいに食材が集められなかった

者が、です」

ダグが言った。

集める方法ではなく、集められなかった場合の対処か。難しい。

少なくとも、合わせる顔はないよな。

そいつのせいで飯食えないんだもん。

「一つに、食事を摂ることができませんね。これは空腹時にパーティー内の雰囲気を悪くし、のちのちまで後を引く重大な問題を起こすことがあります。さらに、課された職務を全うできなかった責任があります。三つめを言うのなら、食事は翌日への備えと考え、その備えが不十分になってしまった責任もあります」

「責められることばっかか。フォローしてくれ」

「そうです」

ダグはポンと手を打った。

「仲間のフォローなくしては食事一つも満足にできないのが冒険です。これはいささかあざといのですが、食料を調達できなかったのなら仲間の擁護を期待した行動をとらなければなりません」

「ほう」

「もっとも、それを悟られてはならないのです。決して表に出さず、絶好の機会を捉えなければなりません。タイミングが悪ければ擁護してもらえませんからね。最低限払うべき注意とも言えます」

俺は頷く。

「そんで、どうすればいいの」

ダグは言った。

「一言、謝ります。精神誠意、申しわけないという気持ちを込めて。一言だけです。言い訳なんかはしてはいけませんよ」

「結局それかよ」

「重要なことです。うまくいけば事態の悪化は最小限で済むわけですから。食事が原因で諍いを起こし、それを戦闘まで引きずるというのは嫌でしょう？」

「……まあ」

確かに、そうだ。

空腹時にはただでさえイライラとするし、些細なことにも怒りやすくなる。

そういうのを何とか抑え込んで、少なくとも表面には出てこないようにするのが肝心なのだろう。

「もっとも」

「うん？」

「食材集めは複数人で分担しますからね。そうそう食いっぱぐれることはないのです」

そう言ってダグは天幕の裏へと回り込んだ。

数羽の野鳥をぶら下げて戻ってくる。

「ヒカルが食材探しに行っている間、私も調達しておきました」

「ダグ、おまえ――」

さすが現役の冒険者。

素人の俺が収穫なしなのを見越していたのか。

やるな。

「でももう夕食は準備したから、それいらないよ」
「そうなんですよね」
しょんぼりと肩を落とした。
「保存食とかにする？」
「では燻製にしましょう。作り方を知っていれば簡単です。覚えておきましょう」
「おー」
いいね。
野外で燻製作り。サバイバルってかアウトドアみたいだ。
「熟成とかどうなんの」
「明日食べるならそれほど味は変わりません。けど、普通の鶏肉とは違った風味を味わえるので美味しいですよ」
「よっし。早速作ろうぜ」
そう言って、俺は腕まくり。
ダグと一緒に焚き火を囲む石を組み始めた。

# ３４　二人で訓練。

森の奥に、少女の高い声が響いた。
その声は幾分の緊張を孕み、そして大きな闘争心も含んでいる。

「『霧弾（ミストボール）』ッ」

声の主は、アズリアだ。

倒木を盾に立ち回りながら、モンスターと相対している。
モンスターは死霊系の『動く鎧（フィアナイト）』。半ば朽ちた鎧と、折れた刀身。
シルエットは鎧を着込んだ人間に似ているが、人間では決してあり得ない角度から攻撃してくる。
ニケはともかく、駆けだし冒険者のアズリアにとっては強敵だ。

「『氷波動（アイスウェイブ）』」

遮蔽物を利用して距離を取りながらアズリアがスキルを行使した。
アズリアを中心に冷風が渦巻く。

「おっ」

ニケはアズリアが行使した『氷波動』のスキルに小さく声を上げる。
『氷波動』は『魔術師』クラスでは比較的強力な範囲魔法だ。そのためにＭＰ消費が大きく、ニケにはなぜ一対一の場面で使用したのかがわからなかったが、その効果を見て納得した。
『氷波動は』草木を凍てつかせながらフィアナイトを包み、濡れた関節部分を凍らせた。

動く鎧の動きが一瞬止まる。

致命的な隙だ。

「『氷槍（アイシクル）』！」

アズリアは白い息を吐きながら杖を前方へと突き出した。

キン、キン――

鋭い音を幾つも立てながら、突如地面に巨大な氷柱が現れた。

氷柱はフィアナイトの足元から、空へと向かって伸びている。まるで逆さに生えたツララだ。

『Ｇｙａａａ！！』

フィアナイトは体の半分以上を氷柱に飲みこまれる。

辛うじて動くらしい右腕と頭を散々に動かすが、氷柱はビクともしない。

やがて、力なくだらんと頭が垂れた。

「――」

「おぉー。一人で倒せたじゃん」

ニケはアズリアの傍に近寄り、そう言った。

危なくなったら手を出すつもりだったニケは、アズリアの手際の良さに拍手を送って讃える。

「いや、失敗した」

しかしアズリアは首を振りながらニケに答えた。

「ん？　そうなん？」

なかなか鮮やかな手並みだと、ニケは安心して観戦していられた。
実際にモンスターを倒してもいるので十分に及第点だ。
ただアズリアはそう思っていないらしく、ニケの疑問の声に、うむと頷いた。

「つっても上手い戦い方だったじゃん。あれ、『霧弾』の水を『氷波動』で凍らせたんだろ」

モンスターに着弾した『霧弾（ミストボール）』は少量の水気を含んでいて、それが凍ったことでフィアナイトの動きを妨害した。
ゲーム時代にはありえなかったコンボだ。

「『氷波動』は最近使いこなせるようになったから自信はあったのだ。でも『氷槍』はまだ駄目だな」

アズリアが言うと、地面に生えていた氷柱がバキバキと音を立てる。
二人の目の前で、あっという間にバラバラに崩れた。

「ほら、すぐに壊れた。もろいんだ」
「攻撃魔法だからな。ダメージ与えりゃ効果が切れるだろ。――いやしかし、長続きするなら足止めとか盾代わりとかに使えそうな感じで、かなり応用が効きそうではあるが……うぅむ」

ニケは唸った。

▼

ニケとアズリアはヒカル達とは別れて戦闘訓練をしていた。実習以外でモンスターと戦ったことのないアズリアに手っとりばやく実戦を学んでもらうためだ。

もともとアズリアは魔法学院で実戦形式の実習を行っていたので、何度か戦闘をこなすと動きが格段に良くなった。

それはニケがあまり手を出さなくとも敵が単体ならアズリア一人で何とか勝利できるほどだ。

「やっぱり――強くなっているな……」

などとアズリアは首をかしげていたが、振り返ってみるとアズリアは復活したポラリスとバハムートの再討伐に参加している。彼らの経験値を習得したはずなのでその影響だろう。

今の世界の水準で言えば、アズリアはかなりの実力者と言えた。

「最近使えるようになった魔法は？　もう慣れた？」

キャンプへの帰り途にニケはアズリアに尋ねた。

ニケはアズリアが新しいスキルを練習していたことを知っている。

実戦で見たのは今日が初めてだったが、アズリアにしても実戦で使ったのは今日が初めてだ。慣れるには時間が短いとも思えたが、この種の『慣れ』は重要なことなのでニケは一応確認をとった。

「『氷波動』と『氷槍』だな。練習では扱いきれるのだが、実戦だ

とどうも上手くいかないな。多分緊張しているせいだ」
「ふーん。――使い勝手と、どんだけ消耗するかは把握した？」
範囲と威力、それに消費ＭＰのことだ。
自分が使えるスキルを熟知していなければ戦闘を有利に進めることは出来ない。
それを知り、アズリアが戦闘でのペース配分を把握すること。
今回の遠征の目標でもあった。

「おおよそは」
「へえ」
「万全の状態で『氷波動』は７、８回、『氷槍』は１２、３回くらいかな。休憩しながらならもっと回数は増えるだろうが、一つの戦闘ではそれ以上は行使できそうにない。あと、連続しては使えない。同じ魔法を続けて行使するには１０秒から２０秒くらいの時間が必要で、『氷槍』の方が長い」
「ほう」
「この時間は訓練で短くすることも可能だろうが実戦向きとは言えないかもしれないな。他の魔法を続けることで時間を埋めようと思うのだが、どうだろう？」
「いいね。ベストだ」

アズリアの考えはゲームならセオリーだろう。

「『術後硬直』――あ、魔法行使直後の『隙』みたいなものなのだが、それも長い」
「ふうん？」

エリュシオンではスキルの『再使用時間』のほかにも、『発動時間』――コマンドを入力してから実際に効果が現れるまでの時間と、

『発動後硬直』――行動後の隙が設定されている。

アズリアが言っているのは『発動後硬直』のことだ。

『発動後硬直』とはコマンドの無効時間のことで、この間は『緊急回避（ローリング）』以外の動作が取れない。『緊急回避』はプレーヤーの意思に因らない確率発生の行動であることを考えると、『発動後硬直』はプレーヤーがキャラクターを操作することができない無防備な時間ともいえる。さらに『発動後硬直』はスキル使用後以外にもあらゆる行動の後に設定されていて、例えば移動時のジャンプ後にもコンマ数秒、『緊急回避』後にも1秒近く存在する。

ニケやヒカルくらいになるとこの『発動後硬直』にも敏感になる。高レベルクエストではたった数秒で生死が分かれる場面が多々あるからだ。

「『術後硬直』は訓練でもどうしようもないもの、と言われているな」

『再使用時間』は装備やスキルの熟練度によってある程度は短縮することが出来たが、『発動時間』と『発動後硬直』は短縮する方法が限られている。

例えばヒカルが装備している『朽ちゆく機工神の腕』や『朽ちゆく機工神の心臓』、ニケが装備している両手斧『アイオーン』は『再使用時間』を短縮する強力なアイテムであり、それらは上位のクエストをこなすことで手に入る。しかし『発動時間』と『発動後硬直』は装備品による時間短縮はできない。唯一可能なのは、特定の職業が習得するパッシヴスキルのみだ。

「『術後硬直』を正確に把握しておいて、その場その場で魔法を組み立てて行くしかないだろう」

そう言ったアズリアに、ニケは驚いた。

『発動後硬直』よりも『再使用時間』のほうが圧倒的に長く、直接戦術に関わる。

初心者が『発動後硬直』を意識することはほとんどない。

「『光球』や『霧球』、『炎球』ではほとんど意識しないものだったから慣れるのに時間がかかりそうだ。大体『氷波動』で3秒、『氷槍』で2秒くらいかかる。一応ニケも覚えていてくれ」

「すげえな」

アズリアの考えにニケは修正すべき点を見つけられなかった。

ニケはアズリアを単なるサポート要員と考えていたが、鍛えればかなり頼りになりそうだ。

▼

アズリアと連れだって歩いている最中、ニケが立ち止まった。

背中に吊ってある戦斧を手元に引き寄せ、「お」と声を上げる。

「……ニケ？――敵か？」

アズリアも杖を構えながら言った。

ニケは、本人も仕組みは理解していないのだが、遠くに離れたモンスターの位置を大まかに察知することが出来る。

これは実は、ゲーム時代に設定していたパッシヴスキルの効果だ。
ヒカルの考察によれば戦闘で使用するスキル、つまり『アクティブスキル』は封じられているのだが、装備していた常時発動型の『パッシヴスキル』は今も生きているらしい。
ニケとヒカルはしばらくステータス画面を確認していないために自分たちがどのパッシヴスキルを設定しているか正確にはわからなくなってしまっていたが、一応の検証作業は進めていくつかは判明している。

ヒカルは『流動』『威圧』『察知』を装備していて、ニケは『流動』『衝撃』『察知』を装備している。

『流動』は行動後の『発動後硬直』をパーセンテージで短縮。
『威圧』は敵に消極行動を強いる。
『衝撃』は攻撃命中時に確率で敵を少し後方に吹き飛ばす。
『察知』は敵を探知。

今回のニケの行動は『察知』によるものだ。ゲームならばミニマップにモンスターの位置が光点で表示されるのだが、今の世界では『気配』を感知するスキルとなっていて、メニュー等のゲームシステムが使用できない現状でも問題なく使える便利なスキルである。
森に入ってからの訓練中も発動していたので、アズリアもニケが何らかの特殊技能を備えていることを察している。
今も黙ってニケの返事を待っていた。

「敵だな。――なんか、変な動きしてんな」

と、ニケは首をかしげた。
今まで感じていたモンスターの気配は一定の速度で移動していた。
しかし今回は移動速度が速く、しかも一定ではなく動きに緩急があ

る。
急に立ち止まったり、唐突に動きだしたり。
「……。あ、そっか。戦闘中か」
戦闘中なら動きが一定でないのが理解できる。止まるのは攻撃を受けたからで、動き出すのは反撃に出たからだろう。
止まっている時間が短いので、モンスターと戦っている者は結構苦戦しているのかもしれない。
ニケは森の奥へと目を向けた。
目を向けた先は今まで2人が訓練していた場所とは全く違う、森の深部方向だ。
「あっちか？」
アズリアがニケに尋ねた。
「だな」
「距離は？」
「割とある。ちなみに単体」
「――どうする？」
杖を握りなおしてアズリアが言った。
どうするとは、戦うか否かを訊いている。
訓練に来たのだから戦ってもいいのだが、今日はずっと戦闘していた。ニケはともかくアズリアには体力に余裕があるわけではない。
そう考えてニケは「やめとく」と答えた。
「なぜ？」

「なんでって――そりゃ、人の獲物を横取りしちゃまずいだろ」
「人？　戦闘しているのか？」
「おう。良くはわからんが、苦戦してるっぽいな。こう……つかず離れずで追いかけ回されているような感じがする」
「……手を貸すべきではないか？」
「いや――」

苦戦しているのか、作戦か。
それはわからないが、ここでニケたちが出ていくのは余計なお世話というものだろう。
ニケはこの世界がゲームにはない『現実』の重みがあることすでに理解しているし、そのことによって温度差も感じている。

冒険も戦闘も命がけ。

そういう現実の中で生き、日々の生活の糧を得ているタフな連中が『冒険者』なのだ。ニケはゲーム時代の気楽さでもって彼らを手助けするべきではないと思う。

「いいさ」

負ける前に逃げる。逃げきれなければ死ぬ。

単純で当たり前のルール。
この世界の住人なら言うまでもなく理解している事柄。

「助ける理由もねえし、義理もない。死にたくなきゃ逃げるだろ」
「それはそうだが――しかし」

アズリアが何か言いかけた時、

「――！」

森の奥から悲鳴が聞こえた。

## 35　二人で訓練。（2）

悲鳴を聞いて、ニケは素早く反転。森の奥へ向けて駆けだした。
慌ててアズリアもニケを追う。

「ニケ！　手助けしないのではなかったか！？」
「前言撤回！　女子は全力で助ける！」

先ほど聞こえた悲鳴は女性のものだった。
アズリアは上げていない。ということはアズリア以外の女子ということで、つまり女性の冒険者がいるのだ。

「わははっははは！　最近はヒカルに妨害されてたからなぁ！？
おい！」
「な、なにをだっ？」

妨害されていたのはパンチラ観賞だ。
実際には『ＰＡＮＴＳｅｒ』の経営業務を放り出して通りに繰り出そうとするニケを、ヒカルが仕立屋と一緒になって引き止めていただけなのだが、ニケにとっては大事なライフワークを禁止されて日々鬱憤が溜まっていた。
最近は遠征準備に忙しかったし。
身近にいるアズリアはアンダースコート標準装備だ。
それはそれで素晴らしいものなのだが、ここらでパンチラ成分を補給したい。

「アズっちィ！　良く見ておけよ！　これがパンツァーの戦いだぜ！？」

「パンツァーってなんだ！」

アズリアの言葉に、ニヤリとニケは笑った。

「オレの背中を、見て学べ……！」

▼

ニケが勢いで開店した店『ＰＡＮＴＳｅｒ』を訪れた訪れた少女、エリカ。

エリカは王都にある上級学校の生徒だ。

上級学校とは１２歳で卒業する幼年学校の次に入学する教育機関であり、そこでは中等教育と初期の高等教育を教え、さらに兵科まで備わっている。

幼年学校は初等教育を教えている機関で、学費が無料。適正年齢に達した子供はほとんどが幼年学校へと通い、学校を卒業したものの大半は見習いとしてそれぞれの職業に就いて働き始める。

上級学校を出れば国に役人として雇用されることも可能なため、上級学校への入学は一般階級の憧れだ。しかし上級学校では幼年学校では無料だった学費が必要で、その額も安くはない。さらに入学には幼年学校の校長の推薦が必要なので、通うことができる者は限

られていた。

つまり上級学校生とはエリート、またはエリート候補生の集団だ。

特に上級学校での成績が優秀でありその推薦がある者は、王国の最高学府である魔法学院への進学も望むことが出来た。

「ハァッ――ハァッ――！」

森を疾駆している冒険者の集団。

その中にエリカがいた。

エリカたちは上級学校の学生同士でパーティーを組み学校の課題のために森を探索していたのだが、その最中に遭遇したモンスターに敗れて敗走中だ。

学校の兵科を通して基本的な実戦技術を身につけているものの、出会ったモンスターが強すぎた。

出会ったのはヒポグリフ。

鷲の頭と翼に馬の体。知能と気位が高く、『王都守護聖獣』とも呼ばれるヒポグリフの討伐はかなり高難易度だ。単体での高い戦闘能力に加えて短距離の飛行能力まで有しているため、一介の冒険者には荷が勝ちすぎる相手である。

人々の羨望の対象である上級学校生も、戦闘能力に関しては駆け出し冒険者以下だ。

エリカたちの手に負えるはずもない。

「エリカ、シンクッ！　一回押し返すぞ！」

リーダー格であるセルジュが走りながら言った。

「はあ！？」

「本気かよ！？」

エリカとシンクは併走しながら答える。

「この速度じゃ追いつかれる。けどユーノはこれ以上ペースを上げられないから、どこかでぶつかるしかない！」

ユーノはエリカ達のパーティーのメンバーで、魔術師だ。

飛行能力をもつ相手に対抗するには遠距離での攻撃手段をもつ『魔術士』や『弓士』が必要だ。通常なら彼らを後衛に配置し、前衛にはエリカ達のような接近職が当たる。

しかしヒポグリフとエリカたちの戦闘能力の差は隔絶していると言っていいほどで、そんな教科書的な戦術は通用しない。エリカたち前衛ではヒポグリフの攻撃を支えきれないし、ユーノの魔法もさして効果はなく、ほんの目くらまし程度だ。

なので勝つためではなく、逃げるために魔術師が不可欠だった。

「――はっ――はっ、ごめ――」

エリカの前を走っていたユーノが、体力を使い果たした青ざめた顔で謝った。

それを見てとったシンクが叫ぶ。

「――わかった！　オッケイ！　一回アイツ止めるぞ！」

シンクは腰から幅広の剣を抜いた。

「えぇい！　わかったわよ！」

エリカもヤケクソ気味に叫び、背負っていた盾を持ち直した。

攻撃役のシンクが行くとなれば、防御役であるエリカも出なければならない。ヒポグリフ相手ではエリカの防御技術はあってないようなものだが、それでもシンク一人で突っ込むよりはずっと良い。

エリカとシンクは学校でもずっとコンビを組んでいて、互いに連携訓練をしている。その連携に縋るしかない。

「セルジュ！　あんたカウントしなさいよ！」

「わかった。――カウントは3だ。3で俺たちが反転して攻撃。ユーノはその間に先行して、遠距離から攻撃してくれ。撤収の合図も頼む」

「うん――退くときは、『炎弾』を打つから……」

「タイミングはアイツが怯んだ時だ。それまで何とか持ちこたえるから、焦って打つなよ」

「わかった……」

よし、とセルジュは頷き、ユーノの背中を押しやって先行させた。

エリカたちは幾分速度を落とし、ユーノの背を追う格好で走る。

「エリカが先頭で突っ込むぞ。――絶対に初撃だけは防いでくれ」

「わかったから、さっさとカウントしなさい！」

「よし。――1……、2……」

3。
セルジュが言って、エリカとシンクが同時に振り返った。
すぐ向こう。
２０メートルほど距離を置いて、ヒポグリフ。
障害物が多いために飛んでこそいないが、かなりの速度だ。
――近い、というか速い！！
立ち止まったエリカたちと、走り寄るヒポグリフ。
互いの距離はすぐに詰まり、ヒポグリフの狂暴なプレッシャーに曝されながらそれでもエリカは盾を構えて前進する。
「――ッ！」
ドン！
と、ヒポグリフと前足とエリカの盾がぶつかった。
エリカは盾を肩に当て、さらには持っていた剣を放って両手を使ってまで防御姿勢をとったが、それでも体重と速度の勢いが上乗せされたヒポグリフの攻撃を受け切ることが出来なかった。
鈍く重い衝撃を感じつつ、吹き飛ばされる。
地面をバウンドし、何度も転がってやっと止まる。
「痛った……」
「エリカ！」
シンクが叫んだ。

吹き飛ばされたエリカと入れ違う形で、シンクはヒポグリフと向き合っている。

「――馬鹿シンク！　前！」

シンクがエリカに気をとられた隙に、ヒポグリフがシンクに体当たりをした。

剣で受けつつも力負けし、地面に押し倒される。

そのままヒポグリフが噛みつこうとしたが、シンクは剣の刀身をヒポグリフの口に挟み込んだ。

シンクは辛うじて、頭を食いちぎられることは免れる。

「――くッ」

エリカは反射的に立ち上がり、盾を前面に出してヒポグリフに突っ込んだ。

しかしその攻撃はヒポグリフにはじき返され、エリカはまたも地面を転がる。

「エリカッ！　逃げろッ！」

シンクがヒポグリフに押し倒されたまま叫んだ。

「ふ――ふっざけないでよ！」

エリカは泣きながら叫ぶ。

シンクが殺されてしまいそうで、エリカはパニックを起こしている。

ただ盾だけを構え、遮二無二ヒポグリフに突っ込んだ。

「馬鹿ッ、逃げろエリカ！　逃げろ逃げろッ！　逃げろ馬鹿エリカーッ！」

シンクの絶叫。

エリカはそれを聞きながらヒポグリフに突っ込み、今までにない強烈な衝撃に包まれた。

ヒポグリフが前足を振るい、その攻撃がエリカを直撃したのだ。

咄嗟に前に出した腕と、それでも庇いきれずに砕ける胸の骨の感触を感じながら、エリカは地面に倒れた。

その、視線の先。

白い骨が突き出した自身の腕の向こうに――

セルジュの後ろ姿が見えた。

▼

「見つけたぜ！」

草木を斧で切り払いながら走っていると、ニケは前方にモンスターと人影を見つけた。

一人がモンスターに組み敷かれ、もう一人が盾を構えて体当たり

をしている。
盾を構えている方は服装で女の冒険者だと知れた。

「よし、バックを取るぞ」
「わかった。迂回して、モンスターを後ろから奇襲だな」
「ちげえよ。戦ってる連中のバックを取るんだよ。基本だろ？」
「……。？？」

アズリアが首をかしげた。

「まあ、戦えばわかる。行くぞ」

ニケはアズリアに言い、身をかがめて進む。
気配を消しつつ最速で接近しようとした時、女冒険者が吹き飛ばされ地面を転がった。
数メートルほど転がって地面に倒れた時、女の冒険者の手はあらぬ方向へと折れ曲がっていて、そして動かなくなった。

「ちょっ――」

死んだのか？

まさかこんな場面に出くわすとは、とニケは絶句
さすがのニケでもぱんちらが吹き飛ぶ。

「あれは……」

アズリアが追いつき、ニケの後ろに身をひそめながら言った。

「ありえない。ヒポグリフだ……。王都を守護する聖獣が、なぜ人

を襲っている……」
「ヒポグリフ？　キメラじゃないのか？」
ぱっと見で、ニケはモンスターをキメラだと思った。
二メートル弱ほどの体高のモンスターは頭が鷲で体は馬。その組み合わせは正に合成獣（キメラ）だろう。ヒポグリフというモンスターは覚えがない。
「キメラ？　――いや、あれはヒポグリフだ。王都の四方に棲みつき、人間を守護する聖獣と言われている。金貨の裏にも彫ってあっただろう？」
「ああ、そう言えば――」
ニケはライオンだと思っていた。
ちなみに銀貨にはユニコーンが彫られていて、銅貨や補助通貨にもそれぞれ『聖獣』が彫られている。
「って、んなことより助けるぞ！　さすがにほっとけねえ！」
言って、ニケは駆けだした。

## 36　二人で訓練。（3）

ニケは冒険者を襲うヒポグリフに接近。倒れている冒険者に当たらないように斧を横薙ぎに振るった。
ヒポグリフは攻撃を察知し、冒険者を放ってニケから距離をとる。

「ニケ！　殺してはいけない！」

アズリアが鋭く叫んだ。

「なんでだ！」
「ヒポグリフは王都の『守護聖獣』だ！　彼が王都周辺のモンスター達を抑え込んでいる！」

討伐ではなく撃退しろとアズリアは言っている。
しかし、ニケには手加減できる余裕はない。
なにせニケが知らないモンスターだ。その強さは未知数で、もしかしたらニケに致命傷を与え得るほどのレベルかもしれない。

「却下だ。全力で行く！」

ニケはアズリアの言葉を無視し、ヒポグリフと相対した。
仮にニケが倒された場合、アズリア一人では抗しきれないだろう。
死なないまでも、ニケが戦えないほどの傷を受けた場合も同様だ。
全力で挑んで確実に倒す。

「――ッ！」

ニケはヒポグリフを一瞥し、すばやく観察。飛ばれたら厄介だと思ったニケは、先手を取るべく踏み出した。
しかしニケが踏み込んだのと同時に、ヒポグリフもニケに向かって飛び込んできた。

「!?」

ヒポグリフは翼を広げての大ジャンプ。低空飛行というよりは滑空といった形態だ。
ニケはヒポグリフの飛行能力を警戒して突っ込んだのだが、ヒポグリフの巨体が縦方向に加えて横方向へも移動するとは思っていなかった。
斧の攻撃を外し、その直後にヒポグリフがニケに向かって体ごと突っ込んでくる。

「くっそ!」

ニケは斧を引きもどし、ヒポグリフと自身の間に挟み込んだ。
斧の刃でヒポグリフの前足による一撃を防いだが、体重差によって地面に組み伏せられる。

『Ｇｙａａ!』

ヒポグリフが巨大な嘴でニケの顔を噛み砕こうとする。
ニケは必死に顔を背け、ヒポグリフの顔めがけて拳を叩きこんだ。
拳は正確にヒポグリフの側頭部を捉え、その巨体がよろめく。
ニケはヒポグリフと自分の体の間に脚をすべり込ませ、ヒポグリフを思い切り蹴り上げる。
武器を持たない接近戦での戦闘能力はヒカルに及ばないまでも、それでもニケは１００レベルであり、身体能力が補正されている。

ヒポグリフを大きく蹴り飛ばした。

「『霧弾！』」

アズリアの援護だ。

ヒポグリフがニケから離れたのと同時に、魔法が次々に命中する。

ダメージはそれほど与えていないようだったが、攻撃を嫌ったヒポグリフがニケから離れ、今度はアズリアに向かって突進した。

「待てや！」

ニケはすぐに起き上がり、ヒポグリフの後ろ足を掴んだ。

力任せに引っ張ってバランスを崩し、その隙にヒポグリフの羽に組みつく。

短い攻防で、ニケはヒポグリフの攻撃力と防御力が大した脅威ではないことを見抜いた。

しかし先ほどの移動には不意を突かれた。

つまりヒポグリフの脅威は機動性で、特に翼による滑空移動だ。

翼を失くしてしまえば危険度は下がる。

「おおッ！！」

ニケはヒポグリフを足で踏みつけ、片手で翼の先端を掴んだままその根元に斧を叩きこんだ。

バキン！

硬質な音を立ててヒポグリフの翼を断ち切り、さらに斧は体を半ばまで切り裂く。

『ＧＹｙｙＡＡＡａａａ！！』

ヒポグリフの絶叫。

「っと！」

翼を切り取られたことで、ニケの拘束から抜け出したヒポグリフが暴れる。

飛行能力は奪ったが狂暴性は増した。

危険度が本当に下がったか怪しいところだ。

「『氷槍（アイシクル）！』」

ニケが怒りに狂ったヒポグリフの攻撃を避けつつ反撃していると、再度アズリアの援護魔法が行使された。

霜が降りたように地面が凍りついていく。

「ちょっ……！」

なにが起きるか咄嗟に理解したニケはバックステップで距離をとる。

ヒポグリフはニケに追撃を仕掛けようとしたが、一瞬遅かった。

突如現れた巨大な氷柱にヒポグリフの体の半分以上が飲みこまれて、その動きが強制的に止まる。

「アズっち！　あぶねえだろ！　オレの動きを読んだ上で狙ってやったならナイスアシストだけども！」

「ならナイスアシストの方だ」

「うっそお！？」

どんな動体視力だ。
本当ならばゲーム時代のヒカルや、ギルマスであるガゼルのプレイを彷彿とさせる。

「それよりニケ、退こう！　私の魔法ではいくらも足止め出来ない！」

たしかにアズリアの攻撃では足止めは出来ない。
なぜなら『氷槍』は高威力単体攻撃で、瞬間ダメージは大きいのだが効果は一瞬。対象を攻撃した氷柱はすぐに崩れる。
氷の中に閉じ込めることでの足止めが長続きしないのは、これまでの訓練でもわかっていたことだ。

「いやでも……死んでんじゃねえ？　これ」

氷柱に埋もれているヒポグリフは、首をだらんと垂れ下げたまま動かない。

「……なんだと？」
「いやほら、動かねえしよ。――まあ、オレも結構攻撃当てたし、アズっちの魔法もあったからな。『氷槍』とか、割と大技なんだろ？」

ニケがアズリアに振り向くと、アズリアは呆然としていた。
ポカンと口を開け、自分が作り出した氷の塊をじっと見つめる

「いや……いやいや。『王都守護聖獣』だぞ？　今ので倒せるわけが――」

アズリアにしてみれば、『聖獣』ヒポグリフは絶対強者だ。
王国の建国史にも登場するし、昔話にも出てくる。アズリアも小さな頃から聞いていたので、物語の中のモンスターという認識がある。そして具体的な現実でも、彼らが王都周辺のモンスターを適度に間引いているおかげで人間は平和に暮らせいる。
アズリアを含めた多くの人間にとってヒポグリフとは、倒す倒せるの次元のモンスターではなく、『聖獣』という象徴として存在するのみで実態を持たないモンスターであり、不滅の存在なのだ。

しかしニケはそんなことは知らない。

クエストモンスターはともかく、ニケは低レベルのフィールドモンスターなら大抵は一撃で倒せる。それを考えればヒポグリフはかなりの高レベルではあったが、１００レベルの自分の攻撃を何度も喰らったのだから死ぬのも当然だと思えた。

「つっても、微動だにしねえしなあ」

ニケが無防備にヒポグリフの顔へと手を伸ばした。

『――ッＧＹＡＡＡａａａａａ！』

突然の、ヒポグリフの咆哮。

「うわ！？」

ニケは驚き、反射的に斧を振るった。

ズバン！

と、斧はヒポグリフの首を切り落とした。

▼

「あ……」
「――ちょッ」

ゴロゴロと転がるヒポグリフの頭を見て、アズリアが絶句する。

「……」
「お、おい――ニケ……」
「……」

何か大変なことをしてしまったということは、ニケにもわかる。
それでどうなるのか、ということまではわからないが。

「首が……」

呆けたようにアズリアが言い、地面に座りこんだ。
やはり取り返しのつかないことをしてしまったのだ、とニケは思

うものの、どうすべきかはわからない。
ただ、アズリアになにか言わなければならないと思った。

「いや、まあ。――良く考えりゃ、あと三匹はいるっぽいし、大した事でもないよな？」

ニケは言った。

「えぇ！？」
「そんな大騒ぎするほどでもねえよな？　あと三匹いるんだし」
「大事（おおごと）だ……」

前例はないが、ヒポグリフが殺されたと知れれば王国が動くだろう。
軍か、もしかしたら騎士団が犯人探しに動くかもしれない。

「いやいやいや。まだ三匹はいる訳だし、今すぐどうなるってわけでもねえだろ」

ニケが言うと、アズリアが考える仕草をした。
アズリアにとってヒポグリフは実態を持たなかったモンスターだっただけに、死んでしまったことが大変な事態であることが理解できてもその実感が湧かない。

「――。まあ、それはそうだろうが……」
「だろ。――ってか、そういうことにしとこうぜ。ここで騒いでもどうにもならんわ」
「……そうだな」
「今は他にすべきことがある」
「うん？」

首をかしげるアズリアに、ニケは言った。

「人命救助」

ニケはヒポグリフの死体の向こう、地面に横たわる冒険者へと視線を向けた。

手が変な方向に曲がっている女の冒険者と、体を食いちぎられた男の冒険者。

彼らが生きているかはわからないが、彼らを助けるつもりでヒポグリフと戦った以上、なんとか生きていてほしいところだ。

「運ぶ前に一応、回復薬使ってみるか」

「……さすがに、あの様子では気おくれするな」

歩きながら、アズリアは特に男の冒険者を見て言った。

男の冒険者はヒポグリフによって上半身をあちこち食いちぎられていて、白い骨や内臓などが見え隠れしている。

あまり物怖じしないアズリアだが、その光景には血の気が引いた。

「じゃ、アズっちは女子の方見てやってくれ。これ、回復薬な」

「うむ」

ニケから回復薬を受け取り、アズリアは女の冒険者の方へと歩いて行った。

# 37　訓練の後。（1）

ダグと一緒に燻製作りをしていると、森から物音が聞こえた。
人の話し声と、草木を踏み鳴らしながら走ってくる音だ。

「なんだ？」

首を伸ばして見ていると、森から若い男女が2人で駆けてきた。
男は切羽詰まった表情で、女は顔をぐしゃぐしゃにして泣いている。

「若い男女に、人気（ひとけ）のない薄暗い森。まさか濡れ場――てか、あの様子は修羅場か？」
「……どうでしょうね。――おそらく、冒険者が戦闘に敗れて逃げて来たのではないのですか？」
「ふーん。でもここって弱い敵しか出ないんじゃないんだっけ。守護聖獣がいるとか何とかで」
「積極的に襲ってくるモンスターがいないだけです。攻撃すれば反撃されますし、中には戦闘能力の高いものもいますよ」
「へえ。んじゃ、ケンカ売って負けたわけか」
「さあ」

ダグはちらりと男女の方に目をやり、すぐに火の番に戻った。
煙の量が気になるらしい。
燻製はダグに任せとけば間違いないだろうと思い、俺は男女の冒険者へと手を振った。
冒険者たちがこちらに気付き、走ってくる。
若いというより、幼い。

少年と少女という言葉がぴったりの冒険者たちだった。

「なんかあったのか？」

俺がそう声をかけると、少年の冒険者は顔をしかめ、少女の冒険者は泣き崩れた。

なんだろう？

その様子が気にはなったけど、俺はとりあえず彼らに回復薬を手渡した。

あちこち傷だらけだ。

特に少年の方の傷が酷い。

「あ、ありがとう――ございます」

そう言って少年は回復薬を体にぶっかける。少女は泣きながら飲み下した。

「なにかあったのですか？」

ダグがやってきて言った。

「……モンスターに襲われました。ここも危険だ」

「モンスター？　相手はなんです」

「……」

少年は黙り込む。

ダグと俺は顔を見合わせ、首をかしげた。

「ヒポグリフ、です……」

回復薬の空き瓶を抱えたまま俯いていた少女が言った。

「ユーノ！」

少年が少女を叱責するように怒鳴った。

少女はユーノというらしい。

「でもセルジュ……」

「いいから、なにも――」

セルジュと呼ばれた少年はさらに何か言おうとしたけれど、俺とダグは無視してユーノに話しかける。

「ヘイ。ヒポグリフってなんのこと？」

「えっと……」

ユーノは言いあぐねてセルジュを見上げ、そこにダグが補足した。

「守護聖獣の一体ですよ、ヒカル」

ああ。例のアレか。

滅茶苦茶強い設定のモンスター。

俺の知っているのではユニコーンがそうだ。

この世界の住人達はありがたがっているみたいだけど、実際はゲーム時代にプレーヤーに使われていたモンスターである。

そういえばヒポグリフも、ユニコーンみたいに移動用アイテムとして何かのクエストで入手できた気がする。

役に立つ特殊能力がなにもない上に『飛行』という性能も微妙なので、あまり使いどころはない。

今なら飛行性能は役に立ちそうではあるが……。

ゲームの倉庫に預けっぱなし。現状では引き出せない。

「しかし、ヒポグリフに限らず守護聖獣は人を襲うことはありません。何かの間違いでは？」

「それは……」

ダグが言うと、ユーノは再び俯いた。

「間違いでないとすれば――ヒポグリフに対して礼儀を欠く振る舞いで接したか」

「……」

ユーノは黙り込み、セルジュが舌打ち。

どうやらダグの言っていることは図星らしい。

しかしモンスター相手に礼儀とか、どういうことだろう。

「礼儀を欠くってどういうこと？」

俺はダグに訊いた。

「ヒポグリフは気位の高いモンスターだと言われています。人を守護しますが決して懐かず、モンスターでありながら礼節を知るとか。接するにあたっては相応の態度で臨まなければいけません」

「へえ。めんどくさいな」

モンスター様ってか。
わけわからん。

「で、ヒポグリフの機嫌を損ねて追いかけ回されてたのか」

俺がセルジュを振り向くと、セルジュはクッと顎を持ちあげた。
気が強いようだ。

「災難だったなあ」
「いえ……」
「でもまあ、逃げきれたっぽいし、良かったじゃん。次から気をつけろよ」

と、俺が慰めるとユーノは泣きだし、セルジュの顔が曇る。

「良くない。仲間が2人やられた」
「……」

……。

「逃げきれたかどうかも、正直わからない。――だからここも危険だ。あなたたちも移動した方がいい」
「うーん」

セルジュはそう忠告してくれたが、俺はあいまいに答えた。
モンスターのヒポグリフがどの程度強いのかはわからないけど、入手クエスト自体はユニコーンのそれよりは低いと記憶しているので間違いなく80レベル以下だ。ダグはともかく、俺が太刀打ちできないってほどではないだろう。
そして何より、森にはニケとアズリアが入っている。

勝手にキャンプを移動させることはできない。

「まあ。俺らのことはおいて置いて、そっちはどうする。なんなら俺らと一緒にいるか？」

「俺たちはこのまま森を抜ける」

そう言って、セルジュがユーノを掴んで起き上がらせた。

ユーノの顔はまだ真っ青ではあったがセルジュの手を借りて立ち上がり、それから自分の足でしっかりと立つ。

「あの、回復薬ありがとうございました……」

「うん？　気にすんな。――それより道中気をつけてな。送ってやれたらいいんだけど、実は森の中に仲間が入っててさ」

俺が気になっているのは主にそれだ。

といっても、ニケたちを心配しているわけではない。

訓練目的で探索をしているニケたちがヒポグリフに遭遇したら、どうするか。

多分、アズリアのレベルアップのためにニケは喜々として狩るだろう。

「あいつらがヒポグリフ倒す前に、なんとか回収しないと……」

実感は湧かないけど、ヒポグリフは『王都守護聖獣』とか言われて有難がられているっぽいし。

放っておいたら面倒事になりかねない。

「え……？」

俺の言葉に、ユーノが目を丸くした。

「ダグ。燻製作りは中断してニケたちを迎えに行こう」

「そうですね。――守護聖獣相手でも、ニケならやりかねないところが怖い。アズリアが上手く引き止めてくれているといいのですが」

言いつつ、ダグは火の始末をつけて森に入る準備をする。

「あんまり期待はできないな。てか、ニケ相手じゃ誰でも無理だ」

俺も外套を着込んだ。

ダグと違って、俺は普段着のコスチュームそのものが強力な防具なので準備は一瞬だ。

後は手甲をはめれば、それでおしまい。

「あの。私たちの話、信じてないですか……？」

俺を見下ろしつつ、ユーノが言う。

「ヒポグリフが、いるんですよ。それなのに森に入って行くなんて。もうすぐ日も暮れるって言うのに……」

ユーノは俺とダグの様子を見て、自分たちの話を信じてもらえなかったと思ったようだった。

「まあ、信じてないってわけじゃないな。――うん。用心はしていくけどさ」

ガツンガツンと手甲を打ち鳴らす。

そうしながら俺は、疑うことなくユーノ達の話を信じてしまった自分に気がついて愕然とした。
ユーノ達がウソを吐いているとは全く思えないけれど、可能性としてそれに思い至らないこと自体が、つまり冒険や戦闘への不真面目さとか油断と言えるのかもしれない。

ちょっと、気が緩んでいた。
これは気を引き締めなければ。

「……私も、行きます」

俺がそんなことを考えていると、ユーノが言った。

「ユーノ!?」
「エリカとシンクが森の中だし。もしかしたら、まだ無事かもしれない」
「もう手遅れだ！　俺はシンクが逃げ遅れてヒポグリフに組み伏せられたのを見たんだぞ！」
「でも……」

ユーノはセルジュから視線を外し、まっすぐに俺を見る。

「私達の仲間が、まだ森にいます。――助けてくれとか探してくれなんては言えないんですけど……私も連れて行ってください。おねがいします……」

油断も慢心もない、ただ決意を湛えたユーノの瞳に見つめられて俺は――

「お、おう」

思わず頷いた。

▼

気を失った女の冒険者に一通りの手当てを施すと、ニケはその冒険者の顔が見知ったものであることに気がついた。

まさかと思いつつスカートをまくり上げて確認すると、『ＰＡＮＴＳｅｒ』製装備パンツを装備している。

女の冒険者は、少し前に店を訪れた少女――エリカだった。

「……」

ニケは背中に気を失ったままのエリカを背負い、片手で斧を持っている。

男の冒険者は、結局助からなかった。ニケが手当てしようと近寄るとすでに息がなく、それどころかヒポグリフに食いちぎられていて顔がなかった。

放っておくのも気が引けたので冒険者をその場で埋葬し、ついでにヒポグリフも地面に埋めたのち、ニケたちはヒカルと合流すべく黙々と歩いている。

斧で草を刈り取っていると、後ろからアズリアが声をかけて来た。

「ニケ。その娘とは顔見知りなのか？」

「まあ、そうだな。顔見知り以上、知り合い未満。変な縁で一回会っただけ」

「店に来たのか」

「……。で、装備ぱんつを売った」

いや、あげたんだっけ。

ぼんやりとニケは思った。

「――それで何か、引け目とか負い目みたいなものを感じているのか？　私はその場にいなかったからどういうやり取りがあったのかはわからないのだが、ニケが気にする必要はないと思うぞ」

「別に感じてねえよ。そんなん感じるほどの仲良しでもねえし」

「では、無茶をしたその娘の事を怒っているのか？」

「怒ってねえ。そんな義理はねえ」

「ならなんで、そんなに気が立っているのだ」

「立ってねえ」

よいしょ、とニケはエリカを背負いなおした。

エリカは今のヒカルと同じくらい小柄なのだが、妙に重い。それは彼女が接近職用の重装備だからというわけではなく、背負う側のニケに問題がある。

ニケにとってエリカは、本当に顔見知り程度の仲だ。

店で一回会っただけで会話もそれほどしていない。親しくなる時間などなかったし機会もなかった。
だから別にエリカの事を心配しているのではない。
そして当然、装備パンツを売ったことを後悔しているわけでもなかった。

「コイツさ。あの男の冒険者を助けるためにヒポグリフに挑んで行ったのかな……」
「私たちが見た時は、そのように見えたな」
「ガッツあるよな。ちっちぇーのに」
「別に体の大きさは関係ないだろう」

そうなんだけど、とニケは言った。

エリカは小さい。

こんな小さな体で、自分の倍も大きさのあるヒポグリフに向かっていくのはどれほど怖かっただろう。
あんなにボロボロになって、恐怖はなかったのか？
腕から骨を突き出させて、痛みは？
そしてその結果は？

小さな体を傷だらけにしてニケに背負われているエリカのことを思うと――

ばかだなあ、と思ってしまう。

エリカ本人はよほど悲壮な決意を抱きながら戦っていたのだろうが、ニケにしてみればそれは全く共感できるものではなく、結末は呆れて失笑してしまうほど滑稽に感じる。

弱いくせに戦うなよ！

それで冒険者とか、ギャグ？

つか、あのモンスター相手に苦戦とか、明らかに実力不足だろ。

調子乗り過ぎ。

エリカの体重を背中に感じながら、そんな言葉が浮かんでは消えていく。

ニケのこの心情は、この世界を『ゲーム』として認識しているからではなく、来た当初の危険地域での生活が原因だった。

絶え間なく襲いかかってくる高レベルのモンスターに、減る一方の体力。

ヒカルにはおどけて言ったが、実際は空腹を紛らわすためにモンスターの肉を食べたし、水着を失い全裸で過ごすという屈辱も受けた。

そしてそんな生活の中で、ニケは圧倒的な戦闘能力でもって多数のモンスターたちを狩り、生き残った。

耐え難い絶望感に、閃光のような生の実感。

そうやって、ニケは心のバランスを崩したのだ。

「でも、すげえよなあ。ちっちぇーのにさ」

ニケは繰り返す。
エリカに対する感傷を全く感じていないニケはそうやって言葉を吐いていないと、怪我を負ったエリカや死んでしまった冒険者に対する暴言を言ってしまいそうになるからだ。

「ニケ。あまり気にするな」

アズリアが言い、ニケは笑った。

「してないって。ただ、感心しただけだ。ちっちぇークセに格上相手に向かっていくなんてすげえなあって」
「……そう」
「まあ、スゲエ以前に馬鹿なんだけどな。それでこんな大怪我したんだからドジとしか言いようがないわけだが」
「……そうか」

ニケ自身、自分の心の不均衡さは感じ取っていた。
なんとか矯正させようと常々心がけ、また他人に察せられない様に普段から道化を演じているおかげで、そのことには誰も気が付いていない。

今も普段と同じように振舞うことを心がけているのだが、むしろその態度が、アズリアにかすかな憐憫を感じさせた。

## 37　訓練の後。（1）（後書き）

こういうお話が、もうちょっと続きます。
二章はこのお話で終わりそうな……

# 38　訓練の後。（2）

同行を願い出たユーノと、森に入ることを未だに納得していないセルジュを引き連れ、ニケたちを探して歩く。
俺が先頭で、真ん中にユーノとセルジュ、後衛にはダグを配置した縦列だ。
なので気付いたのは俺が一番早かった。

「あ――おい！　ニケ、アズリア！　こっちこっち」

とぼとぼと歩くニケたちを見つけて俺は声を上げた。
2人が俺に気付き、小走りにやってくる。
見ると、ニケが何かを背負っていた。

「誰それ？」

ニケが背負っていたのは赤毛の少女だ。
声をかけても身動きしない。

「エリカ！？」

と、俺の後ろにいたユーノが悲鳴を上げてニケに駆けよる。
ニケが背負っているエリカと言う少女がユーノたちが探していた人物のようで、セルジュも顔を青くして続いた。

「あ、探してた人なの？　良かったじゃん」
「エリカっ！　ねえって……！！」

聞いちゃいねえ。

ユーノから事情を聴くのは無理だと思った俺は、ニケに声をかけた。

「なんかあったの？」

「いや、ヒカルこそなんかあったのか？　こいつらなんなんだよ」

ニケはユーノとセルジュに胡乱気な視線を向けながら言った。

「森から逃げてきたとこを保護した。お前が今背負ってる子の知り合いっぽいよ」

「そうなん？」

俺が言うと、ニケはユーノ達に向きなおる。

ユーノが頷くのを見て、ニケはエリカと呼ばれた少女を下ろした。

「眠ってる。結構ひどい怪我してるから、そっとな」

「――眠ってないわよ……」

呟くようにエリカが言った。

その言葉にニケとアズリアが驚く。

「あ？　起きてたのかよ。――喋っても平気か？　肋骨折れてたけど、痛くないか？」

ニケはぺたぺたとエリカを触った。

「――平気」

「手ぇ貸すか？」
「いらない」

そう言って、エリカは自分で地面に立つ。
ふらふらと立つエリカに、アズリアが訊いた。

「いつから気がついていたのだ？」
「――最初からよ」
「最初？」
「そう。『最初』から」
「……そうか」

アズリアは低くつぶやき、そのまま黙る。
ニケもなにやら事情を知っているらしく、髪を掻いてため息を吐いた。

三人の会話はそこで終わり、入れ替わるようにユーノが言う。

「エリカ！　よかった……！」
「――ッ！」

飛び付いたユーノを、エリカは払いのけた。

って、え？
なになに？
なんなの？

「え――」

ユーノは呆然とエリカを見つめ、エリカはユーノを無視してセルジュを睨みつける。
こぶしを『ぎゅっ』と握り、絞りだすように言った。

「どの面下げて――戻ってきてんのよ」
「心配は、していた」
「よく言う……！」

吐き捨て、エリカがセルジュに向かって駆けた。
走りざまにユーノから杖を奪い、勢いをつけてセルジュに振るう。

「！」

セルジュはエリカの攻撃をかわして距離をとる。
その距離を保ったままセルジュはエリカに言った。

「話を聞いてくれと言っても、無理だろうな」
「無理。殺してやる」

言って、エリカは再度杖を振りかぶった。
セルジュはそんなエリカを迎撃しようと、剣を構えて前傾姿勢をとり――

俺とダグがセルジュを羽交い絞めにして、ニケとアズリアがエリカに組みついた。

「離せっ！　離しなさいよ！」

「と、言われもなあ」

ニケがエリカに組みついたまま俺へと視線を向ける。

俺は頷く。

よく事情はわからないけれども。

なんか切迫しているっぽい。

ここは力ずくだ。

「とやかく言う気はないけど、複雑な事情なら自分らだけの時に解決してくれ。とりあえず今は落ち着こうぜ」

俺はギリギリとセルジュを締めあげた。

うん。

こういうのって大体男が悪いんだ。

▼

無事に仲間と合流できた俺たちはキャンプへと戻る。

事情があるなら自分らで解決してくれと言ったけれど、俺たちも関係者といえば関係者だ。少なくともユーノとセルジュ、それにエ

リカとは全くの無関係とは言えないわけなので、セルジュが気を失っている間に俺たちは一通りの説明を受けた。

「……」

聞き終えて、俺は無言。

アズリアは絶句していて、ダグも不快そうに眉をしかめている。

「サイテーだな。アイツ」

と、唯一ニケだけがエリカとユーノに話しかけるけど、それも適当な言葉かどうか。

いっそ黙っててくれ。

「しかし――」

俺が念じていると、ダグが口を開いた。

「シンクさんやセルジュさんのことは辛いでしょうが、だからといって早まってはいけないと思います。今あなたは辛い経験をした直後で、自暴自棄になっているように見えますよ」

「……そうですか？　早まってはいけないと言いますけど、セルジュが私たちを置いて逃げたことこそ、いけないことじゃないんですか？　咎められるのは私じゃなくて、あいつだと思うんですけど」

「別に、咎めてはいません。私はあなたが物騒なことをしでかさないよう引き止めているだけで。セルジュさんに対しては特に言うべき言葉はありませんが」

ダグがエリカの相手をしている隙に、俺はニケの隣に移動。

ニケが余計な邪魔をしないよう気を配る。

「あいつは……相応の罰を受けるべきよ」
「だからと言って、あなたが罰を下すべき、ということにはならないでしょう。唯一それを下せるのは犠牲になったシンクさんだけで、エリカさんは生きているんですから」
「だからアタシがするんじゃない。生き残った者の義務よ！」

エリカが叫んだ。

「それは何に対する義務ですか？　死んでしまったシンクさんですか？　それとも、自分だけが生き残ってしまったという事実にですか？」
「両方よ！」
「違うでしょう。シンクさんを死なせて自分だけが生き残ってしまったという負い目に対して、義務なんて言葉を使って誤魔化しているだけでしょう。――あなたは自身のエゴから、セルジュさんを殺すと言った。そしてそれは、セルジュさんがあなた達にした行為と同じでは？」
「……」

ダグが言うと、エリカは黙った。

俺はそんな二人を眺める。

ダグが言っていることは正論の様だけど、それにしてもずいぶん辛辣な事を言う。
一人生き残ったエリカの気持ちはどうなる？
裏切ったセルジュには何もなしかよ？
俺の自分勝手な思いとしては、まあこれもダグの言うエゴなんだろうけど、エリカを味方してやりたい。

だからと言って、エリカがセルジュを殺すというのが頷き難いものであるのは確かだ。

「あなたがすべきことは、体を休めて、早く元気になることです。――残酷な様ですが、時間が癒すものもある」

「――ッ！　アタシは！　今、何かをすべきなのよ！　この気持ちを忘れないうちに何かをすべきなの！」

エリカが、ダグに掴みかかるかの様な勢いで叫ぶ。

それを見て、ユーノが泣き出した。

地面を見つめたまま涙を流し「ごめんなさい、ごめんなさい」と何度も謝罪する。

「だからそれは――」

「ダグ、やめとけよ」

俺はダグを止めた。

所詮。

エリカとユーノ、そしてセルジュの問題なのだ。

どこかで落とし所を見つけて彼らが自分で解決すべき問題で、関係者であっても当事者ではない俺たちが口をはさめることではない。

説得や慰めの言葉をいくらかけたとしても、本人たちが納得しなければ意味はないのだ。

「それで気が晴れるって言うなら、エゴでもなんでもいいじゃんか。貫き通せるんなら、他人に文句を言われる筋合いはないわな」

突然、ニケが言った。
俺がダグの方を向いている隙にニケは立ち上がり、そしてエリカの方へと歩いていく。
「俺は手を貸さないけど、お前がやるってんなら知らんぷりはしてやろう」
「……」
「でもまあ、そんなんしない方が良いに決まってるけどな」
「良い悪いの――問題じゃないのよ」
「ふうん。友達が死んだ負い目背負って、今度はそんな余計なもんまで背負うってのか。年不相応というか、ちっちぇえくせして頑張るのな」
「そうやって責めるけど――じゃあ、アタシはどうしたらいいのよ!?」
目に涙を溜めて、エリカが叫んだ。
「泣けば。泣いてもいいんだぜ、別に」
ニケが言う。
「――え?」
「めいっぱい泣いて、泣き疲れたら眠る。俺はそうした方がいいと思う」
「――泣いても、なんにもならない……」
エリカはどこか呆然としながらそう言った。
ニケの言葉に「なんにもならない」と拒絶したけれど、実際はどういう思いなんだろう。

事情を知った今だから不審に思うのだけど、エリカは俺たちと合流してから泣いていない。
親しい友達が死んでしまったのなら泣くのが当然なのに、今までずっと我慢していたのだろうか。それとも、エリカの中で何かが張り詰めていて、それが泣く事を許さなかったのか。

「たくさん泣いて、そんでいつか元気になるんだ」
「元気には、ならない……。なれない……」
「でも今は泣けるだろ？　もう泣きそうじゃん。泣いちゃえって。俺の厚い胸板なら貸してやらんこともないぞ」

ニケは胸を張るようにして言う。
だがしかし、というか当然のことなんだけど今のニケには『厚い胸板』なんてものがあるはずもなく、ただデカイ乳があるだけだ。

「意味わかんない……」
「わかっとけ」
「――アタシは、何もできなかった。本当になにもできなかった。あいつは逃げろって叫んだのに、アタシはシンクを助けたかった。アタシにできることって何もないの？　シンクの仇も討てないで、ただ泣くだけ？」
「わかったから。今は泣いとけ」

重ねてニケは言う。

「悲しかったら涙が出るのは、当たり前のことなんだから」

その言葉を受けて、エリカは目を見開く。

やっと、だろう。

小さく嗚咽しながら泣き出したエリカは、まるで感情を押し殺すかのような、とても悲痛な泣き方だった。

## 38　訓練の後。（2）（後書き）

感想が目に浮かぶようだ……

次はギャグ回です。

## 39　訓練の後。（3）（前書き）

注意。
今回、後半がギャグ回です。
興味ない方はすっ飛ばしてください。

## 39　訓練の後。（3）

「ヒカル。おいって、起きろ」

そんなニケの小声に、俺はもぞもぞと体を動かした。

薄く眼を開けて、声のした方へ顔を向ける。

「……んぅ？」

「起きろ」

「朝――じゃ、ないよな。暗いし……」

目を凝らすと、薄暗い空間にボンヤリとニケの顔が浮かんだ。

俺はフルフルと頭を揺すりながら上体を起こす。

「今何時」

「知らん。でも明方だ。もうすぐ朝」

「――寝る。昼まで起こさないで……」

バタン、と倒れこむようにして横になると、さらにニケは言った。

「おいって。起きろよ。頼みごとがあるんだよ」

「まじでー。実は俺もあるんだ。寝かせて……」

「な、割とマジな話なんだって。頼むから起きろ」

む？

割とマジな話？

「……何？」

俺は枕に顔を埋めたまま視線だけをニケに向ける。

「とりあえず、テントから出ようぜ」

「……」

昨晩の話し合いの結果、一つしかない天幕には女性陣（俺とニケ含む）が眠ることになった。なので俺達の他にもアズリアとエリカ、それにユーノが眠っている。

この場では話せないということは、つまり万が一にも聞かれたくない話題ということなのだろう。

「――わかった」

頷き、俺はのろのろと起き上がった。

ニケに連れられて天幕を出ると、焚き火の前にはダグが座っていた。

モンスターの警戒と火の番をしていたのだろう。眠りが深くなる明方の時間帯の警戒は熟練の冒険者であるダグが自ら買って出たものだ。

ニケがダグの体面に座り、俺も座る様に促す。

重要な話らしいけどダグの同席は特に構わないということか。

そう考えて俺はダグの隣に座った。

焚き火はすでに熾火（おきび）となっていて、その上には小さな鉄製の容器がかけられている。
お湯を沸かしているらしい。
夏にこの世界にやってきて、すでに三カ月以上が経過した。
ここの季節は多少のズレはあるけれど現実に準じていて、すでに秋だ。
日中はともかく明方の冷え切った空気に熾火の熱はありがたく、俺は両手をかざして暖をとった。

「あったか……。さむ……」
「おはようございます」

ダグが小声で言ってきたので、俺も小声で返した。

「おはよう。……きつい時間を任せて、悪いな」
「いえいえ。――最近はアズリアにお願いしていたので機会がなかったのですけど、久しぶりにヒカルの寝起きの顔が見られたのでよかったです」
「俺今テンション低いから流すけど、今度そんなこと言ったら殴るからな」
「……」

ダグは何も言わずに湯気の立つカップを差し出した。
紅茶だ。
俺はそれを受け取り、ずずずと音を立てて飲む。
温かくて、ちょっと苦い。

「セルジュは？」

俺はダグに訊いた。

昨日、セルジュとは会話らしい会話が出来なかった。ユーノ達から事情を聞いたときには気絶していたからだ。俺が締め落としたんだけど。

「夜中に一度目を覚ましました。一緒に火の番をして、会話もしましたよ」

「ふうん。なにか言ってた？」

「特に何も。他愛のない、世間話程度です。――会ったばかりの私に言ってもしょうがないと思ったのでしょう。まあ、何事も経験ですね。今回のことを乗り越えられるといいのですが」

「やたら肩持つじゃん」

俺が皮肉ると、ダグは肩を竦めた。

「優秀だとは思います。冷静で、賢い。――皆が皆、ヒカルやニケほどは強くはないんです。冷静な判断が出来るからといって、つまり正しい行動をとれるかというと、そうではない。そういうことがとても多い」

俺は、寝ているセルジュを見た。

涙の跡がある。

たしかに、そうだ。

出来ることしか出来ない。

当たり前だ。

「――で、ニケ。話ってなに」

セルジュから視線を外し、俺はニケに向きなおる。

「おう――ヒカル、お前確か『不死鳥の羽』持ってきてたよな」
「『不死鳥の羽』？　――うん、一応な」
紅茶を飲みながら答える。
『不死鳥の羽』は、所持しているプレーヤーが戦闘で死亡したとき一回だけＨＰとＭＰを完全快復させるアイテムだ。
ショップや合成などの通常手段では手に入れることが出来ず、課金して購入する以外では初回プレイ時に3個だけそれぞれのプレーヤーに配られる。
今回の遠征予行ではアズリアの戦闘訓練のことを考えて念のために持って来ていて、あらかじめアズリアに1個持たせてある。
「ちゃんと効くか確認したいって言ってただろ」
「あー……」
モノがモノだけに、『不死鳥の羽』は検証をしていないアイテムなのだ。
試しに死んでみるというわけにはいかないし、まして他人を殺して検証するわけにもいかない。
ぶっつけ本番で使うには覚悟がいる代物だから検証作業はしておきたいんだけれど、現状では、ないよりはまし程度の気休めアイテムでもある。
「あれ、試そうぜ」
「……誰に？　まさかセルジュ？」
試せそうなのはエリカに命を狙われているセルジュか。
しかし、昨日のエリカの様子を見る限り今更人を殺せるほどの気

力と元気があるとは思えない。
そう思って俺が言うと、ニケは首を振った。
「違う。シンクって冒険者が死んだって言ってただろ。そいつに試そう」
「……」
ニケの言葉に、俺はすぐに返事を返せなかった。
しばらく黙って紅茶を飲み、飲み終えてからやっと口を開く。
「まあ。『不死鳥の羽』の効果と発動条件がはっきりしない現状じゃ、最初の1個は誰に使っても同じなんだろうけどさ。――でも、もっと条件がいいヤツがいるだろ」
条件とはつまり『不死鳥の羽』の発動条件のことで、『不死鳥の羽』は『所持している』『プレーヤー』が死んだときに発動する。
『プレーヤー』という条件は置いておくとしても、前提としてあらかじめ所持していないと発動はしないはずだ。
死体相手に試して効果があるのならそれで良い。しかし発動しなかった場合に元々効果がないからなのか、それとも発動条件を満たしていないからなのかがわからない。
貴重なアイテムであるだけに検証作業も慎重に行いたいところだ。
「なんでシンク？」
俺が訊くと、「あいつら可哀想じゃん」という返事が返って来た。
「どうせどっかで試す予定なんだろ？　なら知り合いのために使った方がいいだろ。効果があるなら俺らもあいつらもハッピーだぜ」
「……」

ふむ。
一理ある。
どうせ、最初の一個には『効果』を期待しているわけではない。
発動しなくてもそれまでで、差し迫った不都合があるわけではないのだ。

「でもなー」

俺は渋った。
ニケの言うとおり効果があれば御の字だし、その幸運を知り合いに譲るというのも悪くはない。
悪くはないのだが、果たして死人を生き返らせても良いものなのだろうか。
この世界での『死』は不可逆的なものとして扱われていている。
『リバイブ』や『不死鳥の羽』などの蘇生は、通常の生活をする分には理解の外にある奇跡的な例外だ。

死んだ人間は生き返らない。

これが常識の根底にある絶対的な法則で、だからこそ人々は日々たくましく生きているし命の危険を冒す冒険者や兵士などは一目置かれている。
当然、彼らも命を落とす覚悟をしているだろう。
モンスターなんかが跋扈するこの世界では注意深く観察すればあちらこちらに『死』が転がっていて、同じ数だけの『覚悟』があった。

そんな世界で、俺らが気軽に『不死鳥の羽』を使って蘇生を試みるのは果たして正しいのかどうか。

もしかすると、それはシンクの『覚悟』を蔑にするもので、エリカの涙を不当に扱うものではないのか。

うーん。

悩ましいな。

「あんま深く考えんなよ。別に大量殺人犯を生き返らせようってわけじゃねんだから」

「……うーん」

確かに。

悩ましいことは悩ましのだけれど、俺らが知ったことではないか。

不運にも死んでしまう人もいれば、俺たちみたいな変人が居合わせたおかげで生き返る幸運なヤツもいる。

不運と幸運。

人間はどうしようもなく、それに左右されてしまうものだ。

深く考えなければ割と単純で、そして当たり前のこと。

「じゃ、試すか」

「よし。早速行こうぜ。今から行けば昼前には余裕で帰って来れるし――で、ダグはその間、アズリアと一緒にキャンプで留守番を頼む」

「2人で大丈夫かな」

「アズリアは結構使えるから、ここら辺のモンスター相手なら心配ない。ダグはアズリアよりも強いっぽいし、2人いりゃあいつら守りながらでも十分だ」

昨日一日中アズリアと訓練していたニケが言うのだ。アズリアの

実力を十分に把握した上での判断だろう。

「ダグ、そう言うわけだから留守番よろしくな」

「――はあ」

ダグはあいまいに頷いた。

「会話に入って行けませんでしたけれど――つまり、『不死鳥の羽』とはどう言った魔術品なのですか？」

「死んだ奴を生き返らせるアイテムだよ」

俺は答えた。

「まあ、効くかどうか試したことないんだけどな。――不発に終わるかもしれないから、ユーノとかエリカには言うなよ。変に期待させるのも悪いし」

▼

太陽が昇った直後の森には木々の合間を縫って鮮烈な光が射して込んでいた。水気を含んだ空気に光が反射し細かな粒子がキラキラと舞っているように見える。

夜の間に停滞した空気を光が追い払うかのような光景は神秘的だけれど、それはある種の冷たさをもった光景だ。

明方の、それも森独特の空気。

新鮮な空気とはつまりこういうモノなのだろう。

「やっぱ朝は冷え込むな。眠気も吹き飛ぶわ」

外套をすっぽり着込みながら俺は言った。

歩いていれば温かくなるだろうと思ったけれど、外套に覆われていない脚がいつまでも冷たい。特に足の指が冷える。

「寒いというより、痛い」

「ヒカルもそろそろ衣替えだろ。着てるの夏服じゃんか」

ニケが振り向きながら言う。

俺は外套の下に自前の『制服装備』を装備していて、白い半袖シャツに緑を基調としたプリーツスカートという出で立ちだ。

『魅了反射』のほかにも『応援』というサポート向きの特殊効果を備えた装備なのでアズリアの戦闘訓練を見越してチョイスした。

ＴＰＯを心得ている俺は条件や場所によってコスチュームチェンジするのだ。

「露出の多い夏服じゃなくなるのは残念だが、でも冬服って可愛いデザインの多いよな？　ぱんちらも、これからは量より質の季節だな」

「そうだなあ」

千変万化。

水着が夏のネタ装備なら、『エリュシオン』には冬のネタ装備もあるわけで。

女子の服装と共に移りゆくパンチラには季節があるのだった。

「ガード堅いのがネックだけど」
「俺ら相手に堅いもなにもないけどな。ってかお前はどうすんだよ」
冬服がある制服装備と違って、ニケの水着装備は当然夏仕様だ。
これから寒さがきつくなることを考えれば、さすがのニケも着替えなければなるまい。
「俺？　――ふふふ。気がつかなかったのか、ヒカル。この水着はすでに秋用だぜ？」
「なに？」
つっても、普段の水着の上からパーカーを羽織っているだけだ。
パーカーは以前から着ていたのでそれが寒さ対策というわけではないだろう。
「これよ」
ニケはひらひらと腰に巻いたミニスカート丈のパレオを揺すった。
「……まじで？」
パーカーに隠れてて気がつかなかった。
それほど短い。
意味あんの。
「もちろん。パレオ一択。これしかない」
「せめてショートパンツのタンキニか、スパッツタイプのセパレートを選べよ」
どんだけ露出していたいんだ？

俺が言うと、ニケは首を振った。

「……オレだってなあ、ヒカル。着たかったさ。今を生きる若者にとってスク水とはスパッツタイプのセパレートのことで、つまり青春時代の象徴だ。当然、着たかった。一度は手にとった。抗い難く、脚を通しかけた。――でもなあ、あいつ等が登場したおかげでワンピースのスク水が駆逐されたんだぞ？　水着に貴賤はない。ないが、しかしオレまでヤツらに屈したら、一体誰が旧き良きスク水の復権をするって言うんだ？」

ならワンピースのスク水を着ろよ。

「今の若い連中はな、かつて確かに桃源郷があったことを知らんのだ。スパッツのセパレートだって、確かにいいもんだ。きゅっと引き締まったボディラインとか、思わず見とれる。……でもさ、もっと素晴らしいもんがあったんだ。それを忘れちゃいけない」

だから。

そこまで言うならワンピースの水着着ろよ。

「まあ。ワンピースタイプのは俺も画像とかで見ただけだけど」

「完全に好みじゃん！！」

パンツタイプのモノを穿いていたいだけだろ！？

「む――。そんなことを言うがヒカルだって好きだろ？　あの、水着が食い込んだお尻のラインとか……」

「そっち！？　素晴らしいものってそっちかよ！？」

古き良きスク水のデザイン云々じゃねえのか。
さっきの話はなんだったんだ。

て、パンツか。

納得。

「まあ、オレにセパレートが似合わないってのもある」
「あ、確かに……」

ニケは出るところが出て、引っ込むところが引っ込んだグラマーな体型だ。
ワンピースタイプやセパレートでも似合わないということはないだろうけど、より魅力を引き出せるのはパッツンパッツンのビキニだろう。
個人の好みの問題はあるが、見た目の印象からは断然ビキニである。

「タンキニはちょっと気になってるんだが、オレよりもヒカルだろうな。今ちょうど一着手元にあんだが、着る気ない？」
「ねえよ」

それで寒さがしのげるか。
つかなんで持ってんだ。

「なんでなんで？　もしかして上がキャミソールタイプなのが不満なの？」
「なんで？　なんでそこが不満だと思うの？　なんでそう思えるの？」
「やめとけよヒカル。ビキニタイプなんてな、言いにくいけど……

それは背伸びというもんだぜ。お前にゃキャミのが似合ってる。ここは我慢しとけ」
「話聞けよ？」
なんで諭されるように言われなければならんのだ。
つか、ビキニタイプだって着こなして見せるっつーの。
浜辺の視線独り占めだっつーの。
「いやいや」
ニケは首を振った。
「ヒカル胸ないもん」
「なぁ――ッ！？」
あるわ！
「ふっざけんなよ！　胸くらいあるわ！　慎ましやかだけど、どうしても隠しきれない立派なもんが二つもついてるわ！」
「いや、ない」
「あるっつーの！！」
「ちゃんと現実を見ようぜ。――ないもんは、ないんだよ」
「揉んでみ！　ほら！！　実際に揉めばわかるから！」
俺はニケの手をとり、自身の胸にあてがった。
揉んでみろと挑発したけれどニケは揉まず、代わりに首を振る。
「ああ――可哀想に。勘違いしちゃったんだな……。これ、大胸筋

だわ」
「だいきょうきん！！？」
あまりの暴言に、俺は愕然とした。
小さいとかペタンコとかならまだしも、言うに事欠いて大胸筋なんて。
いくらなんでも酷過ぎる。
……。
大胸筋なんて！！
「な。キャミにしとけって。ビキニよりずっと可愛らしいって」
「あほか……。絶対着ねえ」
俺はふにふにと自分の胸を揉みながら言った。
――まあ。
いつものおふざけである。
うん……。

## 39　訓練の後。（3）（後書き）

休日だったので、がんばりました。

重い話の後なので違和感ありますね。

# 40　色々ひっくるめて。（1）

「ここのはず」

ニケがそう言って立ち止まったのは、森の中にあるちょっとした空き地だった。

ここだけぽっかりと開けていて日の光が差し込んでいる。

膝くらいまである草をかき分けながら歩くと、たくさんの小さな虫が飛んだ。

「どこ埋めたっけなー。目印に剣をつき立てといたからすぐに見つかると思うんだが」

「埋めたんかい」

「だって野ざらしってのもどうなんだよ。それにモンスターが死体食って人間の味覚えたりしたら嫌じゃん？」

「お前にとってのモンスターって、熊と変わらんのか」

というか、人間を襲うからモンスターなのだ。

味を覚えるとか今さらだろう。

「……ん！？」

ガサガサと歩きまわっていると、ニケが驚いた様な声を上げた。

目当ての墓が見つかったのかと思ってニケに近寄る。

ニケは地面に突き刺さった剣の横に立ちながら、少し離れた場所を凝視していた。

なんだろう。

ニケの視線の先には、地面に開いた大穴があった。

「……何これ？」

「――さあ？　なんだろうな」

「墓、ではないよな」

目印に剣をつき刺したと言っていたので、探していた墓は俺たちの真下だろう。

「ああ――」

ニケは首を振る。

「まあ……知らん。それよりこっちだ」

そう言って、ニケは斧を使って豪快に地面を掘り始めた。

俺はそれを少し離れた場所から眺める。

墓を掘り起こすという行為は何とも薄気味悪く、まして死体に用があるのだから気後れもする。

にもかかわらずニケがせっせと地面を掘り進めるのは、さすがというかなんというか。

割とニケにはそういうところがあって、大抵のことには物怖じしない。

だからというわけではないけれど、俺はニケの背中に話しかけた。

「なんだろうなあ、あれ。なんか掘り起こしたっぽいよな」

「そうか？」

「土がさ、割とまとまってるじゃん。2、3人で掘り返したんじゃないかな。ところどころに足跡も残ってるし、割と最近。――てか昨日ニケが気がつかなかったんなら夜の間に掘られたのか」
「へえ」
「残飯処理用のゴミ穴とかそういうのなんだろうか。キャンプ場とかであるらしいじゃん。――いやしかし、ここらに人住んでんのか？」
「どうだろうなー」
「待てよ……。この空き地にしてみても、明らかに不自然だよな。てことは、やっぱり人が住んでんだ！」
「……ヒカル、お前さ。よっぽど手伝いたくないのな」
土だらけになった斧にもたれ、ニケは呆れたように言う。
ばれたか。
でもそれは穴掘りが面倒くさいという理由ではない。
「いや、だって……死体が出てくるんだろ？　俺、なんかヤだ」
「ヤダとかいうな。オレの斧より、おまえのグローブの方が穴掘りにはうってつけだろ。文句言わねえで、掘れ」
「うぇー」
まあ、ニケだけ泥まみれなのもなんか悪い。
死体は気味が悪いけれど穴掘り自体は大した手間でもないので、サクッと掘り返してサクッとアイテム使ってサクッと帰ろう。
そう思い、俺も穴掘りに参加する。
手甲を装備して抉るように地面を掘ると、すぐに死体が見つかっ

た。

▼

「……これで全部かな」
「おう」

穴からシンクの死体を引きずり出し、念のために細かな肉片も拾い上げてパーツごとに並べる。大体のシルエットは出来あがったけど、どうしても足りない部分がある。
どっかにあるんだろうけど探すのは面倒だし気味が悪いので俺はこのままアイテムを使うことにした。

「じゃ、使うぞ？」

ぽい、と『不死鳥の羽』を投げた。
羽はひらひらと飛んでゆき、シンクの体の上に落ちる。

「……」
「……」

ニケと2人で無言で見守る。

「……」
「……」
「……」

「……ヒカルよう。使い方ってこれでいいのか？」
「しらん」
「なにも起きんぞ」
「なら不発なんだろ」

ニケの言うとおり羽にも死体にも変化はない。
『プレーヤー』ではないからか、それとも死んでから時間が経ってしまったからか。

それか、そもそも効果がないからなのか。

やっぱり無駄だったかと思った時、突然羽が燃え始めた。

「あ！？」
「なんだこれ。――『効果がありません』つって無駄に一個消費しちゃうカンジなのか？」
「うわ。最悪だな……」

貴重なアイテムなのに検証もままならないとは。
これではいざという時に頼りにならない。あんまり期待しちゃいけないのかも。

「……」

羽を拾い上げることもせずに、俺とニケは無言で立ち続けた。
不発という結果に終わったものの、目的は済んだ。だから帰ってもいいんだけど、俺たちはその場にとどまってなんとなく火を眺める。

火は死体にも燃え移り、めらめらと勢いを増してゆく。
その火勢はまるで小さな火柱だ。

「人間の体って脂肪があるから、きっと燃えやすいんだな」
「……やめてよ」

俺は一歩下がる。
匂いが不快だ。

火は3分ほども燃え続けて、やがて消えた。
死体一人分の灰がこんもりと地面に残っている。

いや。

一人分？
こんなに量があるのか？
体積考えたら、目減りするどころか増えてるんだけど。

「？」

俺が不審がっていると不意に灰の山が崩れた。
崩れたところから腕がにょきりと突き出していて、空を切るように動く。

「うわ！？」
「お？」

俺は驚いてのけぞり、ニケは身を乗り出した。
ニケはそのまま灰の方へと歩いて行って突き出た手を握る。
何をする気なのかと思っていると、ニケはそのままぐいっと引っ張った。

その勢いで灰が飛び散る。

「――ぶはっ！！」

と、男の声がした。

「――」

俺の視線の先には一人の男。

ニケに片手を握られ、地面に這いつくばる様にしている。

「効果あったみたいだな！」

ニケが俺へと振り向きながら言った。

なるほど。

『不死鳥の羽』

ゲーム時代だと無数の光が溢れだすような演出だったけれど、実際にはこうなるのか。

「……」

俺は、手の中にあるもう一枚の『不死鳥の羽』を見つめる。

効果があったのは、よかった。

時間経過に関わらず第三者が使用するだけで効果を発揮する『不死鳥の羽』は、汎用性の高い強力なアイテムであることも確認出来

た。

しかし――

喜ばしいはずなのに、なんだろう。

俺は言葉が出ない。

死人が生き返ったという事実に理解が追いついてないのだろうか。

「ばっちりだぜ！　良かったなヒカルゥ」
「……」
「？　シンクちゃんと生き返ったぞ！」
「……」
「――ヒカル？」
「生き返んのかよ」
「あん？」

ニケが訊き返し、俺は考えをまとめ切れないままに言う。

「こんなんで、ほんとに生き返んのかよ」

何ともいえない微妙な気持ちだった。

▼

シンクは、気持ちのいい奴だった。

生き返った当初こそ事情がわからずに混乱しているようだったけど、それでも取り乱すようなことはせず努めて冷静になろうとしているように見えた。

最初に訊いてきたのがエリカのことで、俺たちは『不死鳥の羽』の事も含めて説明した。

蘇生に関してはさすがに驚いた表情をしたけど、すぐに理解し、信じた。シンクはヒポグリフに自分の顔を食いちぎられるところまで記憶していたからだ。

「サンキュー」なんて気軽にお礼を言っていたけど、顔を真っ青にしながらだったのでニケと一緒に笑った。

そんな俺らの様子に何か感じることがあったのか、シンクは変に畏(かしこ)まることはなかった。

友人と話すかのような気軽さで俺たちと打ち解け、特にニケとは気が合ったようだ。

「待てよニケ、それには反論させてもらうぜ。――最近のエリカはな。ああ見えてヒモパンを着用してるんだぜ」

「知ってるっつーの。でもなあ、あいつにはまだ早い。なんとか年相応に矯正させようとしたんだがな」

「早いかどうかはともかく、可愛らしいじゃないか。背伸びしてさ。ニケだってそういう時があっただろ？」

「うぅむ……可愛らしいのは認めるが、しかしなあ。子供は子供ぱんつを穿くべきだとオレは思うぞ。――女が色気づくのはぱんつからなんだ。それはあんな子供でも変わらん。今からひもぱんとか穿いてみろ、将来的にはきわどいセクシーランジェしか穿けない体になってしまうだろ」

「……ゴメンな。ニケ」
「なんでヒカルが謝る？」

そんな会話。

まあ、その合間にシンク達のことも聞いた。

シンク達がヒポグリフの森に来たのは５回目で、訓練が目的だった。

きっかけはユーノだ。

ユーノは魔法学院への進学を希望していて、最高学府への進学を希望するだけあって上級学校の兵科の授業（どんな内容だろう？）は生ぬるかった。最初は一人でやって来て訓練していたのだけどエリカが気がつき、本格的に探索しようということになってセルジュとシンクが加わった。

４人とも上級学校では上位に入るくらいの実力者で、特に主席であるセルジュの加入が大きかった。

セルジュは剣士としてはかなりの腕前であり、魔術士にとっての『魔法学院』に匹敵する機関である王国騎士団の養成所『騎士寮』への入寮がすでに内定しているほどらしい。

実力者のいるパーティーというのは、単に人数が集まった集団ではない。

一本の芯が通る。

芯が通れば、自然とそれに沿うように行動する。

つまりは戦術ということだ。

もともと魔術士であるユーノがいる状態だったのでその戦術はむしろプレーヤー寄りの有機的かつ効率重視のもので、シンクたちは

順調にヒポグリフの森を攻略していった。

そして先日、偶然ヒポグリフの住処を突き止めた。

ヒポグリフは王都守護聖獣と呼ばれるモンスターでありながらその生態は謎が多く、一流の冒険者でもめったにお目にかかれない。遭遇するのはヒポグリフが相手を認めた時だけと言われ、実際に会うというのは割と名誉なことだったりする。

シンクたちは、その住処を突き止めた。

興奮し、証拠に何か持って帰ろうということになった。

セルジュは騎士寮に入寮する前になにか実績を作っておきたかったし、ユーノにとってもその実績は魔法学院への推薦を得るために魅力的だ。シンクは騎士団に入れるほどの腕前ではなかったのだけど、もしかしたら騎士寮へ入ることが出来るかもしれない。エリカも何やら事情があったようだ。

４人で話し合い、今回の探索で『ヒポグリフの羽』を持って返るつもりだった。

持って帰るつもりで住処に侵入し、返り討ちにあった。

当然だ。

ヒポグリフが気を許すのは、認めた相手だけなのだから。

「ああ、楽しみだなあ。俺が無事だってわかったら、あいつらきっと驚くぜ」

シンクはニヤニヤしながら言った。

「まあ……」

俺は黙る。

そう言えば、シンクが戻ったらどうなるんだろう？
それぞれが抱えているわだかまりが綺麗に解消し、すべてが元通りというわけにはいかないだろう。
セルジュはシンクとエリカを見捨てて逃げた。エリカはそんなセルジュを殺そうとした。
どんなに取り繕おうとも変わらない事実だ。

「もしかしたらエリカ泣くかもな？」
「……」
「……」

ニケも俺も無言。

「……お前次第だろうな」

辛うじてそう言った。

# 41　色々ひっくるめて。（2）

シンクが生き返ったことで何かが解決したわけではなかった。
再会の喜びはセルジュとエリカの負い目を多少和らげたかもしれないけれど、それだけだ。エリカの怒りはやり場を失って鬱屈し、セルジュの自責は矛盾を抱えて螺旋する。

それを感じ取ったシンクは、仲間たちの関係を修復することを諦めた。

ダグが言った様に、事ここに至っては時間が癒してくれるのを待つほかないからだろう。
正直、仲間の前で必死におどけるシンクが痛々しくて見ていられなかった。仲間のことでこれ以上シンクが傷つくようなら、シンクを生き返らせたことが彼にとってもエリカたちにとっても迷惑なことだったのではないかと思えてしまう。それは悲しいことだ。
だから諦めたことはちょっと嬉しい。

いろいろ抱えて、でっかくなってくれ。

かなり無責任なんだけれども、そう思わずにはいられなかった。

エリカたちと一緒に、王都へ戻った。

ただ、一緒といっても二班に分かれた。
俺とダグ、セルジュとユーノが一緒の班で先行し、後からニケとアズリア、エリカとシンクがついてくる。
エリカはセルジュと決別したし、セルジュは生き返ったシンクとは馴染めない。それをふまえての編成で、途中で休憩をとったりしながらゆっくりと戻る。

「笑ってお酒を飲み合える冒険者もいれば、会うなり殺し合いをする冒険者もいます。後者を因縁と言うのでしょうか」

歩きながらダグが言った。
セルジュが答える。

「……俺にとっての、エリカの事を言っているんですか？」
「さあ。私はただ、自分の事を話しているだけです。――長く冒険者をやっていると、たまにそんな相手のことを思い出します。今何をやっているのだろう、どこにいるのだろうとかね」
「……はあ」
「私にとって最大の因縁の相手は幼馴染で、彼にはずいぶん辛酸を舐めさせられました。一緒に旅に出たのですけど途中で別れ、私が放浪している内に彼は故郷に戻って名声と栄誉を手に入れた。同胞は私を愚物と評し、彼を奇士と評しました」
「……」

セルジュが黙ってしまったので、俺が続きを促した。
ダグは続ける。

「私と別れる時、彼は私からとても大切な者を奪っていきました。

それまで一緒に旅していた仲間で、庇護の対象だった同胞（エルフ）の子供です。――彼の行動はエルフにとって必要なことで、結果だけを見れば決して間違いとは言えないものだったのですが、当時の私は許せなかった。彼の判断を心底憎んだ。あの子が死んだと聞いた時、よほど殺してやろうかと思いました」

「へえ。――で？」

「それで終わりです。彼の行為は許しがたいものであると同時にある種の正当性はしっかり持っていて、私には選択できないものだった。『だから』彼がそれをした。――それがわかる私は実際の行動をしないまま、未だに旅をしています。幼馴染は故郷で暮らしているのではないでしょうか」

なんだそれ。

オチなしかよ。

「許したんですか？」

突然、セルジュがダグに訊いた。

そう言えばそうだ。

ダグの幼馴染や子供のこと、エルフの事情なんかはわからんけれども、その幼馴染にダグにとっての大事な人を奪われたのなら許しがたいだろう。

けどダグの表情には憎しみとか苦しさといった『負』の感情は見受けられない。

なにか曖昧で、無理やり当てはめるとすれば戸惑っている、といった風に見える。

「許してはいけない、と思っています。一件で決別状を送りつけて以来、彼とは因縁の関係というやつで」

ダグは頬を掻く。

「けど、ずいぶん気安げに話します。それはなぜ？」

「時間が経っていますし、なにより決別とは関係の消失ではないからです。それは他人との関わり方の一つで、どこかで私と彼は繋がっているのでしょう。私はある部分では誰よりも彼のことを理解していますし、おそらく彼もそうです。――やっかいなものです、友人のあり方というのは」

俺は首をかしげ、ユーノと顔を見合わせた。

ユーノもわからない、という顔をする。

俺もわからん。

ダグほど長生きしなければそんな達観は得られないのだろう。

「友人、ですか……」

「お互い憎み切っていますけどね」

「……」

そんな会話をした。

何か思うことがあったのか、セルジュはそれきり黙り込み、ダグはのんびり歩いている。

俺も、思うことがないわけでもなかった。

昔一緒に旅したという子供。

誰かと重なる部分がある。

でも俺は敢えて深く考えないようにし、ユーノの相手に終始した。

王都に着いて、セルジュやユーノと別れた。
未だに思いつめた表情のセルジュは挨拶もそこそこにとぼとぼと立ち去り、そのあとをユーノが小走りに追っていった。

「ヒカルのおかげで最悪の事態だけは回避できたのですし、後は自分で考えるでしょう」

ダグはそう言って見送っていた。

ほどなくニケたちと合流し、ニケが始めた店へと戻る。
宿はすでに引き払っていて、生活の拠点を店へと移しているのだ。

とりあえず、今日は休もう。
なんか、色々あって気疲れした。
カミラや爺さんに挨拶して回りたいところだけど、それは明日でいいだろう。準備もあるし、危険地域を目指した冒険への出発は明日以降になる。

▼

「――で、エリカたちはなんで居るんだよ」

制服を脱ぎ、ソファでひとしきりくつろいでから俺は言った。

目の前には床にぺたりと座ったエリカとシンク。
二人はブラブラと店までついてきて、そのまま二階に上がり込んでアズリアと談笑し始めた。
それがあまりに自然だったので無意識にメンバーとして認識していたけど、俺へ向けるシンクの視線に初々しいものを感じ取って気がついた。
今更俺の下着姿に赤面する仲間などいないのだ。

「いや、ちゃんとお礼したいと思ってよ……」
「あんたたちが使った魔術品って、物凄く貴重なものなんでしょ？お礼もせずにこのまま別れるなんて出来ないわ」

シンクは赤面しながら、エリカはそんなシンクを睨みながら言った。
とはいえ、お礼なんかいらない。
シンクは結果として生き返ったけれど、それはエリカたちのためというよりは俺らの勝手な実験のためだ。
あくまで偶然の結果なので、感謝される道理はない。

「いいよ。まだあるし」

俺は手を振りながら言う。
『不死鳥の羽』はアズリアに渡した他にももうひとつある。

「いえ、駄目。お礼するまで帰らない。アタシ達に出来ることなら何でもするから、なにか言いなさいよ」

俺に詰め寄りながらエリカは言う。

「それにヒポグリフのことだってあるし……」

と、わけわからんことを言い重ねた。

「？」

まあ。

本人にとっては本当に死活問題だったのだし、エリカがお礼するまで気が晴れないというのなら、何か適当に言ってあげるのも手だろう。

本来ならニケに言うべきなんだろうけど、ニケは特に要求する気はないようだ。

うーん。そうだな……。

いやでも、ニケか。

「じゃ、パン――」

「ちょあ！！」

ばし、とニケにチョップされた。

「何すんの」

「ロリ犯罪！　１５歳未満は未成年だぞ！」

「未成年は２０歳未満だよ！！」

どんな法律だよ。

おおらかすぎる。

「てか、パンまでしか言ってないし。パン買ってきてっていうつも

りだったし。犯罪じゃないし」
「いや、ヒカルのことだ。ぱんつ頂戴とか、ぱんつ脱いでとか言うつもりだったに違いない。ロリ相手に」
「いわねぇよ！！　普通にパンツ見せてって頼もうとしただけだ！！」
「ヒカル。それは普通ではないな……」
アズリアが言った。
「というか、着替え時とかに私のを見ているだろう。あれだけでは不満なのか？」
おおっとー。
あっぶねー。この話題地雷だったか。
危機一髪だぜ。
「なに……？　同性相手に、変態じゃない……」
「許してくれ、エリカ。ヒカルは、こう――同性相手に興奮する異常体質らしいのだ。気を悪くしたのなら、代わりに私が謝る。すまなかった」
しっかり踏んでました。
「ヒカルは悪くない。体質だからどうしようもないモノなのだ。ただそれを正面からちゃんと受け止められない私たちが問題で……。ヒカルも、あまり他人には言わない方がいい。誤解を受けたら嫌だろう？　耐えきれないようなら私が見せるから……」
アズリア。
ほんとゴメン。

マジで謝るから、そんな目で見ないでくれ。

「おめぇは！　この！　アズっちにも手ぇ出してたのか！！」

「手は出していない……決して……」

止めてよ……。

俺はすでに死に体だ。

「歯ぁくいしばれ！」

そんな風にニケにばしばし叩かれていると、

「お、俺居ていいのかな……？」

シンクがおどおどと視線を彷徨わせ、

「ガールズトークと言うやつですか。席外しましょうか？」

ダグが生真面目に言った。

## 42　色々とひっくるめて。（3）

「ニケさん、ヒカルさん。お客さんですよ」

二階で俺がいじめられていると、店を実質経営している仕立屋のオジサンが来て言った。

お客？
誰だろう。

「イクトール様です。元筆頭顧問魔術師の」
「あー。――ああ？」

爺さんか。
たしかに知り合いだけど、なんの様だ？

「下に来てるの？　今行く」

俺が制服に手を伸ばした時、

「それには及ばん。というか、人目に付くとまずいでの」

真っ黒なローブを着こんだ爺さんが、どかどかとやって来た。

「爺さん、久しぶりじゃん。って、あれ？　カミラ？」

爺さんの隣には、カミラがいた。

いつだったか俺があげた制服を着て、上には大きな紋章が入った外套を羽織っている。

「私はただの案内よ。用事があるのは院長」

「まあ、だろな」

爺さんを引き連れてカミラが来る理由がわからない。

カミラには店のことを話していたので、用事のある爺さんがカミラに案内させたのだろう。

俺が爺さんに向きなおると、爺さんは部屋を見まわした。

「ほう。仲間というわけか」

「まあね」

「知っている顔がおるの。――ダグラス、久しいな」

ダグラス？

俺が不審ががると、後ろでダグが小さく息をした。

ダグラスとは、ダグの事だろうか。

いやでも、『ダグです』って自己紹介されたんだけど、どうなのだろう。もしかして、いきなり愛称で自己紹介されたのだろうか。

「イクトール。引退したと聞いていましたが」

「今は学院の院長をしていてな。楽隠居のつもりだったが、どうにも人手不足で色々と駆り出されとる。今日はヒカル達に伝えたいこ

とがあってよ」
「はあ」

ダグは頷いた。

「つかダグよ。俺が魔法学院に言った時、爺さんと知り合いなら直接頼めば良かったじゃんか」
「いえ、ほんとに知りませんでした。――それに知り合いといっても、親しいわけではないので。彼は、なんというか……エルフを毛嫌いしているのです。若い頃はエルフを王国の仮想敵とみなして、『聖なる暗き森』などの居住地に偵察に来たりしていました」
「仮想敵？」
「憂国論者とか危機論者とでも言うんでしょうか。……アレです。私の因縁の相手の一人？」

へえ。
それでは頼めんな。

「聞こえとるぞ。――まあ、若い時分は確かにやんちゃしたもんだが、今は落ち着いた」
「――枯れている様に見えますが」
「言うわ。お前もかつての精彩がない。長い旅に疲れたのだろう。引導を渡してやろうか」
「遠慮しておきます。やることがありますので」

ダグが言うと、爺さんが笑った。

「やはりな。――といういうことはヒカルか」
「さあ？」

はぐらかす様にダグが言う。それを見た爺さんは笑みを深めた。

「『ラース』の関係者なのは知っておるぞ。お前は放浪の果てに、まがい物ではなく本物を見つけたわけだ」

「……は？」

そんな2人をみて、俺は口を開いた。

「話が見えん。説明を要求する」

見つけた？

ダグが俺を？

何のことだ。

しかし俺の言葉に爺さんは首を振り、ちょっと肩を落とした。

「スマンの。残念だが昔話をしている時間はないのだ。――わしの用事を済ます前にひとつ確認したい。お前さんら、まさかヒポグリフを狩ったのか？」

ヒポグリフ？

見たこともねえよ。

俺がそう言おうとした時、ニケがまっすぐ手を上げた。

「わるい。俺やっちゃった」

「……」

「……」

俺と爺さんが黙る。

俺はまたしても話が見えない。
何のことだ。

「誤解して貰いたくないのだが、わしはそのことを知らなんだ。その前提のもとで聞いてもらいたい。――今朝、数人の冒険者たちによってヒポグリフの死体が王宮に持ち込まれ、ついで蘇生のために魔法学院へと運ばれた。蘇生の秘儀は元魔術士団顧問魔術師であるフランキリルの専売特許なのだが、知識は学院にも伝わっているからだ。早速蘇生を試みたのだが、しかし死体の損傷が激しいために間に合わず、今は国葬の準備をしとる」
「へえ」

俺は頷く。
隣でアズリアが小さく肩を揺らした。

「死体の検分も行なった。ヒポグリフを持ちこんだ冒険者たちは、聖獣は殺されたのだと言ったらしい。ヒポグリフの傷の切断面と、魔法による損傷。目撃証言も合わせて、学院はヒポグリフが凄腕の冒険者に『殺された』ものだと判断した。――この時点で、わしはまだ眠むっとった。寝室でまどろんでいるときに叩き起こされ、こうこういった特徴の腕の立つ冒険者に心当たりはないか、と訊かれた」
「ほう。災難だな」
「全くの。しかし、学院長たるもの不快を表情に出すわけにもいくまい。わしは丁寧に説明してやったよ。『ああ、それならば知っとる。まず間違いなく、ニケだろう。一緒にいるヒカルという冒険者も凄腕でな。今は王都に滞在している』とな」
「大人の対応だ」

さすが、人の上に立つ人物は懐が深い。

「まあ、そんなこんなが色々とあってだな。――いま、この建物は騎士団に包囲されとる」

「ええ!?」

そんなこんなのとこが重要なんだろ！

そこ説明してくれ！

しかし爺さんは説明せず、言いたいことを続けた。

「あんたらのことだ。なにか理由があってヒポグリフと戦ったのだろう。わしはその事情を知らん。知らんままあんたらを売る様な事をしてしまった。悪い」

爺さんは深く頭を下げた。

「ヒカルー。これ多分、俺のせいだな」

ニケも頭を下げる。

俺は唸った。

「ここが包囲されてるって話、マジなの？」

「うむ。わしらはその斥候よ。もっとも、直接話がしたくて志願したのだが」

「……相手の数は？」

「騎士団２隊と、中央軍が少し。３００くらいか」

「……事情はちょっとわかんないけど、どうなの？　このままここにいたらまずい？」

「まずいな。捕縛され、何らかの処罰を受けるだろうが、守護聖獣

を狩るなど前例がない程の重罪だ。まず間違いなく死刑だな」
「うわ……」
「逃げるなら手を貸そう。そのつもりで来た」
爺さんはカミラを見て、カミラは頷いた。
「カミラもそのつもりで？」
「ええ。――さっき見て来たけど逃げる分には容易いでしょうね。数は多かったけど個人の力量はまちまちで、問題にならないと思う」
すげえ強気。
騎士いったら２０レベル以上あるんだけど。
「じゃ、お言葉に甘えようぜ」
ニケが言う。
「俺らが暴れると余計な被害が出るだろうし、ここは逃げとこう」
「私も賛成だ。学院をやめて、せっかく冒険者になれたのだ。ここで蹲く気はない」
「私はヒカルについていきます」
アズリアとダグも賛同する。
となれば俺が何か言うまでもなく逃亡だな。
俺も捕まりたくはないし。
「よし。なら逃げるか」
俺はいそいそと制服を着始める。
それを見てとって、みんなも準備を始めた。

「お、俺も手を貸すぜ！」

ガチャガチャと装備を整える音が響くなか、シンクが言う。

「ヒポグリフって言ったら、あれだろ。多分俺が原因なんだろ」

「はあ？」

「ヒカル達が逃げられるよう、俺も手を貸す。エリカも、な。お礼だ」

シンクに言われたエリカも頷いた。

「そう……ね」

いや、手を借りるまでもなく逃げられると思うんだけど。

俺らに手を貸したらエリカたちも犯罪者扱いだろうし。

しかし俺が言う間もなく、爺さんが扉へと向かって歩き始めた。

むう。

正面突破ですか。

## 43　色々ひっくるめて。（4）

▼

「うわ……」

爺さんの言うとおり、店は騎士団に包囲されていた。
大通りほどではないけれど、それなりに幅のある通りを埋め尽くすほどの人数。
帰って来た時は気がつかなかったのに、どこに隠れてたんだ。

「大丈夫だ、心配ない。任せておけ」

爺さんが小声で言い、ごそごそと杖をとりだした。

「ちょ――魔法で殺すとかなしだからな。穏便に逃げられるように手助けしてくれよ」
「相手は騎士団、死にはせんさ。それにこの程度で死ぬようならそれこそ無用というものだ。国庫のためにも死んでしまった方がいい」
「……」

……。

過激だ……。

呆れて見ていると、爺さんはゴホンと咳き込みした。
大音量で叫ぶ。

「おのれー！　逆らうか曲者めー！　素直に縛に付けェい！」
「大根過ぎだろ！　もうちょっと努力しろや！！」

酷過ぎ！
全然大丈夫じゃねえよ！

「問答無用ぅ！　喰らえぃ我が秘儀！　『氷結回廊（コキュートス）』！！」
「こっ……！？」

『氷結回廊（コキュートス）』。
『魔導師（ウィザード）』になると習得可能な水属性範囲魔法の最上位。
ゲーム時代は無数の巨大なツララが地面から生えてくるという魔法だったけど、現実でもそのままに発動する。

つまり、騎士団ごと通りを氷で埋め尽くした。

「……」

俺達は絶句。
アズリアやダグなどは規模と威力に驚いているようだけど、俺とニケは呆れて言葉も出ない。

「範囲魔法っていうか……もう、自然災害だろ」

魔法（スキル）。

接近戦闘職とか、いらないじゃん。
パワーバランス崩れまくりじゃん。

「さ。行け！」
「いやいやいやいや。どこにだよ！？」

本当に氷で埋め尽くされたのだ。
どこに行っても『氷結回廊（コキュートス）』の効果範囲で、俺やニケはともかくアズリアとダグは死んでしまうんじゃないだろうか。

「うん？　これくらいなら問題なかろう？」
「俺らはな。アズリアとダグはそうはいかない」
「ほか。――ではバスク君」
「あん？」

爺さんの言葉に首をひねる。
カミラに何させようってのか。

「ちょっとどいて、ヒカル」

カミラが俺を押しのけて前に出る。

「ぐええ。お尻で押すな。お前、俺よりでかいんだから潰れるだろ」
「潰れるか！　――というか、ちょっと魔法使うから、ほんとにそこどいてよ」

魔法？
そういえば、カミラの得意は火属性の魔法だっけ。
ということは、あらかじめこれを見越して連れてこられたのだろうか。
いやしかし、カミラ程度の魔法でじじいの『氷結回廊（コキュートス）』が何とかなるものだろうか。

疑う俺の視線の先で、カミラは杖を構えてもにょもにょと何事かを呟いた。

「『炎帝宮（イフリート・キャッスル）』！」

そう叫んで杖を振るう。

突然の、場面転換。

瞬きする間もなく、一瞬で画面が切り替わる。気がつけば通りの一方が赤く染まっていた。

赤い燐光が舞い、オーロラに似た炎が揺らめく。

火の海という表現では言い足りない、まるで焔の世界だ。

「あ。院長が魔法で閉じ込めてた人が出てきちゃったわ」

「火だるまになってるぞ……」

通りには炎に包まれ狂ったように逃げ惑う騎士の姿。

オーロラに触れると発火するらしい。

熱さのためか、爺さんが生み出した氷に飛び付くヤツもいる。

「まあ――騎士だし。死なないんじゃないかしら」

クルクルと杖を回しながらカミラが言った。

自分の魔法に満足したのか、地獄のような光景を見ながら柔らかく笑っている。

怖っ！
キースのことでからかうと赤くなる、あの可愛いカミラはどこ行ったんだ！？

「とにかく。威力低めで魔法行使したから、ここ通って逃げなさいよ。私たちはヒカル達の逃亡を阻止しようとして魔法を使ったことにするから、これ以上は手伝えないの」
「あ、はい……」

思わず敬語で頷いちゃった。

「騎士団や軍の追跡を振り切るには、一度王国を出たほうがいいと思う。当然王都から離れるわけだし――しばらくは会えないわね」

カミラが言った。

そっか。
追跡云々と置いておいても、俺らはこのまま危険地域入りするわけだから、上手く運べばもう会えないという可能性もある。
カミラとは話すのもこれで最後かもしれない。

「寂しくなるなあ。祭りの後みたいだ」
「――元気でね」
「そっちこそ。キースとのこと、上手くいくように祈ってる」
「～～っ！　いいから！　さっさと行く！　燃やすわよ！？」
「あ、はい。そうですね……」

ああ！
また敬語使っちゃった！！

「とにかく、ありがと。カミラ達もヘマすんなよ！」

色々と話したいことはあったけど、お礼だけ述べて俺は走り出した。

途中で振り返る。

「アズリアとニケも！　さっさと行こう！」

「うむ！」

俺の後ろにアズリアが続く。

そのアズリアをカミラが引き止めた。

「しっかりね。ついていくのは大変だろうけど、頑張って」

「ああ、わかっている。――今日の事、感謝する」

「いいって。今度、どこかへ遊びに行きましょう。また会う頃にはお互い自立しているだろうし」

キョトンと、アズリアは瞬いた。

やがて笑う。

「うん。約束」

「ええ。――じゃあ、また」

そんな言葉を交わした。

▼

ニケの目の前には立ち止まったアズリアがいた。
カミラと何事かを話しているようだが、あまり呑気にされても困る。
カミラが行使した範囲魔法は、致命傷とはいかないまでも確実にニケにもダメージを与えていたからだ。

「ほれ、アズっぺ！　呑気に突っ立ってんなよ！」
「む、おぅ！？」

気をもんだニケが、会話が終わった途端にアズリアを抱え上げた。
片手で軽々と持ち上げ肩に担ぐ。

「こんにちわ」

アズリアとは反対側に担いがれていたエリカが、アズリアに向かってあいさつした。
むすっと頬を膨らませている。

「む、エリカ。ニケに攫われたのか？」
「そんなとこね。アタシとシンクには手伝わせる気がないみたいよ」
「……。シンクは？」
「あっち」

エリカが指差した方には、踊る様に走るシンク。
熱いらしい。

「役に立つ気があるのかしら」
「いや、そう言っては酷だろう」

騎士でさえこの炎には手こずっているのだ。
気分でどうにかなる問題ではない。

「――おい！　喋ってると舌噛むぞ！　しっかり捕まってろ！」

走りながらニケが言う。
その指摘は当然のことで、ニケは2人を抱えながら炎のオーロラを避けつつ走っている。アズリアたちが自分で走るよりは安全で早いのだが、上下動が激しい。

「……」

エリカは何も言わずにニケの頭にしがみついた。

「いてぇっ。髪つかむな！」
「じゃ、こう？」
「目え塞ぐな！」
「こうかしら」

首に捕まる。

「ぐえあ」
「あ、ごめんなさい」

変な声を出すニケに驚きながら、エリカは腕に込める力を調節した。
なんとか落ち着く姿勢を見つけたようだったが、それはニケに抱きつくような格好で、エリカは首をかしげた。

「なんなのかしら、この状況？」

ニケはそんな声を聞いたが、それ以上は聞こえなかった。

▼

「……」

「行ったか」

カミラがヒカル達の去った方を見ていると、後ろでイクトールが呟いた。

羽織っているローブの裾を掻き合わせながら続ける。

「にぎやかな連中だったの」

「そうですね……」

「話したいことは山ほどあったのだが――まあ、いいか。そのうち会えるだろ」

イクトールは言葉の途中で、ぶるり、と大きく身を震わせた。

「寒い……この寒さは、年寄りには辛いな。――そろそろ帰るか。バスク君」

「いいんですか？　騎士がまだ氷漬けなんですが」

カミラが自身の杖を軽く示しながら言った。

扱える限りの最大威力の魔法を行使した直後だったが、氷を溶かすくらいの余力はまだある。

「いいさ。他の連中が来るだろ――それに、これからの王国に弱兵はいらぬ。この程度で死んでしまうヤツは、その程度だったということだ」

カミラはイクトールが何の事を言っているのかわからなかったが、すぐに気がついた。

ヒポグリフ。

王都守護聖獣の一角は崩れ、その守護はすでにないのだ。

「世の中が変わるだろうな。今回のことで貴族連中は、今まで聖獣として敬ってきた存在が何者であったかを知ったのだから」

ヒポグリフは、ヒカル達によって倒された。

『聖獣』として人間たちを守護したヒポグリフは、つまるところ只の風変わりなモンスターだった。

そんなモノの上に築いた平和がいかに危ういものであるか。

知った以上は変わらずにはいられないだろう。

「どうなるんでしょう?」

「さあな――まあ、自衛を目指すなら王都周辺に展開する中央軍の規模が大きくなるだろう。王の判断か議会の判断かは分からんが、いずれにしてもそれが各地に伝播すれば、軍拡みたいなことになるんじゃなかろかの」

気楽な口調とは裏腹に、イクトールの言葉には確信があった。

ということは、そうなるのだろう。
嫌な空気だ。

「ま、学生身分の君が気にかけることではない。学生が国事を論じだしたら、世も末だからな。――それより、すべきことがあるだろう」
「そうでした」

カミラは杖をしまった。

「教練棟で『炎帝宮（イフリートキャッスル）』の修練ですね。確かに、練習のときより制御出来ていないと感じていました。今日中に修正します」

カミラはアズリアが学院を去ってからイクトールに師事している。
アズリアの影響だ。

ヒカルと出会ったアズリアは、一瞬の逡巡なく『冒険者』の世界に飛び込んだ。
なんとなく官僚になれたらいいなあ、と考えていたカミラにとって、友人のアズリアが命がけの世界に飛び込んだとい言うのは途方もない大事件であり、同時に自分の将来についてもあれこれと考えさせられた。

もしかしたら自分は才能に任せて楽な選択をしているのではないか。
能力を持ちつつもさらなる高みを目指さないことは怠慢ではないのか。

あれこれと考えた挙句、カミラはイクトールに弟子にしてくれる

よう頼んだ。

官僚になるには魔術師として能力が求められる。求められる以上、どうせなら厳しい環境に自分を置きたかった。そしてそれには、元筆頭顧問魔術師のイクトールに師事するのがいいと思えたのだ。

「いや、練習はよいよ。それより急いで夕食会の衣装合わせだ。騎士団に見かけだけでも協力したのは、騎士団の顧問魔術師と君を引き合わせるためなのだからな」

「……」

カミラは息を吐いた。

「なんじゃい。まだ不服なのか。わしに師事している以上、弟子なら社交界の一つや二つこなしてもらうぞ」

「……まさかそんな振る舞いまで要求されるとは思っていなかったもので。――正直言って、とても億劫です」

イクトールは今まで弟子を取ったことがない。

カミラ自身、彼が何をもって自分を弟子と認めたのかわからない。しかしとりあえず、カミラがイクトールの初めて最初の弟子だ。自然、他の人物はカミラの事をイクトールの後継と見なすだろう。カミラがそのことに気がついたのは師事し始めてからで、なので途中で逃げ出すわけにはいかなかった。

そしてカミラの最大の誤算は、どうやらイクトールもその気らしい、ということだ。

単に魔法を究めたかっただけなのに、横道にそれるようでカミラは気が乗らない。

気は乗らないのだが――

「――とはいえ、ここで退く気はないですけれど」

社交界のなにするものぞ。

もはや只の町娘ではない以上、いずれは経験することだ。

有力な魔術師だらけ、というのが気になるけれど、それだけだ。

こういう種類の苦労も成長するには必要なのだろう。

「うむ。それでよい」

イクトールは満足げに頷いた。

将来の事や今夜の事、ヒカル達の事などを色々と考えつつ、アズリアはイクトールと共に学院へと戻る。

戻る途中、『置いてかれた……』と泣きべそをかいているシンクを拾った。

▼

「ニケ！　これ！」

「ん？　――おう！」

走りながら、俺はニケに笛を手渡した。

遠征用に用意していた移動用アイテム『馬』を呼び出すためのアイテムだ。

こんなにあわただしく旅立つことになるとは思わなかったけど、事前に用意しておいてよかった。
このまま騎士団の追跡を撒こう。

「アズリアは馬乗れる!?」

俺はニケに並走しながら、肩に担がれているアズリアに訊いた。

「乗馬は得意だが、なぜ訊く?」
「これ！　これ吹けば馬来るから、その馬に乗って逃げよう」
「これは……笛か？　ピー！　ピー！」
「迷いがないな」

誰かが使うのを様子見するとか、そういうのは一切なし。
アズリアはピーピー笛を吹いている。
気に入ったのだろうか。

「ダグも」

俺はダグに笛を手渡した。

「ほう。これは、ずいぶん古い物ですね。これを吹けばいいんですね？」
「そう。ついでに俺も乗せて」
「わかりました」

ダグは頷き、高く笛を吹いた。
すると、街中であるにも関わらず馬が現れる。
俺たちは一旦立ち止まって馬に乗った。

「で？　これからどこいくんだ？」

エリカを後ろに乗せながらニケが訊いてきた。

「危険地域入りのためにエルフの居住地を目指す予定なのは前話したと思うけど、とりあえずアズリアの家かな」

「――はぃ？　ヒカル。今、なに……」

俺の言葉にダグが何か言いかけたけど、緊急時なので手で制し、俺はアズリアへと向きなおった。

「家ってどこ？」

「実家はマンシュタイン領ロングホーン郡だ。王都からは北東へ向かえばいい」

「おっけ」

俺は頷き、ダグを急かす。

「よっしゃ、ダグ行け！　俺は道わからんから、案内よろしく！」

「いや、しかし……」

「ほれ！　騎士団来てるぞ！　いけー！」

「――」

俺が急かすと、ダグはしぶしぶと言った様子で手綱を操った。

ダグと俺が乗った黒馬が先行し、ニケとエリカの乗った栗毛馬、アズリアの白馬が続く。

「ねえ！　マンシュタインの領地に行くの！？　これから！？」

ニケに抱かれる様にしているエリカが叫んだ。

「ああ」

て。

エリカ？

「おいぃぃ！！　ニケ！　なにエリカ連れて来てんだよ！！」
「は！？　――しまった。抱き心地がいいからつい！？」
「あほ！　下ろせ！　はよ下ろせ！」

ていうか、一緒に来たはずのシンクが見当たらない。
もしかして騎士団に捕まったとかだろうか。

「ちょっとっ！　ここで下ろされたら騎士団に捕まっちゃうじゃない！　連れてけ！！」
「馬鹿。めちゃ危険なんだって！」
「イクトール様が言ってたでしょ！　捕まったら死刑なのよ！　一旦逃げ出しちゃった以上、王都には戻れないわよ！」
「ああ！？」

なんだそれ！？

「死ねって言うの！？　このアタシに！？」
「いや、お前が何様なのかわからんけども」

まあ、死んでほしくはないわな。
いやしかし。
そうは言っても。

……。

「あほニケ！　お前ちゃんと面倒見ろよ！　俺知らんぞ！」
「ええ！？」

というか、この面倒事の原因はニケだ。詳しい事情はさっぱりだけど、ヤツが自分で言ったのでそれだけは確か。
なのでこれ以上の面倒事はニケに任せる。
ニケならどうとでもするだろうから、俺は知らん。

「ちょ、ヒカル！」
「よんな、馬鹿」

馬を寄せて来たニケに向かって拳を振り上げて威嚇。

「なあって、ヒカル！　ど、どうすればいい？」
「知らん！　てか、わかんねーよ！」
「連れてけって言ってるでしょ！　連れて行ってよ！」

俺とニケ、エリカは馬に乗ったままぎゃんぎゃん騒いだ

## 43　色々ひっくるめて。（4）（後書き）

少々強引ですが二章終了。

一週間か二週間ほど、ストックを貯めることに専念します。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4571v/

だれかが綴ったエリュシオン

2011年11月26日01時52分発行